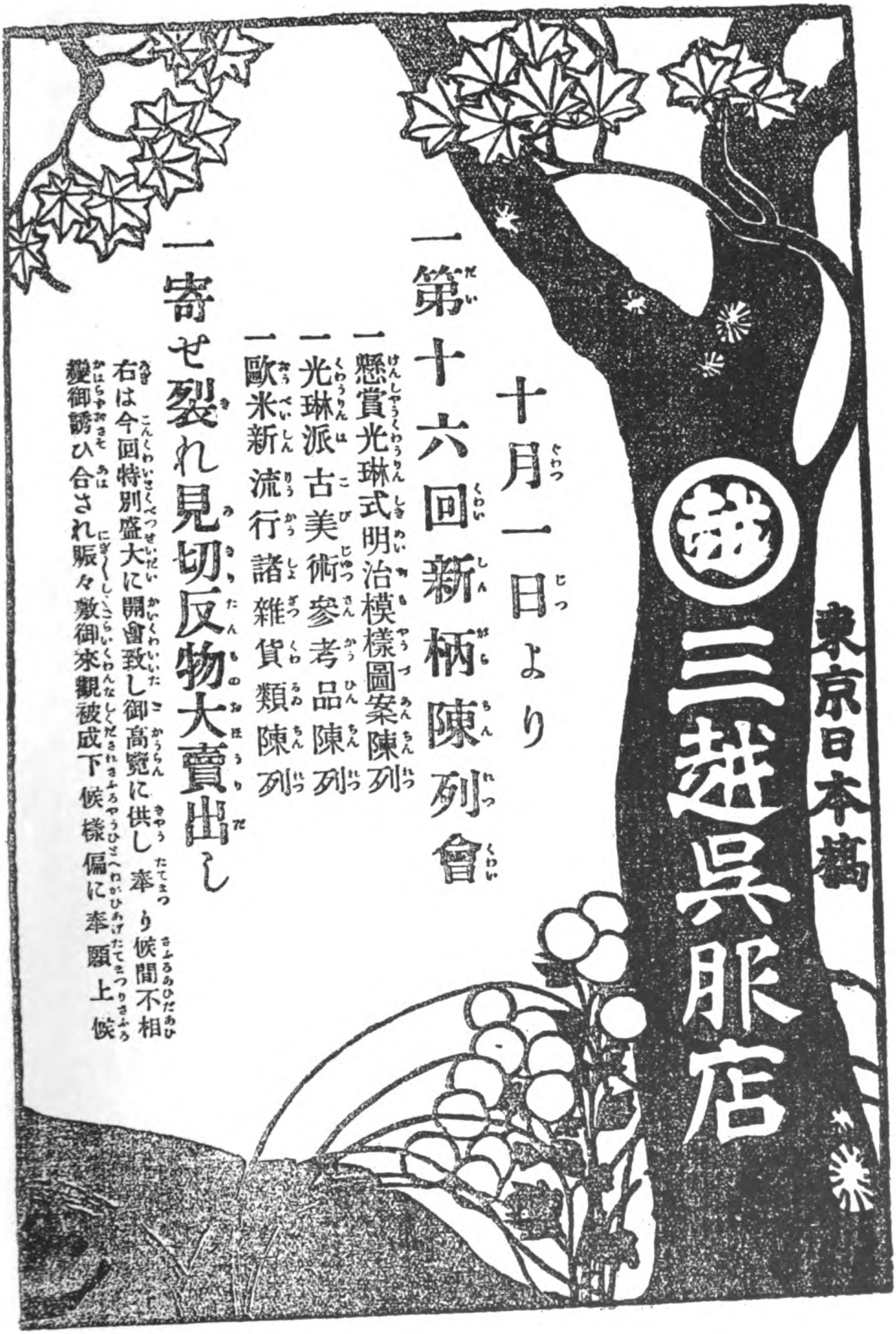
明治四十一年十月十五日發行（毎月一回一日）

女子文壇

文壇の光

明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可




東京日本橋
三越呉服店
十月一日より
一第十六回新柄陳列會
一懸賞光琳式明治模樣圖案陳列
一光琳派古美術參考品陳列
一歐米新流行諸雜貨類陳列
一寄せ裂れ見切反物大賣出し
右は今回特別盛大に開會致し御高覽に供し奉り候間不相
變御誘ひ合され賑々敷御來觀被成下候樣偏に奉願上候

女子文壇臨時増刊

文壇の光

目次

附錄

浴泉



大江原色版部製版

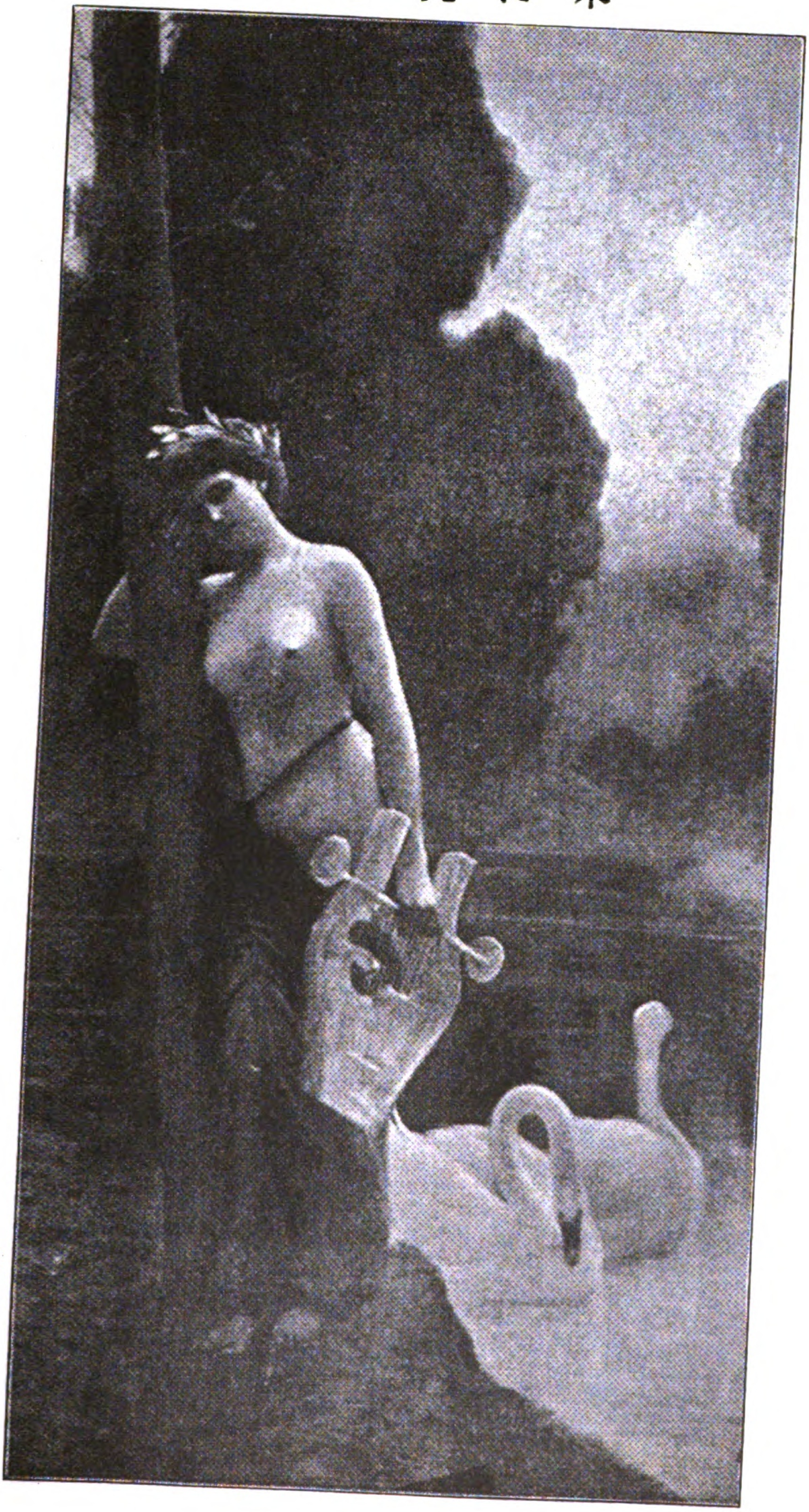

改良醬油
今般御愛用諸彥の御注意に基き更に釀造法の上に一大改良を加へたる結果製品の品質一層醇良となれり幸に御試用の榮を賜へ
釀造元 日本醬油釀造株式會社

物思ひ



（泰西名畫）

木に凭りて



（泰西名畫）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

（明治卅四年創刊）
（懸賞文學雜誌）

▷本誌は何故に多數の青年に愛讀さるゝ?◁

秀才文壇

秋季增刊 紅楓（紙數二百五十頁 正價金二十錢）十月十日發行す

十月二十號は八卷廿一號廿二號發行

●卷頭……文壇諸名家

▲每號懸賞募集項目▼

○短篇小說……德田秋聲選
●新體詩……馬場孤蝶選
○美文 ●評論文……小川未明選
○新口語詩 ●寫生文 ○小品文 ●評釋文……矢部白雨選
○和歌……尾上柴舟・前田夕暮選
●俳句……岡本松濱選
○漢詩……虛舟選
●スケッチ……服部愿夫選

定價表

●一冊郵稅共金十一錢 ●六冊前金六十三錢 ●十三冊增刊共前金一圓四十錢 ●廿六冊增刊二回共前金二圓五十五錢

第三卷第十號

少年之友

益々大發展

○單身虎穴を探る（石版密刷）……服部愿夫筆
△美麗口繪▽
○少年繪手本……古洞、宗方維實
△猿△りんたう△釣り△柿の實
△記事▽
●妖怪宮（二勇少年の大冒險）……白雨
○黑うさぎ（お伽繪噺）……よしを
●建御雷神……薄光
○珍奇な動物……はくう
●十月の日記……記者
○如何にして象を馴らすべきか……秋畝
●羅馬のはなし……竹峰
●知惠競爭●繪さがし

新題 少年文壇 普通文○日記文○短詩○はがき文○和歌○俳句○お笑草○新考物○友達會○筆蹟○スケッチ

無比廉價 一冊金五錢 郵稅五厘 ○六冊郵稅共前金廿七錢○十二冊前金五拾四錢

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目 文光堂（振替口座壹九五五番）

賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 至誠堂 上田屋

（丙の二）

●有効保險 前代未發

秘傳奇術

全壹冊正價郵稅共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

（目錄大要）神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰門の爛れを治する法●消渴を必治する法●黴毒の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顏クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治藥製法●髮の脫落するを止むる法●化粧石鹼製法●西洋白粉製法●毛髮必生法●臭汗治法●白髮を染むる法●毛髮の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室內を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●拔毛劑新法●眠入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●眠入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の皺婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に惚れらるゝ藥法●硬き毛髮を柔軟にする法●思ふ女をなびかす藥法●堅き女の氣を狂はす藥法●陰莖を長大にする藥法●そばかす必治法●女を部屋にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を增す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を强む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顏赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を發せしむる法●記臆力を增進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黑字夜光の奇術●老人終身皺取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする內服劑新法●寶丹の藥法●腹痛速治法●疥瘡病の藥法●生たる魚を遠國へ送る法●張脇を治する法●黃疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●痳病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る最新法●頭髮を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髮豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●夜小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の腫痛を治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齡により事房の度數●病氣前知の奇術●男女全證の色を白くし且つ靨美ならしむる法●蒔酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊の汚染を落す新法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顏術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す（合計壹百四十法あり）著金即刻送本す

專賣元 東京神田區石軒町九番地 日新館商店

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

●內服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九十錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學敎授スヒーゲル氏の發見に係る男女**生殖機不能**即ち**陰萎病**陽物無力、遺精、夢精、早漏、過房、元氣衰弱、老衰精無力、生殖虛弱、手淫に起因する諸病、早老者精液缺乏、**腎虛、神經衰弱**、精蟲缺乏、不能妊娠、冷症、**快美**減少及び**短小**、一切の難症に用ひ輕症は拾參劑、重症は四五劑にて根治の目的を達せしむるに天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力**を**增進**し生殖器を强健にして**勃興情慾**を著しく**發動**せしめ人生の最大**快樂**を得んと望む者は早く試よ快烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる誇大奇言を羅列する內地製無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓效は高名なる醫師に就て承合せば明白なり

世界無比 …… 最新發明藥

あざ

入墨は廿日 **ほくろそばかす、なまづ、いぼ**は**拾日**目に必ず除去すること**保險附**

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛に除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝状**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）著金即刻小包郵送す

美き聲の出る新藥

（藥名……ウエーヌス）

壹劑送料共壹圓拾五錢

特別製分同上參圓拾五錢

何程音聲惡しき方又は聲出ぬ人にても直に全治美音となる新發見奇藥也

以上參藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

本品は最も完全なる白毛赤毛染なり又本品を以て赤毛を染める時は有に半ケ年以上を保つと云ふ奏効禮状日々多大なり

全國到る處の小間物化粧品店藥店に有り



本舗

東京市日本橋區通鹽町一番地

服部重右衛門商店

入賞作家の光彩（一）



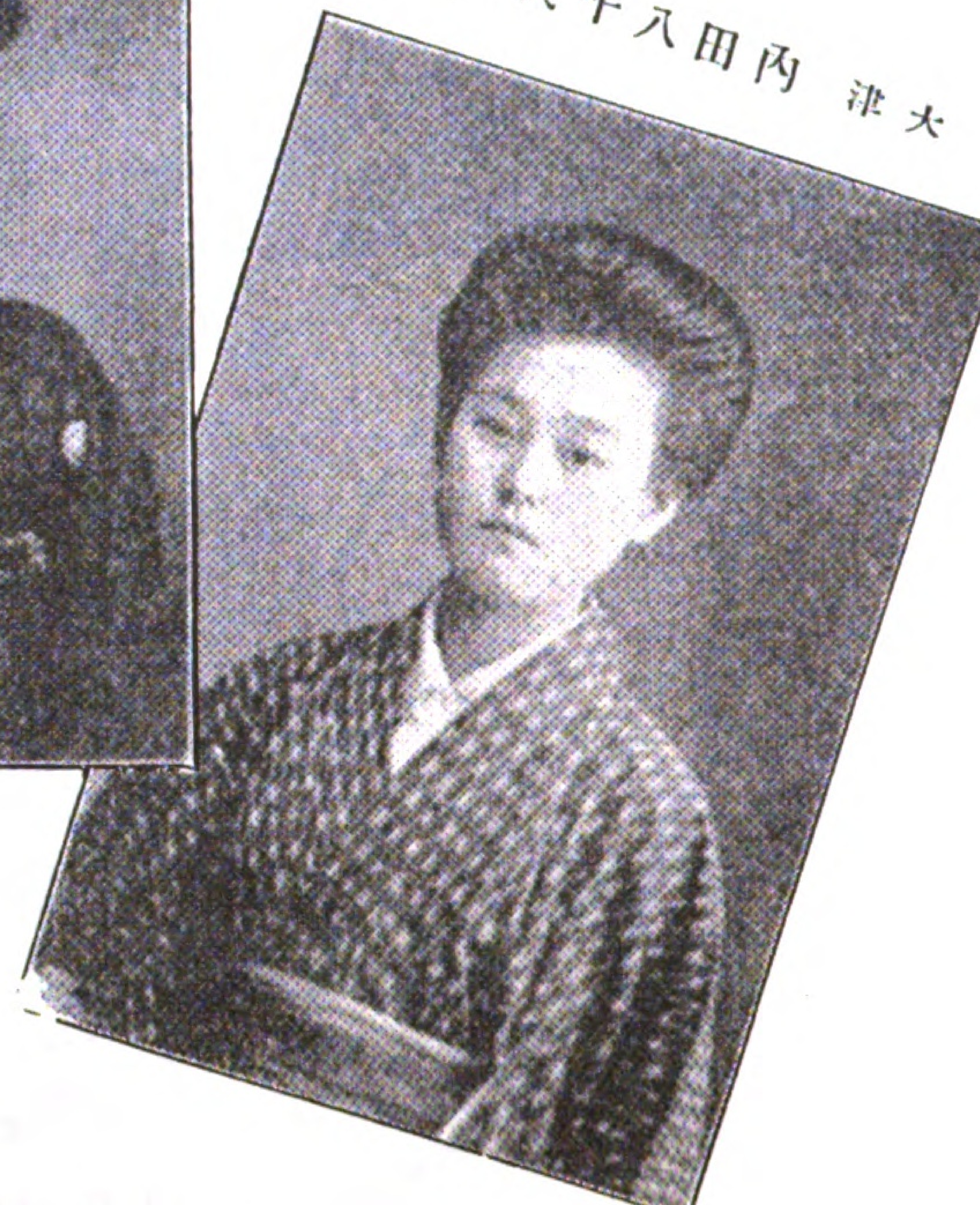
臺灣
稗貫美津子君

東京
しげ子君





東京
佐藤萬壽子君



大津　内田八千代君



東京　平塚白百合君



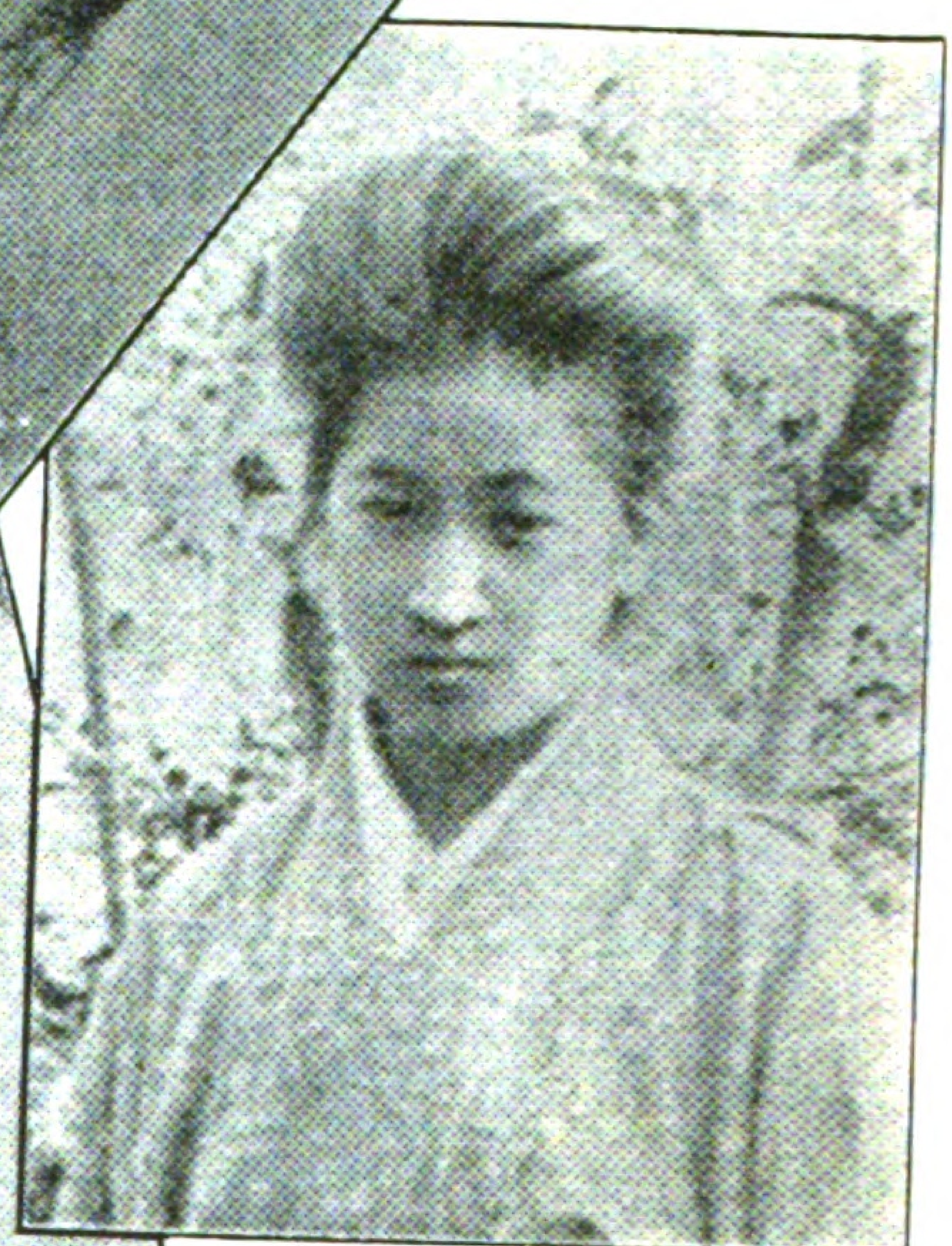
大坂　木村花子君

入賞作家の光彩（二）

入賞作家の光彩（三）



北海道 越智滿壽美君

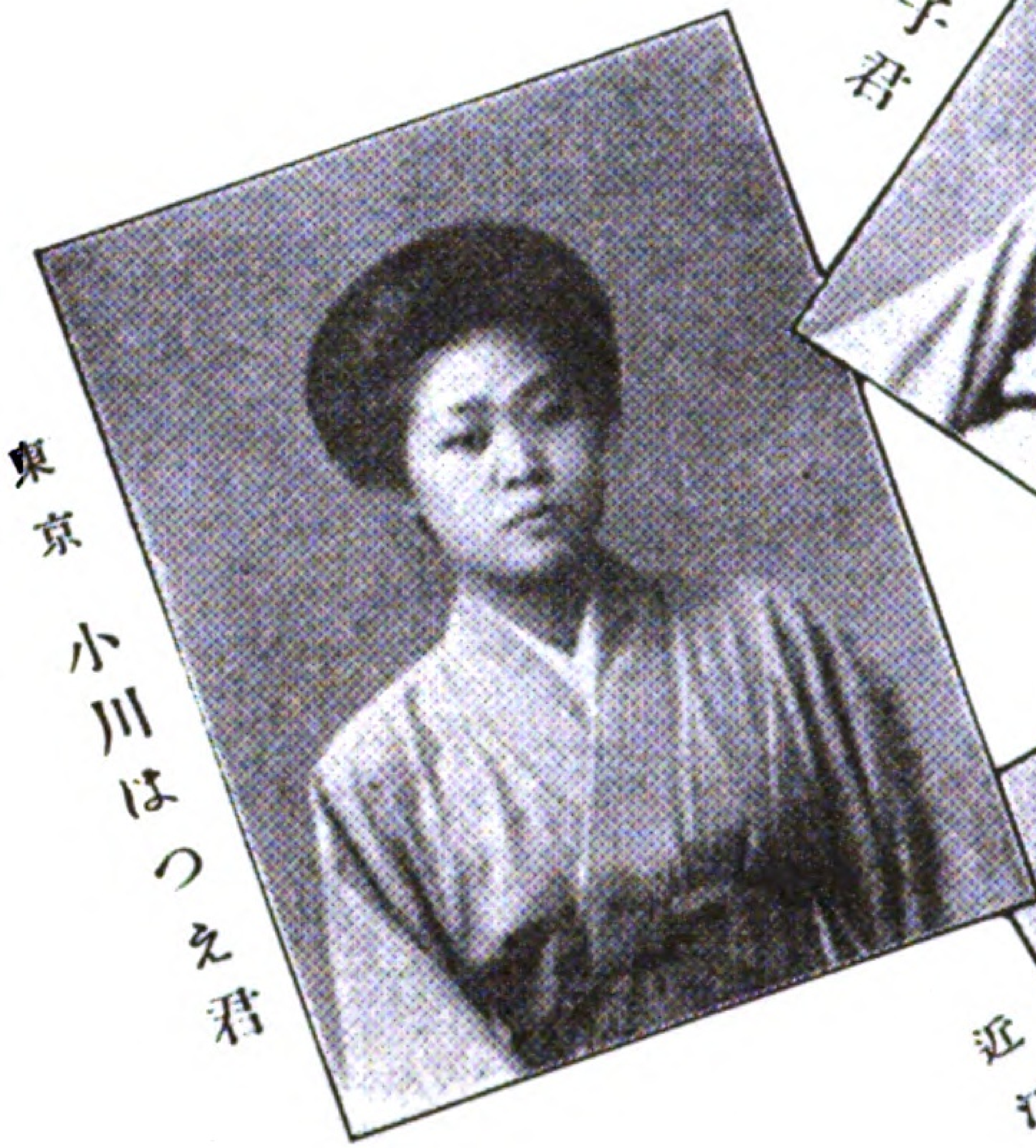


横須賀 檜垣留子君



大坂 鈴木房子君

入賞作家の光彩（四）



東京 小川はつえ君



京都 川田益子君



近江 若井きく子君



福井 片山千里君

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女學部新設

實用女學講義錄

新學期開始

第一號十月五日發行

此の際 **入會金免除** の特典あり目下入會の最好機なり。

新設趣旨

本會は中學講義錄の發行に從ふ事既に五年進歩せる通信教授法は自宅獨習の目的を達せしめ得べきことを信じ今回更に女學部を新設して實用女學講義錄を發行し女學校に入ること能はざる人の爲に女子必須の學科を遺憾なく講習せしめんとす

學科組織

本會は多年の經驗により短かき時間と少き學費とを以て修了せしむべき組織とせり即ち講習全期を一ヶ年半となし之を三學期に分ち毎月講義錄二冊を發行す講師は皆各科專門の大家のみ也。會費は最も低廉、都會一ヶ月の遊學費を以て優に卒業するを得べし

講義錄

女子唯一の目的は家庭の主婦たるに在り本會講義錄は高等女學校令に準據するは勿論勉めて實用に重きを置き以て圓滿なる家庭の主婦を作ることを期す▲講述最も平易にして懇切、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難きことを信ず

女學雜誌進呈

本會々員は講義錄を受くるの外毎月女學雜誌『姫百合』を無料進呈せらるゝ大特典あり『姫百合』は現代知名の女子教育家及び專門大家の訓話學説及び純潔なる家庭小説を收むるの外會員諸孃の文章和歌等を斯道各家の選評を經て掲載すべし。

規則書 申込次第直に進呈す

東京神田駿河臺
電本局三千四番

大日本國民中學會女學部

▼紙數二百四十頁▲

秀才文壇定期增刊

紅楓

十月十日發行

▼本號に限り 正價金二十錢 【郵税一錢五厘】▲

表紙及口繪

斷崖……服部愿夫筆

秋の色(縦長額面)……(原色寫眞)

羊飼ひの少女……(原色寫眞)

秋季大附錄

△氣質論……文學博士 坪內逍遙

此れ博士が特に筆を執りて本誌の爲めに寄稿せられたる者、論議深遠眞に近來稀に見るの快論文也。青年にして文を志す者之を讀まば大に啓發する所ある可し。

△小說 頽癈……德田秋聲

△小說 幸不幸……小栗籌子

秋聲氏の特色は人生の哀愁を寫すにあり、即ち「頽癈」は氏が苦心の傑作にして。閨秀小說家の一人たる籌子女史の新作と共に今秋文壇の一大光彩なり。

青年文壇

○論文○美文○新體詩○評釋文○寫生文○人物評論○日記文○消息短文○小品文○新口語詩○和歌○俳句○漢詩○スケッチ

各欄選者

○德田秋聲 ○中島孤島 ○西村醉夢 ○小川未明 ○河井醉茗 ○尾上柴舟 ○中內文學士 ○高濱虛子 ○小笠原虛舟 ○矢部白雨 ○服部愿夫 ○前田夕暮

發行所 東京神田旅籠町一丁目廿三 文光堂

賣捌 東京堂 東海堂 ○ 北隆館 良明堂 ○ 上田屋 至誠堂

(丁の四)

文壇の光

女子文壇　臨時増刊

明治四十一年十月十五日發行

文壇の光出づ

女の十五六から二十五六までの姿は美しい、姿ばかりでなく、言ふことも、書くことも美しい、美しいのは若いからです。一寸思ふたことを書くにしても、感じたことを歌うにしても、眞實の生きた姿が現れる、其證據には今の大家連中でも投書家時代に作つたものゝ方が、假令疵はあつても、眞の感情が流れて居たやうです。わが「文壇の光」を編輯しても然う信じて疑はない。

記者

TERO



短篇小説

龍眼肉

「天」　しげる

「夕顔」といふ名で、熱烈な新體詩や美文を折々雜誌に投してゐるのは、私の友達の直子さんだ。其作品を見ても本人を見ても、恐ろしくハイカラな、きかぬ氣の、品行なども餘り善くない女らしく誰も思ふが、それは皮相ばかり觀た大誤解なはなしだ。

つひ此頃まで、作詩の事は私にも隱してゐた。無論人に知れるのを恐がつて、「默つてゝ頂戴よ、ね、きつとよ〱」と逢ふ度毎に念を押す。でも私とは非常に親しい、今日も朝から來て、終日遊んで去つた。

「ちよいと、夕顔つてどういふ意味？」と訊いたら、

「なあに何でもないのよ、始終青い顔してぶら〱してゐるから」と自ら嘲ける樣に笑つてゐたつけ。成程巧い事を云つたもんだと私も笑つたが、今ふと考へて見ると、夕顔もいゝが、あの人には「龍眼肉」といふ方が適當だ。然しまさか「龍眼肉女史」と名乗る譯にも行くまいが、今度逢つたら然いつて見やう。

「私あなたに龍眼肉つて名を命けてよ」と。
「龍眼肉？、へえ」、とあの弱々しい眸を据ゑて、必然考へ込むに違ひない、考へても一寸は解るまい。
「何故？」と降參したら説明して爽らう。
「あなたが即ち龍眼肉なのよ。表皮が眞黒氣なカンカン堅い皮で、それを破つて見ると、内部は柔い甘い身でしやう、ね？、穿つたつもりよ」。
「はゝゝ實際だわ」と例の自ら嘲る樣に笑ふだらう。
實際不幸な人だ。年齡こそ廿三だが、小づくりではあるし容貌は佳し、あの毎時引約めてゐる前髪を、もうちつとふつくり庇にでも



膨して、着物の柄でも少し撰擇したら、どんなに美しい、可愛らしいお孃さんだらう、それより一層惜しいのは、あれだけの才學と、玉の樣な性質だ。何故あんなに自ら欺いてゐるのだらう？、自分もそれが苦しくて、あゝ始終健康が惡いのかも知れない。
　金儲けの上手なお父さんと、交際家のお母さんと、陸軍大尉で伏見へ往つてゐる兄さんと、名古屋の富豪に嫁いた姉さんと、勉强家の弟とがあつて、まづ中流の、不自由のない生活をしてゐるから、家庭の談話はつひぞ爲ない、そりや不思議に語はない、稀に此方から、

「皆さんお變りもなくつて？」と訊くと、「えゝ」と極簡單に答ふだけて、父が如何したとか、母が恁うしたとか、決して語つた事がない。事に依つたら自ら欺くし欺かせた原因が、其裡に潜んでゐるのぢやあるまいかと思はれる。

それから、戀人の有つたのは事實だ。それは一昨年の春、名古屋の姉さんが流産して、後の養生に蒲郡へ轉地した時、直子さんは看病兼お相手に、實家から派遣されてゐる時の事で、二ケ月程も滯在てゐた。其時送致した手紙には、さすが「姉もおひ／＼快くなる」などと書いてあつたが、書信の大分は、土地の風景や自分の動靜ばかりて「海に突出した離れの二階に早稻田出の竹井さんといふ人が來てゐて、月朧の夜更けて、尺八をあはれに吹きならす。其高い涼しい音にそゞろ涙が催されて、自分は恍惚と欄に凭れながら、あなたの事を想ふ」といふ文句が三度目位の書信て、それからは、都度々々「竹井さん」の文字のない事はなかつた。尤も一寸した事ばかりて、「大汐に蛤を採る人の影が、遠方からは雀の下りた樣に見える、竹井さんも其中に交つて」とか「昨夜此宿屋へ盜賊が泊つた疑ひがあると云つて、お客が一々調べられる、竹井さんも閉口してゐた」とか何でもない事だが、其名だけは必ず記入つてゐた。

歸つて來てからは大變おとなしくなつた。從前の樣に大氣焔を吐いたり、大きな聲で笑つたり、あの人が何處が虛弱いのかと思ふ樣な事はなく、大分眞面目にしんみりして來て、一寸した世間ばなしに涙など零したのも見た。是は社會の干渉を逃れた野廣い田舍て、自然の空氣に浴して來た爲身躰も精神も健全に近づいたのだらうと、私は大變悅んだ。

蒲郡の談話ばかりしたがつて、竹井さんの事も多く語ふ。そして其後へは、「ほんとに嫌な人よ」を必然附加る。私もうつかりしてゐたが、遂にはゝあと氣が附いたから、

「あなた竹井さんに戀してね」と云たら眞赤になつて

「馬鹿なッ。私あんな人嫌ひだわ、あんな時代に後れた人」と頭ごなしに云つてそれても何か落附かぬ風に

「ほんとよ、全くよ」とむきになつて辨解した。確に戀を得たに違ひない。それも私は悅んだ。あの虛弱い人が餘り緩なくなつたのは偏に蒲郡――特に竹井さんのお蔭だらうと思つて。

處が此頃はまた變になつて來た。折角風姿にも少し

氣を注け出したのが、今年の春頃より、又引約めのくる〳〵卷にして了つて、其爲かも知れないが、顏なども何だか憔悴た樣に見える。

新體詩など作り出したのも恰然其頃からで、竹井さんの事は、どうしたものかばつたり語はなくなつた。そして其暴れ方といふものは從前より甚い。殆ど傍若無人て、往來を歩きながら卷煙草なんぞ吸ふのだものなまじつか美容なだけに、人が振り返つて呆れてゐる

「ちよいと！癈したらどう？」といふと、

「介意や爲ないわ」と云ふ事は云ふが、私の忠告は不思議に感動と見えて、それぎり卷煙草は癈して了つた他の人の前では如何だか知らないが。

然いふ行動だからお友達も漸々遠ざかる。今では私ぐらいなもんだらう、慿して交際つてゐるのは。だから勢び私にばかり親密の度が傾く。されぱと云つて、遠ざかつた人達の事を、恨んだり誹つたりする樣な事は決してない、まあ恬とした樣な風てゐる。

先が然ういふ風だから、此方も口頭で同情など表した事はない、寧ろ逢ふと双互に惡口の云ひ合ひばかりしてゐるが、私の眞情は熟く解してゐる。つまりお互ひに熟く知つてゐるのだから。私の前では些も僞らない。私の覩た直子さんが眞實の直子さんなのだ。そりや尤も妙に遠慮したり、はにかんだりする樣な行爲があるけれども、それが則ち眞實の直子さんなので。然し虛僞ても何ても此節の樣ぢや、ほんとに困つたものだ。今日も、

『此節竹井さんどうして？」と訊いたら、

「むゝ」と異樣にすましてゐたが、

「あ、ちよいと、肋膜炎てどんな？」、

「肋膜炎？、肋膜尖て……病氣の名よ」

何も茶かす氣てはなかつたけれども、餘り唐突だつたから私は正直まごついて了つたのだ。すると、

「知つてゝよ、どんな容態？」と熱心に訊くのだもの私は去年患つた時の容態を逐一說して、

「竹井さんが肋膜炎なの？」と云ふと、

「まさか」と、寂しく笑つて「私此頃變なのよ、夜ちつとも眠られなくつて、時々胸が異樣に痛いの。」

私はぎよつとして、

「そりや不可わ、早く醫者に診て貰はないと、萬一肺病にでも化つたら大變よ、」とくれ〴〵も注意して與つたら、例の「介意やしないわ」てすましてゐたが、思ひなしか、眉の邊に一種悲しい色が漂つてゐた樣だ。

少時經ると、
「肺病にてもなつて死んだ方がいゝや、世話なして」
と思うだ。
「串談いつて、あなた死ぬと新體詩が作ない事よ」。
「はゝゝゝゝ、あんな新體詩の爲に生きてるの？嫌になつちまふなあ」、と洪然大笑するかと思ふと、忽また眞面目になつて、
「あのねえ、私今度島田に結つて見やうかと思ふのよ笑いてしようか」といふから、「可笑いどころぢやない」と大に賛成してやつたら、
「それぢや其中必と結つて、紀念に寫眞を撮る」と云つてゐた。

思ひ切つてはきくした調子が氣に入つた、凡てが都會式に出來て居る、土くさくない、初めは輕く起こして來て、段々深い處へ運れてゆくと云ふゆきかたて、新しい作に始終氣を着けて居る人てなければ、迚も此れ丈のものにならない、直子と云ふ女も活きてゐる、新代の空氣を呼吸してゐる女にはまア斯うしたのが多いので、其處を捉えた作者の機微な働きは目覺むるばかり、際立つて見える（評）

『選』

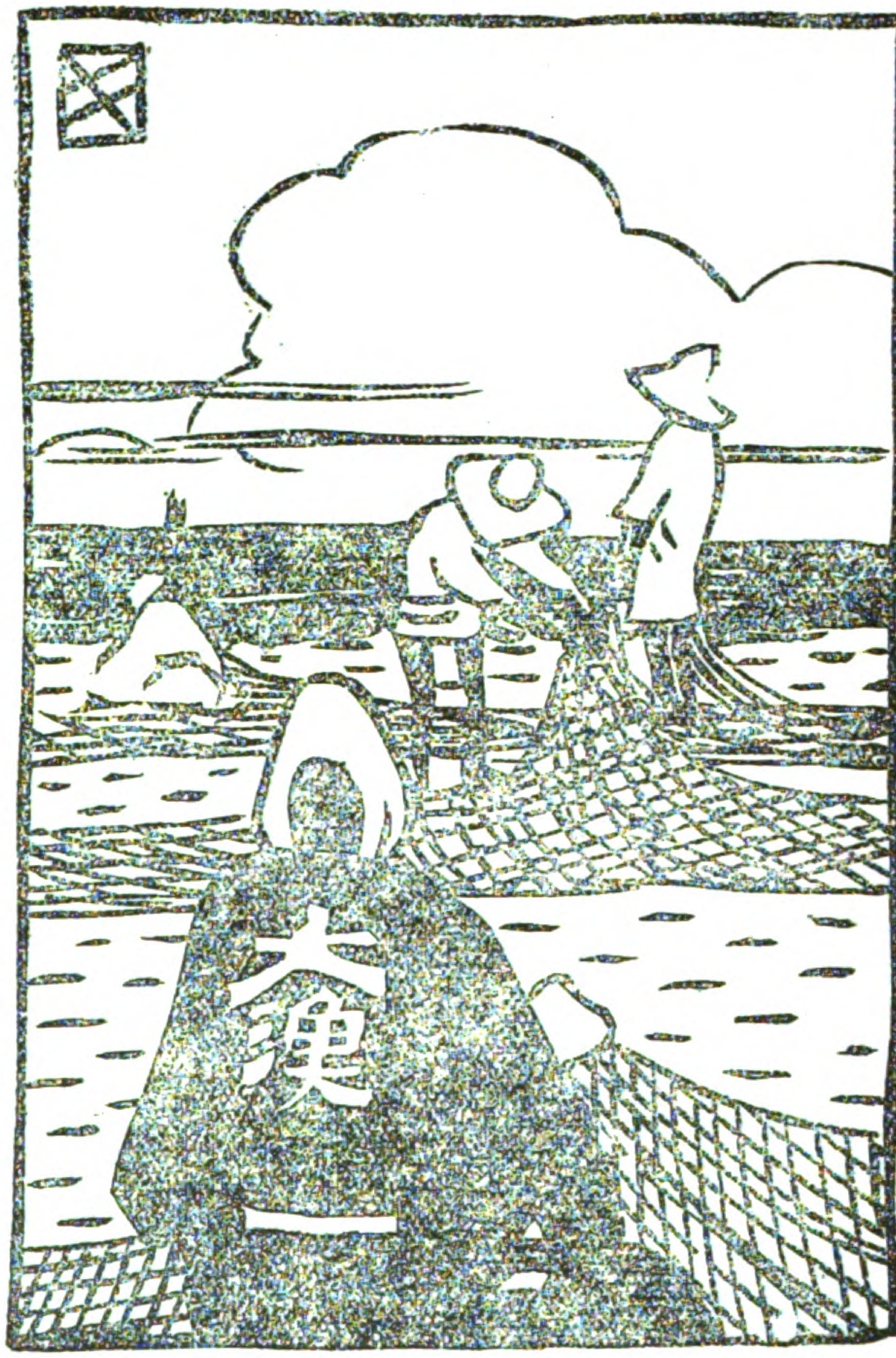
友の一人

田中久子

汚い俥だけれど漸と一臺見付け出したので私は直其れへ乘つて長谷まで急がせた。日中二時と云ふ強い光線が幌の無い頭へ直接に照つて目瞬がしさうに暑い。俥は停車場前の廣い傾斜を勢よく走つて、なぞへにすつと右へ曲ると平らな道をヨタ／＼行く。
私は又直懷中から波さんの手紙を出して見た。
波さんは私とは極親しい友ではあるが年が三つ許りも違ふ所から私は始終、姉さん／＼と呼んでゐる。是所は四日許り前に來た其人の手紙である。
：：：此節はもう茂さんも來てはくれませんの、母樣だつて私が野崎の家を出たのが第一お氣に入らないのだから矢張り其となしに舉動に出るのでせう、私はもう親にも捨てられて逝くのかと思ふと靜さん、本當にどうしませう、泣いても泣き切れやしないの只もう靜さん許りがたよりよ。
あゝ靜さん苦しいわ胸が：：裂けさうに苦しい、も

うもう私は明日にも逝つて了うんてせう。人を恨み世を泣いて泣き通してそして明日、うつろに成つた胸を抱いて……あゝ。寂しいわ靜さん！あなたも獨ね私もかうして獨ぼつちて寂しく逝くのよ靜さん!!

私は此處まで讀むと、例も蒼い顏をして夜着の衿から細い手を出して私の手をシッカリ握る波さんの姿が見えて堪らなく可哀想に成つて了ふ。波さんは去年の秋事情はよく知らないけれど二年もゐらしつた家から去られたのであつた。そして外には兄弟もなく、年老つたお母樣との二人限りな寂しい身で今年の春から此鎌倉へ病氣保養のためにお移りなすつたのである。



佳作　網干し　駿河きよし

父さんにも早く別れて兄弟も無いと云ふのが私と波さんとの間の鎖となつて、他人乍らもよく、と思はれる程の仲、其上私にはとうに母樣も亡く成つてるので夫からはたつた一人で自炊をしてゐる身てはあり、人一倍波さんがたよりに思はれてゐるのである。

此手紙を受け取ると波さんの顏を思ひ出して、明日の土曜日を待ち兼ねて居たのだつたが、所が又昨晩の端書。夫には急に又惡く成つたやうな事

が書いてあるので私はもう堪らなくなり。午後の教授を藤井さんに頼んでかうして飛んで來たのであつた。ふいに强い音がして俥ががたんと飛び上つた。拍子に持つてた手紙を風にとられさうに成たので慌てゝ袂納めてゐると、車夫が振り向いて「河田さんてしたね」と訊く。「えゝ其處」。と答へ乍ら懐へ仕舞ふと往來の左側へよせて梶棒を下した。

門は竹で鳥渡した別莊風、阿母樣と只二人ぎりだけに廣い家ではないけれど「河田」とした女文字が何處まても門の柱に似合つてゐる。

格子に手をかけると鈴が鳴つて、ふと顏をお出しなすつたのはお母樣である。

「おやまあ、貴女よく‥‥。」私は直上つた。如何樣御容態かと氣が苛つ。

玄關の右、病室の襖を開けると、途端に烈い音がして反對の側の襖の蔭へ。細い絣の着物の裾がチラと隱れた。見ると波さんは白い枕へ顎を宛がひ、腹這ひに成つて居て、腰の邊りからふわりと輕く黃八丈の夜着が懸つて居る。「まあ靜樣」、と嬉し相に顏を此方へ向けた。

「姉樣如何？　私ね」。と何か言はうとすると、「まあ暑かつたでせう、靜さん、よくねえ」。

夫からお母樣が氷を洋盃へ入れて持つて來て下さる波さんと三人、種々談話が立て續いて汗を拭く間も無かつた。雖然波樣は其麽惡い樣な容子もなく、枕元には雜誌が一冊開いた儘のや、黑い毛糸に光つた編棒の幾本も着いた靴下の編掛け等が轉がつて居た。母樣が去つてお了ひなさると「本當に靜樣よくねえ、‥‥‥私もう寂しくつて。」「左樣でせう、私だつて始終來て居たいけれど矢張學校へ出ないぢや成らないし」。

「えゝ能く知つてるの、ですから來て頂くのも濟まないとは思ふんですけど‥‥だけど本當によくねえ全く嬉しいのよ。依然靜樣計りが賴りなもんだから。

波樣は子供らしく甘へた調子で私の手を取つて、兩方の手で捻くつて居る。

「でも此以前の時よりずつと御容子が良いわ。」「さう」と言つたが、急に悄氣た容子に成つて、「さう見えて？　靜さん、矢張自分で無くつちや苦痛は解ら無いんだわね」。と右の胸を抑へる。

「ぢや依然不良の？」「えゝ、夫にね」。と聲を潜めて「此節は母樣がね、手紙にも書いて有つたでせう、彼麽風なものだから私如何樣に辛いか知れ無いの。夫り

やあね私が野崎に居れば母樣だつてチヤンと下女の一人は使つて居られたんだから、夫は有理だとは思ふんですけど……だから矢張身體の方にも駄目よ。ねえ貴女も一人ぼつちだから、いゝとは思ふけれど。」

淋しく笑つて眉を寄せた。

「だつて其麼事。」「否、私はもう何人にも見離されて了つたの。」「あら姉樣、そんなら私だつて然うよ」。

二人とも默つて了つた。そして波樣は續け樣に、堪ら無相に太い吐息をつく。少し經つと、

「靜樣、貴女がね此地の學校の先生をして被居るなら如何樣に私嘻しいかと思つてよ。ねえ靜樣、東京とだつてさ程異ひはしないてすもの。」と言つて、又以前のニツコリした嘻し相な容子に返つた。

「姉樣が然うお思ひなさるなら、私は此地にしたつて構やしませんわ。」「然う、そしたら靜樣如何樣に私嘻しいか……全く寂しくつて堪らないんですもの。」

之で少し話が切れた。臺所でお母樣の何かして被居る音が折々聞こえる。

靜かな初夏の晝は六疊の病室を隅から隅迄明るく照らして居る。戸外を軌る車の音の合間に、浪の音が手に採る如に聞こえて來る。之ては全たく波樣も寂しから、殊に夜なんぞはと思つて居ると、不意に大きな聲て波樣が「此方へ被入いな、ねえ」。と茶の間の方へ向いて言つた。

波樣の聲かと思ふと、驚かれる如な大きな聲なので私は喫驚して顔を上げ乍ら「何誰？」と小聲で訊いた

「何有。茂樣よ。」と平氣て「他の方ぢや無いのよ、茂樣ね被入いな」と言ひ乍ら、如何樣小さな聲ても聞き漏らすまいと爲る樣に、枕に宛てた顆を上げて頻りに耳を立てゝ居る。私は夫を見ると厭な氣がして、堪ら無く傍を向いて了うと、茶の間の緣側邊りから、

「エヽ。」と氣の無い如な男の聲がした。

「ホヽ厭な茂樣、靜樣てすよ、知つてるぢやありませんか。」波樣の斯う云ふ聲が、何となしに機嫌を取つてる樣な調子に聞こえて、甚く厭な感じを起させる。

私は默つて俯向いて居た。茂樣は直ぐと入つて來た波樣だの、靜樣だのと。直ぐ快活な調子て能く談す未だ波樣が野崎へ嫁か無いずつと以前から、波樣のお宅へ來て居る方て、私もちよい〱お目に掛つた事もある。私には僅た一人の從弟だと言つて、波樣は始終弟の如に茂樣々々と、よく私にも談を成すつた。私大學の生徒だとかて波樣よりは二歳位下、二十歳恰ど

位の年配だ。
「貴女とは大分お目に懸りませんてしたね。」と、茂様は袂から煙草を出して吸口を潰し乍ら「ねえ」。と今度は波様の方を見る。「然うね。」と波様は仰向けに成つて茂様の手元を見い／＼、さも満足した樣な顔付で居る其處へお母様がかき餅の焼いたのをお皿へ盛つて入つてゐらしつた。「何にも御座いませんてね、貴女。さ茂様も喰つて下さいな。」と言つて、夫から波様には別に紙に載せたカステラを出して「お前は之になさいよね。」と言ひ含める如に置いてゐらしつた。
「マア斯麽詰らない物。」と、波様はかき餅を見て一寸舌皷をなすつたが、「さア喰つて頂戴な、静様、茂様もさ。」
「は。」と茂様は笑ひ乍ら「如何てす？」と私の顔を見て一つ取つた。そして直ぐ「や、此方の方が焦げてて甘さうだ。」と、も一つのと取換えて快活相に笑つた波様は一寸睨む真似をしたが口元て笑むて居る。私は何だか馬鹿にされてる樣な氣がして。急に默り込むて了つた。
夕方、私が茶の間の縁に立つて居ると、お母様が切下げ姿に襷掛けて、裏木戸から手桶を重相に下げて入つてゐらしつた。「お大抵ぢや御座いませんね。」と聲を掛けると、傍へ寄つてゐらしつて「何有貴女、波さへ癒りませばね、え丶丶、もう人様を懐こがつて／＼ねえ貴女、夫ても三日許り前からもう夏休暇だとかて茂様が居らしつて下さるもんてすから、どんなにか元氣が宜しいんてすの、夫に貴女も入らしつて下さいましたし……。」と袖口で小鼻の汗を拭いてゐらしつた。
隣室では茂様の高い笑聲に交つて波様の小さい笑聲もして居たが、不意に夫が止むと波様は「母様／＼。」と續け樣に呼んて「お水を頂戴。」と虫の鳴く如な心細い聲て言つた。「アイ／＼。」とお母様は手桶を置いた儘て、薄暗い勝手の方へ慌て丶馳けてお入りなすつた。「すると直ぐ又二人の笑聲が聞こえる。
私は波様がお母様に對する不満を疑はずには居られなかつた。斯麽宜いお母様、斯麽優しいお母様に波様はまあ何の不満に思ふ所が有るのだらう。夫は病氣の所爲も有らうけれど、けれど波様の方から嘗めても足り無い位ぢや無いか。と思ふと、私は又一層欺かれた樣な心地がして暗い其所に暫く立つて居た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

私は急に其晩歸る事にした。波様もお母様も「折角だのにせめて一晩」と止めるのも肯かずに「御容體か

大變宜い樣て安心したから。」と言つて「夫に明日も授業を休むと取持の子供が可愛相だから。」と言ふのを楯に無理に別れた。

波樣は窓の柱へ握つて「折角今夜は嬉しいと思つて居たのに。」と落膽した如に言つて「今度の土曜には必然ね、静樣必然ね。」と念を押し乍ら、私が俥へ乗り切る迄見て居た。お母樣も茂樣も門迄送つて下すつた。

疎らな星の晩である。乾いた砂地へ看板の灯が明るく限取つて、遠くては波の音、近くては頻りに蛙が鳴いて居る。私は停車場へ向ふ俥の上て、今日の波樣の言葉や態度。夫から過日の手紙の文句をも考え合せて、皆波樣が同情を求める爲に誇張したんだなと思つた。すると先刻の茂樣と二人しての笑ひ聲も思ひ出して憎くなる。彼て何が苦しい何が淋しい。私は皆馬鹿にされて居たんだと思ふと思はず頬がかッとして來た。と同時に年老つた彼お母樣の歩くにも太儀相なヨタ〳〵した態度が、かつきりと胸に刻まれた。

俥は砂地を音も無く走つて、浪の音は漸次遠く成つて行く。

此作の波さんのやうな人は隨分現れて來た、手紙を書かせると、さも〳〵寂しさうに、又はさも〳〵悲しさうに、會はれば何うなるか知らんと思つて、會つて見ると手紙の半分も三分の一も情が動かない、つまり人間が空想的になつてきて、小説其外の文藝の力が波及したのであらうと思ふけれど、只さへ感傷に傾き易い女性の爲には忌むべき傾向だ。其處に氣の落いた田中さんの態度は全く敬服すべきものだ、作は皆さんも御存知の通り批評するまでもない（評）

「人」

鷄小屋

白井寿か子

唐臼の遺木、藁、外縁の戸箱の隅、木暗と心當りは全然探したが見付らない。それても未だ尋ね倦みもせず、長男の猪之助は、鷹の羽の定紋の着いた弓張提灯へ灯を付つて持つて來た。

よく凪いだ夜で、氣をつけてゐたら小禽の寝息ても覗はるべき靜かさだ。接骨の垣越に隣家の肉桂や、辨慶芝、樫、櫧などの常磐木が鬱蒼と生茂つた間を、暗は眞黒に蔽ひ冠さつて、底凄く晴れた空には、煌々す

る大粒な星が覆れるやうて、直ぐ手前の籔蔭を透いて向ふ村の灯がまたゝく。暮春の莫迦に陽氣の弛んだ夜何處からか甘い花の馨かして、田原通ひの汽船は今市場の入江に着いたらしく、充分に弛みを持つた汽笛の音が南の空で鳴つた。

「味柑の木にでもとまつて居やせんか。」女房のお卷は恁う云ひ乍ら猪之助のもつてきた提灯をふん奪る樣にとつて、づん／＼鳥小屋の中に這入つて行く。

この鷄小屋は母屋の壁に添つて、東裏の明地に竹を斷べて作つたもので、上は繩を網んで蔽てあるが、所々破れて、身輕な牝鷄は直きこてから舞ひ出て、近所の野菜畠を荒しに出掛ける。

鷄小屋の隅の所によく肥えた味柑の木が一本ある。女房は鳥渡及び腰になつて、めやにの泌んだ目を細めて瞬しさうに見上た。

「居るかへ。」と七つになる妹のおしげは、半てんの襟を搔き合せて、母の後から、冷たく顏を舐める味柑の葉を右手ではねて仝樣に覗き込む。

「そんな所に居やあせまいがなあ、居るか。」畑歸りの儘入口の所に立つてゐた父が云つた。猪之助は鷄小屋の外から味柑の枝をざわ／＼と搖つたが見つからない

母は失望した樣に身を引いて、

「居らん。」

提灯の灯のとゞく限り鷄小屋は、餌鉢、水がめ、藁屑などが所狹に撒ばつて、暗い方から鷄の糞がぷん／＼匂ふ。女房は提灯を低く持つて、壁際に吊した籠の中へ手を突込むで、白と肉色の卵を二つ取り出した。おしげは相不變母の背後にへばりついて、

「卵かへ。」と知れきつた事を聞いてる。

女房はそれには構はず、

「猪之助／＼。」と聲高に呼んで、「其所のな、其所の接骨の根にでもすくんで居るかも知れんに――そら提灯をこゝからやる――

猪之助は默つて提灯を受取つて、向側へ廻つて、接骨の根へ提灯を差向けた。

其所へ隣家の女房がひよつくりやつて來た。

「怎うしたゞえ。怎うかしたゞかえ。」

「鷄が一匹失くなつたゞけど其所らに居らなんづらかのう。」

女房は便る網でも得たかの樣にはれ／＼しく云ふ。

「黒い鷄だかん。」

「はいさうだ。鷄冠の垂れた、目の下の少し白がゝつ

た。」

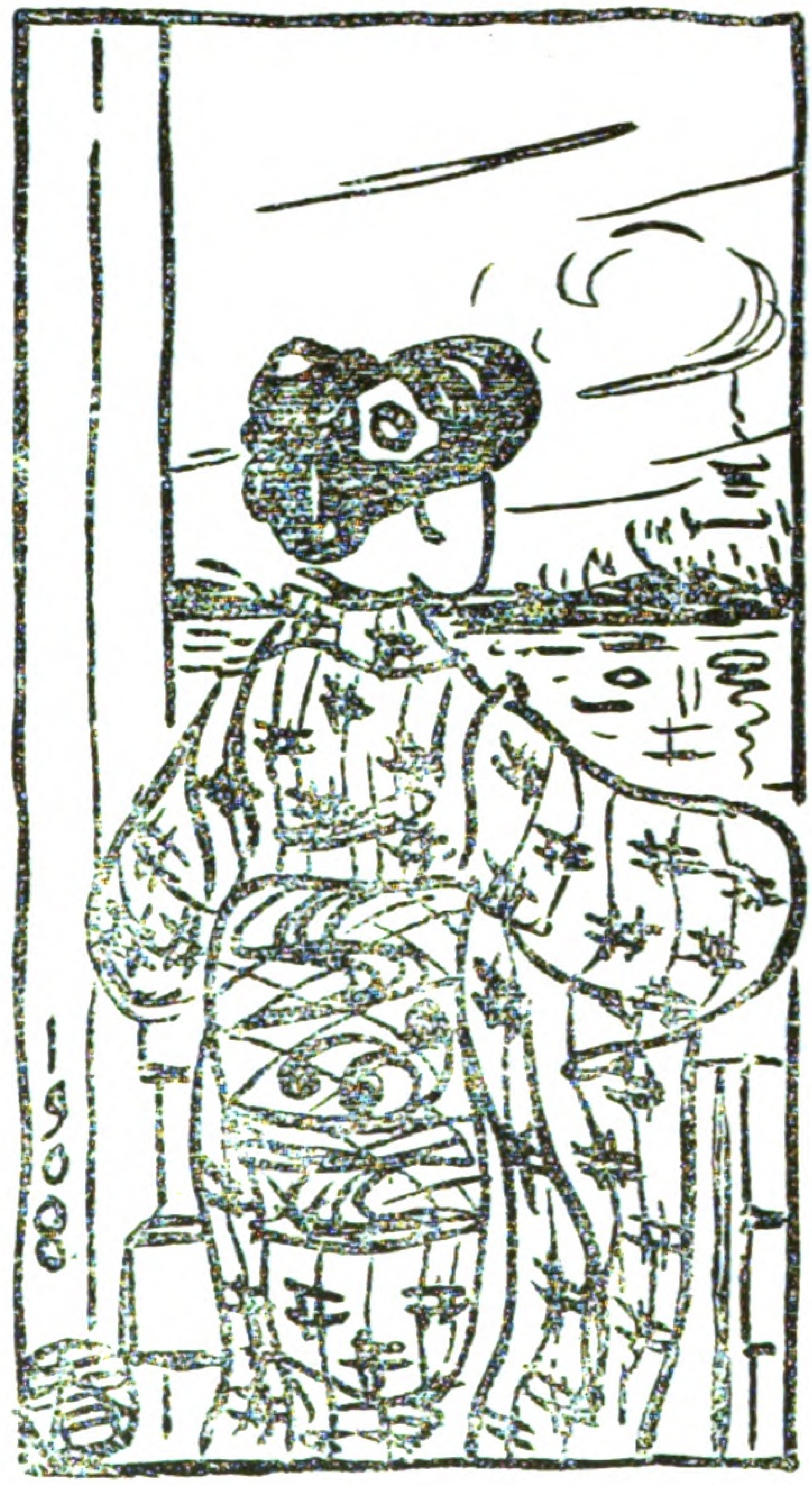
「それなら今日晝頃私家の表に遊んでをつたが、それから私留守だつたて怎うした知らん。」

父はいと鷹揚に、

「鷄てえものあ氣の小さいもんだて餘程氣をつけて追はないと、驚けた機につい迷つちまふ。」

「眞箇に、それてなくてさへ一羽ばかりはぐれて、他家の畑なんかへ遊びに行くと、それなり自分の家を忘れるなんかようあるとだてのう。鷄程馬鹿なものはない。」と婆さんが口を切る。

「此間もお前、お脊戸の鷄が迷つて來て何程追つても行かんので、晩に鷄箱へ這入つた所を捕へるつて其の儘にしておくと、晩になるとふつと何處かへ行つちやつて。」



佳作江のほとり　大阪　今西春江

「あんなり未だ分らんかん。」

「あゝ、あんなり。確にあれだと思ふのが西の方の人の家にゐるのだが。」

「鷄の澤山飼つてある那家？。」

「あゝ左樣だ。」

婆さんと女房とは首を搖つて會心の笑を洩らした。

猪之助は蹲んだまゝこの談話に耳を呉れてゐたが、話が歇むと立つて、違つた方へ提灯を向けた。蠟燭の灯を正面に受けて、黄金の手毬の樣な橙が葉がくれに光つて見える。

と婆さんが、

「そんな所になんの居らあやれ。」

猪之助は茫然起つた。
それから數分の後、暗い家にはカンテラの灯が小さく點つた。同時に、煤けた簀戸、石油瓶、紙傘の洋燈、掛竿、それから庭のやぐら、鎌かけ、梁に掛けた鍬、鳥箱、鷄箱の上の藁と穢苦しい光景が薄い光の中に浮いた。今夜は蛇の來るのまで懸念して、鷄箱の戸を特更によく閉めた。
婆さんの去た後、一家四人は火の氣のない夕餉の膳に向つた。じめ〳〵と濕つぽい蒲蓆の上で、冷たい飯、冷たい菜、冷たい茶で、お夜食のやうな晩飯を喰べると云ふ事は、二人の子供にとつてはこの上なき寂しさ、冷やかさであつた。何なら麥を蒸す沸騰の音でも、此室の何所かに響いてゐたら、この上の寂さは味はゝずに濟むと思つた。加旃猪之助は、己の委託されたものを失つたと云ふ良心のせめが小さな胸を痛ました。
女房は冴えぬ顔をして冷たい飯を口に銜んで
「晩くなると迷ふて、日の暮れぬうちに入れろつてあれ程言ひ聞かせて行つたに、遊ぶ事ばつかにほがされてるもんだて、仕樣がない。鷄一匹だつて空や愚じや買へやあせん。加旃彼奴は一番よく卵を産す産だつたに。」

猪之助は不平さうに、
「晩までなんちあ遊びやせなあなあ。」
「遊ばにやあ何故入れんのだ。」
「入れ樣と思つたつて這入やあせんだもの、逃げちまつて、なあおしげ。」おしげは默つて頷いた。
「這入らんと云ふ事があるもんか。」
「餘り酷く追つらもんだい。」父が言ひ足した。
「なんのなあ。」と猪之助はおしげの方を向いた。
「左樣でなくちやあ、それに相違ない。見た樣な事た」
女房は何所までも白狀させようとかゝる。が事實子供が追ひ失くせたとばつかりは思つてゐない。留守にこつそり、こつぷらてんの男が來て掠め去つたか、それとも隣畑の野菜でも荒しに出掛て、棒切れでも投げつけられたか、ことに依ると明日朝あたり、杉垣のかげからのつそり出て來るかも知れんとも思つた。
猪之助は默つて、茶椀の中を凝視ながら、冷たい茶漬を掻込んだ。
「これて思ひ知るがよいだ。」
と母は呟やくやうに言ひ捨てた。
「これから氣をつけてよからあ。」
父が膳を片付けて、立上り乍ら云つた。

女房はもう疾うに濟んで、膳箱の上へ頬杖つき、目を眠つたり、開いたりしてゐた。猪之助は飯を終ると、帶の間へ手をさし込んで、胡散さうに立つたが、母の方を一度見て、匿れるやうに寢室へ入つた。

「人」

拗所を田舍に取り、鷄一羽なくしたと云ふ僅かなことを此れだけに書きこなした手腕は、決して容易に得られるものでない、提灯持つて探しに出る處、家中が騷ぐ處、カンテラの火に冷たい飯を食ふ處など、何でもない動作を、此作者の筆に乘ると皆生命がある、殊に猪之助の母、乃ち此家の女房が能く田舍にある吝嗇の爲には愛情も何も彼も犧牲にする中婆さんを彷彿せしめて居る（評）

父子

岡田美知代

明けましたから最も一昨年の秋、私共は牛込辨天町に移り住みました。其頃私共の移轉と云へば聞えたものて、世間からは何か道樂にてもして居るかの樣に、とんでも無い評判をされるともありました。併し私共の方から申せばそれ相當の理由はあります積りて、絕へず轉し歩く數の中には、一軒や二軒いつ迄もと氣に入つた家のないてもありませんてしたけれ共、其處には又種々事情もあらうと云ふもの、つまり餘義なくされて轉します次第。辨天町の家も其一つて、物靜かな南榎町を大願寺の前から横に曲つて、瓦斯燈の硝子へ鍋釜の形を出したいかけやから斜に左手の門構へ、門を入つて直ぐ横手に、細谷とやさしい女文字の表札うつた格子戸の家があり、兩側に樫檜の植込を見て、借りようと云ふ家の玄關は正面に奥深く、知人と云ふてはないが、二三度さる席て顏を合した事のある、某大學出の秋山と云ふ男の持家、二階が八疊四疊半とそれに二疊間二つ、下は茶の間御座敷敷臺付玄關下女部屋臺所と云つた造りて、木口は皆ひねくつたものばかりを撰び造作の洒落てる事は先づお茶人向か隱宅か、別に一棟湯殿もある。それて家賃は十八圓、何よりも嬉れしいのは眺望がよくて閑靜な事、一通り話を纏めて早速見つくろいに出掛けて見ると、植込の樫をヂヤ

キリヂャキリ鋏で以て手入れしながら、一ず々〱此方を氣にして、眼の鋭い。けれ共白い髯の長く美しい老人が居まして、私は初め細谷とやら前の家の御隠居だらう位に思つて、其積りに唯會釋した計りで過ぎようとしました。と、もしと呼びとめ、

「貴下かね、這度此處へ越して來ようと云ふのは、それじや敷が三月分いりますぞう、秋山は何と云つたか知らんが、彼は養子じや、私が折合はん、好いかね。敷が三月分いりますぞう。」

秋山との談判には家賃を前金でと計り、敷等と其樣した事は少しもなかつたので、變だとは思ひましたが最早それ〱準備もして居る事なり、敷がいりますぞうと、古風で飾り氣のない其言ひ草が如何にも氣に入つた、尊大な樣子もさまで憎いとは思はず、多少の損はあるけれど、這度目移轉す時に世話がなく、吾々の樣な遣りつ放しの、貯蓄心のない者にはけつく便利かも知れぬと云ふので、丁度手許に金があるのを幸私は何も云はず、先方の云ひ目に從ひました。

移つて見ると思つたよりも尚一倍物靜かで、只時折遠く榎町をはやして行く廣告屋の幽かな樂隊を聞きつけ、おもてを通る飴屋の唐人笛にあわてゝ、此處彼處の路地口から溢れるやうに駈け出す小供連や、女中共の下駄の音カラコロと、笑聲に交つて聞える計り、私は其都度云ひしらぬ物懐しさを覺えるので、靜かに物を考へ書物を讀むにはうつてつけの土地です。私は書齋を二階の四疊半と定めましたが、東北に向つて開口から眼白臺を望み、稍色づき染めた森の景色の美しさ窓の障子はすつかり硝子張りになつて居て、目の下の芋畑を隔てゝ、恰度正面に建てられた二階の八疊らしいのに、二十一二の書生が二人机を並べて、早稲田邊りへ通ふのでせう、盛に新體詩を朗讀するやら、議論を初めるやら、細かな談話は解りませんが、偶には鍋のお汁を蹴覆す等の喜劇を演じて、如何やら自炊して居る樣子、吾々も曾て彼の時分には親友H君と二人、原町に家を持つて彼樣した愉快な生活をしたものです勿論今日迄も變らぬ友情を續けては居ますけれど、何と云ふても樂しかつたのは矢張り彼の時分で、私はいつそ若い二人が妬ましい樣な氣もします。次ぎの間の八疊は眞西を受けて居ますから、お天氣の好いよく晴れた日なぞ、障子を開けると座つて居て富士の高嶺があざやかに見えます。何方かと云へば些と奇麗過ぎて秩父榛名等の連山が宛ら屛風を立て廻した樣な森嚴な

山らしい趣はありませんけれど、如何にも形よく繪にも見られぬ美くしさは、誰一人讃め稱へぬものもありますまい。前の家の裏口は私共の切庭と續いて居て此處から座敷の樣子を見て居ると中々面白い。家族は母子と老婢の三人限りて、阿母さんと云ふのは何うても精神病か、てなければ烈しいヒステリーらしく餘程違つて居る。娘は年頃二十か一か、例のハイカつた廂を巾廣の黒リボンて飾つたマガレツトに結び、黑眼勝の細面の、眉の邊りに云ひ知らぬ寂しい趣の充ちた美人て、强て云はうならスヰートメランコリーとても申しませうか、始終黃八丈の被布を着流し、殆んど毎夜の樣に角帽の書生が大勢出入つて、時には一二時頃迄も夜更しをしますので、起きて出るのは何時も十時を過ぎて、鏡臺の前に座つて寢くたれ髮を結び化へ、廂を前にかき出す手つきの器用さは、私は見る度にうまいものだと思ひますの。て、阿母さんは三度々々お魚がなくては不可ないと言つて、折節甚くだゞをこねますが、其津度娘は「そんな無理云つたつて仕樣がないじやありませんか、ね阿母さん好い兒だから今朝丈け我慢なさい、今に老婢を買ひにやりますから、ねえ老婢や序に私の分も見て來てお呉れ、伊勢海老てなくちや嫌だよ。」と云つた調子て、我儘てはあるが中々しつかりしたもので、多少阿轉婆過ぎると思ふ事のないてもありませんが、私は全く氣に入つて了ひました。併し近所の評判は餘りよくない方て、前のいかけやのお神さんなんかは別して「何をやつてるんだかお嬢樣も聞いて呆れる。」とか何とか、時にはわざ／＼私共の下女を呼び出して「一寸とお前さんお聞きよ、可笑しいじやないかね、昨夜ね私が遲くお湯から歸つてくると其處の橫町て、細谷さんのがさ、若い男と手を組んて異人じやあるまいし、つるんて歩いてるじやないかねお前さん。」こんな事迄云ふんてす。而して折々立派な御隱居が訪ねて來ますと、娘は父樣と呼びまして、人の噂ては狂人の阿母さんは妾だと申すことてす。

それて私共ては別に他へ轉さうと云ふ氣もなかつたのてすけれど、思ひ掛けもなく家主の方て財産爭ひを初めた爲、何處へ家賃を拂つて好いのだか解らなくなつたので、委しい事は知りませんが、つまり此家は例の老人の娘即ち秋山の妻なる者の名義になつて居て云ふ迄も無く法律上秋山に權利があるのてす。併し内情を聞いて見ると、娘へ讓り渡しの登記々入後、老人の手て湯殿を建て造作を增し、事實に於て全く双方の

所爲なのですから、私も殆んど始末に困つて友人に話しますと、中にはそんな事位何も譯は無い、それ程氣に入つた家なら家賃等拂はないだつて、大に此喧嘩を利用して何時迄も知らん顏して居るさ、等と茶化し半分亂暴な事を云つてのける者もありました。仕方が無いからいつそ秋山へも老人へも拂はず、月々十八圓づつ家賃あてに銀行の貯蓄へても入れて置かうかしらとも考へましたが、書物を讀んで居てもふと此問題が出て來る。と最う無遮苦遮に不快の念が壓へきれなくなる、例の窓硝子から畜生部屋を覗くと、氣まぎれ處か、此樣な時には餘計にいら〳〵します、てわざと見ないやうにして何時も次の間の八疊へ行くのてす。

　或日の夕方又無遮苦遮して來たので、八疊の緣側に出て暫く富士を見入つた。と前の家て何だか罵る樣な聲が聞えます、いつに無い事變だと思つてそつと覗いて見ると、流石に障子は閉てられて中の樣子はしれません。

「だつて私……あの父樣の御名譽を毀損る樣な事は決して致さない積りて御座います、け共此事計りは死を以て拒まして頂きます。」と少しく震へを帶びては居るが落着いた娘の聲て。

「じや貴樣は野村を思ふとると云ふのか。」急き込んだ調子て、全く別人かと思はれるけれ共、確かに父てす。

「ハイ。」

「フン好い度胸。」と嘲つて「併し考へて見るが好い、お前だつて最う二十越した女だ、少しは行末の事も考へてのう美耶、たのむ。」

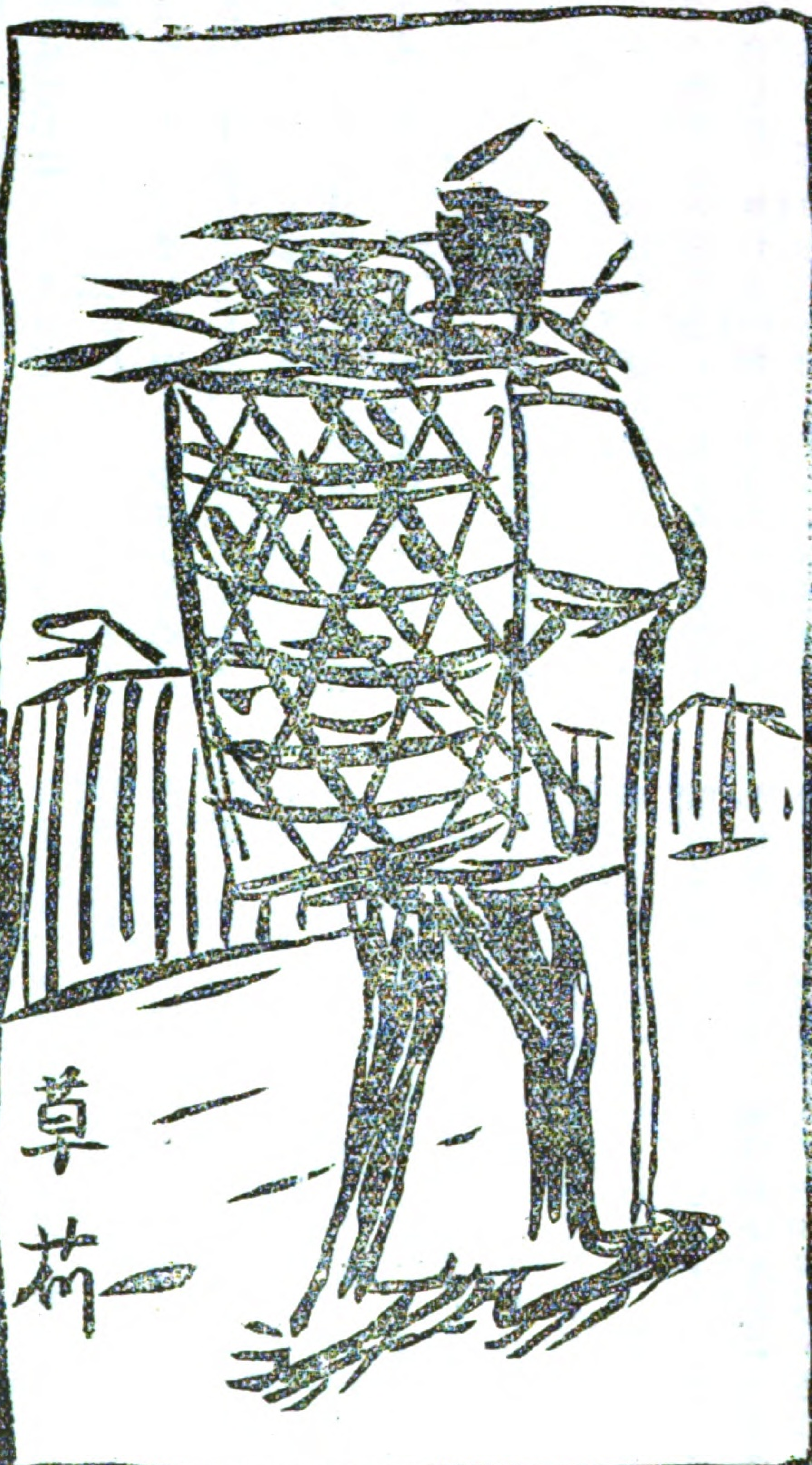
「濟みません、けれ共……。」

「けれ共野村は忘れられんと云ふのか、馬鹿奴、梅津は子爵だぞ、願つても無い良緣とは思はんか、私はな妾腹だからと云ふので世間からお前が馬鹿められぬやうにと、甚麽に苦しんだと思ふ、馬鹿奴！」

倘く〳〵說諭して居る樣てしたが、聲が低くなつてはつきりと聞えません。二三日後ふと娘を見掛ますと、思ひなしか甚くやつれて蒼白めた其色削けた其頰は明かに此頃の烈しい煩悶の程を語りますので、私は浸々痛々しく感じるのでした。て絕へず娘の事が氣になつて意志を貫すか、柔順しく泣いて悲しい運命に從ふか、私は面白い芝居の一幕を見る積りて居ましたが一方家主の爭ひは愈々激しくなつて來て、終に秋山が家を賣物に出す、而して每日の樣に買手を案內すれば老人も又默つては居ない、湯殿を初め自分て建て增し

た箇處は一切毀して持つて歸ると云ふ始末、如何にしても煩はしさに堪へ兼ね、又かと友人に笑はれ乍ら、今少して何方かに定らうと云ふ前の家の娘の上も見定ず、私は又もや移轉して終ひました。

此作者の技倆は前の「文壇の花」て認められた通りで、兎に角作家の素質は具はつてゐる此作見つけ處ら面白く描寫も念入だが、筋を叙し事を描くことが主になつて、存外人間が活きなかつた、中心に全力を入れなかつた爲に、面白くは讀まれても、後へ殘る印象が弱い、成程世間には斯んな事もあらうと思はしめるが、斯んな人もあらうと思はしめる處で一二段落ちた（評）



佳作　草刈

滋賀縣　若井きく子

『秀透』

お志摩

麻布　森とよ子

まあ、お志摩は遂々情死なんかしたんてすか、まあ可哀相な事をしましたね（と平崎の奥さんが語りだした。）一體強情な女てしてね、一度爲ようと思つた事は、叱つてもどうしても聞きませんてした。てすから氣が向いて自分からやりだす時を待つてゐるんてす、するとよく動きま

すよ。一日汗水流してもさも愉快さうでした。

私共に參りました時ですか、さう、昨年の二月時分でしたらう。前の下女が急に暇を取つて歸つたものですから、桂庵に賴んでやつと探して貰つたのですが丁度サラ〳〵と淡雪が降つてる日でした。ヒョッコリ勝手口から身體の大きな女が現はれたので驚てると後から桂庵の女房さんが來ましたので、やう〳〵賴んで置いた女中といふ事が分りました。

ムッツリして口も中々利きません。

『お前さん、之からお世話になるんだから、よく奥樣にお賴みしてお置きなさい。』と女房さんに言はれて初めて頭を下げましたが、矢張無言でした。

『お前の名は何んてお言ひだい？』と女房さんが歸つてから尋ねますと、

『スま。』と答へました。スだかシだか分らないので、

『もう一度言つて御覧。』と聞き返しましたら、矢張り

『スま。』と言ひました。其でも何だか妙なので、

『字で書いてお呉れ。』と申しました。すると今度は、

『シマ。』と覚束ない片假名で書きました。おほゝ恰度異人と話してるやうなんです。と奥さんは愼ましやかに微笑んだ。

それから年齢を聞きましたら『ズウハッ（十八）』と答へるのです。東北地方の者ですから致し方もありませんが、初めの中は用を命付けても間違いばかり多くてそれは困りました。

それに馬鹿正直でしてね、何時でしたか夫が笑談に柿栗と言ふものを買つて來いと申しましたら、霞町から六本木あたりの菓物屋や八百屋を殘らず探したさうで、三時間ばかり經つてからボンヤリ歸つて參りまして『旦那さん、何處へ行つても柿栗なんてごぜえませんです。』と恁うなんてしやう、餘り可笑しいので皆で腹を抱へて笑ひますと、何ですか大層怒つて居りました。罪な事を致したものです。

それでも二月ばかり經ちます中には、漸々東京風に馴染んで來まして、言葉も大分直りました。それにおホゝ色氣がついて來ましてね、魚屋や牛乳屋の若衆に嘲弄はれたり何んぞ致しますと、それは頰を紅めて恥かしがるのです、或時郵便配達に『お多福。』と言はれたとかで、終日鬱いでた事がありました。

その時分から暇さへあれば鏡を買つて來て見てゐるんです。そしちや毎日のやうにお湯に這入つて頭髮を結つて白粉をつけて、そして鏡に向つては前から見た

り後姿を映したりして喜んでゐるのです。夫も、『あつはゝゝあの面相て！』と能く笑つてゐました。

それも夜なら未だしもですけれど、晝日中そのお怪のやうに眞白に塗つた顔で町に買物に參るんてしやう近所の人が、「山崎さんの女中は一體何んてす、全然婬賣みたいぢやありませんか。」と噂してゐたさうてす。それが私の耳にも這入りましたから、

『お前は一月の給金を湯錢と白粉の代に使つて了ふんだらう。』と申しますと、餘計なお世話だと言ふやうにブツ／＼言つて居りました。

『髪などもせめて二日置き位に解くがいゝ。』

と言つても矢張ふくれて默つてゐました。

田舎からポッと出の女は墮落し易いと申しますが、つまり、よく土地の有様も知らないて、無暗に生意氣になりたがるからてございましやう。お志摩なども慥かに然うてした。

もう夏の末頃――丁度お志摩が宅に參りましてから七ヶ月目頃――になりますと、夜など種々の用事を作りましては外へ出たがります。お湯に行つても二時間餘もかゝる事がありますので、或時、「一體女が夜然う出る事は不可いのだが、用があるなら成る可く晝間にするが好い。」と夫が云ひましたら、例の通りムツクリとして何も答へませんてした。

『お前は主人が何を言つても返事をせんのか。』と今度は少々強く申しますと、「然うぢや無えんてす。」とやつと澁々した調子て言ふのてす。『然うてないのなら答へるが好いぢやないか。何しろ夜出る事は止して晝間にしろ！』

其時は其て濟みましたが、何時まで經つてもお志摩の夜出る事は中々直りません。もう致方がないと思つて夫も私も其からは捨てて置きました。

それから、二ヶ月ばかり經ての事です、初秋の小雨の降る淋しい晩てした。恁ういふ晩は早く寢た方が好いと申しました、九時頃からもう戸を締めさせて家中寢靜つて了いまして。妙に淋しい晩てしてね、外にはポト／＼と雨垂れの軒に傳ふ音が聞えます。コホロギが哀れな聲て鳴いてゐました。私はどういふものだか少しウト／＼すると直ぐ眼が醒めてどうしても寢つかれませんので、仕方なしに天井を默つて見つめながらボンヤリして居りますと、丁度十一時半頃てした。戸外てピーと幽かに口笛の聲が聞えました。別に大した事てもないので氣にも止めないてその儘又ボンヤリし

てゐますと、今度は女中部屋の方でゴトと音がするのです。それと共にスーと唐紙の開く音がしました。多分お志摩が便所へでも行くのだらうと思つてゐましたが、便所へ行くのなら私の寢てゐる茶の間を通りさうなものなのに、何時まで經てもそんな樣子がありません。私も何んだか怪かしいと思つてゐました。するとやがて靜かに勝手の雨戸の開く音がしました。私は驚いて「お志摩かい？」と言ひますと、「はい。」とさも驚いたと云ふ風に答へましたが、その儘靜かに雨戸を締めて又女中部屋に歸つて行きました。「お志摩何んだい？」と私は重ねて尋ねましたが、もう何とも答へませんでした。何んで御座いますんですよ、口笛は合圖でしてね、おホヽ、お志摩も最うそれ程になつて居りましたんですの！それから後でした。夫が或晩八時頃散歩がてらに青山墓地を彷徨つてゐますと、魚屋の定と言ふ若い衆と話してゐた女がありましたが、どうもお志摩のやうだつたさうです。夫を見て袂で直ぐ顔を隱したんですつて、おホヽヽヽ。

　そんなでしたから代りがあつたらば、早く取り替へやうと思つてゐましたが、何分下女が今御座いませんさうでね、桂庵に賴みましても中々連れて來て吳れませんでした。

　其樣斯樣で又一月ばかり經ちました。とその頃から急にお志摩がしほれて來ましてね、何ですか太儀相なんです。それに私と好く一緒に參るのにお湯にも參りませんし、若しやと思つて注意して居りますと、酸い物を好んで食べてゐます。それでしたから或る時そつと誰もゐない室へ呼んで聞いて見ましたが、『其麼事は無え。』と言つて眞赤になりまして、中々實を吐かうとしません。『でも然うやつてゐてはお前のためにならないから。』と能く言つて聞かせましたら、やつと『濟みません。』と泣きました。『濟むも濟まないもお前の事なんだから、自分でして了つた事は仕力がない。それで對手は？』と聞きますと、果して魚屋の定でした。まあ、眞個にその時私は呆れてしまひましたよ。

　その中に漸々お志摩は人目にも立つ程のお腹になつて來ました。すると定は驚いたんで御座いませうよ。能くお志摩と爭つてゐましたが、その中に何處へか逃げ出して了ひました。非道い男ですはね。

　お志摩はそれは口惜がつて、『あの薄情者、唯ぢや置か無え。』と言つては泣いて居りました。そして間もなく私共にも何も言はずに姿を隱して了ひましたんで御

座います。多分男の跡を追つて行つたんだとは思つて居りましたが……。
情死の對手は矢張り定なんて御座いますか。然うですか。でも眞個に慫うならうとは存じませんでした。可哀相な事を致しましたね。（語り終つて平崎の奥さんは眼に涙を浮べて淋しさうに微笑んだ。）

渾然として珠の如き文體、餘り疵が無さ過ぎて、小說と云ふものゝ規範に書いたやうで、小說志願者の試驗作としては、確かに通過するけれども根抵の力が足りないやうで、此位の筆が自由に動くのだから、今少し實のある傑作を見せて貰ひたい（評）

暗き家

上野　葉山村子

一秒毎に變りゆく世のさまも一日二日には見ることも出來ないけれど、一年二年三年と積むでは、さすがに驚かれる。人口は幾何の增加を來たしたか知れず。小さな此の町にも家並美しく電氣がついたのでも知れる俥は人をのせて走り、荷馬車は荷をつけて步いてゐる痩せこけた犬がひとつ、喘ぎ〳〵步てゆく——全體、白い調子だ。何物か、目には見えないが活動という大きな翼を擴げて、上から覆ひかゝる。總の物は此の重い翼をはねのけやう、くぐり出ようとしてどたばたしてゐる——喧噪——それもやがて疲れ果てた氣勢で暮れ方の日は東側の軒並深くさし込んで來る。

半鐘の角から三軒目、金看板の高い倉造りは藥種店、雨風にさらぼいた大きな黒塗の看板に太い金字でうゐろうと書いたのが店先に吊してある。このやうな古い因縁つきな藥種店だから家のうちもうす暗い古典的だらうと想像がつく、事實は全然相違してゐる。

家のなかは明るくつて、硝子戸棚にはさま〳〵な美しく粧た香水瓶や賣藥なども並べてある。

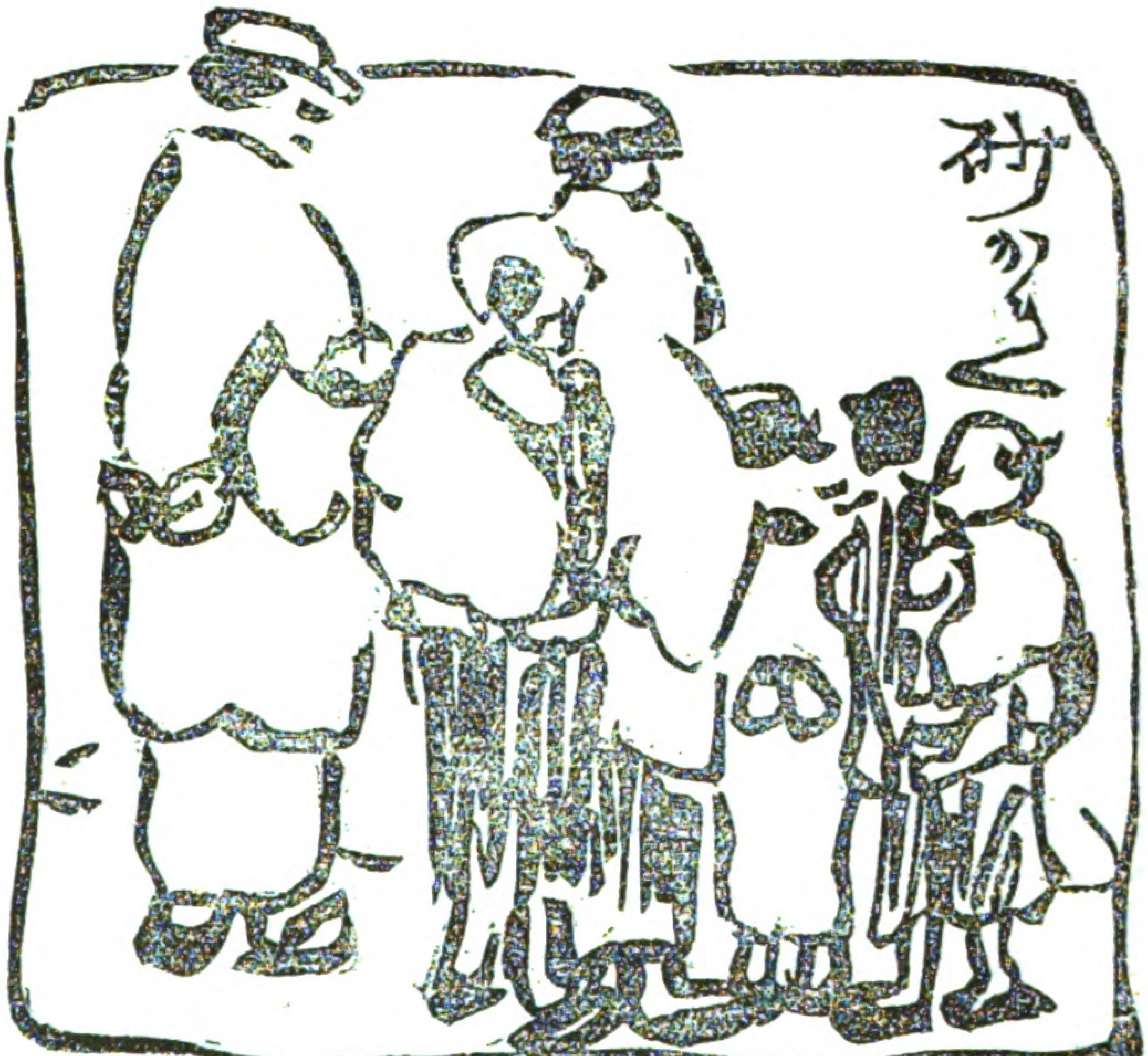
それと並むで、廂に青く苔蒸した奥暗い家の軒低く垂れた、暖簾の色は褪めてゐる。梅子の育つたのはこの家である。

梅子は鄙に稀な美貌を持てゐた。細面の引緊た、色艶は父に似て美しい、眼は稍細いが、視線に力がある。口は固く結てゐる方で總躰が愛くるしいというよりは寧權高い、小作りではあるが後ろ姿が如何にもすらりとしてゐる。梅子には意氣地ない一人の兄がある。

一と頻り込むだ飯時の勝手は掃きだされて、臺所には皿小鉢の觸れ合ふ音、帳塲の番頭が聲高に新聞の續物を讀むころには煙草入を腰にさしてゐた父の妻は早や見えなかつた。古い暖簾の家に一人息子と生れて、大量な祖父の手に育てられた身は、廿歲の年に義理で貰

つた分家の娘の窮屈さに苦んだ。
逃れてあるく道こそ違へ、いまだに笊碁の仲間を渡つて其日を暮してゐる。氣も心も弱い息子がふとしたことから暢氣な遊び場所を知つて其處へのみ足をむけるやうになつた。たまさかに歸つた折は殊更に氣づまりな家庭といふことを痛切に感じた。
若い時分のことを反省て、息子の放埓を叱ることのできない父は。齒痒さ腹立たしさに無暗と母にあたりちらされる嫁を愍れむだ、そして嫁の肩をもつた。圖にのつて姑を蔑がしろにする淺猿しい嫁の行爲を口惜しがる母の脊に、酒に狂ふた父の手はとばぬまでも、人の前をつくろう笑顔のうちには激しい暗闘があつた
姑は息子の道樂をひたすらに嫁の罪に歸した。
そうして罪を責るような仕向をされる兄嫁を蔽隠ふ、不思議な反抗心は梅子の胸にいつも湧いた。
梅子はどこまでも負け嫌いの女であつた。
學費の半分を貢いでゐた遠縁の醫學生を父母は梅子の夫と心で決めて。梅子にも望む女學校へも入れて置た
梅子が鋭敏な頭はいつともなしにさとつた。
梅子の室は離室の十疊に隣つた四疊半のこぢんまりした一間、建築がいゝので間が小さくても天井は高く。浮彫の欄間に紅葉を散らした、南向の半床に接して丸窓が出來てゐる。南と西に椽側を廻らしてあるので家じうでは一番明るく日當がいゝ。町の物音も聞えぬ位隙あるごとに此の部屋へ引込て。勝手なことを考へる
昨年の秋心臟を病んだ兄の看護によばれてから上京を許されなくなつてからはいつも此の室に引こもつて友人のこと、東京のこと、それからそれへと聯想をめぐらしてゐる時、いつも梅子の胸には醫學生の面影がうかんで來た。けれど醫學生は梅子や梅子の父母の思ふ通りにはならなかつた。或る年の春のこと。色褪めた古暖簾の前に若い都姿の夫婦連れをのせた梶棒はおろされた。何心なく出迎へた梅子は一層。憤怒の情がむら〳〵と押よせて『人を馬鹿にしてゐる』
『口惜しい〳〵』と腹の底でわめきたてた。
梅子の家を二年振りに訪れて身なりの大きくなつたのを恢かろした若い醫學生は、美くしい新婦と共に閑雅てゝからというので梅子の居間に通された。
梅子の胸は性來の勝氣の爲に忿怨失望の色を見せまいと板の樣に硬張つてゐた、母が勝手へ立つた後、三人て向いあふと、重い〳〵壓迫をうけてゐるようで碌々話も出來なかつた。

一東京は暑いてしよう。』梅子は思ひ出したようにいふ
『えゝ、でも慣れるとそうでもないです、東京へはもういらつしやいませんか。』
梅子はちらと瞳をあげたが新婦の視線とばつたり合つたので狼狽伏目になつて。
『行きたくもないてすよ、私のような我儘ものは矢張田舍の方が呑氣で。』
と心にもないとを言ふ、其樣ことはどうでもよいてはないか――要らぬ小癪な一寸顏をあげたが、直ぐ目を庭の方へ外らして了つた。
醫學生は小さくなつて默つてゐる新婦を一寸省みたが、仕樣ことなしに床の間の軸を茫然と見つめて居た。
梅子と、醫學生の二人の胸には冷たい水が暗く流れた。
『あの軸の繪は昔見た樣に覺へてゐますよ、あの自分



佳作 砂かき
大阪 梅原りう子

のお下げに結つた梅子さんの姿を考へてみると、目に浮かんで來るね、』
『そうですか』
と言ふたが薩張氣の乘らぬ返事ばかり。
醫學生も流石に手持不沙汰の感があつた。
梅子の父母の失望は激しかつた。感情を表面へ表す弱點を持つた梅子の母の待遇を見てとつた新夫婦は、にげるように匆々梅子の家を辭した。
梅予の矜は傷つけられた。少なからぬ侮辱を感じた梅子の反抗心は、新しく上京心を燃上らせた。
汽車賃を入れた財布はいつも懷をはなれぬようになつた。ともすれば、おち目な家運を白眼に見ようともした。さうした折がないて

もなかつたが。其の頭はもう見兼て手を出した出入の算盤を放すことは出來なかつた。諦らめよう諦めようとして二年はすぎた。

隙のあるごとに文學雜誌などを漁つてゐた、頭はいつかその方へ傾いて新らしい思潮も知つた、筆もとつて見た。折々の緣談。そんなことには耳もかさなくなつた。

北國に近い田舎町の夕べは早くから人通りが絶えて了ふ。夜は早く爐の火を消して戸を鎖す、店には小僧共の夜職の紙つぎ、音さら〳〵とそれも、何時しか聞こえなくなつて時計は九時を報じた。

足もと危ないまでに醉ひしれた兄は歸宅た。

向かひあつて一疊を横に隔て丶いぎたなく居眠つてゐた娘は腹立しげに勝手へ立つた、いつもかうした夜の母の煙管は、唐銅火鉢に甲高く響くのであつたが、現はすに現はされぬ面白くなさに、身體を弱くして其の精神を捻けさせて了つて何とも云ひしらぬ味氣なさが胸に充ちてゐる母は隅の炬燵に凭りかゝつて蹲つてゐる。四十といふ、頭髪のうすい痩せぎすの方で——大きい眼鏡かけた父は、身を斜に火鉢の猫板に肘をついて新聞から目をはなさない。

母は折々顔をあげて、ランプの向ふに何か一心に讀書してゐる梅子の方を見る。

父母も梅子も兄も默して一語も發しない。

兄は、ふいと次の間へ立つた。

不愉快な家庭を忌む念と意久地ない兄を憎む心とが一緖になつて、陰に陽に家庭の調和をはかる身の愚かさを感じた梅子は、閉いた書籍の文學を辿らずに盛んに上京心に駆られる——何かいはうかと顔をあげたが、又そのまゝ顔をさげて了ふ。

活動も、喧操も止むだ町の夜は靜かである。

止むとき知らぬ景色に夜すから雪がふり積る。

此作者も技倆は「文壇の花」で認められてゐる、其「春雨の家」に比べて此篇は優ろとも劣らない、田舎の町にありさうな家と人と女とを捉えて、又ありさうな出來事を書いて居る、深い底に何物かあつて人を引きつけるのではないが、局部〳〵の描寫はうまいものだ、面白く讀ませやうといふ點に於ては拔目のない方だ（評）

不安

東京　赤崎あい子

何んだか恁う頭が壓しつけられるやうで、近眼では無い筈だが遠方の物などは唯ボーッと霞んで居るやう少しも見えない。昨夜遲くまで起きて居た故もあらうが、どうもをかしいので醫者に行つて診て貰つた。

「少し神經衰弱といふ氣味がありますが大した事はあ

りませんよ。誰だつて多少犯されてるんですから。」と先生が居なくつて代診が言つた。それでも何んだか不安――代診なんか分るもんか、若し間違つた見立てゞもあつて、明日に成る中には、もう手後れになつて了つたらば――恁う言つたやうな念が譯もなく頭に往來して、居ても立つても堪らないやうな氣がする。

それでも千代子は祖母の一週忌といふので、夕方からぶら〳〵赤坂の溜池まで出かけた。

最早九月の末、黄昏の空には恐ろしいやうな形をした雲が靜かに浮んで居る。西の空はコバルトにピンクマダーでも混ぜたやう、ほんのりと淡紅を呈してゐて、涼しい風は淋しい音を立てゝ千代子の頰を吹く。秋の夕暮れの悲哀――恁ういふ風な感じが亂れ亂れた頭に深く深く響く。

千代子は兎に角步いた。

足はフラ〳〵する、眼はボーッとする、頭は壓しつけられるやう。不安が又浮んで來る。――若し手後れになつたならば……あゝ嫌だ嫌だ！

すると祖母の死んだ時の光景が眼に見える。靜かに眼を眠つて、眞白い衣から頭だけ出して、……その周圍に親類の者、知つた人等は皆集つて居る。父も母も伯母も叔父も、そして正雄さんも（從兄）……。皆の眼には淚が浮んでゐる、殊に伯母と母の眼は泣き腫れて居る。自分も泣く。……やがて坊さんが來る、お經を上げる、鐘の音が身に染みて悲しい。

千代子の心には死の悲慘な暗い影が浮んで來た。死！二三年前大森で見た水死！隣りの婆さんが縊首した時の淺猿しい姿！……思ふとぞつとした。

六本木の通りへ出た。緣日と見えて非常に混み合つて居る。電燈の光、瓦斯の光、燈火の光、それが飛び交ふ塵芥にボンヤリ見える。手を引かれて笑ひ興じて居る夫婦、孫の手を引く老婆、步くのに容易ではない程混雜してゐる。不圖千代子は恁んな事を思つた。

「遠かれ近かれ、もう死の手が近づいてるのではないか。何て人は恁んなに騷ぐのだらう！」

あゝ嫌だ、嫌だ！無意味だ！愚圖々々死の近づくのを知らぬ人間は馬鹿だ！死！悲慘だ！

又頭がグラ〳〵して來た。左の半面が殊に痛む。そして淋しい淋しい、人が居なかつたら泣いてみたいやうな氣になる。急いで雜踏から通り拔けた。

もう太陽は全く落ちて四邊は暗くなつてゐる。空には星の光がキラ〳〵輝いて居る。空氣は先刻よりも冷

ついて來た。頭も少し輕くなつたやうな氣がした。

千代子は新坂を降りかけた。皆緣日に引き込まれて此の邊の町の寂れた樣、雜踏を經て來た眼には、哀れに氣の毒に思はれてならない。

突然一人の男が千代子に衝き當つてニヤリと笑つて行つた。

「馬鹿！」と千代子は言つた。

「何んだと！」男はふり向いた。

千代子は默つて歩き出した。男も暫く立ち止つて見て居たが、ブツ／＼言ひながら矢張り歩き出した。

あゝ淺猿しい男！：：千代子は再び呟いた。

淺猿しい男、彼には此の秋の夕暮の悲哀をも感じまい。唯のらくらして浮ついた無意味の生活を送つて居るのだらう。人間の何んてあるかも知るまい、生も死も頓と頭にあるまい。哀れなものだ、儚いものだ。併し流石に千代子の胸は波打ち、心には恐怖が宿つて居た。

新坂を降り切ると交番がある。ボンヤリ一人の巡査が立つて居る、その影が後ろの何とかいふ醫者の電燈の爲めに、ハツキリと地面に映る。淋しい影だと思つた。空を仰ぐと星は益々輝いて、氷川の森はクツキリと黑く見える。何處からか草雲雀の鳴き聲が聞える秋の夜の悲哀——又つく／＼と身に染みるやうに覺えた。泣いて見たい、泣いて：：そして心ゆくばかり淚を流したならば、幾らか頭が輕くなるかも知れぬ。

死！悲慘なる死！：：千代子は又思つた。生きて居る者が動かなくなる、口を利かなくなる、眼を閉ぢる：：若し、自分の病氣が手後れになつて居て：：そして冷い死の手に捕へられたら：：あゝ不安、顏を外向けて眉をひそめた。

すると不意に後から聲をかけた者があつた。

「あの千代子さんぢやございませんか？」

「何方？」と

後をふり返ると同じ學校の同級の綾子だつた。

「まあ、貴女、何處へ御出かけですの？」

「私？私は溜池まで。」

と近づきながらニコ／＼して綾子は言つた。

千代子は愛想もなく答へた。

「御一人で？」

「ゑゝ。」

「何か御用事でもお有りになつて？」

「ゑゝ。」

千代子は他の事を考へて居た。

「貴女、今日學校にお見えにならなかつたわねえ。」

「あゝ。」

「どうか遊ばしたんですか？」

「あゝ、少し頭が痛みましたから……」

綾子は千代子の横顔を見たが、一寸微笑んでそのまゝ默つて了つた。千代子も勿論無言である。二人の間を涼風が通る。綾子の雪駄の音と千代子の小町下駄の響きとは、四邊の空氣に傳はる。

「千代子さん。」

と又暫くして綾子が又呼びかけた。

「はい？」

「貴女、緣日へ行つてらしつて？」

「あゝ、一寸通りました。」

「賑かてしたわね。」

「あゝ。」

「今夜は又格別人が澤山出て居ましたから……」

綾子の面白さうに言ふ顏を、苦々しく思つて千代子は見た。そして何も言はなかつた。

「貴女、何か面白い事がありましたか？」

「面白いとは？」

「お、ホヽヽヽ、」

と嫌らしく綾子は笑つた。千代子は不圖綾子の學校でも不評判て、又實際素行の正しくなかつた事を思ひ出して、益々不快を感じた。どうせ一人て緣日など彷徨く位だもの……とも思つた。

「貴女お一人なの？」

今度は千代子が尋ねた。

「然うよ、何故？」

「いえ唯一寸……。」

「おつホヽヽ」

又蓮葉に綾子は笑つた。千代子はニコリともしなかつた。

「丁度觀音樣の側て植木を見て居りましたらね……」

と嬉しくて嬉しくて堪らぬやうに、男の學生が横眼て見て行つたとか、衝き當つたとか、手を握らうとしたとか綾子は得意氣に語つて、

「つい今し方まて後ろに蹤いて來たんてすよ。」

と附加へた。

千代子は淺猿しい、哀れに儚い者よ……といふやうな感じがして聞いて居たが、フヽンと鼻て冷笑してやりたいやうな氣になつた。

「そりやさぞ面白うございましたらうね！」と嘲笑するやうに云つた。

「然？」と綾子も急に妙に默つて了つた。そして福吉町の角に來たらそこ〳〵に分れを告げた。

千代子は又淋しみを感じた。そして又冷笑する氣もして居た。て溜池に近づいた時に、急に自分の從弟――と云つても未だ八つばかり――を思ひ出して鹽煎餅を買ひに小さな店に這入つた。

何故然う「死」に就いて深く心をなやますか、それが少し分りかねるので、唐突のやうに思はれるが、緣日に歩いて蓮葉の友人と話す處などは、手に入つたもので、其人が眼に見える、描寫は全體に垢拔がして、清新の味ひに充ちてゐる（評）

紫陽花

下野節子

「お新ちやん、本當に全然東京者になんなすつて、一寸道でゝも逢たんぢや分りやんせんよマア、」「ホヽ島ちやんもお變りになつたわ―本當に久濶ね島ちやん一寸お寄り下さらない事」「あの、……今日は子供を寢して參りましたんて、又今度ゆつくり上りますよ、」小身なのに五月の懶さうな身を紬の前掛態とらしう、母親振りし世話女房も、黑と合せた友禪縮緬の飛々に紅入の極の模樣が流石にまだ若い。他家を訪ねての歸り道裏木戸に居た幼友達の新子に逢つたのである。

藥種屋の一人娘のお島……町の學校を卒へるのを待ち兼ねた母親は其心組で長らく店に置た養子と夫婦したお島は人の世の戀味ふ暇もなく、人妻と呼ばれて、廿五の今七つを頭に近き中に三人の母親となるので……親がゝりの家付きて浮世の浪風何處を吹くかと、……生れた町の外よき處ありとも思はねば平凡の生活に滿足して何の野心もない。今年學校へ行く子供の母親としては心も年もあまりに若いのである。

新子の家は富んで居る。邸も廣く商ふ肥料は多くの藏に積み上げられ荷馬車の出入絶えぬ、家兄は新子にも從姉に當る妻を迎へて、乳呑子さへ抱く身の上。兄妹の母親は何の苦勞もない筈である……が新子の幼い頃其良人……新子等の父……は何の煩悶もないのに狂氣になつた。狂へる血は遺傳である、明日は東京の病院にといふ夜看護婦の假寢のひまに姿は見えて、江戸川に上草履が二つ並んだのを見出した時、母は狂はん計り歎きの限りを盡した。新子の祖父も、祖父の伯母も此血の爲に果敢なくなつたといふが、父の樣に非業の最期ではなかつた。今は縣廳も設立たお屋敷町から來

た母親は何も知らずに來たのてある、淑やかな柔和な母は其より以後世に出るのを耻ぢた。新子は美しい娘てあつたが緣が遠い、女學校を卒へて廿二迄家に居つた。其間二度迄緣談は纒りかけて破れた。母親は美しき我が娘の姿を見ては夜も眠られぬと袖の乾く間は無かつた。地方の常とて土地の友は皆嫁したのてある、新子は一生を教育事業に委ねんと遂に渡淸を思ひ立つた同意せぬ母を强て說て、上京の上、音樂と淸語を專門に三年の星霜怠りなく、優れた成績を以て、淸國某省へ招聘せらるゝ事と爲たので一旦歸國したのてある。

不安に滿ちた胸の血は、花の如き青春の若き血と戰つて、煩々、……悶々、……己が肉の色を見ては世を呪ひ、夢の榮えの光閃めく現し世にすぐ〜と身丈のびて、而も華やかな女の生を受けたのを恨み憤つた。及はぬ望みとは思ひ乍らも美しき時代に美しく描いた、戀人があつたが友にも母にも素振にも表さぬ新子の戀は儚き夢と終つた、悉皆新子の身を知りぬいて居る舊友の許に戀に敗れた後丹躑躅の燃ゆる思ひに泣きつゝも一と書て送た時、友は涙の限り同情を寄せたのてある、斯る煩と戰つた新子は世を冷やかに見なして反抗の念がまざ〜ときざしたのてあつた。

「島ちやん何時頃御丈夫におなりなさるの？」木戸の中に入て日中の暑さを栗の木蔭にさけつゝお島の姿を



佳作　お針り　北海道　わかば

見てからきいた。「オホホ……」此暮てすがね、私耻しいんですよ、此様な樣子して、お新ちやんなんざあ本當に氣樂で好う御座んすね、私等子供許り出きて、チツトモ身體に暇がないんですもの」「デモお樂しみでしやう」「いゝえ今の中は少とも樂しみ所か苦しい位ですが又大きくなつたらと思つて、オホホ……」と相手が淋しい顔にお島は笑ひにまぎらしたが、「私等こんな田舎で何處も見ずに一生を過すんですがお新ちやんなんか、東京で修業して外國へ迄敎へに行きなはるつて豪い事つたと町で賞てますがね、デモ遠い〳〵處だつてますから阿母さんが如何にか、苦勞なはんすだらうつて家でもいつて居りましたんですよ」新子は豪いと言はれるのが我身の不運を笑ふ聲かと恨めしく、又同情されるのが情ないやうに口惜しいのである。「遠いと言つても西洋へさへ行く方があるのですもの―まあ知らない所を見て來る丈でも好いと思ふのよ」「爲ゝ、爲ゝ、左樣ですとも……まだ四五日間があるんぢやお新ちやん家へもお遊びに來て下さいな矢張汚ない處ですが」「上れる樣でしたらね、お邪魔致しますわ、小母さんにも宜敷仰有て置て下さいよ」女の兒が急いて馳て來たが母の姿を見付て「阿母ちやん」と呼んで又かくれた「マアお蝶來たのかい此通り跡計り追てオホホ……あれが總領なんですよ、汚ない風をして、――此方へ來て姉ちやんにお辭儀をするんだよ」

お蝶は含耻んだ風で新子に頭を下げた、「まあお蝶ちやんてしたか、大きくなつて、可愛いのね、安次さんによく似てお出でだわ、學校は？」「一年級」と小さく答へる。お島は可愛相に「跳ね廻るので眞黑になつて、辰坊はまだお晝寢かへ」「あの起きて泣いてるからつて祖母ちやんが」「ア、さうかへ……てはお新ちやん乾度いらしつて下さんしよ」

「あらお歸り、お止め申しても立話で、……蝶ちやんに何か上げたいわ」新子が行ふとするのをお島は手早く「いゝえ又上りますとお新ちやん、家でもお袋が困て居ますから」「さう、ぢや又蝶ちやんといらしつて下さいね待つてますわ」新子は外迄送ると母子は手を取て急いて踊る。お蝶が後を振り返つてはお河童顔を母の袂にかくす、新子は凝乎と見送つた、肥料を店に運ぶ運送車の響が眞晝の靜けさを破つてゴーと聞える、栗の葉がはらりと新子の肩に落ちたのを氣味惡さうに滑らして、キリツと下駄で踏みつけた。「島ちやんにお逢ひだつたのかへ、お上げ申せばよかつたに」この年

頃の心づかひは年より老けて足音も靜である、手に花鋏と見事な紫陽花を持つた新子の母なので……答へぬ娘と並んで木戸から顏を出したが向ふの角を曲る母子を見て「島ちやんは和女と同年だつたね。もう三人の阿母さんになるんだよ」新子は冷やかな笑を見せて、「あんな若くつて、子供に追はれて田舍で終へるのかと思ふと可哀想だわ」「デモ親はね――新ちやん田舍で朽ちてもあんなにして見たいよ」と娘の顏色を窺いて聲が濕る、新子は苛然して「デモ何て仰有たつて仕方がないわ……もう嫌や阿母さんそんなこと」と母屋へと足を向る娘を哀氣に見遣て「新や、お前も彼樣遠くへ行かなくつてもねえ。私は人樣に賞られるのが辛いがね」と零とする。「又阿母樣弱い事仰有つて、……もう決定たのに」と強くは云ても瘦せた母を見れば淚も湧く。「私も何もかも斯した因緣と思て、そりや、もう諦め樣〳〵と思つては居るがね、マア人並より優れた娘を授つて居ながら、遠い處へ遣つてしまふのかと思ふと、遂ねえ、情なくつて、……私等には神樣も佛樣も無のかと……勿體ないが私は御先祖がお恨み申されるのよ、兄さんもお前に分産とお言のだから桂一と夫婦に爲てお呉だと、私も安心だし、家の爲にも……ねえ、新ちやんお前よく考へて御覽よ」

新子は都にありし折も、美しといふ我姿に、……惡戲にとはいへ、さり迚衷心よりと思はるゝ文の數々、名も表に言ひ寄る男も有しが、父の血潮を盛る我肉體の此儚世の爲に消よかしと心の誓に心強くも情なく過しゝもの、、我も處女の、甘き夢を夢みて微笑む友の上妬ましう、殊には此君のみは……との戀もたゞ悲しき運命に縛られたる魄の恐れに我から逃げて敗れしこの身……不言の中に互の薄命を慰め合ふ母の口より桂一と……家の白鼠とか言へど……どちらと聞いた時、高きに憧れた身は、手強く抗ふたものを又も言ふ母、…母迄に悔辱された樣に憎しい程恨めしく動悸さへ亢るのである。……「あ、あんな……あんな教育も無い桂一なんかに、阿母樣私を其樣に、莫迦に見て居らつしやるの、いゝわ私、もう歸國つてなんか來はしない。」「まあ新や、何も是非といふ譯ぢやなし、其樣に怒る事はないのだよ。たゞ私が心細いので斯うもしたらと思ふのだがね、歸らないなんて悲しい事を云ておくれてないよ、娘といへばお前一人なのだもの、阿母樣はお前が便りに思はれてね……」と襦袢の袖に淚を拭ふたが露乾く花に氣付て、「此樣によく咲いてたから亡父

樣に取て來たが、水揚げしてお室へ一つ挿したら好からう』美しい色の花を一本渡して、先に立て行く。新子は心優しき老いたる母を殘して海路遙に外國迄も漂泊可き身の運命を思ひ、母在す國を後に遠き旅路の船の上に打寄る濤のさぶり〳〵と。……闇に啼く千鳥の聲に夢破られて、母の面影忍ぶ時……獨り……獨り…………と寂い〳〵呼きを聞く夜々の其寂寥……身を襲ふ時、我心はよく贏ち得るであらう？……と思はず先祖より傳る血の前に犧牲となるべき我身を切り惨んで見たい樣な氣もする。

ピリッと音がしたので母は驚いて見返ると、紫陽花は莖より折られて、鞠の樣に目醒る計り美事な花は拗られて丸められて居る、新子の眼は異樣な鋭い光を放つて居た。

* * * * *

紫陽花も二度咲たが桑野新子の姿は町に見えない。哀なる新子は胡砂吹く國に美い身の胸を抱て故山の空のみ眺て居るのであらう？……得意のオーガンは彼女をよく慰め得るであらう？……隙の多い町の郵便局員が此頃巣鴨の消印を幾度となく見たと話した時、町の人は若や？……と噂した。此間に新子の母親と家兄は雨三度東京へ往復したとの事である。

新子の心持も、お島の動作も、新子の母のまめやかさも皆それ〳〵力を籠めて書いてある、殆んど非難すべき點がない、まア殊更狂はさなくてもいゝかとも思ふが、最も是あるが爲に一層同情は深くなる要するに作家らしい筆(評)

變化

横濱　石川しげ子

妾は恰んど夢を見て居る如な心地で家へ歸りましたそして自分の居間の机の前に座つて眤と考へて見ました、けれ共怎うしても今日私が見たり聞いたりした事が眞實でない如な氣がしてなりません。

先々月、六月の十九日、それは妾の許へ郷里の父から母の大病の報知が來る前の日の事でした。

例日の如に妾は小田樣と連れ立て裁縫學校からの歸途、丁度都橋の上まで來ますと、朝から模樣して居ました雨が遂々降て來ました。妾は怎う仕樣かと思ひましたら小田樣が。

『貴女の御家までは未だ餘程有るんですから迚も此降りて、傘無しでは行けやしませんから、少し家で雨止みしていらつしやい、』

と仰有て下すつたものだから妾も其塲合、それより外に仕方がありませんでしたから仰有る通りに從いて

行きました。

小田樣の御宅は柳町と云ふ一町しかない短い町てしたが、場所は横濱ても目拔の處だ相てす。て御宅の方向は前に一寸廣い河を控へて、少し北へ寄つた東向の瓦屋根の角の御家てした。

表の硝子戸を開けて家内へはいる頃は、空もますます暗く雨も餘程烈しくなつて風さへ少し出たのてす。家内へはいると直と出て入らつしやつたのは小田樣の御母樣て、御芳年は九とか四十とか、御年よりは二つ三ッ位も老けて見えます、これは左の眼が御不良からてしようと思ひます。顔色の少し青白い面長な、人の好さ相な短身の方てした、結髪を小さな丸髷に取り上げなすつて。

「君かいまあ降られたてしよう、今庄ちやんに持たして上げ樣と思つて仕度して居た所なの」

と仰有て一寸妾の方を御覧なすつて小田樣に、

「御連れかい誰方」と小聲て御問きになる、

「池田樣よ御母樣、そら此間入らしつた」

妾は土て汚れた足を拭ひ終つた。

「今日は、先達ては出まして種々と――。」

と云ふ妾の顔を御覧なすつて、

「そゝ此池田樣かい」と云ひ乍ら膝を折て「いえ怎う致しまして御かまいも致しませんて」と頭を下げる、

小田樣は此時上へあがつて來らつしやつたが。

「まあいやな御母樣、此池田樣て彼の池田樣て家へ入らつしやる御方の中て池田樣と仰有るのは藤枝樣許しじやありませんか」と笑ひ乍ら仰有ると、

「然うだつたけれど、つひ御名前を忘れてね。」

と辨解らしく云て、急に心附いたらしく、

「それても澤山御ぬれてなくて好かつた、君や早く御二階へ御連れ申して御前のても御着せ申しな」

と親切に仰有て下さる。ほんの些少てすからと御辭退をすると。

「いゝえ、少しても身體の爲めに大毒てす、貴女方の御身體は怎の位る大切だか、親御樣の身に成て御覧なさい」と泌み〳〵と云て下さつた。

妾は此時の御言葉が未だ耳の奥に明白と殘つて居る如に思はれます。

眞實妾は其時覺えず眼の中をうるませました、それは何がなし郷里に御出てになる御母樣が、小田樣の御母樣の御口を借りて、妾に御諭しになる如に思はれましたからてす。

それから妾は御二階の三疊で君枝樣の着物を拜借して、自分の衣服を衣紋竹へかけて干す、君枝樣も無言て着物を着替へて居らつしやる、袴を召して居らつしやる時は左程にも眼に附きませんが、着流しになると丈のスラリとした程の好い身體が眼に附く、と何と無く自分の肥えて居るのが耻かしい如な氣もする。

妾は心の中で斯う思ひました、容色の好いのは年を若く見せると、妾の眼、年を知て居る妾の眼から見ても九月生れの十九、とは受け取れません、少なくも二ッは若く見えます、それに引き替へ妾は君枝樣より一ッ年下なのに大がい何時でも一ッ位ゐ上に見られます妾は斯麼事を思ひ乍ら恍惚として、君枝樣のする樣を見て居ました。

ふと心附いて妾は表の雨戸を細目に開けて戸外を見ました。

雨は先刻より烈しく降りしきつて居て、風も吹く、空も暗い。

河向ふの教會堂の尖つた家根が低い日本建の家の上にそびえて宛然低く舞ひ下つて來る黑雲を貫かうとするやう。

河岸端の柳の下に馬の無い空馬力が五六輛、河の中には苫屋根をふいた荷足船が、それにかけられてある棧橋が、河の上を流れて居る空俵が、是等の物總てが雨にぬれて愁然として居る樣が暗澹なる空と相對して物がなしい。

妾はこれては迚も急に歸る事は出來まい、と思ひましたから其處を閉めて君枝樣の傍に來る。

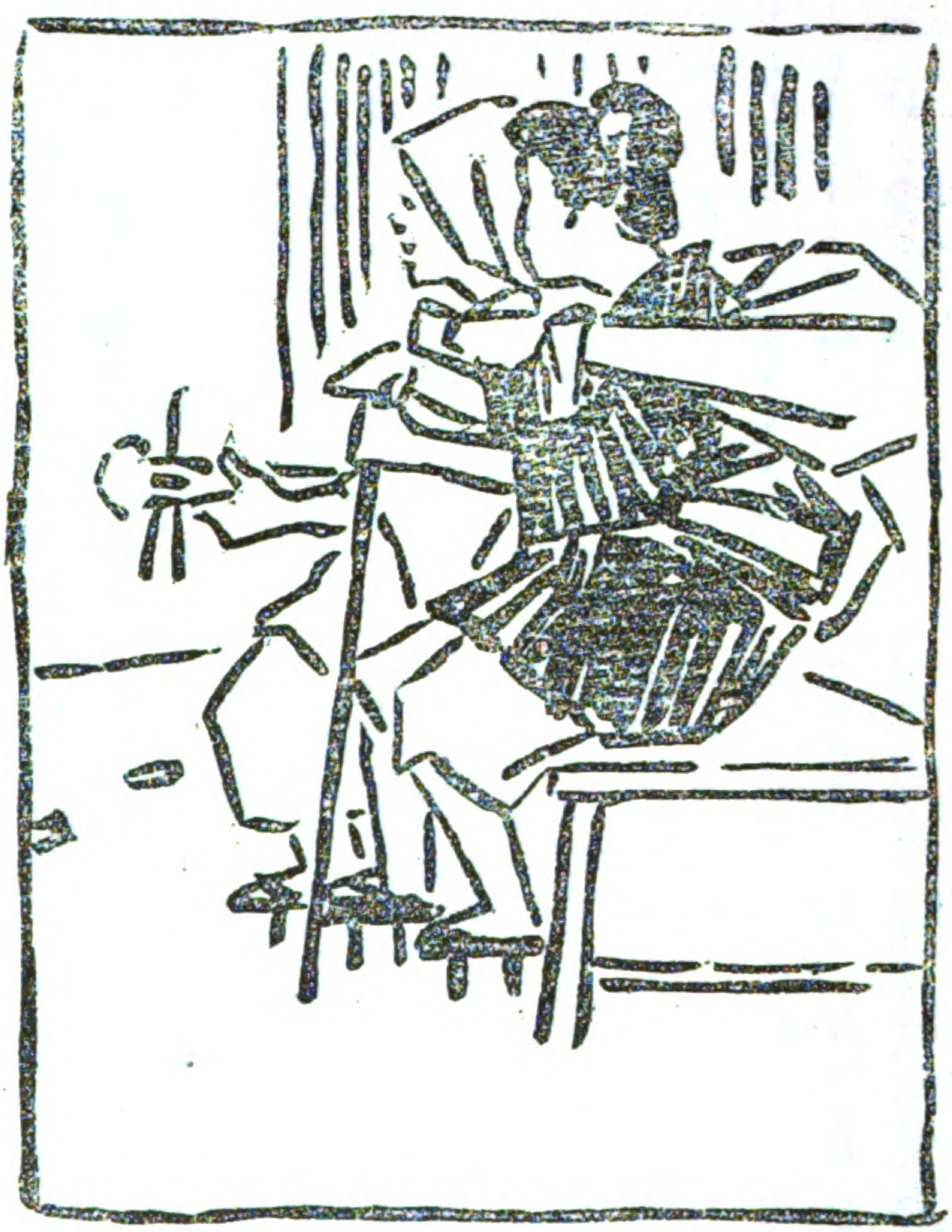
只、君枝樣は既う此時は御自分の衣服を干して御仕舞なすつて其處へ御針の道具を御出しになりましたが暗いので御裁縫も出來ない、一寸電氣をひねつて見たが未だ點かないので下から洋燈を持て來て點ける、其處へ君枝樣の直の弟の庄ちやんが昇つていらしつた

「姉樣もう燈火なんか點けるの、早いなあ」

と眼を丸くなさる、庄ちやんは十歳だと云事ですが御父樣に御似なすつたのか丸顏て、口の少さい眼の丸い可愛らしい御兒さんです。二言三言姉樣と御話してバタ／＼と向の座敷へ出て行く。

妾も只ぼんやり見ても居られませんて、君枝樣の御手傳をして居ますと、今庄ちやんがいらしつた座敷が大層賑やかに成りました。戸外は未だ降て居るらしく時々風に連れて雨戸に當る雨の音が何と無く物寂しく聞えます。君枝樣はせつせと針の手を運んでいらつし

やる、それ君枝樣が此御盆に着る銘仙の御單衣。
君枝樣はふと顏を御上げなすつて。
『ねえ池田樣、此柄は妾に似合うでしようか怎うでしよう、』と縫ひかけの着物の端を妾の方へ出す。
『ゑゝ此柄でしたら貴女には好く似合ひますわ。』
『左樣でせうか、』と一寸笑ひかけ乍ら。
『妾着て見ない內は何だか氣がかりで――』と云て微笑む。と隣りの室から君枝樣の御父樣の聲で『此奴が中々字が好なもんで――それに一寸巧い所がある、』間の聲は聞き取れませんでしたが斯う云ふと『左樣でしよう、御好な位なら御上手でしよう。好きこそ物の上手なれと云ますからな、』客人でしよう、若々しい男の方の聲が聞えますと、



佳作　ごぜ　八王子　乙姫もん子

『又來て居るんだよ：本當にいやに成て仕舞』何か知りませんが君枝樣が斯う獨言を仰有つた。
妾は何が何やら存知ませんから默つて居りますと、
『此間も先生が、皆樣字と云ふ物は小田樣の如に書かなくては不可ません、と云つて丶此通りしるしを附けて呉れた相な、だから兎に角手すじは好い方と見える、』
稍得意相に小田樣の御父樣が仰有て何か書た物でも見せて御出なさるらしい。

只、妾の眼の前へ小田様の御父様の得意氣なお顔が現はれる。頬のこけた所へ深い皺を寄せて根のまばらに成た歯。先の一寸紅く成た鼻、少しくぼんだ丸い眼妾はウットリとして居ますと、突然階段をドタンバタンと荒く降りて行く庄ちやんの足音に驚ろかされて吾れに返つて、君枝様を見る。と君枝様も縫物の手を休めて眤と何か考へていらつしやつたが、ふと顔を上げて、

『池田様、妙な事を聞く様ですが相場なんぞと云ふものは必と成功するものでしようか、』

唐突に斯の様な事を問はれましたので、妾には怎う返事して好いか解りませんので。

『然てすね、』と云ふより他の言葉が出ませんてした。眞實妾には其意味さへ充分に解らなかつたのてす。

君枝様は妾が答に困つて居るのを御覧なすつて。

『いゝえね、今御父様と話していらつしやる方ね、彼の方は株式の仲買する方なんてすとさ、』

と云て妾の顔を見乍ら寂しげに微笑むだ。

それを聞て妾は好奇心にかられまして、息を殺す如にして耳をそばだてましたが、内では買ひが何程とか賣が何程とか云聲がチョイ／＼と聞えたゞけ。

其内に兄の宅からむかひの者が來ましたので、妾は兄の家へ歸ると、其夜遲く郷里から電報が來たので、兄と共に郷里へ行て、妾だけ後から昨日此地へ歸つた今日尋ねて行きました所が何時の間にか大戸に貸家札が斜に貼られて有りました。隣家て問ふて見ましたら相場て失敗して御妻君の故郷とかへ引込むだと云ふ事てすが、私共へは何とも仰有らずに御出立になりましたから詳しい事は存知ません、と云ふ賴り無い言葉。妾は只もう夢でも見て居る如な心地がして怎うしても事實とは思へませんてした。

此作はまだこども／＼してゐる處がある、敬語を使つたり使はなかつたり、文章もあどけないが、只全體の趣向と云ひ、自然や人を見る心の働きと云ひ、文章の幼い割には大人びて、重みもあり、獨創もある能く培ふてゆけば、立派な花になるてせう(評)

破壞

山梨　井上笹波女

其様な眼識はないから……と云つてはすまされない、この場合そんな一時のがれの事は云へなかつた、金代は自分の知つてる―只二三度手紙の往復があつたのを見た―だけの事を細かく書き送つた、若い男女の交際と云つても必ず秘密があるものてない位の事は充分承知して居た、大屋の伯母からは折り返して今度は本人

につき當つて今迄の經路と、今後の事について何か約束でもした事があるかどうか、それもよく問ひたゞして知らせて呉れと云つて來た、

いくら一人子の行儀樣の事にせよ自分も女てある、一度はこの時代をも通つた覺もあらうに、餘り若い女を侮辱した云ひ分だ、と金代は少からず憤慨して書かうとした返事の筆も投げて仕舞た、其の儘忘れた顏て居た今日、何も知らぬ筈の父から其事について老人のくどく\/しく云つて來た、其上に明ら樣てはないが行儀と金代との間にも何か關係でもありはせまいかと、母からても差口したらしい事が付け加へてあつた、一時は憤とした手紙を引き破つて投げても見たかつたが、是が爲めに只優しい友情にのみ引かされて居た心に、自衛の爲め濡衣を乾すため何うしてでも眞僞をたしかめなければならぬと云ふ新しい項目が加へられて、遂に金代は決心した、然し一年半の長からぬ交情とは云へ、入學當時から今日迄の姉にも勝る心つかひを思つては流石に心がまよふのてある。

金代が市の女學校へ入學の日、先祖から大恩ある大屋の令息に連れられて來て、初めて君江に逢つたのはての隣りの應接室てあつた。

「ぽつと出の田舍者てすから何卒妹と思つてやつて下さい……」と今度は金代の方を向いて「この方が私の厄介になつて居る下宿の君江樣てす」と云はれない前から其名も聞いて居たのて、一目見て金代は姉さんの樣な氣がした、初めて他人の中へ出た身にも慣れない生活の面倒迄よくみて呉れる志に、つく\/人鬼のない世だと思つた、敎室以外には影の形に添ふやうに慕ひ懷しんだ人だと思つては、自分の災ー父母の疑問ー人の犧牲とてはないが、「强くあれ」との心の低聲にも打ち勝てないのを悲しんだ。

七間に十二間の大家に、夜は灯の下に丁稚共の筆なぶりや算盤をはじき乍らの細語もするが、小賣に車を引き出す者、得客廻りをする者の出た後は、店には番頭と樽ゆすぎの朝吉のみて土間となく倉となく、詰込まれた大樽の醬油の香は、夜にも勝つて寂寞した家中の壹を益々陰氣臭く濕つぽくする。

活躍と迄は行かずとも政界に立廻る夫の留守を守る伯母の席は、土間の突當て色の褪めたネルの座蒲團は、滅多に冷えた例がない、徒然に讀む新聞の三面に、伯母は新しい敎育を非常に呪つた、別て女のー金代が出市する時など未だ其頭は市の中學に居た行儀の、金遣

ひの荒いのを例に引いて散々反對した、金代が夏の休に初めて歸省した折などは「家の行儀にも困つて仕舞ふ」と上京して以來前に倍する學費の高を云つて、都會の生活程度迄も罵つた、愛憎の念が甚だしくて、田舍によくある婚禮の時の親分子分の間柄でさへ、家の閾を跨がせると否との鍵は自が手に堅く握つて居て月に一度か二度歸る伯父は何の關係もなかつた。請負に失敗して債主に攻められた時の救助者――「伯母樣の恩を一生忘れてはならぬ」と涙ながら父に云はれた時、益々つのる伯母の權威の恐ろしさ口惜しさに金代は新しい反抗心も起きないではなかつたが、新屋の娘と云ふ弱身ばかりでなく何とも口が開けなかつた格子戸の蔭に身を斜に置いて禿頭をかゝへた父の姿―それを威丈高に見下す瞳の働き――

「昔は旗本の娘だつて今あ下宿屋して居るぢやないかね、ね―新兵衛さん考へて見てごらんな行儀がなんぼ欲しいと云つたつて家の嫁にやあ迚も出來やしないわね‥‥金代と同つ學校に居ると云ふ話だから先方の心もよく聞いて見る樣に、私から金代宛て手紙を出して置くが、未だ後の返事が來ないから、お前さんから今一度よく其の理由を云つてやつてお呉れ‥‥最早遠に返事をよこす筈だがさ、それに金代も傍に居て知つて居やうに斯うならない中何とか知らせて呉れさうなもんだ、餘り不親切な話さ、‥‥何がお氣に召さないか知らないけれど‥‥」と皮肉に云はれた其儘を、其處では外へ表はさないが腹立まぎれに、後で惡いと知り乍ら神經の過敏な母に話すと「知つて居ながら知らせないのは金代の身にも汚點があるからだ、果ては此處迄深入した疑り深い青白い母の顏が、金代の眼にはつきりと映る、と何がなしに氣がクシャ〱して自分の神經を心から害された樣に思はれて、つと立つた、其拍子に運動時間を告げる笛の音が長い廊下を渡つて來た。

食堂からの歸りに舍監室の前で手紙を受取つてから三十分も、机の前で此樣な事を考へて居たのだ、時節柄運動を奬勵するので食後、舍の中に居る者は少い、て四邊は寂寞と隅々はもう薄暗くなつて居る。

下草履をはき變へると金代は小砂利の敷いてある庭をざり〱と大きな槐樹の下迄行くと塀一重のテニスの庭からは「プレー」の掛聲が夕べの空に勇ましく響く。

秋の初めの萩や菊は枯れやうとする夏の草花に混つて花の開くに間があるまい、花園の向ふは細かい芝が一

面に生へて、薬に遮られて姿は見へないが聞きなれた讃美歌の聲がする

　めぐみのひかりは　わがゆきなやむ
　やみぢをてらせり　かみはあいなり…
　われもあいせん…　あいのみかみを

「あの歌だ平常のだ」と思つて金代は其影に身をかくした、美しい憧憬の只一時も長かれと願ふやうに…こんな晩に君江は家庭の不和をよく金代に打開けた、瓦解したとは云へ昔二本さした後目を繼がせる長姉の婿は「二十八にもなつて獨身で居る君江樣の次姉樣は武士の娘だから學士でなければ嫁かないと云つてるさうですよ」と誰となく陰口する今何處か近くの學校に女教師をして居る次姉と君江との氣には入らなかつた然し長姉とは義理ある姉妹の流石口へ出しては何とも云はなかつたが、互に外に現はさぬ暗闘はあつた。柔順しくて氣位の高い君江は多くの友からも敬遠されて居た。

薄ら寒いのと四邊の暗いのに金代は身を起して歩を進めた、芝生の隅の柳の木に體をもたせて居た君江は夕暗にそれと知つて、歌をやめて微笑した、「姉樣！」人の居ない處では四つ上の君江を斯う呼ぶのが常であつた

「私姉樣に御話したい事があるのよ、すまないけれど…」「すまないつて何、話してごらんなさいな」と何處迄も落ち付いて居るのが此の人の癖だ、金代の手はいつか堅く握られて居る。

伯母は堅く明言して居るが、事の眞？僞？にかゝわらず今云ひ出して後の二人の間の冷やかさを思はぬてはないが、此處で云ひ反れては、と、伯母からの手紙の文句を取捨して成るべく同情的に語り出した、然し父から云はれた自分の事だけは何とも云はなかつた、話の半程から君江の青い顏色は一層青くなつた、淚は頰を流れて居る、語り終つて暫時すると、

「あゝ破壞破壞、皆破れて仕舞つたわ、ね！金代さん地球が破れてついてに世界中の人が皆死んで仕舞へばいゝに…」聲は震へて居る、手巾で淚を拭つた、此の人にもなく言葉が强かつた、思ひがけない口吻に金代は何とも云ふ術を知らなかつた、無語の中に自習時間のベルをきいて二人は舍に歸つた。

二時間の默學がすんで各自が樂しい故鄕の夢を結ばんがための床を取つて居る時、君江は金代の室を訪ふた一重瞼の眼は腫れて頰は淚で光つて居た、白い封筒を懐から出して「これを見ればよく解りますから貴女

がご覽なすつた後で行廬檢のおッ母さんに上げて下さい」と云つて金代に渡した、何故か金代は耳をも覆ひたい樣な氣がして中は見もせずに自分から宿所書した狀袋を受取つた其儘入れて其晩の中に小使に投函させた。

其夜の午前一時頃廊下の騷がしさに金代が眠りから覺めた時は、脚氣衝心で君江が縣病院へ送られた後であつた、熱が激いと云ふので面會は一切謝絶した、只一度訪れた室長の話によると、甚だしく譫語を云つて居た相だ、何んな事を云つたかと尋ねても、只笑つて居て何とも答へなかつた。

それから三晩ばかり經た或夜、金代は舍監室へ呼ばれた、丁度電流に故障のあつた晩で、不用意な薄暗いランプが點いて居て、側には君江の姉が座つて居た・舍監の先生と同窓とかでよく遊びに來るので金代は別に不思議にも思はなかつた、先生の居る氣色はないが硝子戸を締めて何げなく會釋すると、其顏をちつと見て居た君江の姉は「金代樣とやら貴女は私の妹をよく病人にして下さいましたね！、今は斯うして居てもこれでも武士の娘ですよ、人に後指一本さゝれる樣な事はさせもしないが、しもしない心算です」と人の腸をゑぐるやうな沈痛な聲に、金代は何とも感じなかつた「手紙の上書に迄母上樣とは餘り人を馬鹿にし過ぎて居る」と伯母からの返事を見た晩だつたが、其樣な事は無論口へは出さなかつた、この時の金代は純潔と云ふ心は何時か去つて、或る時期に起る若い女の誇は一種の輕蔑となつて、薄暗い燈火に色どられた容色の衰へた艶のない相手の顏を見て微笑んだ脣には人を見下む冷い色があり〳〵と見へた。

事件が複雜してゐる上に、書きぶりが複雜してゐるのだから、鳥渡走り讀みしたのでは分らない、ゆつくり見ると成程と合點が行く、入組んだゆききつを能く書かうと勤めたあとは確かに分る（評）

生前

本郷筆子

今から考へると、彼の多摩川の半日が最後の別離であつた。

終生親友と誓つた三人の、私を殘して、峰さんと玉枝さんとは相抱いて死んだ――と、私は云ふべからざる悲哀が迫つて、何故二人死んだ〳〵と繰り返へすこの胸は、搔き挘られる樣に苦しかつた。

既う四十九日も過ぎたが私は未だ、萬一や二人が堤の邊を彷徨つて居るのを、誰かゞ救けてくれて、生きて

居るのではあるまいかと、折々此樣な果敢ない事を思ふて又、月の夜など、峰さんの手が玉枝さんの腕に搦んて、斯う眼を閉ぢて、嬉し相な顏をして橫たわる二人を、此樣なお月樣が照らす…と忽然熱い淚が溢れて來た、一人殘つたのが濟まない樣な、殘されたのが怨めしい樣な、氣がし遂ひしくしく泣き出して了う。

然し薄命な人等だつた。玉枝さんは熱心な耶蘇敎信徒て而して日頃自分には肺病の遺傳があると云ので、非常に世を悲觀して居たらしい。峰さんは猶更孤子と云ふ實に氣の毒な身の上、伯父さんの世話になつて居ると云ふ境遇に依つてゞもあらうが、極く苦勞性な、少しの事にも淚を見せて深く考へ込んで了ふ。

一度玉枝さんと敎會へ行つたのが、伯父さんに知れて大騷ぎをした事もあつたが、峰さんは、玉枝さんから聖書の話など聞いて、宛も冬枯れの野末を行く樣な淋しい思ひを慰さめて居た。

佳作　見物　三河　近藤道江



私は玉枝さんと從妹同志て、自然三人は姉妹の樣に親密だつたのも、あゝ皆死後の思ひ出と成つて了つた。

多摩川在の八幡の山に遊んだのは、死ぬ――四五日前の事。杉林から夕日が、玉枝さんの秋草摸樣の袖に差す。「私、屹度病氣して居るのよ」と玉枝さんが、淋しい顏をして私を見返つた。「又！大丈夫ですつたら」と私は強く云つて、「ねえ峰さん」と同意を求め樣とすると、「何⁉」と、峰さんは紫紺の袴を少しかゝげて、遠く銀の樣な一筋、多摩川の流を望むで居たが、此言葉に心付かぬらしと、「此處から落ちたら死ねてせうか」とつかぬ事を云ひ出す。

「奈何だか……私なら厭だわ此樣な處で……」

「奈何せ死ぬのなら、何處だつて可いぢや有りませんか」と玉枝さんが口を入れたが、ほつと溜息をして。

「あゝ一日も早く天國に行きたいわ、私なんか心が弱いから到底一人で渡つて行かれない、と云つて此樣身體を人によせるのは、全く罪惡ですからね」

「あの、私等が死んだら本當に天國へ行けるのでせうか」と突然峰さんは、手に爲た野菊を投げ捨てゝ熱心に聞く。

「峯さんなんかは決して疑ふ處は有りませんわ、罪ある人でも悔改めれば可いのですから、」

「死て了つた後が解るもんですか、一體天國ですね」私は口を挾んで云ひ掛けると、玉枝さんは微笑みながら「いゝ事よ、貴女の所謂――破戒敎の御主意は善く解つてゝよ」

「それなら生きて居る內天國に這入る方が可いわ、峯さんなんか、今からそんなに、悲觀するもんぢや無くつてよ」私は染々と二人を見比べた。

「でも全く、私は心細くつて、此間はね、折角玉枝さんから頂いた聖書を破つて了ふのでせう、いゝえ伯父はそれはかりぢや無いの、隨分氣位な人ですから……私行末を思ふと何だか、暗黑な穴にでも這入て行く樣だわ、だから遂ひ阿父さんや母樣の事を考へ出すの、私は駄目ねえ、信仰の力が弱いのでせうか神樣のお傍へ近けませんの」とはら〳〵と淚を流す。

玉枝さんも私も袖を濡らして、

「其樣に考へない方が可いわ、だが伯父さんて方は實に亂暴なのね、聖書を破るなんて、全く失敬だわ、」と息卷く私を玉枝さんは抑へる樣に、

「什麼事があつても峯さんの信仰さへ厚ければ可いわ汝の敵を愛せと有りますから、伯父さんの事なんか氣にしないで祈つておあげなさい、あゝ私も峯さんも全く不幸だわねえ……」

急に三人ともしんみりとして了つた。

偶と人の氣勢がして若い女が子供を負ふて、拜殿の方から、露の溢れ相な白百合を籠に入れて、來掛つた。

「まあ美しい！」と私の聲に見返つた峰さんが、讓つてくれないかと云ふと、

「百合ですか、今ね東京のお客樣から賴まれたのですが、又山に行けばあるから、上げましやう」と心善く分けてくれた、と子供好な玉枝さんが「坊やは溫利ねえ、」なぞとあやして居る。

「この花が澤山、山にあるの」と峰さんは大切相に頬に當てながら「其處の山に私住んで居たいわ」
「峰さんは中々氣が多いのね、ほら此の間は波の音を聞いて庵室を結びたいのつて、今度は山の中なの」
「そう〳〵何時か其樣な事を有仰つたつけ、ほゝ…」
私と玉枝さんと笑ひ出すと、
「だつて……私全く意志が弱いのね」と耻し相。
「此坊やの樣だわ峰さんは」と玉枝さんは子供を凝と見ながら、本當に可愛いのね、幾才なの」
「へい三才で御座います、もう腕白者でね貴女、ほゝゝ〳〵」と片手で五月蠅相に遲れ毛を搔き上た。
「阿母ちやん、はいちやいよう」と子供は、足をバタバタして鼻を鳴らす。
「あいよ、あいよ、まあ貴女御免下さい」と女は會釋して行き掛けた時、背の子供は丸々とした顏を向けて
「姉ちやん、はいちやい」
「まあ好い子ねえ……」
「あゝ姉ちやんにはいちやいつてか…ほゝゝゝ」と女は石段を下りて行く。
一時蟬の聲が降る樣に、せわしない。
本當に子供程罪のない者は無いのねえ」

三人云ひ合はせた樣、夕霞に消えて行く彼の女の影を見送る、
「私なんか一生子供の愛を知る事が出來ないわ」
玉枝さんの顏には失望の色が見えた、
「私も、既う一度阿母樣に、抱かれて見たい」
此は峰さんの心からの言葉であつた。
二人の運命をそゞろ思ひ比べて、私は實に泣かずには居られなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

其晩は久しぶりで玉枝さんの別莊で、鮎の御馳走になり、二三日遊んでと云はれたのを私一人夜汽車で歸つた。
書き置を手にしたのは翌々朝、私ははつと息を呑んで其時急に天地がせまくなつた樣な氣がした、
新聞紙上に二人は多摩川上流に水死したと、揭げられたのである。
噫私の友は現し世の苦を捨てゝ、冥路の國に旅立つたそれは、玉枝さんが誘つたか、峰さんが云ひ出したのか又は死の神が招いだのであろうか――。

若い人が、好んで若い人の死を描かうとするのは餘り好い傾向ではない、此作、自死の動機も薄弱であり、此れと云ふ鋭い見かたも無いが、只、爭はれない女性の純のにほひを取る（評）

彰善會

徳島縣 賤子

花澤、花澤、たれかと呼ぶ聲がするので振返ると教員室から校長がしきりに手まねぎして居らつしやる、何の用かと思ひ乍ら行つて見ると、校長は例日の通り正面に嚴とかまへて、テーブルの前には一つの空椅子が置かれてある。恐る／＼進むで默禮した、校長は例の嚴な言句で今日は少し聞きたい事があるから其椅子にお掛なさい、意外の御言葉に默つて差し俯向いた校長は初めてにこやかに、いや尋ねたい事とは貴方の事じやない、あの野村に付ての事です、遠慮なく椅子にやつと安心して恐る／＼腰を下した、校長は隣の雪ちやんの事に付て種々尋ねられた、で妾は有りのまゝお話した。

野村雪、九才の少女である、父は五ケ年間リユーマチスを病みて手足も自由ならず、大小便は言に及ばず食事すらも自分で出來ぬ、當年四十七歳なる母の手一つ其心痛は一通でない、家宅は火事の爲に燒かれて借物最早一錢の貯もない、只姉娘の給料と母なる人の賃仕事で得るわずかの金で辛じて其日其日の細ひ煙を立て行くのである、五ケ年間病床にある其人の心は果して如何であろう、只孝心一つなお雪の可愛き手に接してわずかに心を慰めて居るのであつた、不幸、不幸柱とたのむ母が又慢性腸加答兒に罹つた、噫一家の煙が如何して立ち行こう、終に姉娘は家の爲、親の爲に涙をのむで身を泥中に沈めた、百二十圓の其爲に今も尚大阪のさる方に勤めて居る、かくて小さき乍らも家宅はわがものとなつた、醫師の手をも買ひ得た、然しおそい、もうおくれた、あゝつれなき嵐は終に母をさそひ去た、殘るは病める父、幼なきお雪、暗中に燈火を失ひ、何れを何れへ辿り行かう、最早學校へ行く事は出來ぬ、朝は早くから食事の仕度、晝は隣家の子守に雇われ、夜はいつしようけんめい父の肩腰を撫でさすつて、看病した、九歳の少女、養はるべき父を養ひて、亡き母を弔ふ。

妾は此處まで語り來り最早言葉が出でぬ。

教員室はしんとして女教師のすゝり上げたのが耳立つた、校長はうでを組むだ儘只、噫實に可愛そうだ、感心な者ぢや、後は何とも仰せがない暫くして、いや野村に付ては他から段々しらべて、其感心な行ひが分つたから、來る十五日に本校で彰善會を開いて、本七ケ村中の善行者へ賞狀を授與するのであるが、野村

は其中の一人です、が尙くわしく貴方に聞いたのです本校內に受賞者を出すのは誠に名譽です、悲哀の裡に笑をたたへられた、雪ちやんが受賞者の一人、嬉しさに聲がはづんで、先生！自分からハツト差し俯向き、後は小聲に有難う御座います。

教員室をすべり出るなり、一散にかけ戻つた、宅へは歸らず、すぐうらへ廻つて雪ちやん居るの、はーい、聲を聞くなり飛び込むだ、すぐ無遠慮に靑疊ならぬ茶色むしろの上に座した、其處には伯父さんが寢て居るやせこけた頰、落ち凹んだ眼、見るから痛々しい、かたへに雪ちやんが父の肩をもむて居たが、妾を見るなり、もむ手をゆるめて、くるりと向き直つた、身にはつゞれをまとふて居るが黑目勝の愛くるしい眼、孃ちやん何か用？、雪ちやん本當に嬉しい事が出來たのよ嬉しい事つて何、

おぢさんあの！ね聞いて頂戴、今月の十五日にね、學校で彰善會つて會があるのよ、夫れはね村の內でよい行ひをした人々に御褒美を下さるのですつて、其中へ雪ちやんも入つてるのよ、へーまーお雪が、孃ちやん本當、雪ちやんが何日、父ちやんを大切にして、せいを出してするからよ、て其日は澤山の人の中で御褒美を頂くのよ、父は老の涙もろく、早ハラ〱とこぼし乍ら、まー勿體ない、其樣にみな樣が思をて下さるのか、是れと申すもだんな樣なり奧樣なり又孃樣のお蔭で御座います、何とも御禮の…、まーおぢさん是はみな雪ちやんが孝行なからよ、人のお蔭なんかじやないわ、ねー雪ちやん、お雪は堪へ得ずをどり上つた、お蔭だわ、愛くるしい目を鈴の樣にみはつて喜んだ。

孃樣其樣に偉いお人のたくさん來さつしやる中へ、着て行くものがございませぬ、なあお雪、ハツハと淋みしく笑つた、父ちやんあたい着物なんかいらない事よ何日も先生が如何つゞれを着てても心さへ眞直だつたらいゝつておつしやつたわ、ねえ孃ちやん、なんて可愛い言葉なんだろう、まあ雪ちやん、にぢりよつて抱きかゝへた、情が迫つて頓に繼ぐべき言葉もない、父は天井をきつと見守つた、數滴の涙ハラ〱とむしろの上にこぼるゝのである、おぢさん心配しなくつてもいゝわ、妾宅に美代のがあるからね、へーへイ勿體ない。

* * * * * *

雪ちやん立つて御覽、あら丁度いゝわ袴はまあこれも

よ本當にあつらへたようね、これていゝから早く歸らないと父ちやんが待つてゐらつしやるわ明日早くね、はい孃ちやん色々有難う、お雪の歸つた後て室を取片付て立ち上つた時、バタ〳〵と足音がして、まどぎわてはたと止つた孃ちやん左足からなのね、まあ雪ちやんは、つーいとまどから差し出した妾の顏と、下から見上げた雪ちやんの顏と。ほ……どーしたの、ても忘れちやつたのだもの、夫れを尋ねに來たの、あーとにつこり、さう左足からなのよ、左から三足進むでね、三足進むでと小くびをかしげたが、エ、わかつてよ覺えてるわ、有難うと早かけ出した、明日早くねの言葉も聞えぬらしい。

＊　＊　＊　＊　＊

田舍には珍らしい大がまへの小學校、門は殊更いかめしい、其門の眞中に彰善會擧行と墨黒々としるされてある、かたへには大松尋常高等小學校と校札が掛つて居る。

妾は朝早くから雪ちやんの手を取つて學校へと急いだ學校へ着いてから一時間餘り經つうちに處々方々からたくさんの人々が集つて來た、その内に開會の呼りんがはげしく聞えた、バタ〳〵ガタ〳〵みんなが一所に整列所へかけて行く。

式場なる講堂には、正面の床にみすを高くかゝげ、テーブルの上には松竹梅が整と挿けられてある、其かたわらには受賞者が八名、椅子に掛つて居る、右側は知事郡長を始め其他諸役員がずらりと並て、左側には諸校の職員、生徒一同が座した、其後に生徒の父兄等、かくて先生が開會と呼ぶ聲の下に校長が出て開會の辭をのべられた、賞狀授與と呼ぶと、校長次席右側から第三席に居られた、方がずーつと出て行く、其方が正面テーブルの前に立ち校長が其横に、次席は賞品を手にせられた。

福岡德平、ヘイ、ノツソリ〳〵腰をのし乍ら出て來たのは七十の上を五つ六つと思はるゝ白髮の老人てある、正面につーいと立つた時、以前の方が賞狀を取り上げ、聲高らかに讀みあげた、其人の賞すべき行を一々くわしくしるされてある、かくて賞品と共に授與せられた、老人は勿體無げに幾度もおし頂きふところへ收めて下つた。

野村雪、妾はハッと彼を見た、ハイ、鈴の樣な聲、下髮に肉色リボン、黒紋付に紫紺の袴、おゝ美代ちやん(亡き妹)と心で叫むだ、彼は滿面に笑をたゝへて靜か

に進むだ。

野村雪、當年九才、父は五ヶ年間云々と例の賞狀を讀み上げた、賞品と共に、あゝ雪ちやんの嬉しさは如何であつたらう、夫れから順次八名に授與が終つた、後知事を始め諸人の訓話があつた、夫から彰善會唱歌勇ましく、こゝに閉會となつた、後受賞者に菓子折を與へられた本日の受賞者は福岡德平、野村雪、從僕一人、下婢一人、農夫二人、本校生徒、高等一學年、春川秀雄、隣村方の上尋常小學校の男生徒一人以上八名であつた。

妾が門際に立つて、雪ちやんを待つてると、賞品をかゝへ、菓子折をさげて、アタフタとかけて來た、嬢ちやん、あのーね校長がお目出度つておつしやつたわ、と見上げた姿の神々しさ、そう本當に目出度いわ、父ちやんが如何にか喜ぶてしよう、妾は此榮ある少女と手を取り合つて歸途についた。

受け得た賞品は鏡であつた、鏡、女の寶、あゝ彼は一野村一家の寶世人の鏡として永久に榮えるであらう。

辛うじて是だけ書き得た位のもので、筆の幼き中に眞あり



佳作 たけがり　背景 井上よし子

表の家

伊藤暁子

私はつひ三ヶ月計り前から、此家の離れ家を借り受けて毎日通學をして居る。それを世話して下すつた方の話しては、此家の主人の松村芳之介と云ふのは、長らく大阪とかの中學校の教師を勤めて居たが、近頃月給取がつくづく否になつて去年の春歸國早々、今の所で雜貨店を初

めたのだそうな。それにおぢいさんと云ふのが昔は小身乍らも、殿様から扶持米を頂いて居た人とかで、何處かにこう上品な所が現れて居る。家族は此の外に芳之介の家内のおかね、一人娘の千枝子、それに丁稚が一人、都合五人で可成裕福に暮して居る。

私が毎朝起きて見ると、まだ夜が白々と明け渡つた計りであるのに、八十に手の屆き相なおぢいさんが一人茶を沸して齒のない口をもぐ〳〵させながら朝飯を食べて居る。そしてそれがすむと鳳仙花や朝顔の入り交ぜて植えてある四坪の庭をぐるりと一まはりして、扨椽側へ坐つて店で用ふ紙袋や厚紙やを張り初める。仕事にかゝつたが最後、お城山から砲聲がズドーンとひゞき渡つて孫娘の千枝子が御飯と云ひに來るまで、口も開かぬ、横見もせぬ。もうそれは働きものゝ丈夫なよいおぢいさんで、小心で親切で整然な事は驚く計り——老人だけに小六かしくはあるが——乞食などには古銅子の一つも遣るが無駄な事には半錢も出さぬと云ふ性分である。頼母子講の七産の包紙は砂糖氣を拔いて鏝を當てゝ他行ゆきの懐紙にする、佛壇の古花は屋根へ投げ上げて日に枯らして焚物にする。好んで食柑類の皮は蚊遣の料にと何から何まで自分でして暇なく體を動かして居る。がしかし折々は古い〳〵謡本をとり出して丸眼鏡ごしに讀んだり、唯一人時折訪ひ來る丸山とかの隠居と茶を呑んで話したり。それで寺參りにも物見遊山にも酒宴にも行かぬと云ふ一寸風變のおぢいさん。何時かもおかねが南向きの座敷へ燃える様な紅裏をひろげて千枝子に縫はせ乍ら「千枝子や、此家が今の様になつたのも皆おぢいさんのお蔭ですから、決してぢい様を粗末にするてはありませんよ」などゝ云ひきかせて居たが、本當に左様だろうと思ふ。

おかねが温順かな、しやんとした勇ましい女だけに、千枝子も世の娘達の様に浮々はせず、何かと一生懸命に勉強して居る。進取の氣に富んだ大變に誇の強い而し乍らおとなしやかに床しく思はるゝ少女で、近頃の女學生の多くにも似ず家事の事共を、よく引き受けてするが、決して店番はせぬ、家人もまたさせ様ともせぬ。紫の色を好んでつけて、それがまたなく色白な皮膚によく映る所から私の部屋へよく出入する渡井さんなんぞ、「紫の君」などと云つてる位、いつも笑くぼを見せて心持ほゝゑんで居る。

ある休日のことであつた、私が部屋にこもつて書見をして居ると、井戸端を隔てた表の茶の間からこんな

會話が聞えて來る、きくともなしに耳傾けて居ると平常よりは少し小聲で、
「母樣、今髮結のお時さんが云つた事、あれは本當なのでせうか、ねえ母樣、」
「そうさねえ、どうだか分りやしないけど、まさかお時さんだつて僞言は云はないだろうしねえ、誰か云つた人があるのだろうよ、昔から町には町姑と云ふものがあつて口やかましいものだからねえ」何か心配らしく云つて居る。
「そうでしよか、それだと私本當に口惜しいわ、今まてが町人てはないのですものねえ、何も別に令孃ぶるなんて事はないつもりですわ、父樣だつてよく／＼事がつかへたからこそ俥も御引きになつたので……けども父樣の近頃のお變り方もずいぶんですわね……」
まだ何か云はふとした處へ千枝子の友達が來た樣子て話はハタと止んで終つた。
やがて夕となつた。　私はお飯仕度に井戸端へとおり立つたが、表の家てはもう來客も歸つて、ちやんと御飯支度が出來てる樣子て、芳之介も「ヤレあつい／＼」とうちはを使ひ乍ら黄帷衣の甚平をぬぎすてゝ、裸體の儘飯臺の前に大あぐらを組んだ。他の者も集つて皆いと睦ましげに樂しげに箸を動かせて居たが突然平民主義に磊落家の芳之介は、
「けふ本町て甚助さんに會つて愉快だつたよ」
と云ひ出した。
「そうですか。そして又何か仰しやつたんですか」
「そりや云つてやつたさ、さんざ云ひのめしてやつたのさ。」
「けれどもあなた、商賣人てすもの、少し位の金はくれてやつたものとあきらめて、お世辭の一つも言つておかなきや……！」少しためらひがちにおかねは云つた。
「またか、俺は其れが大嫌なのじや、教員ならば校長へお世辭の二口も言はねばならぬかもしれんが、自分の品を自分て商ふ我々は大きな面しとつてもちつとも困らんのだからね。品物は砂や砂糖とはちがつて容易に消えんのだからねえ」
云ひ乍ら盃をふせて茶碗をつき出した。酒のまぬ他の者はもう各々に茶の間を出て終つた、おかねは飯を盛つて突き出しながら一寸銀の簪て頭をかいて、
「それも左樣てしよけれども、俥をお引きになる丈は止して下さいましね、貞吉も居ますし、それに人の手前もありますから」、

私はハタ〳〵と煽ぎ乍ら七輪へ火を起して居る。椽側の伊豫簾がゆら〳〵と風にゆられた。

「フム、女は其れだから考へがないと云ふのだ、人の車ではあるまいし自分が勝手に引くのに何のさしつかへがあらう。それよりか三十か五十の月給をもらつてへエ〳〵云ふ人の心の中の方が大分あはれなのだ」芳之介は何か云ふと二言目にはすぐ月給取と云ふ、殊に今夜の樣に酒に醉ふては尚更である。

外はよい月夜である。家の前の池の水は夢の樣に金色を流して秋吹く夜風が涼しい、芳之介は腰掛にもたれてしづしづと冴え上る月を眺めて居たが「いゝ月ですな、皆樣、ビールは如何ですな」とはやもう滑稽な事を云ひ初めた。涼み人は一時にドッと笑ふと一軒先きの嫁さんが「持つて居らつしやいまし此間の樣に、何時ても御馳走になりますよ」涼み人も陳列臺の間に坐つて今日の勘定をして居る、おかね貞吉もおかし相に笑つた。芳之介もやゝほゝゑんで居る。折から吹く風に松村家の二階の白いカーテンがゆら〳〵と動いて、千枝子が奏づるバイオリンの六段が心地よく耳にひゞいて來る。ちい樣はもう日が暮れるとすぐに蚊帳へ入つたが今頃は明日の仕事でも考へて居るだらう。

島渡一癖ある人間をつかまへた、じみな小說だからあてこみと云ふことはない、只すら〳〵とまともに書いてあるだけだけれど、頑强な爺さんの牛面は出て居る、今少し心的狀態が深くあらはしたら引立たらう（評）

伊香保

小石川　小川はつゑ

風通しの好い二階の六疊の座敷から廊下に出た文子は欄干に靠れて、珍らしそうに外の景色を眺めて居ると後からソッと忍び寄つた妹の小夜子が「ワッ」と叫んだ。

「まア喫驚したワ、誰？、小夜ちやん、まア大きな聲て人を嚇かすのね、本當に喫驚しちまつたワ」

「ホヽヽホヽ」

と座敷の中で笑ひ聲がする。

「アラ姉さんまで笑つて――隨分ね！」

文子はツンとして綠に染まつた麓の方に眼を向けてしまつた。

其所へ下からトン〳〵と輕く階段を登つて來たのが道子である、湯上りのポッと上氣のした顏に笑をたゝえて、石鹼を手拭に包括だまゝ持つて、默つて文子の傍へ寄つて來た。

「文子さん、そんなに何考へて被在るの？」

と道子は文子の肩から覗くやうにして問ふた。
「オヤ道さん、もうお上りなすつたの、早かつたわね」
「エヽあんまり混てるので私直に出てしまつたワ」
「そう、そんなに混雜てたの？」
「お隣室の三代子さんも階下の神部さんも這入つて居たワ」
「そんなに、其ぢや私は後にしよう」
と文子は何だか浮ぬ顔色である。
午後の日に照り返つて、青白く霞むでゐる小野子兒持の方を凝視と見てゐた文子は何か思出した如くに身を捻つて。
「道さん、私まだ此下の方へ行つた事が無いんですの貴女散歩ながら行つて見ませんか？」
「そう私も去年見たつきりですから、行つて見ませう」
二人は其儘むつましそうに街へ出た。
街と云つても上から下まで石段で築かれた伊香保の町、馴れるまでは往來するのに一寸困難である。
「文子さん、貴女水澤の觀音樣に參詣つたことがあつて」
「いゝえ私まだ知らないワ、何處？近くなんてすの」
「そう近くは無いんてすが、直きてすワ」
「そう行きませうか、此方へ行つて行かれますの」
「エヽ此所を降りて右へ曲ると直きてすワ、其は好い所よ」
「そう、早く行つて見たいワ」
二人は細工物、綺端書等賣る店の並むだ町を降りて行く、と右側の靑物屋の家から右折して今度は傾斜の道を下ると澁川へ降る本道に出る、釣鐘草や女郞花の繁つた徑を曲ると直ぐに水澤觀音の前に出る。
坂東三十三番の札所の年十六番の觀音堂、堂は小さいが何處となく神寂びた趣きがある。
二人は同じやうにハンケチを敷て堂椽に腰を下した
「道さん、貴女アノ徳富さんの「不如歸」を見て？」
文子は何を急に思ひ出したか道子に斯う聞いた。
「私本ぢや見たことが無いんてすの、けれど芝居て見たワ」
「芝居、何處の芝居て？」
「此春本郷座て――」
「そう」
と文子はニツコリした。
「浪子さんは隨分可愛そうな方ね――、私芝居とは思へなくつて本當に涙が溢れたワ」

「實際に浪子さんはお氣の毒な方よ、始から終まで悲い思ひをして、それて遂々死むてしまうんてすもの」
と文子は同情の涙を拭つて、
「それても浪子さんは武雄さんと伊香保へ養生に被在た時は如何なに樂しかつたてせう」
「そう〳〵その時蕨狩する塲がありましたつけ、あれは何處か此邊なんてせう」
「えゝ、私も此邊だつたと思つてたワ、」
と二人は少時何物かを求める如く四邊を見廻して居た。
「道さん、千明つて宿を御存じなの」
「えゝ千明、聞いたやうな名だワ、お待ちなさいよ」
と道子は鳥渡考へて。
「在ります、在りますよ、そら先刻石段を下りて來ると左側にズウッと奥へ引込むだ宿に一寸意氣な門があつたてせう、あすこが千明てすよ、」
「アラ彼處なの、今でも其處に浪子さんの泊つた室は別になつてるそうてすのね」
「オヤ浪子さんは彼處に居たの、私些とも知らなかつたワ」
「そう」

と文子は其の小説中の事柄を思ひ廻るが如く、深く生茂つた草の上を熟と凝視めて居た。
少時二人は默つて居たが、やがて文子は潤むだ眼を上げて。
「私も今にあんな運命に成るのかも知れないワね」
と淋しそうに笑ふ。
「あら否な文子さん、鶴龜々々、文子さんに限つてそんな事はないワ、それに貞ともう何が決つてるんてすもの」
「えゝ何つて何？」
「あら私の方でお聞き申したいのよ、私今朝姉さんにみんな聞いてしまつたワ、お目てたいんてすつてね」
「知らないワ」
と文子は爭はれぬ顔にサッと紅葉を散らした。
「旦那樣は文學士村部さんてすつてね、私先刻寫眞を見せて頂いたワ、隨分立派なお方ね」
「……」文子は無言て頷いてゐる。
「此秋御結婚だそうて、さぞお樂みてせうね……」
「いゝえ」
と文子は僅に首を振つた。
「文子さん改めておめてとう」

文子は何とも言はず、兩の袂で顔を覆ふてしまつた
靜まり返つた樹立を搖動る風の音にふと氣が付いて。
「オヤもう日が暮れてよ、歸りませう？」
と道子は立上つた。
「あらもう日ぐれ」
文子は驚き顔で日の影のうすれた空を見上げた。
山上には霧が垂れ籠めて、茫と白く霞むでゐる。上から吹き下す風はいやに冷たくヒヤ〳〵と襲ふてくる
「大變寒くなつて來たワ、直に歸るつもりでこんな薄着で來たもんだから寒くつてよ」
と文子は寒そうに着物の衿を搔合せた。
「實際に寒いワね、東京ならまだ透綾でも暑い時分だのに伊香保は夜なんかは袷で丁度好いんですもの、オヤ霧がだん〳〵深くなつてくるワ早く歸りませう」
二人は次第〳〵にかすれ行く黄昏れの山路を登つて行く。
水澤觀音堂はもう霧に包まれて見えなくなつた。

措辭が無くて、疵がないと云ふだけて、別に此れと云ふ取り處もない、只「不如歸」の話などが一寸讀者をよろこばすだらう(評)

妊娠

相摸　淸水花子

役所の歸途、とある小間物店に入つた、入替りに紫紺式部の群が六七人ドヤ〳〵と孰れもインク瓶を手にして出て行た、まだ田舍の人達がお盆の買物で店は一ぱいになつてゐた。
思切つて「アノ花簪にリボンを見せて頂戴な」「へーかしこまりました、助どん花簪の箱入持て來ふ」「へエー」と雪のうやな簪差し箱は山のように自分の前に運ばれた、「マア其這に澤山運ばなくとも好いのよ、餘り澤山列べると目移りがして何れが宜いか判らなく成るわ」と僅に五個ばかりの其中から一番高價なのを買ひ取た、「エーとリボンは巾廣ですか中廣ですか？」「あの廣いのを頂戴な」「助どん巾廣リボンの箱持てお出で」「へーー」と小僧が持て來た「へー此邊では如何で御座います只今は水色が非常に流行して居升さうで先刻荷が到着たばかりですから」と手早く一束に束ねて有、見ると涼しさうな水色リボンの舶來が目前に置かれた、私は早速二尺切らせた「エーと何か他品は……へ成可お安く願て置き升から香水も何もズーと上等が來て居升「エ、亦其内藏きに參りますワ」「へ、左樣で」と買取た物品はキチンと袋の中に入て呉た、私は代を拂つて立上つた「おや靜江さん久濶ねー」と聲掛

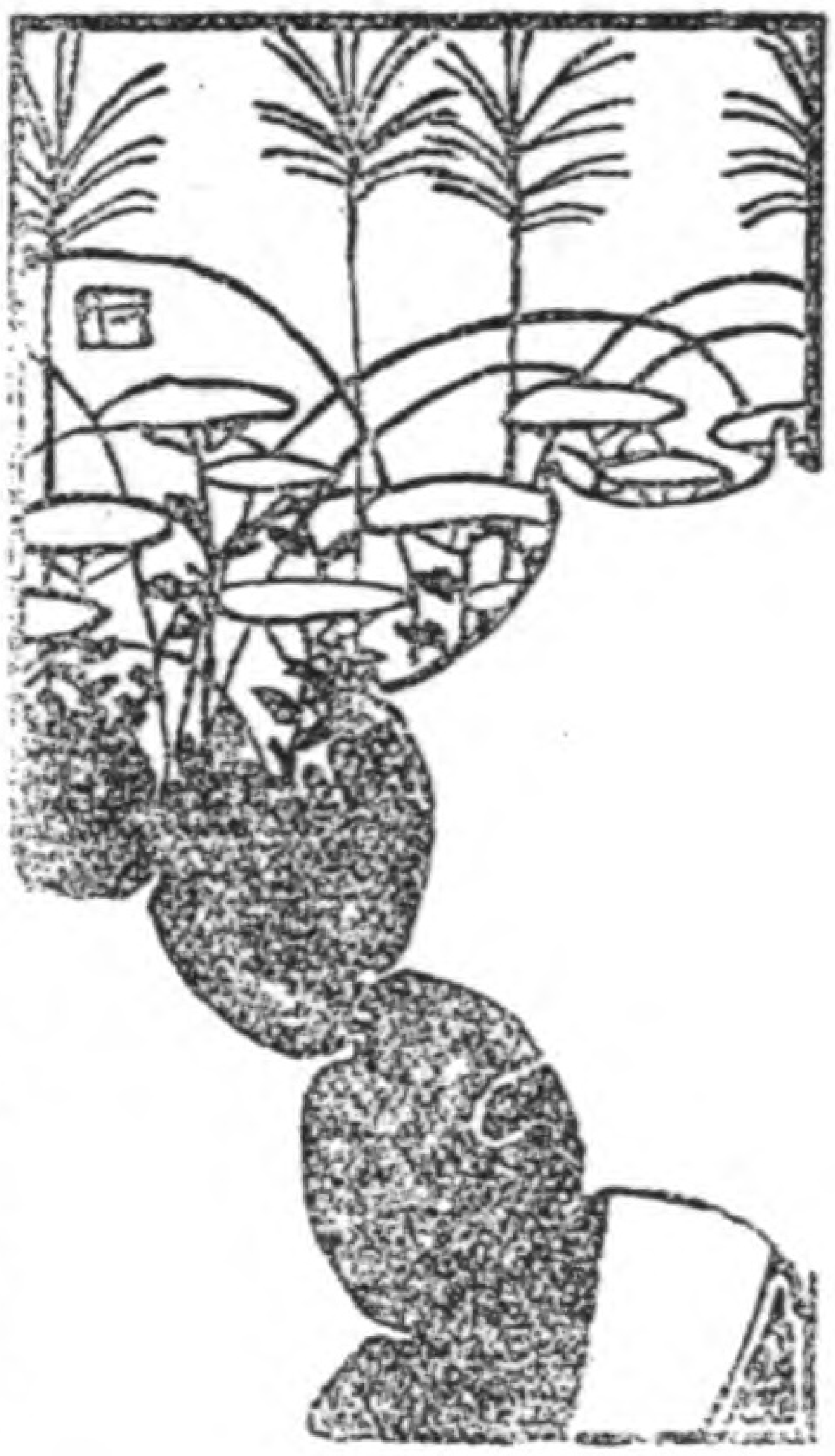
られて吃驚した「アラ私何處の奥さまかと思つて居ましたの、隨分御無沙汰致しましたわ」「イヱ私こそ」私は久濶逢はなかつた友に逢たので嬉しくて堪らない。「マア時子さん、何だつて此お暑いのに！……」と口迄出たが只のお身でないのを悟つて他に話頭を轉じて仕舞た、「眞實に暑く成ましたね」「眞實にね」と時子さんは氣まりが惡るいの、但しは耻かしいかの絶えず腹部を氣にしては幾度と無く羽織の衿を合せるのである「輝ちやんはお病身つて如何？」「はア有難う！大分お影さまで健康に成ました、ツイ先日だから這ふようになりました」、左樣で御座いますか、隨分お早いものてすね、小兒の育つのは、昨年の何月でした？」「七月の廿日でした當年こそは良人が暑中休暇に箱根に連て行と申て樂しみに思て居ましたがね」と、友はホット吐息を漏した「て此度は何月お出産なのですか？」「まだ確と判らないてすワ、産婆にも判らぬと申てるのですもの、」「いやな産婆ね、オホヽヽヽ」「眞實に田舍の産婆など駄目です」と友も寂しく笑た、嗚呼！變れは變る物だ、恰度一昨年の今頃であつた、荒いお召の矢絣のお一重にヲリーブのお袴輕々しく靴音高く私の家へ訪れなされたお姿！まだ眼に其お美しい姿が殘て居る。私はホンの小供であつたが小供心にもあヽ美くしい這麼美人になつたら嘸宜かろうと羨しく恍惚としたが花も人も何時迄か續くものてない、如何しても三年前の時子さんとは思はれぬ。彼の艶々とした頬の肉は落ち、濃い眉毛に美しい生際も生る間も無く姙娠ては堪らない、無理も無い——絶世の美人ても？併し世帶を持と這麼にもなる者かと熟々と友の顔を瞶た。「ねッ靜江さん、夫は優しいのを持のですね、良人抔は勿體ない程愛して呉升ので私は幸福者だと思ひ升ワ」と友は何時か良人の方に話を向て仕舞た「それが何しろ結搆てすワ」「オホヽヽヽ」「オホヽヽヽ」「ヲヤ私餘り話しに實が入て來過ぎましたわ、では此處て失禮します日曜には必然被來しやいな」「ハア有難う！貴姉も何卒お出て下さい」「ハアさよふなら……」「さよふなら……」私は時子さんの後姿を見送て吁！時子さんは二人の母樣となるゝのだ、私等はまだ〳〵リボンよ簪揷よと、騒ぎに騒いて居るのに……何だか時子さんが急にお可哀想に成て來た。

小間物屋の店先で遭つたと云ふだけが目新しい（野）

『天』

秋の野路

稗貫美津子



岡野久江樣と云へばクラスきつての美人、而もお家は村て屈指の富豪家と云ふ所から、皆さんに羨やまれて居た方てす。學課も亦餘り人に負をとらぬ、どつちかと云へばまあ勝氣の方てした。けれどじれつたい程溫和て、ブランコ、遊動圓木は無論、テニスもピンポンも一向なさらぬものてすから、大の運動家て、おしやべりの木村八重野樣などは「岡野樣、貴女そんなに默つて居ずと、ちとお遊びなさいよ、ねえ、ブランコへのりませう」など云ふ事もしば〳〵てしたが、久江樣は「否え、妾厭よ」といつてことはつておしまひなさいました。丁度木の葉も枯れ、田の稻も皆かり取られて、案山子ばかり詫しさうに風に吹かれて居る秋の末つ方、しと〳〵と音せぬ雨が降つて、何となく心の底から悲しさがこみ上げてくるやうな日、私は急いて校門を出ようとすると「遠山さん遠山さん」と後ろて呼ぶ聲がしますので一寸ふり返ると岡野樣が、傘もさゝずに、袴の裾をかゝげ、本包みを袖に入れて馳けて來て「妾ね、今朝お天氣が宜かつたもの

だから傘もつて來ないのよ、家でも忙はしくつて、誰も迎ひに來て呉れないから、貴女の傘に入れて頂戴な」と例の靜かな調子で云ふ「え〻宜ございますともお入りなさいよ」と妾の傘にお入れして參りました。人通りの少ない田圃路に出ますと、岡野樣が「妾幸福に見えて」と突然おつしやる、私は驚いて、知れきつてる事何故お聞きなさるだらうと思つて「當り前だわ貴女」と早速云ふと「これで隨分氣苦勞があるのよ」と俛首れてしまふ。私は再び吃驚 貴女にそんな事ないでせう」と無意識に云つてしまふと「否え貴女、ぢや私貴女に皆お話するわ」と一寸考へて「御存じの通り、妾の母はあの通りの大酒家でせう、だから自然お小使ひに不自由して、藏の穀物を賣り出すのよ、それが又祖父や、祖母には嫁でせう、云はゞ赤の他人だから、祖父母は母の仕打を大層怒つて、二六時中喧嘩が絶えないの、昨日なども、今度穫り入れた米をね、母が十俵とか賣つたつて、祖父母が非常に怒つて、母にせめると「妾のする事に老人は構はなくても宜いよ」つてまあ、妾の居る所でさう云ふの、妾漸々兩方をなだめて、其塲は濟ましたのよ、ね、此樣に母は酒ばかり飮んでだら〳〵してる、祖父母は苦い顏してひそ〳〵蔭口ばつかし云つてる、まあ家の內の淋しい事、殊に此頃の樣な氣候には、妾家へ歸り度ないのよ」と霜枯れた草の上に、はら〳〵淚を流して「私ね自分の母ながら母を恨んでますのよ、不孝かも知れませんけれど、私は私の母を母とは決して思はれません、眞實私は今はもう誰一人力と賴むものつたら無い事よ、兄弟もなし、祖父母も母も彼の通り、せめて父でもね、生存して〻くれたら、まあどんなに嬉しいでせう、といつも〳〵さう思ふのよ、私の口から斯う申しては可笑しい樣ですけれど。衣食住もまあ人並以上に出來る妾ですから、皆樣には幸福にも見えませう、從つて羨まれもしませうが、こんな厭な家庭に育つてるんですよ、だから妾はかへつて皆樣の方が御幸福だ、お羨やましいと思つてますよ、ほんとうに宜い母はもつべきものです」とほつと太息を吐かれたが、急に顏を和げて「おやとんでもない〻やな事お聞かせ申しましたわ……」と例の才智は斯う云ふ時にも巧みに利いて、寂しく笑ひなすつたがやがて「こんな事、家の恥ですから、私だつて云ひ度くはないんですけれど、悲しさが包み切れずに、つひ口を辷らしたのよ、何卒何にも云はないで頂戴ね」と優しくおつしやつた。さぞ心では泣く程苦しくいらつしやつたんでせう、私は只々久江樣のお口から、此樣な悲しい事承はらうとは思ひもよらなかつたものですから、お氣の毒なと思ふ心は切てもお慰め申す言葉を知りません、て只「え〻決して誰にも云はない事よ」とちかつたきり、私は心で岡野樣の樣に、幸ひに見える方でも、裏にはこんな悲しい事があるのかしらと、半ば怪しみながら、無言で露冷たい山路を參りますと、萩も、女郎花も、桔梗も、憐れや野邊の花と云ふ花は、皆昨

日盛りをほこつた甲斐もなく、果ない姿となつて地上に打ち伏し、すゝきばかりが秋風のまに〳〵ふら〳〵と動くのを見ました。

「人を描け」とは嘗て記者も言ひました、美文でも人を中心として書いたものはうるほひがある、此文背景としての自然も能く調和してゐる、それから此短い文の間に久江と云ふ人、久江の家庭、及び作家自らまでが表はされてゐるのは不用意の間に用意あるものだ(評)又曰く書きぶりの柔かなこと、始終女らしい氣持の現はれて居ること、いやな癖が少しも無いこと、誰が讀んでも分ること、新な言はず、言に泥まず筆が意の如く動いて居ること、以上五個の長所を採つて此文章を第一等に推す(評)

「地」

葡萄棚、林檎林

勝子

夏も盛りに、活々した氣が天より地に流れ、地より人の胸に流れて、ぢつとしてはゐられぬ頃、わが愛するかめを連れて葡萄棚の間、林檎林の奥に分け入り、自分の身を全く人目から隱して逍遙ふ時の靜かな趣き、我れならぬ誰に傳へられやうぞと、私は沁み〴〵思つた。葡萄棚は高さ三五尺、長い畝の幾うねかをなして、農園の半分、小石多い方をば占めてゐる。立つと首から上は現はれるが、屈むと廣葉は全身を蔽ひ、日影をさへ遮つて了ふ。私は先づ屈んで反り身になり、逆しまに葡萄の房を眺めあげるのであつた。房の大きいのは長さ三尺あまり、粒も李くらゐ、熟むと黄になる。小さい方の葡萄は一房であけびほど、粒が簇つくりなるので、何れも三角、四角にをしつけられ、そして皮が柔らかいので蜂や、虻にすはれる、此れはうんでも綠だ。けれど一番に多いのはくろ葡萄で、最も早く熟し、最も晩くまで殘る。釀されて酒となるのだ。これ等の葡萄の日に照されて、透いて見える姿の美しさ、黒は紫に、黄は琥珀に、綠は瑠璃に、そして己がじゝ其色を保つて、かさと戦す綠葉の照り反すさま、この園がたゞちに一つの神秘の部屋ともなるのであつた。私はその中の甘さうなのを選んで、摘むので、秋の渡鳥の深山に木の果を啄むがやう、好むがまゝに飽くまで唇を染めるのであつた。ふと耳元に鳴く蜂の聲に驚かされて振り返ると、いつか忘れて了つて居たかめが後ろにゐるのであつた。そしてその時、これほど味のよい實、ともすればかめも食べるであらうと、試みに其一粒を摘んで口の所へやると、彼はちよつと嗅いで見たばかり、一向つまらなさうに首をそむけて了ふ。

私はそれが不本意て、厭がられながらも幾度も繰り返し繰り返してみた。

葡萄にあくと私とかめとはこゝを去つて林檎の林にはいるのてあつた。幾拾本立ち揃つての圓い林、日の影にも疎い、たゞ微風の起ること、葉のゆらぐに連れて、二筋三筋の細い光が落ちて來て、幽かなる趣きを添へるばかり。枝と枝、葉と葉と重りあつては宛ら緑の家をなしてゐる。そしてこの緑の中、たまたま紅いに、黄に色づいた林檎を見ると、そのとばりに鏤めた玉のやう、ともすると此の林の暗のやうにも見えた。

私は枝を曲げては其一つ二つを味はつた。けれども淺く低い葡萄の園にくらべては、深く遠く思はるゝ様て、久しくは居るに適せぬやうてもある。私は口笛を鳴らす、かめは悟つて駈け出して、私の先に立つて、古城の下を繞り、桃の下道を過ぎ、夏花多い堤の上へと行くのてあつた。こゝは私とかめとが勝手な遊びに耽るところ、淋しいながら懐しいのて。かめはすぐに青草の上に寢ころび、前足を並べて投げ出し、後足をかゞめて頭を擡げ、悠然と何物かを思つてゐる様な風。私も横臥して、今半圓形に踏んで來た道のあなた、遠目に林檎林の一端を望むのてあつた。

木の實の林をさまよふなど云ふ事は今まで餘り日本人のあたまになかつた趣味てあるが、何故斯んな詩を歌ふやうな、而しておちついた秋らしい趣味を忘れて居たのてあらう、わが美文に此一篇を得たのは堆き果實の盛籠を貰つたほど嬉しかつた(評)

『人』



恐ろしい夢に驚かされて飛び起ると階下の時計はちやうど二時を打た、今朝は女中が病氣て起られないので、私が勝手を仕なければならない、をそくなるといけないと思つてぱちんと電氣を付ると、何時もと違つて、目がしぶくつていたい。それも其の筈、昨夜は皆のかへりがをそかつたので、寢付たのは十二時過ぎ、何しろ二時間たらずしか寢ないので、ねむいのは仕方がないと思ひながら、階下へ下りて、大坂格子をあけ、つう〳〵と、すり足て手を宙にかざしながら歩て行くと、からんと何か足にあたつた物があるのてびつくりしたが、手てそつとさわつて見ると土びん、だれがこんな處に置いといたのかしらと、こゝと言ひながら漸く電



氣の下まで來た。せいのびをして付るとぱつと光がさす、とたんに今までどこに居たか鼠ががた／＼させながら戸棚の上へ迯て行く、はつと思てびく／＼しながら、米をはかつて水を一トしやく入れて、さく／＼さゝくと米をとぐ。あたりはしんとしてどこの家もまだ起て居ないので、米をとぐ音計り、ばかにそう／＼しく聞へる、ようよう流して火をたき付て置て、みそをする、お汁の實をきる、火を引く、膳立をする、茶を入れる、御飯を移す、是で漸く朝の支度が出來た、幾時間かゝつたかしらと時計を見ると、今ちやうど四時二十分前、をそくなつてはならないと奥へ行て「皆なお起なさいよ」と二聲喚んだが皆よく寢て居てだれも返事をしない、こんどは



佳作　大根洗　遠江　増子

一人／＼の枕元へ行て起すと、小さい兄さんは直ぐ起た、中兄さんは向をむいてしまう、それでも一人起ればいゝと思て二階へ上ろうとすると、お父さんががた／＼させながら下りて來た、すると今まて私が起しても聞へないふりをしてねて居た中兄さん、お父さんの足音を聞くといきなり飛び起きて、手早くかし着きかへるやいなや、と……と戸外へ出て仕舞た、其の樣子のをかしい事、やがてお父さんは奥へ行ツて「をい／＼起ろ／＼いつまでねてゐるんだ」と大きな聲で喚んだので、さすがに寢坊の大きい兄さんや英ちやんまで驚きながら、しぶ／＼起た。て私は直ぐ床を上げ始めた、臺所ではお父さんが顏を洗て居る、戸外では小さい兄さんが雨戸をあけて居る、此方では大きい兄

さんや英ちやんがぐづ〳〵しながら河岸着を着て居る、近所ではも早や皆起きて、あつちでもこつちでもがた〳〵どたんと戸を開る、雨戸をあける、其の内に河岸上が來て平田船からどし〳〵魚を上て來る、中買が出て來る、商人が來る、魚がしはだん〳〵にぎやかになつて來た、わづか二時間立ぬ内に今までの靜かさはどこへやら始めて魚がしへ來た人なぞは實に驚いてしまう、輕子（かるこ）なぞは皆「あアあぶないよ〳〵」と大聲でどなつてあるいてる。口のきゝ方も皆らんぼうで、どつちが賣手やら買手やらわからない「をいかつをはどうだい、ゑい、買はねいか」「うん、いくらだね」「そうよなあ、是で一三にまけてやらあ」（一三と云ふのは一かん目壹圓三拾錢の事です）「ほう高けいな、どうだいびんて買はふじやあないか」「馬鹿云ふない、そんな物たあ品がちがわあ、よく目のくり玉あいて見ろい、そんなねならよせ〳〵」まるでけんくわでもして居る樣、二階から見るとどうしてこうもよる物かと思われる程、男の人ばかりで一ぱい、其の人等が皆わいわい言て居るので、其のさわぎといつたらない、これが魚の澤山ある時には五時半頃から、十二時頃まで、少ない時でも八時九時頃までがや〳〵して居るので、一日の内に、けんくわの二組や三組は必ずある、で私はいつもこう思ふ、魚がしと云ふ所は朝だけ一つ別の世界であらうと。

女子文壇の投書家と云へば、多くは脂粉にリボン、袴穿いたやうな方だらうと思はれるが、是は百戸前の藏が並んで居ると云ふ日本橋のほとり、魚河岸の別天地に髪も結うて、襟のかゝつた着物に、前掛でも締めて居やうと云ふ下町の粋、餘り漢字などを御存知ない處を見ると若い方らしいが、筆は行かないでも江戸式のきほひは、はき〳〵した文章の間に現れて、輕子の言葉じやないが「アあぶないよ〳〵」と言つた調子がすてきに好い（評）

『秀逸』

ヰオロンの巻

闇夜の海

芝　長谷川静枝

とある漁師町のはづれから私は獨り暗い小路をさぐり〳〵磯に下りた――。

闇夜だ――空には星が何萬となく照り輝いて居る。けれども水の上を薄明りするほどの力は無い。

鋭い針のやうな貝を植ゑた岩――その黒い岩の上を私は一歩一歩辿つて行つた。

ザーと渚を匐ひ上る波頭が朧ろに白い、と引く潮に漂よふ燐光が青金を散らしたやうに入りみだれてやがてスーとまた暗い波に呑まれて終ふ――夜光虫――あゝ何と云ふ寂しい光りの蟲であらう。

私はしばらく身じろぎもしないで水の上を見詰めて居た。消えなんとする光――その突嗟の寂しい光はやがて私の運命を織り出す色ではなからうか。

乘合馬車

眞夏の日はじり〳〵とあらゆるものを焼き盡すやうに

照り付けて居る。
馬車は今峠を越して長い橋へ懸つた。
と遥か右に當つて海が見えだした——濃藍の海が。
眞白な鷗のやうな帆をいくつとなく浮べて。
乗客は一様に眼を擧げて見た、そうして暫くはそれから眼を放さうともしなかつた。
ポーピーと半音に吹く笛の音が乾いた空氣に響いて如何にも暑苦しい。
再び峠に懸つた。
海はもう見えない、乗客のすべては倦怠さゝうにあくびをした、そうしてまたうとうとゝ眠りに落ちて終つた。

森の冥著

森へ入つて來た。
壓え付けるやうな若葉の匂ひに神經が興奮されて、頭が妙にいらいらして來る。
私はあてもなくそこいらを歩いて見た、そうして歩き疲れた體をとある切株に靠せた。
心がやゝ靜まると今度は何處ともなく身内のわなゝきを覺えた。
(白晝の恐れ)が襲つたのだらう。
褐色の土の上にところどころぽやつとした日の色が浮いて、風が吹くたびにゆら／＼と華紋のやうな影が揺れる。
私は凝と耳を澄ました。
胸をそゝるやうな葉ずれの音を聞くと私は無暗と悲しくなつて來る。そうして涙が止度なく流れる。
勿論熱い涙ではない。
けれどもなぜこんなに悲しいのだらう。
あゝなぜこんなに悲しいのだらう。

夕暮

默つて歩いて居た。
遥か下町の方を見ると、もうすつかり夕暮が黒い裾を擴げて、仄暗い夕闇に瞬たく灯の影さへチラホラ見えだした。
私はふと思ひ出したやうに立止まつて耳を欹てた。
巷のどよみが重い空氣を傳はつて遠雷のやうに響いて來る——。
私は再び耳を澄ました。
氣のせいかしら——どうも誰かゞ私の名を呼ぶやうに思はれて……
荷車が一臺ガラ／＼と私を追ひ抜けて行つて終ふ。跡はふたゝび元の寂寞にかへる。
と足元でヂーと虫が鳴き出した。
凝と聞き入つて居ると何だかこうチクチクと胸を刺されるやうだ。
うそ寒い風が冷やりと襟元を掠めて行く。
(あゝもう冬が來たんだ)
私は恁う云つて明るい町の方へと足を早めた。

所謂口語詩を散文にしたやうなもので、散文詩とは斯ふ云ふ作を指

す、而して此の種の散文詩も美文の一體として今後必ず發展すべきものであらう(評)

此篇以下美文の秀逸に相當するもの甚だ多ければ、是を三分してヴオロンの卷、箏の卷、笛の卷の三つにせり、其間自ら逕庭あるべけれど、必ずしも深き理由なし、只見易からしめんが爲のみ(記者)

裾野の秋

麹町　しげ子

雲は高く澄みきつた大空を北へ北へ流れて行く。

今迄裾野を取卷いて脚下に豚々と折重つて居た足柄や箱根の連山は茫と掻消されて、唯とぢこめた眞綿の樣な白雲の斷間に紫の膚を匂はして居る許りである。

同伴に逸れて單獨り御殿塲の方にトボ〳〵と下つて行くと、背後から逼る山風は絕えず負うて居る茣蓙を吹き煽つて、早く〳〵とうながす樣――

楢、栗、楓の林が道を挾んで處々に鬱々として居る、下を通ると、赭色の粘土が未だ乾かずに光澤を帶びて滑かに、ともすると疲れた草鞋の足を踏辷らし相になる、落葉と梢の露はしつきりなしに、笠の上にボタリボタリと落ちて、何所となく身が引締められる樣な感じがする。其上幽暗い奧からは絕えず暗い〳〵風が吹いて、日陰になつて濕々した立木の片側に生えて居る苔の上をさら〳〵と渡るので、其度に襟元が冷こくなつて竦とする。靜かな寂として居る林の中に、曳く金剛杖と、輕く歩く跫音のみが奥の奥の方で谺返しに響いて、心弱い自分には、此奥には黑衣の魔が居つて、息を吐いて居るのではないだらうかなどと、あらぬ想を起してたへがたき寂しさを益すのである。

林が盡きて吻として顧みると、天半に薔薇色の光をして、桃色の膚を誇つて居た一萬二千尺の富士は、群小の閲を脫して風雲に隠踪する神々しい姿を最早肩から斜に笠雲に匿して、裾野ばかりを遠く曳いて居る。下りて來た山腹の路は、黑ずんで縫目の樣に薄く雲の中まで續いて居る。

裾野は濶と展開して明るい。落葉の杜や、常盤の木立が黑く一團宛散在して居るのが傾斜の起伏を見せて居る。空はむく〳〵と膨んだ灰色の雲が低く空一面に垂れ下つて、今にも降り出しさうになつた。

同伴は何處まで行つたやら影すら分らない、四邊に人家もなく、萱野は東へ東へと限なく續いて、只だ獨寂さと恐怖とにおそはれた自分が力なげに辿つて行く許り、天地創造の時の第一人の自分が、エデンの花園を逐はれて、泣く泣く人生の天地を彷徨つて行く樣に、淋しい、遠い荒野の感が犇々と胸に迫る。手を擧げて泣かうか、大聲をあげて叫ばうか、神の富士は背を向けて立つて居る。あゝ胸が一ぱいになる。……

もう此あたりは一面の萱野で二尺許りの萱が蓁々と生えて、風吹く毎にザワ〳〵と葉擦がして、其中に野百合が赤い頭を重た相に擡げて居る、假令へば美しい人が高島田に緋鹿子の手絡をかけて重た相に初々しいなよび姿にも例やうか。又草苺が小さい紅の粒を見せて居るのは、小供が可愛い〳〵隠をして含羞んで間から偸

み見をして居る樣てある。外に荻が風に靡いたり、名も知れぬ八千草が亂れて居る、蟋蟀も啼いて居て晝さへ夜の道を行く樣てあるなど恰も秋の繪卷が一面に繰り展べられてある樣。此秋草の裾模樣の裲襠をきて、笠雲の綿帽子を被つて富士姬が今坐つて居るのだと思うと自ら微笑まれる――草臥れたのも忘れて、草を折つて居ると前方からチャラン〳〵と優しい鈴の音が聞えて來る。

仰向くと、阪の下から馬の背ばかりちら〳〵見えて、登りの馬がくる。馬子の張のある美しい唄も手にとる樣に聞える。

「富士の裾野の萱野の中に……

少時すると阪の上に現れた。馬子の女は悠然と橫乘をして居る。筒袖から水色の襦袢の袖を少し出して、手綱を緩く絞つて居る、唄う度に笠を結へた紅の緒が搖れるなど逈に可懷しい色てある。詩人が居たなら、恁麼詩になるだらうかと、思つてる間に萱野に隱れて了つて鈴の音許りチャラン〳〵と低い雲の間を漂うて來る。雲は尙低く〳〵なつて、最早體を圍繞くばかり、暗臉の色驚破と駭く間もなく時雨がハラ〳〵。遠くからサアと近いて、萱野を過ぎて行く時雨の音、――引つけられた樣にそんて此自然の聲に耳を傾けた。

假しこの曠野に孤獨佗住居して居たなら恁麼感じが起るだらうと、凝と俛れて此自然の聲を聞いて居ると、見捨られた樣な淋しい〳〵心地になると同時に何處となく可懷しい力て引き寄せられる樣てもある。

富士の裾野、舞臺が先づ好い、自然の描寫も新代の人が眼に映ずるまゝを氣の利いた、才のある筆て描いてある、少し才氣のあり過ぎるやうにも思はれるが、此美文も亦わが「文壇の光」に一つの光を添ゆるものなることは疑を容れない(評)

恐怖

小野つかさ

何となく人に逢ふのが物憂くてならない、眞夏の日盛り、私は小座敷の窓近く、身を投る樣に小さい机によりかゝつて、現ともなく、夢ともなく、ぼんやりと、自失した樣にかん〳〵と日の照りつける倉の屋根瓦を見つめて居るのである。

部屋はむされる樣に熱い、しと〳〵と背から胸から汗は流れる、けれども、手にもつ扇は弄るばかりて涼を入れ樣とは思はなかつた。私の心はある事から激しい打擊をうけて非常に混亂し動搖した、はては想に惱み、苦悶に勞れて、例へば暴風が吹き荒んて葉も枝もちぎれるばかりにゆれにゆれた庭の大木が、ハタと靜まつた後の氣のぬけた樣にひつそりする、それの樣に、魂もはなれたかと思ふばかりうつとりと、燒ける瓦を見入たのてあつた、見るともなく無意識に。そしてやつぱし無意識に想ひはいつか思ふまいと思ふ其の事をくりかへして、悲しい〳〵追憶の絲はそれからそれへと手ぐりよせられるので。胸底ふかくひそめる、幽な不安のかげは見る〳〵眼前一面にひろがつて、襟元から

冷水をかけられた樣に、乳房のあたりまでゾクッとしたが、堪へられなくなつて、双袖に顔を掩うて机の上につつぷした。怖い夢に襲はれた樣に感じて――。

あゝ、不安！不安！自分にもそれが何であるかはわからない、只胸が異樣にわなゝいておどつて、あるにもあられず苦しいので……かきむしつてきづゝけて、煮える樣な血汐と共に此苦しい想―わだかまり―が一勢にほとばしり出て了つたならどんなに晴々するだらうと思ふ迄に……つかまへ樣と思つてつかまへる事の出來ない捕へ樣として捕へる事の出來ないわが回想！……あゝ此の回想さるゝそれをしも戀と云ふ事が出來るなら、おゝわが戀？は花や蝶の美しいものではなかつたのだ、淡い〳〵幻の樣な、夢の樣な、灰色の鉛の樣に冷い重い沈んだもの　……心の底で「あゝ自分はどうなつて了ふのだらう」と絶望は、力なき聲に呼いた、あゝまつたく自分はどうなつて了ふのだらう、どこからともなくこんな聲がきこへる「汝の胸は眞暗闇の洞穴だ、如何なる道を進んで輝く光を仰がうと思ふ」とおゝ、私は眞に〳〵黒暗の洞穴へ這入てゆくやうな氣がしてならないもの光を！光を！光をと、求めつゝ私は何處迄迷うてゆくのだらう、と思ふと、たよりなき世の只かびろく、荒て寂しい秋の野末に孤りさすらふ心地せられて、止めどない涙は只わけもなく頰を流れる。私は今日こそは思ふ樣、心のまゝに泣いて泣いて泣いて見た、けれども、けれども、あゝ、此の泪とて私の苦悶を流すにはあまりに力が弱かつた。弱い〳〵涙！おゝ私のそれは、悲しい過去の追憶と、寂しくつらい現の夢とを結びつけた束の間の露の閃きてあつたのだ。

頭はピン〳〵痛む、何かに怯えた樣に五體はすくんで動かない、いえ動かせないのだもの、わきの下からはしぼるかの樣に油汗が、たら〳〵と流れて、耳に入る物の音は、幽かにかすかに遠い處のものを聞く樣、氣は次第〳〵に遠くなつて行く――。

ふと心に「汝弱き子よ、悲しき過去は過去に捨てゝ、新らしい世に、新らしく生き樣とは思はぬか」とやうな呼きを聞いて、はつとわれにかへり、彈かれた樣に机を離れて身をおこした、胸はわな〳〵と顫へてうつ脈のはげしい事、見まわすあたり、すでに夕暗靜かに迫り殊に部屋の裡はくらい、眼のはつきりしないのは充血して居るのだらう、のぼせた顏を夕風に吹かせ樣と窓から首さしのべて、暮れゆく空を見上ぐる目に、只一つ强い〳〵光の星かげを見出た。

それは倉の屋根を三四寸はなれた所から、赤く、青く、またゝき凝とわが顔を、眞面に照らして居る星てあつた。

此れだけの事でも言ひたくて、言ひたくて悶へて居る女が澤山あらうと思ふ、言ひ得たるつかさ子はまだしも幸いである、文壇に涙もろき文字の多きを咎むる勿れ、涙と戀、此二つを去つたら文壇に若き女はないであらう、せめては彼女をして其を語らしめよ、語ることのあぶなかしきは是非もない(評)

美文

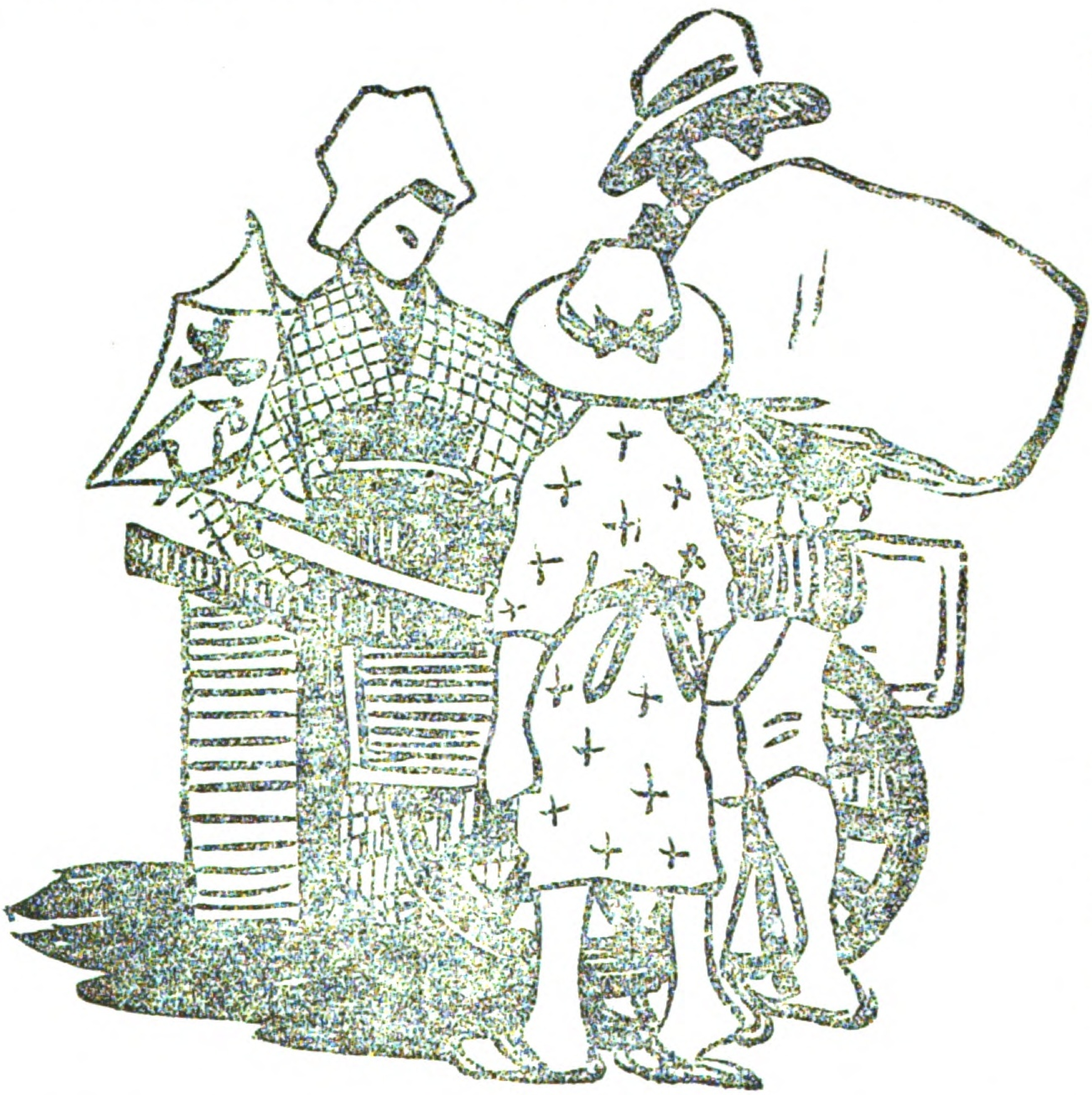
お風呂

京都市　春日桃牛

くり／＼肥つた弟の身體に手拭で湯を掛けて遣る。腹は瓢簞の樣に膨れて、兩腕や肩や脊中には蚤の喰つた跡が赤く點々、妾は自分の瘠せ細つた腕を弟のそれに比較して見る。其懸隔して居る事は弟は小人島の常陸山程有ります。

湯は藍色に清潔で澄徹して溫く白い湯氣を立て、波は左右に搖れる。妾は這入つて兩手で弟の脇腹を支へて入れると、暑そうですが然しほらしく辛抱するのか平氣で湯をチャプ／＼させて微笑むで居ます。晝寢の寢起て、目は凉しく瞳は黒いが眼の縁に少し脂が溜まつて居るから濕めした手拭で拭つて遣り、椀冠の光澤のある黒い髮の毛の亂れを湯で撫てて穩かに櫛で揃へると筋目がキチンとして奇麗です。妾の病氣は到底長くは持ちますまい。弟が成長した時亡姉にこうしてお風呂へ入れて貰つた事を其時迄覺えて居て、そして想ひ出すでせうか。せめて此膝子でも持つてから死にたいんですけれど。結むだ唇が花の蕾の樣で顏が滑稽に見えます。

湯は未だ早いので人が來ませぬ。空氣拔



佳作　おてんや

三河　近藤入重子

からは五月の陰欝な鈍い光線が流れ込むで、白い湯氣が濛々と立ち上る。槽の周圍の板の上に安石鹸が散亂して氣味が惡いので、桶へ熱湯を汲むで洗ひ流し幾度も湯をかへ出して、弟を座らせ、桶に湯を汲むで手拭を擴げて蔽ふて遣ると、弟が兩手を桶の中へ押して湯が手拭の上に出ると俯向いてそれを呑むのを、止めもせず、妾は病氣の事を思ひ續け乍ら凝つと見つめて居ます。

弟が水溜の水を柄杓で呑む間を、色硝子が反射して石造の水溜の御影石の縁が紅色に濡れて居るのを眺めて、妾の病が重くなつた時も此麼血塊を吐くのかと泌泌思ひました。弟の手拭を絞つて身體を拭いて遣る。手拭は月に雪の松二羽鳥の摸樣です。着物を着せると私は汗がタラ〳〵流れる。額から頬から胸腹股と滴つて益々激しくなつて敷物を濡らします。で氣が氣で無い。焦れば焦る程汗が流れて捗取らず、漸く出來ましたら全身は汗に塗れて溶けて了ひそうです。と弟は妾の緋の腰卷を見付けて、これお母さんの。可愛いゝ事をいふじやありませんか。

湯に入つて居る有樣と、其悲しい心持とが、精一ぱい女らしく表はれてゐる、殊に風呂場の工合が見えるやうに書いてある、少しも囚はれてゐない、若い人の筆は斯うも自由に動くものかと感嘆せしめる(評)

鳥の聲

八重子

机の前てそれからそれへ空想にふけつて居ると、突然裏の森でバサ〳〵と羽搏ッてキーと一聲叫び捨てゝ、飛ぶ鳥がある。アッと思はずつゝ伏して暫し身動きもし得ない。星も見えない暗の夜に、町をはづれた一軒家にたつた一人の留守居の私を斯樣に怯えさすのは、誰の惡戯であらうか。

彼鳥は今頃怪眼を光らせながら餌食を探して居るであらう。其餌となるのは何だらう? 蟲か木の葉か、それとも罪ある人の靈であらうか。では私を狙つて來たけれども、私に未だ强い所があつて私をえ潑はずに逃げたのかしら?

おうおそろしい。

丁度一年前の今夜の樣な晩だつた、親類のお婆さんが亡くなつた時。矢張りあの樣な鳥の聲がして、人の最後には怪鳥が鳴くと、誰かゞ云つたのを思ひ出して胸安からず思つたが、果して――

今でもまざ〳〵見える。空が白むと起きて、おばこに結つた頭に手拭をかぶつて、圓くしやがんで首を振りながら、廣い〳〵庭の草をむしつたり掃いたりして、これが濟むと、美しくなつた庭を見て茶を飮む。それが唯一の日課、且つ樂しみてあつたのだ。

極めて無口な、恐ろしく自愛自重心の深いしやんとした人だつた。惡く云へば、頑固な同情心の無い、聲が出れば皮肉を云ふ。俺しは此の家の先祖だよ、大切な人だよ、と始終自讃して、客が來れば罷り出る、話をして居ると、何事だ聞かせろと云ふ。故に人は皆敬遠

主義を取つて居た。

悴の嫁が大病になつた時『心得が惡いから病氣になるのだよ』と生死の境に在る病人を誡めたと云ふ話は今だに殘つて居る。

其の家の女の子など『私の御婆さん大嫌ひよ、母樣の御里の御婆さんと取り換へるといゝのに』なんて、御婆さんの前で平然と云ひ放つのであつた。

晩年、病を得て養生の爲め私の家に來て居た間、自分の家を案じて居た。次第に老衰して或る夜。

怪鳥の聲に驚いて私はぼんやり見て居たが、集まつた人達は云はず語らず思ひは同じであつたものか、ひたすら見守つた。

けれども、慟哭の聲はなく、悲しみの色にさへ何んとなく安堵の影が沿うて居た。泪なき人のためには泪を與へぬとは誰の定めた法則か。あゝ。

其晩、御婆さんの靈はあの鳥の鋭い嘴に咬へられたのだろふ。

もしやさうであつたら、今度私を攻めた時、御婆さんの仇を討つてやろう、御婆さんとても亡くなる前は、あんなに悔いて居たもの、惡かつた助けて下さいつて云つたのに、人々は苦しまぎれのいひわけだと聞き流して心を汲んで上げなかつた。鳥も容赦なく啄んでしまつた。

おゝ、憎らしの鳥よ、私は、私は、屹度仇討をしませう。

いえ必ず致します。と誓つて居住ひを正した時、夜も森も一寸も怖ろしく感じなかつた。

確固として大磐石のやうな文章、得て斯んな境地を描出する場合には、亂れがちになるものだが、始終態を正して居るやうな態度は敬服に値ひする、（評）

石狩の空

函館　根本ひて子

「高い北海の天、廣い石狩の野、エルムの林、牧場の香り」と云ふ風の文句の屹度出る手紙を書き〳〵して居る。南より來る旅人は、北日本の地を踏んで、空氣の味の變つてゐるのに驚くであらう。東京の押被さる樣な空氣は、人の頭に癇癪の種を蒔く。石狩の高く晴れた空に立てば、大氣はしんみりと胸の奥深く滲み入り、そゝのかす樣に、沈思と哀愁を誘ふ。一歩郊外に出ると、大陸の匂ひが遠くの方から漂つて來る樣な氣がする。自然は露骨に迫る。

乳母車を押しながら、近いエルムの林に逍入る事がある。早く赴任の途に上つた良人が「西歐の繪にある樣な亭々たるエルムの樹林」と手紙で云つて寄越した時に、妾は憧れの眼で讀んだ。――今妾は出來るだけ靜かに車を押して行く。日は其生の上に黄色い斑を作つて、水々した林間の氣が、差入る。草の香りがする。名も知らぬ小鳥の鳴いた後に耳傾けると、閑寂の氣がすうと肚の底に吸ひ込まれる。

暮方、戸口へ出ると晝は見えぬ遠山が、低い兩側の家

並の端れに夢の樣に浮んでゐる。立つてゐると、牧草を滿載した馬車が通る。馭車は洋服の古手を着て卷煙草を吹かしながら、元氣よく馬を追つて行く。妾の立つてゐる此道は曠野の眞中を何處までも走つてゐる。眞晝時、明るい日光の下に茫と展がつてゐる此曠野を見ると、幼少い時見た行倒れの脊を連想する。北海の秋は短い 向ふに黑ずんで見えるエルムの林も、其間から農科大學の白堊が透いて見える樣にならう。やがて其根方に絡み付いて美しく紅葉した葛の葉も、一日一日冷い風に吹き拂はれて、そして寒い、長い、倦々する北海の冬が來て了う。

十月も押づまつた或日――、ぼか〳〵と肩先を暖めてゐた日が、何時の間にか陰つて、灰色の雲が見る〳〵擴がつて行く。此頃の空はもう毎日恁うだ。妾は停車場の前でどや〳〵と出て來る群集を眺めてゐた。不意に後の方で『オイ金盛樓の主人が越後サ妓買ひに行つたと云ふナ彼等だド』と聲がする。下品な扮裝をした女が十二三人、きやつ〳〵と笑ひ興じながら屈托のなさそうな顏をして出て來る。と、糸織づくめの肥つた男が横柄に俥を呼ぶ。――俥は走る。から〳〵と並木の續く廣い街路の眞中を、一直線に南に走る。

『遠い越後の國から……』と心の中で獨言つ。

北海の冷いカラーは如何なる所にも附纒ふ。

何となく露西亞の作家と、作物が聯想される、努めて北地の自然を出さうとしてゐる、餘も一段と作家の風がある、一般の人に其味ひは分らなくても、常に文壇に親みを持つ人々には、いしくも書いたものだと微笑を催ふさしむるであらう(評)

雜木林

静岡縣　岸　つぎ子

其は丁度抑へられぬ嬉しみを抱いた人の一群のやう。一木一木に若々しい色を漲ぎらせて、雜然と林をなしている。自分は其中をさまよつた。曉方の空の色。洋々として晴れやかに、帆のやうな眞白な雲がそこここに飛んでゐて、日の光は天の宮殿の金扉からサツと投げかけたやうな黃金色で――。暖かい風。若葉がサヤ〳〵と囁れ合ふ音。自分は吸ひ付けられたやうに佇んだ。雜木が稍粗らな所のサラサラと盛り上げたやうな丘に、紫色の苔が一面に其を被ふて、蒸すやうな大氣が美しくかげろふてゐる。夏の曉方は壯嚴である。しかも華やかである。なつかしげな丘。若々しい木立。――眼に遮るすべての物が皆この壯嚴な華やかな光を浴びて、酔ふたかのやうに立つてゐる。自分は知らずあたりの景色に同化されて了つた。美しきみ空。華やげる木立。金色の日が燃えて燃えて燦たる雜木林の輝きを見たとき、自分は夢から醒めた如く愕然として驚いた。まあ何といふなつかしさであろう。何といふ嫉ましさであろう。例へば血潮の沸りはげしき少女が、心を滿す何物かをえた刹那の微笑。その微笑をみるかのやうな雜木林!。この今の自分の身に引比べて何と

いふ悲惨なコントラストであろう。自分の渾身の血潮は氷のやうに鐵のやうに冷たく堅い。胸に吹き荒んでゐる思ひは木枯のそれよりももつと／＼哀れに痛ましいてはないか。ア、殘骸だもの。殘骸だもの。おゝ旺盛なる林。悦樂の最頂に醉へる雜木林よー。なんてこれが嫉まずにゐられやう、羨やまずにゐられやう。悲しい淋しい將浮々とした華やかな自然の景色と、悲しい淋しい將浮々とした華やかな自己の心裡とが一致したとき、そこに慰安もあらう誇りもあろう。が一致を缺いた時、殊に自然の華やぎに對して泌々心の淋しさを感じた時程いま／＼しい事はない。この場合自分は冥府でもいゝ。冥府でもいゝから行つて悲哀な景色に慰安を得やうと焦れた。焦れて自分はひと廻りあたりの景色に瞳をくばつた。雜木林は森閑として何等の響きをも傳へぬ。時たま生暖かい風がフーッと頬をかすめて、又何地かへフーッと窃むやうな足どりてすぎて行く。けれども木の葉はソヨとだにゆるぎもせぬ。フワ／＼と空でも舞ふているやうな心地て、雜木林は今眠るべく木といふ木の葉は皆愼しみやかにうな垂れて居る。其時其時！自分は偶と或る淋しみい物のかげを認めた。そして慰安！慰安!!と云ふ鋭い心の叫びに、溫かい血潮の流れを感じて、いひしらぬプライドを覺えた。一振動又一振動いた／＼しい葉ずれが起きて林は囁ぎはじめた。眞夏の日が燃えて燃えて白く／＼中天に懸つた時の雜木林は、死の前に苦痛——死の前に最も近い近い苦痛をあらはに萎れ果てゝ了つた。自分は何がなしにニッと微笑むだ。一致！一致！こう自分は強く高く叫んて、そしてこの雜木林の一端に済然として色をなしたのてあつた。

書き方は男性的て、女性的の神經質なところは乏しい、それだが雜木林の若々しさは活きて居る（評）

悲しき夜

しぐれ女

夜は正に一時半。

後の山から死の使とも、凄い夜がらすの音がもう二度聞えた。此暗い晩宿るに木なくさまよふのか、沈默のこもるあの山て、黒い／＼あの鳥が、「意味」なく鳴く譯がない、と思ふと思はずぞつとして底の底からをのゝいた。——と又細い／＼息の音に、次第に我世をはなれ行くとも見えるお祖母樣のお顔をのぞく。

おちくぼんだ御目はゆつたりとゝじられて、やゝまがつたお鼻から出入する息の音の、さてもさても淋しい事よ。ハラ／＼と外には夜の雨の音、前の海には浪の音がむせぶやうに聞える。

何て物淋しい夜てあろう。

細い細い息と共に、刻々に我世をはなれてゆく魂の、ただ後に引く夢の樣な或るものに、つなぎ止められてある祖母樣の御命。

若き血汐のもゆる身ならば、よし今、刻の間に引とらる

べき命なるも、なほそれ自身に於ては生てふ望に信をおいて、大なる努力に我をつないでおくが、御年のはてのはかない御身には死てふ恐ろしい暗い思が、胸のすべてをとざしてそこに、もゆる命の火の入るのをゆるさない。希望なき御身はいやが上にもなえになえて、ひとみの光もどんよりと、たゞ見ぬ世の國の暗く冷い影にのみそゝのかされて居るかの樣――。あゝさなきだに心ぼそかる老の身の、病てふ魔にとりつかれては、もがけど狂えど定められたる運命の槌に、死てふ響は深く/\打てまれて、なえたる肉を引ちぎらてはやまないので、のがれようたつてのがれられぬとあきらめては、さすが六十有餘年、あらゆる人生の苦痛にきたえ上たる「觀念」其ものに、己を靜に守つては、死の前に立ちつつ取り亂した姿もなくきはめて靜に其手を待つておられる。

遠い夢の樣など、我はきく死のひゞきが、車のわだちの一歩一歩近づいて來るそれの樣に刻々あざやかに、重く大きく老たる祖母樣のお耳に近づき來るのに、さりとはあまりに靜なる御姿ではあるまいか。

波のしらべは何だかこう、寒い/\北海の悲哀の曲をかなづるように、悲しい涙のあふれそうな、しかしどこかに物なつかしい永遠の源を慕ひ/\て歌ふようなえも云はれぬ悲しき音して、しわぶき一ッきこえぬ此室の戸をこえて、目に耳にあざやかな自覺をうながすかのように、しんみりと流れ入つてくる――あゝ此波の音！はたして我世に遠ざかりゆく祖母樣の御耳にはまあどうひびいておるのであろう。永遠の源!!そこにかへりゆくべく今かすかに殘るたましいの、うすい自覺にむせびよる、此なつかしい波のひびき、我世の上にかつさわぐ波のひびき、天と地の樂の音に、魂のゆくえは遠くなつてゆく――。としづまり返る此室は波のひびきがひろごつてかぎりも知らぬ大海原の中に浮べる身の如くたゞかぎりない空なる圓なる天の一端がつと裂けて、萬の始、老の源、その旭の上るのがひたすらまたれて御息の、旭に逢へと祈りつゝくらい/\やみの夜を御枕近くうづくまつてゐる。

此文章も詩から來て居る聯想が多い、それて全體に暗黑な方面、殊に死と謂ふことを深く書いてゐる、文體と云ひ、觀想と云ひ、甚だ山田くに子に肖て居る、信濃の國の若い人は皆斯んなことを考へて居るのか知ら、然うてもないだらう、摸倣者もあるだらうが、此文章は摸倣ばかりて出來ない、獨創の生命がある、人をひき入れるやうな銳い力がある（評）

秋　○

松山　木暮葉子

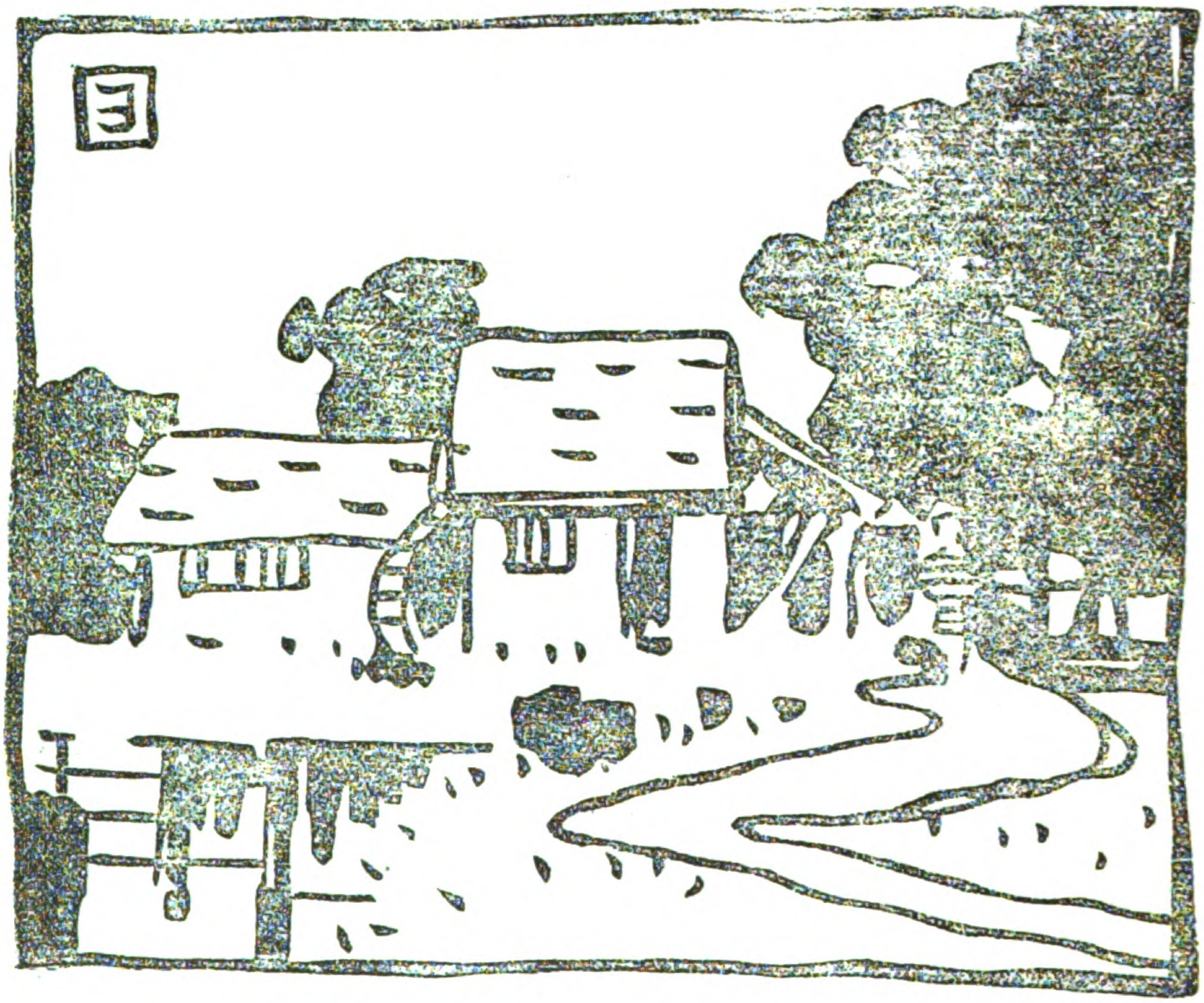
野の中にひとり立つてゐる。
風がさびしく、さや/\と薄をわたるばかり、何もない、誰もおらぬ。自分ひとり。涙がおさへられるやう。
涙がおのづとこぼれる、涙は頰をつたふ、涙は冷めたくなる、冷めたくなつて頰を傳ふ。
（母樣、母さま）と呼んで見たい。自分ひとり、また

風が吹く。

○

明るい日光はさら〳〵と照る。人は日光をあびて事もなげにあるいてゆく。ぶら〳〵と歩るいてゆく人もある。急いでゆく人もある。柳の葉が散る。自分は路傍に立つてゐた。（あの人達は、どこから何處へゆくのだらう）あゝして「今日」のためにあるいてゆくのだ。西へもゆき南へもゆかう、あゝして今日は暮れるだらう。そして段々「死」に向つてあるいてゆくんぢやないかしら。生から死へ――。華やかに笑ひながら女學生が四五人連れ立ッてゆく。自分は身ぶるひした。

佳作　水車　　青森　井上よし子



○

どうしても哀しい、泣きたい、何と云ふこともなしに哀しい、燈を明るくつけても見た。やはり哀しい。どんなにしても悲さからのがれることが出來ぬ。身の中、自分の身體の中に、「悲哀」の血が通つてゐるのだらう。

○

木の葉が散る。はらはら〳〵と散る。静かに散る。あの落葉はやがて土となる。あの落ちてゆく木の葉一枚一枚にも、無限の時が刻まれてゆくのだ。あゝ木の葉が散る。自分の髮はみだれてゐる。

○

じつとしてゐても涙がこぼれる。

（淋しい淋しい）僞らない心の叫び、誰彼に澤山と手紙をかく。本を讀んでみる。歩るいて見る。しかも眞晝だ。それに「畏怖」の思がせまつてくる。影――

○

雨が降る。朝からしと〳〵と雨が降る。暗らい。雨は夕方になつてもやまぬ。このまゝ世は腐つて、朽ちて、古りて、終つてゆくのぢやないだらうか。そして「自分」はどんなになるのだらうか。

○

街はづれ――野の方は眞ッ暗だ。街の方は明るい。現し世と冥府とのやうだ。泣きたい〳〵、自分はどちらへ行かう。明るい方へゆきたいけれど、自分は暗らい方へ歸らねばならないんだらう、さうぢやないかしら。せめて星でもあれば好いに。

「自分」が立つてゐる。涙がこぼれる。

純然たる散文詩、此れを横に書けば今の所謂口語詩に讓る處はない、前の「闇夜の海」と同じ系統に屬す（評）

筆の雫

初めて圖書館に行きし記

本郷　朝井松子

五度目に手にせし和漢書目錄の中より漸く目指す書物の見當りければ、用紙へ書名冊數番號等を記載して、扨借用せんとは思へ共、出納掛は何處なるやら少しも樣子知らねば、誰ぞ聞く人もがな、と思ひ惑へる折しもあれ先程より頻と目錄繰りて有りし君の用紙持ちて出て行き給ふに、妾も後に從ひて男子室の正面に控へたる掛員に用紙を示して書籍を借り受け、音立てなば折角學び給ふ君の、嘸や迷惑し給ふらんと心して步めども、思ひなしかや衣擦のさわ〳〵と耳立ちたることうたてけれ。

先づ婦人閲覽室に入れば、長方形のテーブルは一直線に五脚備へられ、一脚を四人にて使用せらるゝやう椅子を配り有れ共、今は僅に二ツの席を餘せるのみ、妾は端の二番目に席をメぬ。

流石は心有る人の集ひにや、室内寂としてさゝやかなる聲さへ漏れねど、只出納の爲め往來する人の上草履の音と、裏の木立に啼く蟬の聲の、馴れぬ身にはいとゞ喧しう覺ゆるぞ是非も無き。

妾が前なる君は、未だ肩上深く、紫袴を胸高にして、つゝましやかに和文やうのもの繙き給ふ樣の、何れいつくしき家庭の人とも見えて床しう覺えぬ。

そが隣の君は、庇三間とはしたなき人の口端に上るべき迄に前髮突き出したる束髮、細かなる紺絣の襟きゆつと搔き合せ、頰杖して、妾が讀める書の上を流目に睨み給ふ、心にくしとは思へ共、何故か面合せん勇氣も無くて、只管其視線を避けんとする不甲斐無さ……常に妾を時代後れよと嘲り給ひし荻野の君がみ言葉の實にもと想ひ起されておかし、久しうしてそが君が小

用にとてか鉤持ちて出て行き給ひし故、何學び給ふかと、開き放ちなる書物を見れば人體解剖の圖なるに、扨は女醫學生なりとぞ知られき。

斯くて五ページ十ページと繰る内にいつしか鋭き視線の事も忘れて、漸く興を覺えし頃、ピカ〳〵つと烈しき光の窓を射るよと見る間に霹靂一聲、大粒の雨は硝子の扉をも碎かん計に降り出しぬ、歸路を氣遣ふ人々の頻と外眺むれ共、おどろ〳〵になる神は、或は遠く或は近く、何時かな止まんともせず、打續きたる八十五度の炎暑に堪へてや、稍々黄ばみ初めし梧桐の幾本は、漸く救世主のみ惜に甦りし樣に、しつぽり濡れし幅廣き葉を振り立てゝ、追いつ追はれつ重なりつ、亂れ合ふ樣の、くしくも面白き眺なり。

聽五時も過ぎ、六時の鐘聽きし時、さしも烈しかりし雨も雷も、名殘無ふ晴れたれば、いざ此間にと、手早く仕度して、穴のやうなる暗き出口をいづれば、木々の梢を渡る微風の、心ゆく迄涼しきに、何かは知らねどホッと太息して、始めて束縛を解かれしやう、夢現に、かな〳〵〳〵と鈴振る如き日暮の聲聞きつゝ、枝と枝とを交へたる櫻の下道を辿れば、ポトン〳〵と綠葉より落つる雫は甲斐絹張の洋傘に小さき皷の音するなど、いみじうもすが〳〵しき心地せられぬ。

事柄も好く、文字も輕く快く、少しのいやみもないが、何故文語體にしたものか、寧ろ口語體であつた方が一層蠱惑を惹起したてあらう、併し此文語體も能く整ふて居る（評）

村の土工事

大阪　松葉要子

つい此間のこと、土地の買收に關係して村長樣が罪もない繩目の恥を受けられた時は、村の人はみんな悲みの涙に暮れましたけれど、この鐵道工事が始まつてからは村は全く見違へる樣に景氣付いて來ました。愛宕下から停車場へかけて瓦葺の新建が荒壁のまゝ、ずらりと顔を並べたのですが、夫れが又云ひ合はした樣に飯食物の店を張つて卑しい勞働者を相手に商買して居るのです。

停車場の敷地は安來登記所出張所の門をかすめて園原の墓地迄一線を畫き、それから鈍角にぐるりと明神樣の崖を崩すと云ふ話ですから、いづれ三四町歩の廣さはあるのでせう。此の寂しい村には似も付かぬ廣い土地を買收したものです。「驛舍は平家建て鼻曲りの餅屋の跡から西へ二十町を限つて、プラットホームを建てるのだから本線と豫備線とは丁度崖下で交叉するのだ」と村はづれのシチウ屋て彌太郎が話して居りました。此のあたり目に見るもの、音に聞くもの總てが私等の幼い胸に深く印象した昔の面影を失つて了つて居ります。曲りから曲り迄は定規をあてた樣に新道が出來上りました。御維新前までは殿樣の御行列に、村の人が總出になつて土下座をしたと云ふ松並木の舊道はもう跡形もなく、斫り倒された老松の幹は輪切にされて、どす黑い脂を吹いてあちらこちらに散らばつて居

ます、烈しい殘暑の日に照り返された草のいきれと、鼻を操る様な赤土の匂が一所になつて、いろんな思ひにつかれた頭を刺戟するやう。折々地響がしてドゥウと海嘯でも寄せる様な音は崖の土が雪崩れ落ちるのです、その崩れた土はレールを滑る小形のトロックでひつきりなしに搬ばれて、あちらの畠、こちらの田圃を段々に埋めて行きます。鶴嘴を振り上る男鬪匙を持つ女は丁度勞働蟻のやうにセッセと自分の受持場所を定めて、にぢみ出る汗を拭き／＼働いて居るのです。つい目の前、松の切株の側に人夫が一塊になつて休息して居ります。

ぞんざいに被た白い襯衣、それも汗と垢で赤茶けて、いつ水をくゞつたものやら、骨組の頑丈な、鬼をもひしぎそうな男がフケだらけの毛を伸ばし、いかにもうまさうに莨をパッパと吹かして居ります、頬骨が高くて顎の短い、どこか意地の悪さうなのが目ばかりきよと／＼さして、何だか愚にも付かぬ事を喋舌つてはみんなが笑ふのを嬉しさうに見て居ります。

村ではこの土工夫を權藏組と云つて「そら權藏が來ました」と云へば赤ん坊も泣き止む位に恐ろしがつて居るのです。

あゝこの權藏組、この權藏組こそどれ丈靜かな、天國の様な村の平和を掻き亂した毒蟲でせうか。雨の日も風の日も穩かに自分の仕事を樂みとした質朴な村の人は何のいさくさもなく、三百年の長い日を親も子も、信仰の深い愛宕様をうぶ神にして、夕日に中海の沖つ浪を見る園原の丘を墓場にしながら美しい、天眞な生涯を送つて來ましたものを。

三百軒にも足らぬ藁屋根の間にはあやしげな飲食店や宿屋が新築されてそこに獸の様な權藏組が入り込んで來てからは、晝となく夜となく、卑しい三味線の調子や浮かれただみ聲が山に響いて來る此頃ではどうして穩かな夢も結ばれませう。あゝまだ夫れ處じやない、鬼のやうな權藏が毒牙にかゝつて口惜し涙に暮れたおしん様親子の様なのは悲慘と云ふも誠に愚かであります。房藏様のお嫁様はどうしてあんな淺間しい心になられたのか權藏の一人と何所か遠方へ逃げたのだそうです。

あゝ明日、明後日、一年、五年、私の村はこれからどうなつて行くのでせう。

村の人は只「鐵道がつくのだ」と譯もなく浮き立つて金の儲かる話をしながらフラ／＼と遊んで居るのです。私は様々の妄想にふけつて叔父様のうちの門にぼんやり立つて居りますと「先生」とだしぬけに云つて私の顔をきよと／＼と見ながら一人の生徒が丁寧にお辭儀をして行きました。

鏡花の「風流線」は此れを舞臺にした、而かも斯の様な事實は今猶ほ山間の僻地に實現せられつゝある、實地を能く知らなけりや、此れまでには書けないだらう（評）

野鼠

磐城　川上靜子

「ちよいと來て御覽、廿日鼠が……」

九月のある朝のこと、私が水を汲んでゐると、小さな妹が頻りに斯ういうて私を呼んでをる。私は思はず駈け出していつて「怎うしたの」と聞くと、妹は默つて「靜に靜に」と手をあげて制して見せる。音をたてないやうにそつと妹の後から覗いて見ると、二寸ばかりのまるまると肥つた廿日鼠が五六疋、列をなしてぐるぐると萩の根株を廻つてをる。皆一樣に眞白い毛で蔽はれて、可愛らしい口のまわりには銀色の細い口髯を、仔細らしく生やしてゐる。

默つて見てゐると、一番先きに立つた、割合に大きなのがぴよッと止まつた。あとの鼠も一樣にとまつた。途端に他の株の影から、同じやうな色の、同じやうな大きさの鼠が、ぴよッくり首を出した。賢しげな目できよろきよろと四邊を眺めて居たが、やがて株の影からそろ〳〵と全身を出して、他の物と同樣、萩の根を廻り始めた。斯くする事五六回で鼠の數は十疋近くになつた。涼しい朝風が絕えずそよ〳〵と稻田を渡つて、萩の花がほろりほろりと地に散る。

「何してるんでせう姉さん」と妹が怎う問くので、

「本當に何してるんでせうね」と私は答へた。實際何の意味か薩張り解らない。妹は

「嚇かして見ませうか」と萩の花びらを拾つて、投げてやつたが、鼠は恐れる氣色もなく、依然としてさきの運動を續けてをる。

やがて霽れやかな朝日が、土藏の壁一ぱいにさして、野も畑も目醒めるやうに輝いた。宵のうちからしつとりと草に置いた露は、涼しい風が吹く每に、ころりころりと地に落ちて、やがて消えて了ふ。不圖鼠の方を見るといつしか數が減つて、その運動もさきのやうに活潑ではなくなつた。そうしてゐる內に、鼠は萩の根を廻るのをやめて、みんな土藏の石垣の方へ、ぞろぞろといつて終末つた。

あくる朝もそのあくる朝も、同じやうな事を繰り返して變らなかつた。そうしてをる內に、秋はだん〳〵更けて渡り鳥も大方何處へかいつて終末ひ、萩の花も全く散つて、朝な〳〵置く霜白く、夜はむさゝびの鳴く聲も聞えるやうになつた。あるお天氣のいゝ、然しうすら寒い朝であつた。妹が「姉さん姉さん」とけたゝましい聲で呼ぶので「何アに」と聞いて見ると、

「あの廿日鼠が死んでゝよ」といつた。

見るとよく肥えふとつた廿日鼠が一疋、長い尻毛をちぢめてころりと萩の根株に死んでをつた。賢しげに光つた目も今は全く閉ぢて、銀色の口髯も何となくつやを失なつたやうに見える。あゝこの可愛らしい廿日鼠何故死んだのだろう。寒さにこゞえたのだろうか、又はたれかに殺されたのか、――さるにても何の爲に今まで大勢の廿日鼠が每朝、萩の根をめぐつたのだろう。考へても考へても解らない。たゞ謎のやうな心地がす

る。

廿日鼠はその次の朝から全く土藏の後にその影を現はさなかつた。

遂に何の爲に萩の根株が邇つたのか分らずじまひてあるが、其處に又おもしろみもあつて、此文章の興に乘つて書いてあるだけ、一度讀んだものは此興を忘れかねる（評）

朝草刈　岩代　泉花枝

簔きて頬冠して鎌を持て家を出る。東の方が少し明るくなつた許りだ。冷々と吹く朝風は輕く頰をなでゝ心地よい。山の裾の方から、初は帶のやうな霧がだん〳〵廣がつて、森を包み家を包み、田の面に廣がつて、スーツ〳〵と流れる。四方の風物は皆包まれて了つた。三町許り行くと大川端、夫さへ霧に蔽はれて見えない。唯、重苦しい睡いやうな水音が、呻くやうにきこえる。負繩と簔とを置いて、鎌を入れた。しつとりと露に濡れた雜草は、サラリ〳〵と心地よく倒れる。冷々した水晶のやうな露の雫が、左の小手を中心として面白く零れる。山手の方で美い聲の唄がきこえる。ふと頭をあげて見ると、霧は大方上つた。東の空は稍黄橙色になつた、其亦周圍は紫がかつてきた。何所かて鳥の鳴く聲がする。雀が一二羽東の方へ飛び出した。もう日の出だなと思つてる間に、空の色は刻々光輝を増してくる。僅かに殘つた河面の霧がゆら〳〵と上つてくる。青葉の山、林森なども眼をさましたやうに段々明瞭してくる。と躍々生氣に充ちた東の空は、一刻毎に色が濃くなる、光が強くなる。鳥が五六羽亂れてとぶ。ちぎれて浮ぶ雲の色も彩に美しくなつた。譬へば朝日を迎ふる化粧を凝したやうに。と圓い圓い眞圓い盆のやうな頭がチラリと出る。『出た!』と見る間もなく、幾百千の金箭銀矢が閃き渡つて、ぱツと明るくなる。四圍の山河草木も一時に起上つたやうに生氣勃々として來た。田の稻葉には千顆萬粒の玉を綴つたやうに露が輝く、水は金波銀波を漂はす。何といふ美しき景色てあらう、と霎時は鎌を手にしたまゝ、此偉大な自然の美景に恍惚として自己を忘れたのてあつた。靜寂幽雅な夜は此朝の醒覺によつて、今日一日の活動塲裡に入らうとするのだと思ふと、壯快な氣が總身に滿ちて來て、得も言へぬ愉快を感じ、思はず拳を握り占むるのてあつた。おゝ!それよ、今は草刈の身だ、今一刈だと鎌とり直した。露がこぼれる。草は切れる。一束!二束!!三四束!!!

幽かに馬の嘶く聲が朝風に勇ましく聞こえる。

日の出を叙するあたり、筆力最も鋭い、餘りの壯大て、大抵の人は眩惑して了うのだ、おちついて是だけ力ある日の出の記事はめづらしい（評）

何の瓜　靜子

私の居間のすぐ前の塀のほとりに瓜の蔓が二本生へて居ます、前の家から苗を貰つて植えたのださうてす。生々とした色合、仲のよさそうな姿が望多き未來を夢みてゞも居るやうに大變面白くあります。

何と云ふ瓜だらうかと名をきゝますと。自然に生へたのですから何ともわかりませんとの事。早く大きくなつて花が咲いて實が出來るのを樂しみませうと、云て笑つた。

大變大きくなつた。一雨ごとに蔓が伸る、早く枝をしてやらなければいけないと思つて居るまに。よくも思ひついて塀の上の忍返にのぼりつひて蕾が出來た。蕾は五寸ばかり枝を出して其さきに寶珠玉のやうな形の小さいのがあるのです。どんな花が咲くだらうかと樂しんで明る日早く起きて見ると、目のさめるやうな黄色い花、朝顔位の大きさて平たい花てす。そして花は日中もたゆまず咲いて。夕方になつて凋み又明る日も咲いた。



佳作

栃木　角山やす子

毎年人がふしぎがる程よく作るのに今年は萬年青に一心になつて、皆な一向氣をつけなかつた夕顔に漸く此頃小さい蕾が見えだした。

垣の瓜はずん〱大きくなつて蔓をのばし枝を出して忍返の半分も占領した、黄色い花はたえず塀の上にひら〱して居る。

夕顔の蕾もだん〱大きくなつて、あすの晩はから咲そうだ姉さんと相談して、瓜の黄と夕顔の白とがつゞいて咲けばこゝの塀が綺麗だからと云つて二人して大きな夕顔鉢を、瓜の葉の青く茂つた下へ置いた。

はたして今晩は夕顔が咲いた、なげなしに作つた[illegible]台には大きい。すき通るやうな白い花瓣に、つゆさへふくんで何とも云へぬ氣高さてある。

白い花の咲いた頃は、黄色い花はもう朝のやうな勇氣になく、異畫をすごした苦しさが花瓣に表はれて淋しげにひら〳〵として居る。

黄色い花は毎日たくさん咲いて居るがあだ花が多くて實るのはごくわずかしかない、上の方にはまだあるらしいが下の方には三つ四つしかない。どんな瓜だらうかと、よく見るとほそ長くて青くて黒みを帶びてゐる經驗のない私には一向何やらわからないので、皆にきくと知らない人が多い、或るもの知りの婆さんが云ふには。是はへちまです、之がみのつてから水にひやかして皮を取ればちようど海綿のあらくしたやうな白いものです、よくたわしに用ひますがと云ふ。あのたわしてすかあれならばよくしつて居ますのに。花も木も實もしらないものですから、蔓があればやはり瓜のやうに思つて居ましたと大笑ひ、漸くへちまとわかつた。長細いへちまはだん〳〵と大く長くなり、花はたえず咲いて垣は非常にきれいだ。

また婆さんが云ふには。此へちまの成子を漬ますと瓜の漬たのとかわりません。あれを坊ちやんに。何とも知さないで食させておあげなされば、大きくお成なさつて銕遺をなさらんとのことてすよと弟をさして云てゐる、お母樣はよい事をきゝましたね、して見ませうかと仰しやる、ほんとにしておゝきなさいませ毒にならん事てすからと云ふ、ほほゝと皆な笑ひました。

夕顔の方も大分榮えて葉もふえ蕾がまして、毎晩さくやうになつた、姉さんは白と黄と一所に咲けば綺麗だしまた妙だから夫婦垣とつけるのにと仰しやる、私はやはりかわる〳〵咲いた方が何時も垣が賑かだから、この方がよろしい、夫婦垣とつけて黄色い方を雄花とし白い方を雌花としたら雌花の方が後から清く咲いて何だか面白味があるてせうと云ふ。

とにかく雄花の方はのん氣なものだ花は小さくても實は大きくて、枝も折れそうにぶらんと板にそつて居る、白い花は夕つゆに潤んで淸く咲きあしたの露にはもう凋んで居る、實はちいさくて見れば見る程あはれてす。

恐ひ邪無し（評）

あき

高知縣　穗岐山はる

▲樂しきかな、山に住めば山の幸あり、栗拾ひ。▲石垣に蛻殘して、穴に入る蛇、禪定覺束な。▲へろ〳〵と力なき羽づかひ、秋の蝶、散りて來しかと、思ひけり。▲千草に埋れし、露の小家の窗明り、何語る。▲菊日和、人懷しうなりにけり、老人のみならじ。▲枯枝に止りける、それならねど、雨に鳴く一羽鴉や、秋の暮。▲兒多ければ、着不足にて、飯櫃の底かき廻す夜寒。▲刈田の中に藁屋點在して、巡れる水に美しう柿沈みけり。▲こつ〳〵と、もの云はず、專念に石刻む人見て、寒き日なり。▲火吹竹に、いく度息入れけむ、芋煮ゆる間を、名月の上りけり。▲田舍町のはづれ、秣積める馬車の荷、秋の空に高し。▲秋晴、お寺

に詣てつゝ本堂の縁に、和ぎたる日當りて、蜻蛉の、眠れる態なり。▲獨離るゝ柱の、我が身も共に、消えて行くかと、秋の夕の色迫る。▲時節後れなりとて、生き殘れば詮なかる可し、蚊一つに口數多き女かな。▲煙草畑に、秋暑き夕日さす。▲秋の蟬、ありたけの聲しぼり出て鳴くらし。▲裏町に、戸の一つ倒れし音して、秋は來にけり。▲家の前、後、右も左も雜木山にて、只秋風操しう暮れて行く。▲野の穗薄、風に靡きて、空飛ぶ雲の忙しげなる。▲秋風立ちそめて抽斗の具合直りし、簞笥うれし。▲何處を當とも、やれ牛に踏まれな、徒らに蝶の飛ぶ、秋の風。▲秋暑き午の刻、野中の松蔭に休らへば、風あり、女郎花。▲秋雨寒き日、玻璃窓越しに、濤怒る海見て暮らす、燈臺守を思ふ。▲春や昔、秋の山に、老いては鶯も小鳥の群れよ。▲壺の月、壺の碪、松風寒き日なり鳬。▲秋晴の、山の池、うら枯れの萍さびしく、とんぼ飛ぶ。▲殘んの暑さ、柿のわくら葉、美しゝ。▲燭乘れば、影法師動く夜長、さびしゝ友ほしゝ。▲初秋の、空高く飛ぶ鳥は何。▲嚔一つに、風邪ひくなと、勿體なき親の心、羽織着る秋の夕。▲孤兒の、裾短かなる衣の、綻びを吹く秋の風。▲露けさの、窓に近く、琵琶とめて、虫に聽き入る法師痩せたり。▲星合の夕となりぬ、色紙ひらめく若竹に、まじれるは、何を願ひの母の狀。▲蕎麥の花、眞白なり、三日月は何時落ちけむ。▲茸狩りの蹤さ、迷ひて草深き徑行くに、脛痒

ゆし。▲秋の山、大氣は水の如く、都の鐘もきこえけり。▲老いたりと云はるゝを、こよなう忌む、ひげ男、陽關を唄ひて新酒を强ふ。▲美しう掃きたる庭、簾の波に、桐一葉浮ぶ。▲川上の春を尋ねて行きける鮎、落ち行く先も同じ秋。▲枝の柿、熟したるに、心の猿を起しけり。▲古莚、生干の炭團ならびたり、夕日斜めに、秋風吹く。▲子無きが故か、秋の暮れ、言葉少き女夫哉。▲稻莚、うら枯れも目出度き色なり。▲人や來る、名月の、火ともし頃となりにけり。▲草相撲、痩せたるが二人對しけり、へた／＼と尻餅を搗く、おかし。▲雨の月、和歌詠み得しぞ、中々に恨みなる。▲爪琴に心曳かれて、垣間見すれば、匂ふ菊の花。▲藪とは、誰がさがなき口の端に始まりけむ、秋風吹く頃、なにがしの醫師が門に、落首かゝれける。▲稻も刈られけるに、和睦せんと、口まめなる雀、樣々に言葉かまゆれど、主命ある迄は、動ぜぬ案山子、賴母し。▲秋の風、屑買ひの吹かれ行く。▲秋の暮、形見の子故笑ふ日もありと云ふ女、哀れ。▲黃菊白菊相合傘して立てる態、姉妹の如し。▲秋風や、佗し、古琴の琴柱も失せて。▲豐年なれば、祝ごと多し、嫁入の荷に着いて行く蝗。▲年寄れば寄るほど、長き夜なりと託つ媼。▲朝寒の顏に、殘んの月白し。▲朝寒むや、湯をつげば、茶碗鳴る。▲秋晴れの、棕梠の葉そよぐ丘の家、夕日に赤し。▲よき秋風、能舞臺に、錦干したり。▲黃白、咲き亂れたる菊の花、案内する

園丁、あるじ顔なり。▲文机や、障子の破れより、秋の聲きく。▲小逖の蔭を、鵙落しの小僧二人、ひそめき乍ら行く。▲稲妻に、目ふさぎて、心見られし男。▲草の月、啼かで飛ぶ虫もありけり。▲鳥威しにも、世の中の智恵さまざま、思はるゝ。▲秋の空、遠方に白き氣球の上りけり。

一種の文體、素より俳句の趣味を以て成れるもの、俳句より出でゝ俳句に優るものが多い（評）

雛芥子

兵庫縣　石神純子

「妙貞、すみ子さんが入らしつたよ！」と優しく庵主に呼ばれて、友は始めて心づいたやうに振返つた。

妙貞さんはけしや、あふひや、美しい草花が、咲き亂れた背戸の花ばたけの中の、車井の綱に縋つて、閼伽桶を側に水は汲まんともせて、うつとりと、私の近づいたのも知らずに、何やら物思ひに沈んでゐられたのである。

「あらまあ」と淋しく笑顔をするまもなく馳せよつて、私は指環の光る手を、珠數もつ友の手につないだ。

「ほんとうによくきて下すつたのねえ」と友は活氣のない、沈んだ面にうれしい色を見せた。

私は詫びるやうに「大へん御無沙汰して……、貴女怒つたのぢやなくて？」

「まあ怒るの何のつて、私はもう、貴孃は色々お忙しいおからだですから、お目に掛られない事と思つて居りました」友は例のへだてなく打解けて語つたが、頓に言葉をあらためて、恭しく

「明後日は愈々お輿入れださうでムいますね、お芽出度うムいますわ」

低う頭をさへ下げられて、私はどぎまぎし乍ら「まあいや、そんなに四角ばつて……」ハッと紅くなつた顏を、急いで袂に埋めたが、其刹那、ふとある考へが浮んて、私は頸垂れた。

いつたい友と私とは同じ數へ年の十八である、そして小さい時から非常の仲よして、一緒に學校へも通ひ、まま事もして遊んだ、實にや雨の日風の朝、鼠染の質素な衣に頭を剃つた友の姿と、メリンス友仙の私の肩とは並ばぬ事はなかつた、が境遇はまるて異つてゐた、友は孤兒である、襁褓の内からこの庵主に引とられて育てられたのである、私は又夫に引かへて、年よつて後まうけた一人子といふので、兩親の寵愛は一通りでない、自分ながら勿體ない程である、て私は子供心にも、始終友の身の上を氣の毒に思つて、いろ色の物を分つたり慰めたりした、がちち母を失つた悲しさはどれだけといふことは想像てきなかつた。

友は感心にも、この親しい永い間のまじわりに、一度も自分の運命に關して愚痴らしい、不足らしい口吻をもらさなかつたが、ただ一度、無邪氣にかう云つた言葉が深くも自分の胸を刺した。

「私ね、昨夜貴孃見たいに紅いリボンつけて歩いた夢をみてよ」話し畢つてさも可笑さうに笑つた、私も笑

つた、が程へて私はつくづく考へて泣いた、もしも私が、位置をかへて友であつたらどうであらう、友が私てこんな裝ひをしたら果してどんな感じがするであらうと、夫から私は父母の與へる美衣美食を、妙に、何となく辭退するやうになつた、或時などはいやがつて紅入りの振袖をうつてしまつて呉れとねがつた事もあつた。

月日は流れ〳〵てお下げは桃割となり、友仙は矢絣とかはつた、私はなぜか今以て華美な扮裝をする度に、友を憚られて、心弱くも訪ひ得なかつた、それが今日は高々と島田に結つて、うすく化粧さへして來たのであるから、一入氣が咎めて、肩がすぼまるのである。

私がこんな物思ひに耽つて居るまに、友はくる〳〵と水を汲み終つて、桶を提げながら、「如何なすつたの、大へん鬱ぎこんで？」と眉をよせた。

私は周章て、きまり惡く笑つた。

「部屋へゆきませう」と友は歩き出した、二人は子供の時のやうに並んで花園の徑を辿るのである。

「大さうお髮がお似合ひなすつてねえ」、まともからつくづくと見入つて、たたへた友の面には一點の曇りもなかつた、私は自分の淺い心から、濟い廣い、友の胸を推し量つたのを恥ぢた。

「ええ何ですか、皆さんがさう仰しやつて顏を覗くので困つてね」、私は身と心の羞らひに再び頬をそめた。

「ほんとうに眞實に御両親樣は、御満足てゐらつしやいませうねえ」友は珍らしくも心の底から出る樣な聲てしめやかにいつて、深い〳〵溜息をついた、私が答へやうとしてチラと見上げた顏は淋しい寂しい、愁ひの影に掩はれてゐた、私は返す言葉もなく俯向いた、ハラリと雛芥子の花が一輪、風もないのに友の袖に散つた。

斯うした友情もあるであらうと思ふと、そゞろに人世の深さ、ひろさ、縺りの多さを感じられる（評）

塵芥車

群馬縣　森下花子

こんな日には、よく嫌なあの塵芥車が來るもんだ、あの男の冷たい眼と、あの呻く聲と……あゝどうして彼樣な物が來るのだらう、何故くらい夜にばかり歩かないのだらう、眞晝の街の活き活きした中を、あの一臺の塵芥車が力なげに通り過ぎると、どんなに晝の美觀が損はれるか知れない、世間が寂として寢靜まつた頃そつと來て、塵箱ぐるみそつと運んでゆけばいゝのに：：けれども若し私が目が醒めて、ごろ〳〵と力のないあの轍の音がだん〳〵近いてくるのを聞く樣なことが――いやなこと！思つてもゾッとする、やつぱり人の多く居る今頃がいゝ、自分さへ隠れて居れば濟むのだもの。もう二丁目のあたりへ來てるかも知れない、油屋から小間物屋其次がお隣で、我家！來ればもう直ぐだと思ひながら、何となく待遠いやうな氣がして、ソッと店の帳面を積んだ陰から顏を出すと、いつの間にか小間物屋の店先に、ペンキで塵芥車と太く書いた其車

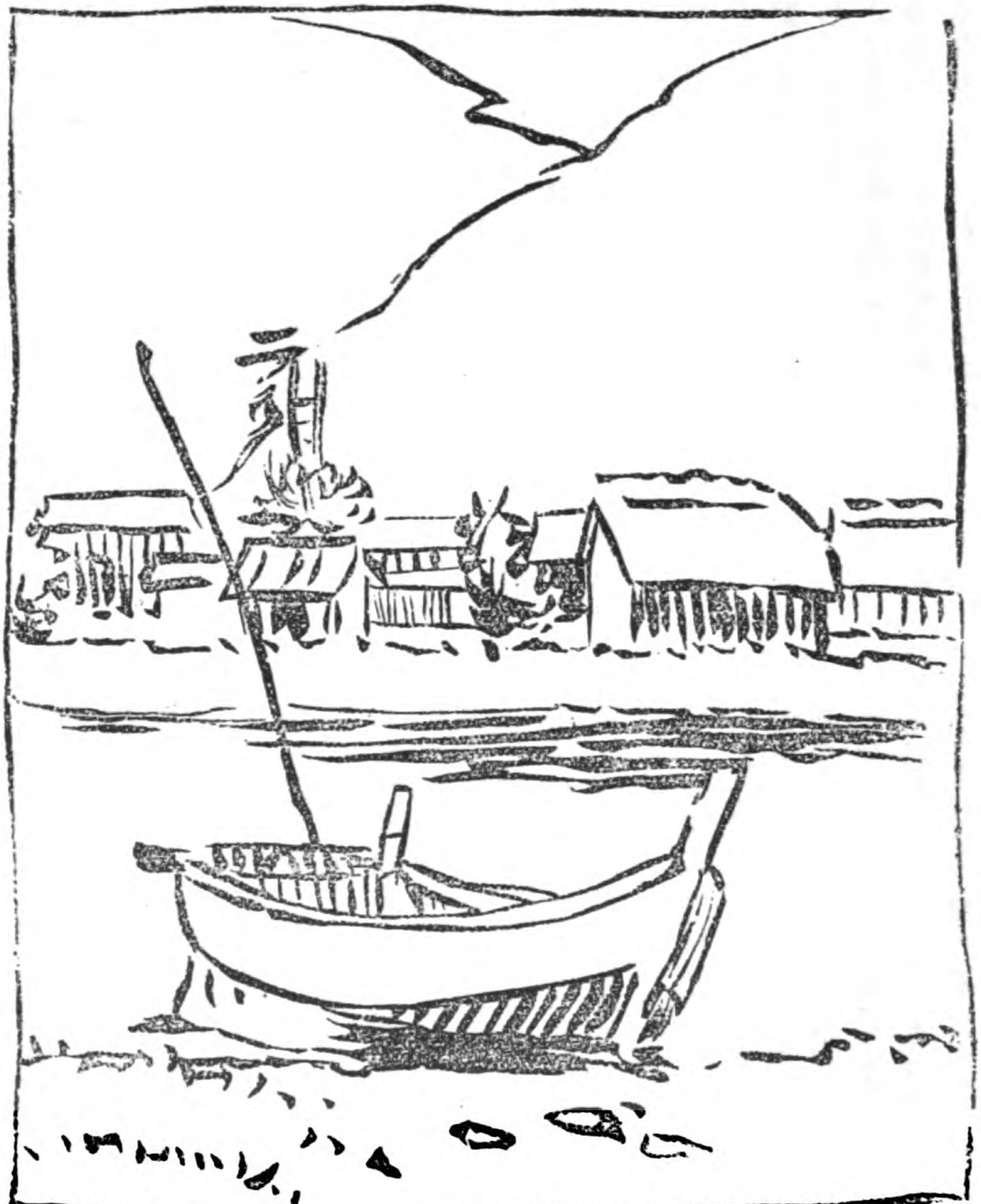
が留つてゐる。

とうとう來てしまつたと思つて、ジッと見てゐると、車の陰て見えなかつた男が、塵箱を傾けて塵芥を引出し初めた、小間物店のだから色々入つてゐる、紅白のざんざら元結の屑や、石鹸の箱のこはれだの、香水の瓶だのが多い、それを何と思つてか一々よく見てゐるらしく、箱一つ空けるのに餘程か〻る、と小間物屋から女の子が出て來た、誰だらうと思ふと後姿てよく解らないがお仙樣の樣だ、派出な中形の浴衣に緋鹿子のしごきをだらりと結び下げてゐる、ほんとに氣が知れない子だ、少女十七恥らひといふのはないのかしら、あんな塵芥取りの男なぞと何をいつてるのだらう、よく恐ろしくないこと、こんなことを私は思つた、そしてお仙樣の高調子な笑ひ聲と、笑ふ時いやらしい品をする身振りとを苦々しく思はずにはゐられなかつた。

と、お仙樣が家へ入るとまた出てきた、手には古いリボンの樣なものをいく筋も持てゐて、塵箱を片付けてゐる男にやりながら、私の顏を見付たらしく、花ちやん！と尻上りに呼びかける、私はハッとした、けれどももう遲かつた、仕方なしに頷いてみせると、男もリボンを持つたま〻私しを見つめてゐた、私は實にお仙樣が憎かつた、あの子が呼びかけさへしなければ、私は道行く人にも顧みられず、更にあの怪物のやうな襤褸の男に私といふものを覺えられずにゐたものを、いやだいやだ！あんなにジッと私の顏を見詰めて〻、何か考へたのぢやないかしら、あの男の暗い胸の中に私といふもの〻影が、いつまでも深く印象されたらどうせう、あの樣な感覺の鈍つた痛々しい老年に近い男の胸は、多くの物體を映し得ない代りに、ある物の影は强く映るといふやうなことを嘗て聞いてる、我家の塵箱を傾けながら、此後はいつも店先から奥を覗いて見はしないだらうか、私は奥へ逃げ込んでからも、あの骨に浸るやうな白眼の光を、忘れ兼ねては寒さを感じた、呪はれたる少女！私はこのやうな恐ろしいことを頻りに考へ初めた。そしてか弱い少女といふことを强く感じずにはゐられなかつた。

祭りの日の浮かれた人中をも、砂利の燒ける夏の日中にも、木枯の吹く冬の街にも、あの塵箱から引ずり出した樣な帽子の陰に、あの伸びた髮の毛と垢と髯との中からあの冷笑する樣な眼を光らせて。男は都會の塵埃を運んてゆく。都會の老廢物は運び去られる、運びゆく中にも已に新しい廢物は生じてくる、絶間のない時の作る限りなき塵芥！あの男は毎日何を思ひ何を怖れるだらうか、都會の生活が生きたる塵芥を止む時なく作つていくのを、また彼男自らが已にその塵芥てあるのを、自ら覺り自ら怖れることはないだらうか、それからあの塵芥車を捨場に引き着けて、がさ〳〵と覆へす時に、塵埃に交つた口紅のついた割箸や、艶かしい水茎の跡ある紙片やを眺めて、都會の廢物をのみ運ぶ身を儚なくは思はないだらうか、そして若い女のことや賑は

う祭禮のことや、あらゆる活動してる都會に身を入れたくは思ひはすまいか。私はやゝ久しく物思に沈んでゐた、眼を上げると東の空に雲の峰がいくつも／＼聳えてゐる、あの下に野原があつて、其晝顔の咲く道をあの男は塵芥車を引いて行くのだらう何だかあの呻き聲が聞えるやうに思へてならない。私の胸にはあの白眼の光が、



佳作 川邊

横濱 安川久子

まだ冷たく蟠まつてゐる。

才筆だ、恐るべき才筆であると思ふが、筆が餘り自由すぎる、今少し不自由に、思ふ事がありながら何うしても言へないと悶えて居るやうな書きぶりの方がなつかしい、餘り話上手が却つて眞の物のあはれを逸するやうに(評)

青き夜

伊勢國 伊藤美山

房さんが亡くなられてから丁度三日目の晩です、月がさえて風が身に泌む夜半、何うしても眠られぬので寢衣のまゝ窓にもたれて、只一人

深い〳〵思ひに沈みました。

庭の榎の葉が雨の樣にばら〳〵と落ちて、樹の影は地にしみ付く樣に黒く、星は青く底光りがして、夫れは〳〵眞實に淋しい夜です。

房さんと妾は從姉妹でした、けれども、實姉よりも一入親しくして、小學校から今の女學校へ通學する樣になるまで成蹟は房さんの方が遙か上であつたけれど、同じ樣に進んで、一度だつていさかひなんかした事はありませんでした、あんなに交情の好かつた房さんが、何故妾し獨りを殘して淋しい處へ去つたのかと思ふと、私は何うしても泣かずには居られません、何年經たつても二度と會へないのですもの。

思へば既う一年になります、秋風が立ち初めて、風が肌に冷たくなる頃、房さんは風邪の氣味だと云つて學校を休まれたので、妾しは一人通學するのが淋しくて仕樣がありません、明日全快するか、明後日かと幾度びか見舞にも行きました、然して房さんが床に就いてから丁度二週間目、妾しは學校から歸ると母が「房さんは肺病らしいと云ふから餘り行かない方がよいよ」と話されたので妾しは吃驚して「まあ、本當」と云つた限り泣き伏してしまいました。

肺病は不治の病とは妾しも兼々聞いて居りましたが、房さんが夫れに今かゝらうとは實際夢にも思ひませんでした、嗚呼不幸な女……と私しは泌み〳〵と友の身の上に同情しました。

私しは其後房さんに會ひたかつたけれど、何を申すにも傳染の恐れがありますので、母は少しも行く事を許しません、只影ながら憐れな友の姿を見たいと、房さんの家の廻りを幾度びか歩みました。

其翌年、即ち此年です、今から一ヶ月ばかり以前、餘程涼しくなつた頃です、房さんは非常に快くなつたから一度見舞に行つて見よと云ふ母の言葉に、妾しは躍り上る程嬉しく、直ぐ其日の夕ぐれ見舞ひにと房さんの家へ行きました。

房さんのお母さん、即ち私しの叔母さんと二人で房さんの寢室へ行くと、折柄房さんは眠つて居ますので二人が默つて御目覺を待つて居りました。

立派に肥へて居た顏の肉が落ちて、櫻色であつた頰は青白う美しい評判の房さんは見違へる程痩つて居りました、暫くすると房さんは落ちくぼんだ目を開きましたので妾しは「房さん妾しですよ、靜ですよ」「まあ、靜さんなの、能く御出て下さつたのねえ」「御加減は大變好いつてね、私し怎麼に嬉しいでせう、妾し度々見舞ひに上る筈でしたけれど……」「有がたう、私し既う貴孃と逢へないかと思つて居ましたわ」「夫れても好くなつて結構ねえ、貴孃全快したら私しどんなに嬉しいでせう、既う大丈夫でせうね、房さん」、「既う大丈夫だと私し思ひますよ、今日庭を少し散歩しましたわ」「まあ嬉しい、早く全快つて下さいねえ、私し神に祈つて居ます」と互に辭を交へましたが、餘り長話は病

人に良くないと思つたので又來る約束をして歸りました。

其時妾しの顔を凝乎と見て一寸笑つた房さんの顔、是れが妾しが房さんを見た最後でした。

二人で全快の話をしたのも夢でした、妾しは房さんを見舞つてから丁度二週間目、房さんの病ひは急に變つたと云つて母が私しに語りました、其翌日房さんは既う此世の人で無かつたのです。

房さんが亡くなられた其翌日、房さんのお母さんが私しの家へ來て房さんの臨終を泣いて話しました、「靜さんによろしく云つて」と幽かに云つたつて、房さんは如何な可憐な女でせう、妾しを殘して遂に遠い〱處へ行つて終いました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

庭の榎の根の處に房さんが立つて居つて私しを招いて居る樣に見えます、月は青く照らして怖ろしい程物凄く、星さへ時々飛ぶのです、既う餘程夜が更けたのでせう、私しは此まゝ夜を明かさうと思ひます。

おちついた文、情の文、女の文(評)

星祭

本所　秋山欣子

「さあ、もう皆樣御揃かえ、こちらはもう出來ましたよ」お二階でお祖母樣の聲がする、「おや皆樣被入いましな、さ樂ちやんも、」と私は、目の覺める樣にお粧りした七つの樂ちやんを抱きあげて梯子段を登る、後へ續いたのは、糸ちやん、春ちやん、百合ちやん、光ちやん、雪ちやん、澄ちやん、皆同い年の可愛い子です、お祖母樣のお指揮で、新らしい香のする十二疊のお座敷へ樂ちやんを眞中に、床を後ろにズラリと並んだ樣子はまるで繪卷物を擴げた樣です、皆一樣に白い顔して、今宵祭る星の樣な瞳に、にこ〱笑つてますが、獨り樂ちやん斗りは――。

薄月の橡には、美しい覆をした卓が据えられて、其上の大花瓶に、夏桔梗、夏萩、夏女郎花、小車草、百合紫苑、蓬、の七草が手際よく活かつて、手摺のつい先には七夕竹が目立つて鮮やかに、吊された寶船や、網や、鬼灯やが、青笹の間にチラ〱と搖めき、爽やかな夕風に吹流しはなびいて居ます。

お祖母樣の星のお話が濟むと、皆てんでに願の糸を取つて、星の光で針へ通すといつて大騷ぎです、針仕事が上手になれるとやらで。

「雪ちやん通つて？」「私まだよ」「嬉しい！私通つたわ」「あらいやだ、私折角通つたのに澄ちやんが押すんですもの、ぬけちやつたわ」「そう御免なさいね、私一生懸命通さうと思つてもがいたもんだから、」つて賑やかな事。

「姉樣、私には駄目ね、」つて樂ちやんが淋しさうに笑ふ私はもう可愛想で〱お祖母樣と目を見合つて默つてますと、「星つてどんなものかしら、」と首を傾げて、「いゝわ、いまに父樣に願つて東京から買つてきて戴

かうや、ねえ姉樣、」と甘つたれた樣にいふ。
「あゝ、」と僅に答はしたものゝ、今私の喉には、大きな何かの塊が出來て、膝にした樂ちやんのユラリと垂れた黑髮へは、留め度なく湯の樣な涙が落ちるのでした。
外はもう薄暗く、高澄んだ空も、やがて茫と煙つて、中に一筋白々と銀河の仄き露けく、薄れゆく末には、夢路より脱け出るかの樣な月波の翠微。
暫すると、淡泊と夕化粧遊ばした母樣もおでましになる、琴竹の奏合も濟んで、金地銀地の舞扇に、星影が幽かに輝り初める。星祭る夜の常例で灯はつけないので、薄明りの廊下を傳つて、朱塗のお盃へ堆く、枝豆やら、新芋やら、水菓子やらが盛られてくる、皆はもう、うつとりとした樣子てした。
「さ、皆樣御遠慮なく、樂ちやんも一所にお上り、」と母樣がしとやかに被仰る、「私？いらないの、皆樣、澤山召上れな、其中お琴をしますわね、」と斗り、探り手に柱を直す、「お姑樣、佳代樣いかゞ、枝豆が美味しいんですよ、」と母樣、「わたしあ喰べたうない、」とお祖母樣私もさう、母樣もさうと見えて凝と目を閉ぢて、柱へ脊を押しあてゝいらつしやる。
「磯邊の松に葉隱れて——、」と澄み透るこゑ、樂ちやんは、樂ちやんのみの領へ除ら踏み入つた。片頰には微笑さへ浮べて。皆は無邪氣に書の口を動かし乍ら、聞き惚れてる樣子。
しつとりと露を帶びだ風がさら〳〵と七夕竹を鳴らして、お祖母樣の御目鏡がふうつと曇る、母樣は、「塵が這入つて、」つてしきりと目をこすつて被居る、私は、キンの糸の音と、樂ちやんの細い干がゝつた聲とが、五體をピン〳〵強く刺す樣に覺えて、ふいと椽へ出ました。
星は煌々と輝いて、幸に包まれた空の一方から、梶の葉に以た雲の一片がスーと降りてくる、お星樣を乘せ參らした船かしらん。
「まあ綺麗な雲!!、樂ちやん御ら……」いひかけて危ふく口をつぐんだ。
「覺めて眞如の明らけき——、」と樂ちやんは夢中、あゝ、眞に靜寂な夜てすこと!!!こんな晩には地上の花の凡てが天上の花を慕つて咲くといふ、人の世の花たる少女が膸のみは、なぜ幸に輝やかないてせう?!

凡て用意のある書き方て、所謂書き流しとは違ふ、品格のある文章だ、けれども生氣が乏しい（評）

妹の墓

鹿兒島　みゆき

綠濃い檜葉をぬいて咲きてた菖蒲の花を四五本切つてけふも露さんの處へとゆく。石に鐫つたか字い苔に鎖された古墳累々として連り、傾いたのもあれば横になつたのもある。雜草が處せまき迄生ひしげつて居る細道を通つて、露さんのお墓の前にてた。何とも云へず只寂しい。

紅いきじの尾のさゝれた花筒へ持つてきた紫い菖蒲をさし交ぜてひざまづいた。

時々物をおそふやうな松風の音が聞える許り、あとは寂然として居る。

堪へかねて目を閉ぢると、現在血を分けた妹ながら此世には惜しい程ろう／＼しいあの顔あの姿が眼前にちらつく。そして姉様あのねといふ銀鈴の様な聲がきこえる様に思はれる、こんなに早く別れようと夢にでも知つたならば……涙がはら／＼と零れる。

何時もお部屋をきちんとして、冬でも障子をあけておく事が好きだつた露さんが、こんなせまつ苦しい、空氣の通ふ處もない冷い／＼石の下へは入つてしまつて、さぞ淋しからふ、辛からふ。

「お前には賢さんといふ許婚もあるけれど、彼にはむこも定めない内にあんな事になつてしまつて……露も馬鹿てはなかつたがつて、御酒をめし上ると父樣が仰る」去年の仲秋の時、「幾年ぶりに珍らしく空が晴れたから、今晩は露の爲めにお祝をしようぢやないかつて母様が仰る、エ、露さんのお祝つて何のお祝ですのつて伺ふと、あのね、女の子が十五の年のお月見にれ、お月樣が雲も懸らずまん丸くお出ましになると、其子が一生幸運だつて昔から云ふの、舊弊な様だけれど子を思ふ親心でつまらない諺もたのみにするものでねと仰つた母様のお心の內、實に其れがはかない願であつた事を思ふと、私は……たまらない。

と人一所に草の上に寝て、風に波立つ湖のせゝらぎを聞いた事もあつた、青空に浮んで居る雲の形が彼の是のと意味ないいさかひをした事もあつたが、吁戀しい二十日前の昔。此頃はもう／＼學校のゆきゝも大抵は一人で自分の足許許り見て歩るいて、遂にまはり道した事もない。そして時には世の中へ自分一人が殘された様な氣がして、人の子一人居らぬ櫻島の頂へ上つて飽く迄泣いて見たいと思ふ。露さんが亡くなつてからは他に姉妹もなし、凡の力を自分一人へ注いで下さる父樣母様の傍に居りながら、こんなに思ふものを、まして／＼一夜でも御兩親の手許から離れて寂泊りさへした事のない露さんが、見も、知りもしない處へあのよわ／＼しい優しい體で只一人旅立つて……吁私は泣くまいと思つても如何しても……。

閼伽を汲んで低回幾時、去らんとして去りやらず又ひざまづいた。

松風がごうごうなつて晴れたと許り思つて居つた空から大粒の雨がばら／＼と落ちて、峰の方に杜鵑が鳴く。

「妹の墓」と云ふ題を見て、又女々しいくり言を並べてあるのかと思はれる方もあるか知れないが、是は決して然うでない、讀んで涙ぐまれるやうな悲しい文章である（評）

痩せたる影　群馬縣　天田ふさ子

ふと目を覺ますと、枕元の行燈は消えかけて又明るく成る、さうでなくても陰氣な部屋は一層寂として夜は大分更けたらしい、折々窓の外ではら／＼と櫻の木に

風が音づれる。

私は何となく悲しく成つて涙ぐんで居た。あゝ何うして私は此の樣に腑甲斐ないのであらふ、鳥渡起上るにもお母樣の手を煩はし、厠へ行くにも妹や弟の肩に助けられると云ふ始末、早や六十近いお母樣や、まだやつと十二三才の弟妹に迄心配掛けるかと思へば思ふ程、不孝の私……。

お母樣は毎夜〳〵、起出て、密と私の寢息を覗ひ、氣遣はしげに脈を見て下さる事は幾度もある、弓張の樣な腰を曲げてまめ〳〵しく働いて居られる。

病床に横はりながら、見ては居ても手助のできぬつらさ、我身をきられる樣な思ひがする、四五日前から急に快く成つたと、お母樣は大變喜んで居なさるけれど、私は死に近付たせいてはないかと、あゝ若しや私が死んだ後は、お母樣や弟妹はどうして暮らすてしようかと、思へば何うして死ねようか、あゝ死ねない〳〵。今は早病苦も何も忘れて立上らうとして、ひよろ〳〵とよろめいて、はたと床の上に座つた。

後の障子の破れから洩れ來る火影に寫る私の姿。

あゝ我ながら見違へる迄痩せたこと。

文章も手も極く幼いけれど、字々眞情より出て涙痕の乾かざるもの（評）

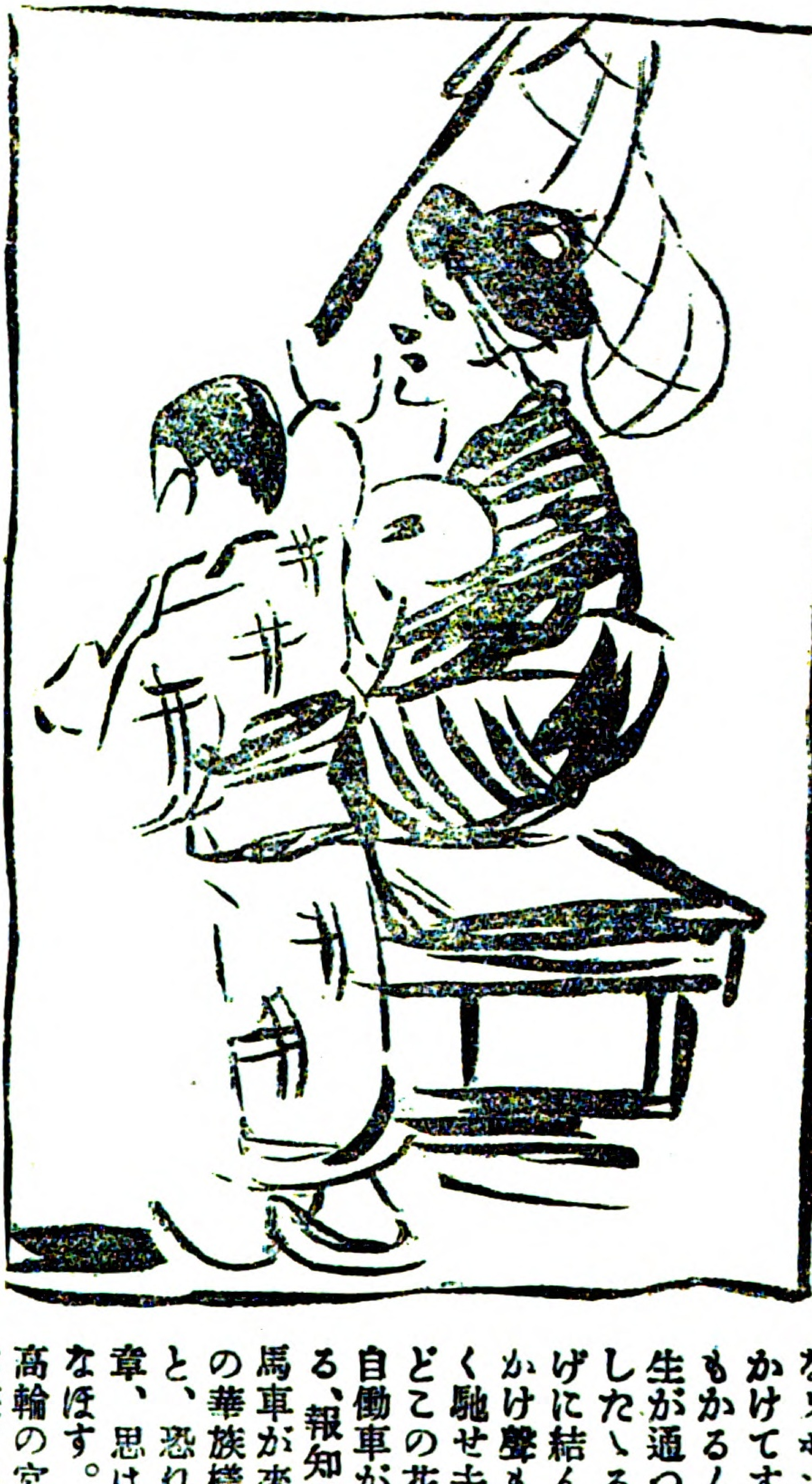
晝の金星

駿河國　藤波馨

午後零時半頃二階て書見してゐると、「金星がみへる金星が……」と聲がするので、ツト半身を外へだして、西北の空を眺めたがみへない　ハツと氣がついて、「かういふ時がけなければかける時はない」、と眼鏡をかけてよくみまはしたがそれらしいものもみへぬ。日光は眩ゆく照りつけてチラ〳〵と目は疲れて涙がでる。庭の木影では、「アーみへた〳〵!! お松はどこをみてゐるんだい、そんな方ぢやないよ、八幡樣の上の雲の近所だよ」、と弟がさはいでゐる。が妾にはまだみへぬので庭へおりると、「姉さんわかつたかね」と弟が得意さうに言ふ、「まだみへないのよ、どこにあるの」ときくと兄が横合から、「そんなに眼鏡なんかかけてきてみへるものか、またてなをしておいて」と冷笑する。「そんなに見限つたものてはありませんよ」と空を向いたなり言ひ放つ。母は「そら森の上に月がみへるてしよう、櫛のようにうすく、その一丈ばかり下の左にあるだよ」「月は見へてゐるのですが……」「お前の目て月がみへれば澤山だ」と又兄が言ふ。後てお松が「金星つて何てす」と思いついたように聞く、「お星樣だよ」と母が敎へる、「箒星のようなの」と問ひ返す。皆が餘り珍らしそうにみるので今までみたことのない、珍らしい星だと思つたんてしよう。「何そうぢやないよ、宵の明星のことだよ」「色々に名があるだチー」と眞面目ていふ。「姉さんまだ見へないの、目が惡いなあ。あの白い雲が突きてゝゐるさきだよ、アツ下の方になつた、アーアー雲の中へはいりさうだ、とう〳〵隱れちやつた」

と說明をやめた。「アッ!!てゝきたく〳〵」とすぐ口を開く。「どうどこにあるだね」と根氣よく視守ると、碧空に白點をうつたようにかすかに星がみへた。「アッみへましたよ」と思はず頓狂聲をだすと、「まあそんな大きな聲をだして……みつともない」と母がいふ。父が「何のことだ騷々しい」と言ひながらも飛び石づたひにくる。

一時其筋に全國に天文學者を加へたほどだから、一文は來るだらうと思つてゐた、果して此文駿河より來る、文もおもしろい(評)



佳作 揃虫

茨城 北川うめ子

時はま夏の午後三時半、場所は人どほりしげき東京の町中に、友が買物の間を、自分はたつて居た、別に考へることもないので通る人に目をとめる、髮をマガレットに結んで眞白なリボンを大きくかけてすそさばきもかるく〳〵と女學生が通つた、水もしたゝる樣な丸まげに結んで車夫のかけ聲もいさましく馳せ去つたのはどこの花嫁樣か、自働車がかけてくる、報知の夕刊だ、馬車が來た、どこの華族樣かと見ると、恐れ多い御紋章、思はずゑりをなほす。高輪の宮樣が御歸館遊すのである、よくは拜し得なかつたが御洋裝の樣に思つた、色の青い六十路の坂をこしたかとも見える老母の、片手には藥瓶を、片手には杖をもつて通る、粗末なりてある、

笛の音

都會の十分間

芝 しら荻

美文

貧しい人であらう。車が五臺つゞいてとほつた。第一は紳士風の人、二は奥様、三は可愛らしい二人の姉弟、四、五、はその祖父母らしい、避暑にても行くのであらう、向側を腰もゆみなりになつた、かどづけが通つた、つり竿とかごとをもつて五六人の書生が、ドヤ〳〵ととほつた、突然そばの横町から太鼓の音がして飴賣が來た、親子づれであらう、男は四十位、女の子は十才位かとも見える、頭の上に飴の入つた大きなたらいの様なものをのせ、太鼓うつ手ゝ重さうである、恰も小間物屋の前に來た、きれいなりボンやかんざしにふと目をつけてか、足がぴたととまつた、男はうしろからつきとばした、ヨロ〳〵としたがまた太鼓をうち、聲はりあげて妙な歌を歌ひ出した、そのうち男は向ひ側にうつり兩側でかはる〳〵太鼓の音させつゝ、だん〳〵とすぎ去つて遂には姿も見えなくなつた、自分はあと見送つてしばらく茫然、友の我が名を呼ぶにおどろいて、云はれるまゝに店の内に足をはこぶと、目のさめる様な多くの花たばと、さも涼しさうなりボンとを、前にならべて「どれがよいでせう?」

生きた活動寫眞、東京を見たければ此れを御らんなさい(評)

健ちやん

米鳴　大井文子

つく〳〵ほうしつく〳〵ほうしと松の木で一しきり鳴くのが已むと思ふと、又檜でつく〳〵ほうしつく〳〵ほうしを始める。これが已まないうちに、松の木でさつきのが又始める。私は健ちやんの枕元に坐つてゝ、團扇でそつと風を送つてゐる。健ちやんはさつきからよく眠つてゐるのである。

健ちやんは如何してか烈しい〳〵眼の病に罹つてゐる。お醫者は餘程性の惡い病だと云ふ。まだ病くなつて一週間も經たないのに、あの可愛らしい何とも云へぬ涼しかつた眼は、毎日〳〵妙な風になつて了う。眼の中は眞赤になつてゝ朱を注いだやう。何か見様とする時は、眼を糸の様に細くする。婆さんがもつと大きくして見な、よく見えるよと云はれても、矢張りいつも猫の様な眼をする。婆さんは私とかはつて貰ひ度いと泣く。婆さんは今日まで眼鏡を御掛けになつた事がない。

枕元の床に飾つてあるのは、此間叔父様から頂戴した空氣銃である。健ちやんはいつ是を持つて駈けまはる様になるだらう。それともこれはいつまでも〳〵この通り床の上に飾つて置かねばならぬのか知ら。

早く學校に上り度い早く良くなり度い、良くなるだらうかと、健ちやんは毎日の様に云ふ。健ちやんは今年二年生である。來春は高等小學はよして了つて、中學校の入學試験を受け、一番では入ると威張つてゐる。健ちやんはこのまゝよくならないのか知ら、めしひになつて了うのか知ら。いや〳〵、そんな事があつて如何しやう。健ちやんは必度良くなるに違ない。良くなつて空氣銃を持つて駈け出すに定まつてる。健ちやん

は中學校には入るのだ、制服つけて威張る顏を早く早く見度い。

『健夫は未だ醒めないかな。』

婆さんが手紙と美しい御本を持つて入つて來た。健ちやんに宛てゝ東京の兄さんから贈つて來たのである。手紙は大概平假名で、處々本字もある。六づかしいと思はるゝ本字には假名が振つてある。兄さんはいつでもかうして手紙を呉れる。早く良くなつて中學校に入つて東京の大學校に入らねばならぬ。待つて居ると云ふ事が認めてある。御本は大好きの少年世界。

『健ちやん醒めて?、兄さんから手紙と少年世界が來てますよ。』

『そう、兄さんから。』

健ちやんは蒲團から手を出して手紙をひろげる。矢張り猫の樣な細い、そして極めて眩しそうな目をする。半分ばかりでよして、眩しくつて堪まらない、もう見えないと云ふ。こんな大きな字で書いてあるのに、如何して是が讀めないのだらうと思ふと、私はほろ〳〵と涙が出る。健ちやんにかはつて、その先きを讀んで聞かせる。少年世界を握つたまゝ、ぢつと聞いてゐる。健ちやんは私の只一人の弟である。去年寫つた寫眞がまだ一枚殘つて居る。あゝ今の健ちやんは元の健ちやんではないのである。

深夜の度は別として、文章に批なく、情も美くしい、一讀健ちやんがあはれになる（評）

玉蜀黍賣

日高國　深草しづよ

強い夏の日影が、札幌特有の楡の梢を隈取つて、赤い煉瓦の壁に樣々の影を投げるのも趣があるが、金風一夜藻岩山の後から吹いて來て、大通の原に秋氣がたつと六萬の市民はしみ〴〵自然の力に威壓される。

北から南へ眞直に四町目通が走つてゐて、北一條の大路が東から西へ悠々と通つてゐる。此辻の南角は荒物屋、其隣が小間物屋で、店前から赫々と燈火が街に射してゐる。向う角の青物屋のラムプが――一イ二ウ三ッ四ッ威勢よく光つて、此方角の接骨病院の硝子戸に、洋燈の蓋がボンヤリ影をさして寂寞として居る。

天は一面の暗黒色。辻に立つてゐる電燈が青い光を投げて、西風の吹いて來る道を照らしてゐる。道には電柱の直下の闇から、鈍い重くるしい灰色を暈して、北に續くアカシヤの並木が青黒く光る。辻を南へ人力車が二三臺急ぐ。北へ雪駄が轢む西へ東へ薩摩下駄が刻む、白履がかすれる。

此電柱の下に、藁莚一枚敷いて竹籠が置いて在る。中には竹皮の樣な青い綺麗な葉に包まれた玉蜀黍が堆高くある。其右手に、石油の空鑵を胴切にして灰を入れた火鉢――上に針金を横たへて蜀黍の剝いたのを四つ五つ並べてある。殆んど扇子の樣に萎えた澁團扇でパチ〳〵煽ぎ乍ら、蜀黍が燒けると、前の小さな木箱の上に並べて客を待つ。木箱の片隅には、薄暗いカンテ

ヲが點つてゐて絶えず火心が搖れる。其覺束ない光線が、爐に並べた蜀黍の半分を照し、皴勝な婆さんの手首をかすめ、餘光が蓆の半分に落ちて、黑い太い電柱の影を消し兼ねて居る。五十超えた婆さんの洗い剝げた手拭の頰冠り頭や、縞の分らんムジリの筒袖が動く度毎に、カンテラの放射線の内に映る。頰冠洩れて、深い額の皺や眼瞼のうるみも、どうかした體の搖ぎによつてチラ〳〵見える。殆んど土色の手で團扇を翳し〳〵色々に蜀黍を置直して、時々炭火を搔廻すと、バチ〳〵火の粉が散る。バチ〳〵と蜀黍がはぜる。

南から來たパナマ帽の三四人が、ガヤ〳〵饒舌り乍ら此方へ寄つて來たが、躊めく足元で蜀黍の籠に衝當りさうにし乍ら僅かに通り過ぎた。まもなく歸り車をガラ〳〵挽いた車夫が大きな嚔一つして拳で鼻を擦り乍ら行つて仕舞ふ。暫して足音が近付くと、だらしなく細帶〆めた人足が兩手を懷にし乍ら二歩三歩こちらへ寄つて來たが、又向き直つて北へ去つた。其後へ來た赤ら顏の子供負うた女が一寸蓆の前に立止つて見て居ると、「燒き立て如何です」と婆さんのシヤガレた聲を聽いて、俄に氣付いた樣に背中の兒をアヤシ乍ら彼方へ行つて仕舞つた。四五人連の威勢のよい跫音が向側を東へ通つた。背廣の細いステツキとお太皷結て白リボンの一組は目もくれないで北へ歸る。先刻前を通つた按摩の笛が段々低く成る。醉ひどれの唄ふ聲も何處やら遠方で聞える。並木のアカシヤの梢が、西側からザワ〳〵音を立てゝ來た。

所謂寫生文風のもの、北海道と云ひ、新開の部合と云ひ、夜と云ひ、玉蜀黍賣と云ひ、すつかり趣のある材料が揃つてある上に、文章も達者だから一寸捨て難い（評）

香魚狩

阿波　西野花菱

「もう船行つても可いかあ――。」

「おうい――。」

遠くから返辭が來る。長い堤の柳から綱を解いて、水夫は水馴棹でトンと岸を突く。蟹が逃げて船はユラユラと河心へ出た。水が舷をなぶつて藍と澄んだ川底の砂利美しうスイ〳〵と細い魚が泳いで行く。上流の狹い橋に乘合馬車が怖さうに喇叭ならして緩く渡ると丈六寺の杜に鴉が群れて啼いて居る。船は磧に近づく長い間水をのせぬ所は草が生ひ茂つて、草いきれて暑さう。續く堤の茂に焦げつく樣な蟬の聲。河原では豊さんが石竈で飯を焚いて居る。船は靜かに下つて行く。緩い流の末遙か彼方には傭うた漁夫が竪網を張り終つた所。燃く樣な日を白布で避けた船の中は廣く緞通敷いて、水を渡る風が涼しう迫つて來て扇を使ふ人も無い。お祖父樣は今朝魚梁でとれた生き鮎を見、父樣はお羊羹摘まみ、母樣と私は船から水遊び、兄樣は寫眞機、午前の日は此所をよそに照して居る。

漁夫六七名堤傳に來て河を渉り、網を曳き流して鮎を下へ〳〵と追うて行きはじめる。父樣は肥た體に白いシヤツ、大麥藁帽で腿まで水につかつて。漁夫の手傳ひ

網を摑むて曳いて行く。折々漁夫が投網を打つては五七尾の巨口細鱗と云ふ美しいのを船の生け籠に投げ込む。其度毎にお祖父樣は莞爾しィ眼鏡越しに餘念なく眺められる、兄樣は一二枚早撮りし直ぐ川には入る。上手な漁夫が二人出來ましたと母樣が豬てお髮搔き乍ら微笑まれる。私は死鮎の腹を割いてお鮨の下拵えをする。磧には炊煙白う微風に搖れて青空には雲一つ見えませぬ。

『結構な土用でごはす、』

漁夫の頭分らしい禿頭が父樣に挨拶して、皆に彼方に廻れ、此方を曳けと指圖して居る。銅色の若衆が二三人折々船をぬすみ見ては、せつせと網を曳く。水覗眼鏡かけて顏をスッポリ水に浸し岸邊の深みて鮎の多寡を見て居るのや、網にかゝつた芥木枝などを除ける男や皆流を下りつゝ手を休ませぬ。

『今日ら、大分とれるぞ、けんど皆小まかいなあ。』

『さうよなあ。おい。早うせぬと夕立が怪しいぞい。』

いかにも西の空、中津峰の彼方に今迄なかりし恐ろしげな雲の峯がむく／＼と大入道の樣に頭擡げて居る。

『夕立が來ると困りますね、お母樣。』

『さうねえ。』

母樣に手傳て戴いて鮎料理が大分出來た。磧て焚く御飯も煮える時分てある。

『母樣、注文しますよ鹽燒に吸物、膾それから……。』

兄樣は何時の間にやら船に上つて、板の間に立つてお料理を見て居られる。

『まあ澤山てすね。ハイ／＼。』と母樣。

私が見ても空模樣がよくない。漁夫は早や充分に網を曳き廻して淺瀨へ鮎軍を包圍して了つた。

『午飯がすんだらあれを投網と手網て攻めて、お了ひには手づかみさ。』

と父樣は兄樣に船へ引上げて貰つて悠う仰有る。

鮎の味噌燒とお汁と刺身てお晝をすまして愈、本獵にかゝる。船を繋いて皆汀に下り裾端折てザブ／＼と水をわける。脛まで浸すと冷たくて夏は何處へやら。二人は姉樣冠り。いや一網、二網と取れること／＼。籠は見る間に底が隱れて了ふ。お祖父樣の手網にも折々銀色のがピチ／＼潑剌ねて居る。

『怎うも天氣が惡いぞ。』

禿頭の爺が呟くと間も無くやがてポツリ／＼。漁夫達と兄樣殘して皆はもとの空船に急いて乘る。ピカリと來てゴロ／＼鳴り出す。船の仕末が濟むか濟まぬにザーッと云ふ大雨。河の面の大きい波紋は眞珠を撒いた樣。兄樣は平氣で裸のまゝ網を手に得意がり、母樣は耳を抑え皆船の眞中に集まる。雨は漏らねど凄いさま、橋さえ見えわかぬ。たゞ河の面を打つ音のみ怖しい程大きいのてある。

鮎の跳るやうに文章が新鮮ていき／＼してゐる（評）

秋の落日　　青山　川島ちづ子

二三年前父と隣村からの歸途生涯忘ることの出來ない落日を見たことがあります。
時は晩秋、處は荒野――野にかゝつた時は太陽が西の山に大分沈みかけてゐました。
風が霜枯の荒野をザハ〳〵音させて過ぎると其都度白狐の尾をたてた樣な薄の穗がなよ〳〵搖れる、野末に一本の銀杏があつて巨人の姿を高く中空に突立てゝゐる樣である、其野中の小徑を妾は父の後についてとぼ〳〵辿つてゆく、沼地の處に行くと草履の裏に濕氣が上つて步く毎にぴしやり〳〵とさも寂しい音がする、銀杏の頂上を限つて右の空に美しい秋の雲が漂ふてゐる黃橙色の勝つた紫地の空に金糸で刺繡した樣なちぎれ雲が斷續又斷續、限もなくフワ〳〵と流れてゆく、追ひつ追はれつ、上りつ降りつ轉々として流れてゆく。
その紫の雲、紅の雲の奧には琅玕で作つた天馬の廐もあるでせう、瑠璃屋根の天女の化粧の間もあるでせう、その天女が香水の一滴を誤つて下界におとしたのが白百合と咲いたり菫と咲くのでせうと思ひました。
太陽は殆ど沈んだ、空も山も野も銀杏も皆同じ殘照に輝き渡つた、父は默つてすた〳〵急ぐ、妾も轉るやうにして後についてゆく。
遠くて鐘が鳴る。
向ふから娘に手を曳れた瞽女がくる、娘の胸にかけた布袋はあまり膨らんでゐない、朝から奏でて步いた曲も誰一人顧みてくれなかつたらう、そして今夜何處へ行くのかしら――妾は可愛想で暫く見送つてゐましたが母と娘は何やらブツ〳〵口の中で唱へながら聽て草原に消えました、持つてゐた杖の頭が夕日にキラ〳〵輝いてゐます。
鐘の音は野を這ふやうにひゞく、雲は矢張漂ふてゐる、獅子のやうなもの章魚のやうなもの、竹箒のやうなもの、果ては狂女が破琴を搔きならして走つてゐるやうなもの、千態萬狀の雲が缺けたり太つたり消えたり出來たりたえず變化搖曳してゆく、突然沼の畔に出ると羽の黑い虫が無數に飛んでゐる、放れ縺れつ、何をしてゐるのだらう、何處へ行くのだらう、妾はこんな事まで考へてみました。
間もなく日は全く暮れて淋しい風は愈々吹き荒れる、鐘もいつか止んで遙かの向ふては灯影がチラ〳〵見え出しました。
それにしてもあの瞽女の親子、美しい夕雲、妾は何うしても今に忘れることが出來ません。
今一息、好い處もあるが其割に全體の見榮えがしない（評）

岩の上

愛媛縣　松村　さみだれ

雨が止むだ。
今日も亦例の岩へ來た。川の流れは昨日に變らぬ、何時迄流れるのだらう、自分もなり度い川の樣に。人家から七八町も離れた此所へは汚れも及ぶまいと思ふから私は毎日此處へ來る。そして私の將來の事を靜に考へ

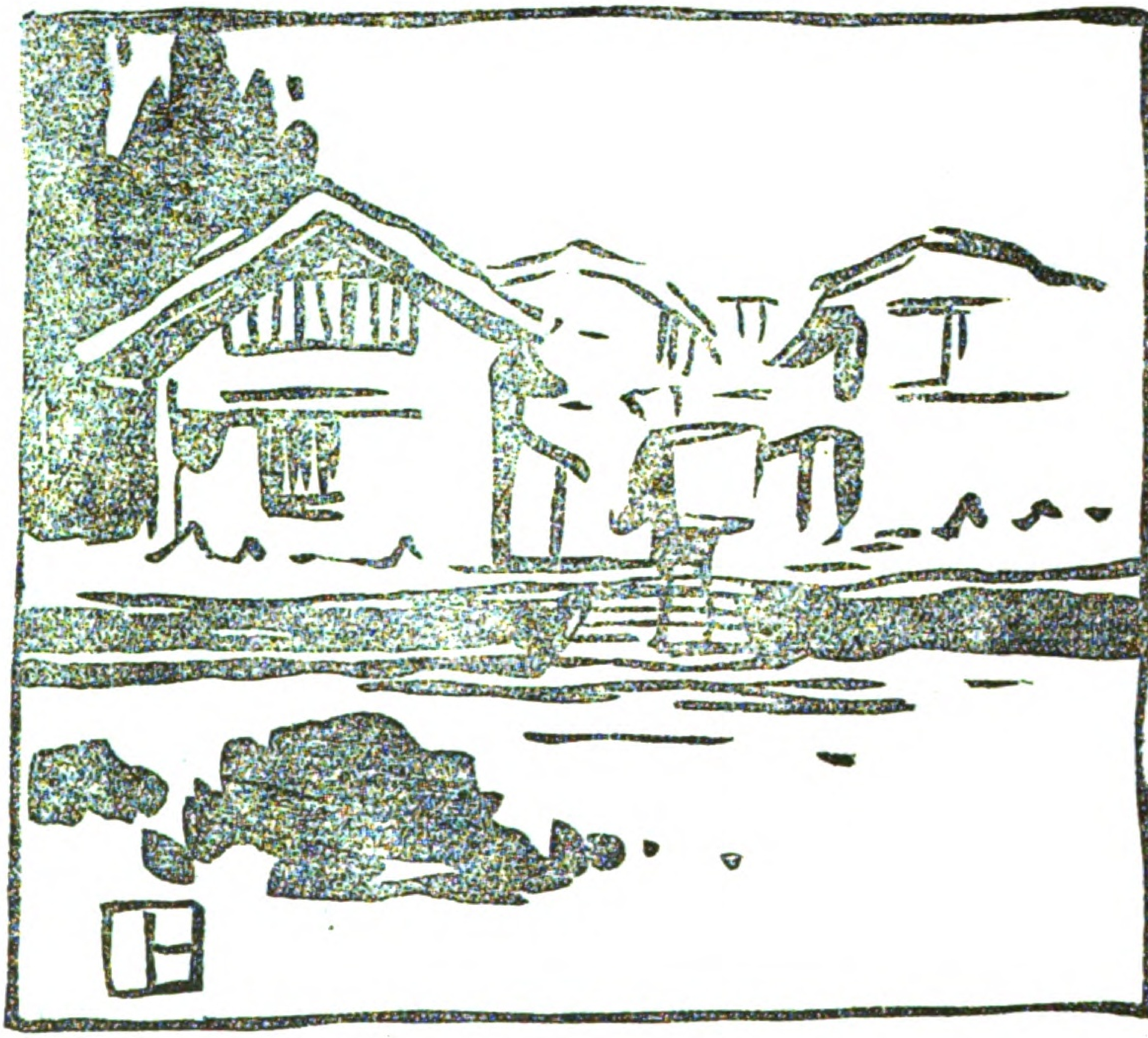
る。里迄は四五里、人家迄は七八町、其靜な里と云つたら太古の様だ。梢には小鳥も鳴かぬ、繁り合つた山草の間に、せゝらぐ谷の水音物淋しう、落ちては一丈の糸瀧となつて大川に續く。あの不動の瀧音が此所迄聞える、ドードーと。

山中と云ふのは實に靜かだ、人も亦靜かだ、此山の學校へ來た時には、何の力も無い敗者の自分にむしろ恥ぢ入る位の待遇をして呉れた。

何も物好きで山に入つたのでない。

唯運命の神に指圖されたのである。頼みに思ふ主人は大學を卒業すると俄に本音を吹き出して、洋行させよとか、分家するには何程の財産をくれとか出來ぬ事の知れ切つて居る難題をお父さんに云ひかけて、それを機會に日は

佳作　町はづれ　青森　立花ともこ



何所にても照ると、家へ寄りつかなくなつた、元元養子となつて來て居たものだけれど、妻としての妾の心は何うであらう。

それからは唯さへ厳しい母上がお前の不行屆きと御叱りなさる。是が眞の母子ででもあれば、まだしも無さぬ仲の悲しさ。

そして又義の妹に相續權を、ゆづれと云はぬ、ばかしの仕打、父の優柔不斷、母の勝氣、家庭の修まる筈は無い。之も皆妾から起つたこと、あまりの事に堪へかねて家を飛び出して此山に來たものの將來は何うしようか。

家を出る時は夢中であつたが。山とは云へ人家もある鷄も居る。里よりは靜かだが、思つた程で無い、それ故授業が濟むと此岩に來て靜に考へる。

四邊は靜だ。

妾は早一年山で暮した。來た時も此樣に緑滴るばかりであつたが、其の色が赤くなつて、木の葉が枯れて、叉芽を出して此樣に青くなつた。妾は此一年の間山の中で何の得る所があつたらふ、などと思ひ出すと何となく悲しい氣がして、世間が戀しい、家庭が戀しい。

四邊は靜である。

此山は丁度摺鉢の樣で三方は高く山になつて一方北の方は開いて川が流れる、此川下六里に、なつかしい父上が居ます、友が住み給ふ。會ひ度い、と思ふが然し今は時機でない。妾はまだ充分な目的が定まつて居らぬ、一生獨心か、又は誰か妾の理想でなくとも親切な人に身をまかすか。それも定まつて居らぬ。その上妾の心は男と云ふ物に對して一種の恐れを持つて居る。その時機が早い、と燃え立つ胸を强いて抑えた。ただ情に堪へかねて傍の葉一つ川面に投げた。笹は糸瀧に渦が巻かれて、しばし見えなんだが、ふと浮き出て、流れに從ひ浮きつ沈みつ川下に流れる。怪鳥が一聲、山の靜さを破つて、私の上を、斜に、川を逆に飛んだ。

四邊は靜である。

空は高く、常に雲に隱れて居る、石鐵山も、今日は珍らしう顔を出して居る。

此靜かさが身に浸みる、何となく淋しい感もするが、其靜さが段々私の身に迫つて來る。心神は、うつとりして山、川、空、の靜さと妾の身の靜さとが一所になつて仕舞ふたのであらふ。

空想で書いた文章とは違ふ、何處かに眞實があつて動かされぬ（評）

今宵の涙

岐阜縣　清　美　女

春はのどかに樂しと云へるも冬は雪の眺に時を忘ると云へるも是皆幸ある人の心なるべし、重ぬる不幸に身を苦め、つきせぬ涙に袖も朽ちはつる遣るせなの身の何かあらん、はては春の日の永きを怨み秋の夜の明るを待つなど夜もすがら蟲の聲となきあかし、おく露に袂のみ濕ひ月を眺むればいつしか心の雲にさまたげられ、花を愛づれば胸の嵐にみだされ、いとゞ浮世のいとはれて、なほ行先の事ども覺束なく思ひつゞくれば心は千々にみだれて袖は涙にしとゞなり。內にのみかきこもり好める雜誌など己がこよなき友として憂をやらむとすれど忘らるべき事にも非ず、軒の松風音のみさびしく燈の影さへかすかに哀さいはん方なし、折から妹のこわ音にて、もはや夜もふけぬ寐ね給はずやとさゝめくに片方なる文の一冊を手にして臥戸に入りぬ。やがて枕の上にてひもとき見れば是なん日頃妹の愛てしたへる女子文壇なりける、讀みくだせば賢こきあたりの諸嬢だちの、ものし給へる、いみじき文歌、さては諸の學びの道に心ざし給へる、こゝろの言の葉など綴りなせるを見るにつけ讀むにつけ、又思ひ起しつきせぬ涙、流れ行く末もうき瀨なりけり。何かなれ

は己は斯く拙なくも後くれたりしぞ。今はいかに、もがくとも學び得べき事にも非らず、同じ硯に水はあれど、筆の心にまかせねば唯獨りさびしく、なげきに沈み勝なる夜は又なき人の戀しさのみまさりて、あはれ父上の世におはしまし頃は、折にふれ物讀むことをばひたすら進め給ひしかども、己なほ年かさ行かざりしまゝ、他ごとのやう思ひて、何くれとはげみもせず送りし事の今更に口惜しう。父君には一とせいと寒う水も氷りて、とけがたき病にちり行かせ給ひて、始めて別れの斯くもせつなく悲しき物なる事を覺え、あけくれ涙にのみ日を送りぬるに、年波のはやく過ぎ行きて、明の年又もや亡き父にまさりて愛て給へる兄上のはからぬ、いたつきに打ちふし給ひければ、をどろきて心を盡し身の及ぶ限り看護りしかども宿世なりけむ、日も深からぬに空しうなり給ひぬ。折しも寒風そよぐ夕まぐれ、思ひやるだに露けき秋の末つ方なり。なげきの内に年のみ積りて數ふれば七年の佛の業を過して二とせが程母上が片方に生ひ立ちし後、其が敎へのまゝにさる方に嫁ぎしが己の良人と云へるは、いと親み深き性なりければ幸ある事に思ひて先だたじ又後れじと固く契りぬ。さるにも夢なりけり、去る年の長月にいと重き病に苦しみつゝ黄泉の旅へいて立たせ給ひぬ。あゝ思ふまじ云ふまじ、とはかねて覺悟せり、幾度くりかへすとも此恨此の悲のつくべしや。憂身なりとて我君のおはせばこそ力と頼みて世を送るべきを唯一人とりのこされし捨小舟、何處をさして漕ぎ出でん。あゝ如何にせむと、あたりを見れば孤燈影暗き處遠寺の鐘は枕にひゞき、又今宵も思ひの内に明けにけるかな。さあれ、たゆみなく勵みもせば牛も馬に及ぶありと聞きつるを、いて學ばむ、いて問はむとてこゝろの駒にむち打てども身に幸なきを如何にせん。

讀者諸嬢、此文を讀みたまはゞ一世紀隔てた人と語るの感があるでせう、實に〱斯んな文章も多くの若き姫達の手に依つて書き出された時代もあつた、此作者清美女が世に後れたことを嘆く如く、文學は進歩した、思想は革新した、諸嬢よ心したまへ(評)

漁夫の妻

仙台市　松山秋海棠

荘内の西海岸を通る旅人があつたなら、第一に其目に止るのは白砂の上に日の光を受けて美しく光る櫻貝よりも、阿古屋貝よりも、七千尺の出羽不二鳥海の峯の雪の冠を戴き緑りの衣の裾が青海原に消える光景よりも、潮に濡れて黒く光る髮を無雜作に束ね、ふくらんだ乳房を惜しげもなく露し、岸を放れた巖のほとり小盤を追ふて碎くる波の飛沫を浴びて藻草とる蜑の妻であろう。

元は美しくとも、汐にぬれ、風に吹かれ、日に燒けて黑い。けれども其胸の中には、マーブルの如く白き肌の女も、天女の如く美しき女も持つことの出來ぬ美しい溫い血汐がめぐつて居る。

朝にその夫や子が板子一枚下は地獄の漁船に乗つて雨の日も風の日も、沖遙かなる漁に出かけるのを送つた

後は、春ならば漸く波が越すくらゐの岩と岩とをとびながら、香高き海苔を摘み、夏ならば海底深く沈んで鮑や榮螺をとる。秋には夫や子に手傳つて鰯の網を引く。

さて、夫や子が沖から歸れば其日の獲物を籠に入れて山一つあなたの大山や鶴岡の町に賣りに行く。歸りは空になつた籠に其日の利益の幾分をさいて、子供の土産あれやこれやと草紙だの果物だの菓子だのと買つて來ては樂ませる。若しその利益の多い日ならば一合の濁酒を買つて夫がその日その日の安全を祝ふのである、そこでその夫が一合の濁酒に陶然として醉ふて樂しむのを見、その子供が一袋の菓子に嬉々として悦こぶのを見ては、自分が飲んだよりも食つたよりも嬉しくまた樂しいのである。

秋に入つて霜のおく頃とても肌ぬぎ姿に肴籠をひつかけ「ヤツコラサ」の掛聲勇ましく山を超えて行く。

冬になれば、藻草や貝を捕つた手に縫ひ針を持つて夫や子供が正月の晴着をぬつてやる。

日本海の冬は實に物凄い、狂浪怒濤、荒れに荒れて岸をかみ巖にくだけ、氷塊は漂ふ、難破の船が流れつく。けれども彼等の夫子は物ともせず、一艘の小舟を仕立てゝ遠くカバフト迄も出獵する。

其日暮しは單に衣食のみか、その生命とても其日其日でいつ何ん時浪に呑まれ魚腹に葬られるかも知れぬ。

かゝる漁夫を夫とし子とせる彼等は妾等が想像意外な樂しい愉快な生活を送つて居る。

もう少し新式に書いたなら恐らく人目を聳たゞしむるに足る好い文章が出來たであらう、新式に書かれてあるかと思へば、舊式に捉はれてゐる、何も新しいのが必ず好いと云ふわけてはないが、蜑と云ふ踏襲的の人物を寫さうとしたゞけ新しい味ひを、より多く見出したかつたのである（評）

寢顏

駿河　泉とし子

芭蕉の葉の間をくゞつて、縁側に置き並べた蘭にちよつと其の姿を見せ、そして座敷に吹き入る涼しい風は、天井から吊した赤、紫、黄、とり〳〵に美しい風車を、さら〳〵と廻してゐる。

午後の二時頃の日脚は、あまり熱くなく、垣の外に遠く逆り展けた青田の上に、あか〳〵と照つて居る。父上は盆栽の手を洗うて今庭から上られた。兄は讀書に倦みて書齋から出て來られた。勝手元に用の無い今時、姉樣も母上も手がお空きである。私も加はつて五人の軀は、今此の座敷に集まつた。そして風車の小止みなく繞る其の下に寢かされてゐる太アちやんの周圍を圍んだ。

太アちやんは、二布の赤い蒲團に寢てゐる。然し眠つては居ない。此の春生れた兄の兒で太郎といふ、此頃頻に手足が利き出した。

今太アちやんは、自分の頭よりも大きい達磨樣を相手に、盛に運動してゐるので。右を下にした軀を弓形に

曲げて、頭を少し持ち上げ氣味に、兩手をつんと伸してぽん〳〵と叩く。右は拳、左は楓、交替に振る毎に、達磨樣はピョコリ〳〵如何にも樂天的に躍る。すると太アちやんは、小さい口をいつぱいに開けて、キヤツキヤと嬉しがる。そして續いて盛に打つ。足まで一緒にばた〳〵やる。達磨樣は太儀さうにもなく、一緒になつて喜ぶやうに、ピョコリ〳〵、全く轉びさうになつては直ぐ起き直る。

あまりに其の樣子が可笑しいので、一樣に太アちやんの手先に耀いてゐた五人の眼は、云ひ合したやうに見合せて、どツと笑ふ。

然し太アちやんは、二十分も經つと之に倦いた。最後にポンと蒲團の外へ突出して終つて、二度と振向きもしない。そして何か求めるやうに、ぱつちりした眼を見開いて、あたりを見廻してゐたが、ぐらツと仰向きにかへると、風車に眸が止まつた。風車は相變らずくるくると、どれも〳〵急がしさうに廻つてゐる。太アちやんの倦んだ腦は、是に復活した。眼を細く、口を大きく、あんなにしても關節が外れはしまいかと危ぶまれる程、四肢をばた〳〵さして、騷ぎ興じてゐる。其間達磨樣は、見捨てられたのを恨む樣子もなく、つくねんと此方を向いて、かしこまつて居る。

風車も直きに倦いた。寧ろ達磨樣よりも壽命が短かつた。今度は如何するかと思つて見てゐると、讀むことも忘れて父上の持つて居らつしやる新聞紙を見付けて、それをよこせといふ樣に、兩手を廣げて前に伸して上下に振る。試みに父上が差出すと、何度も摑みそこなつた上句、やつと兩方で鷲摑みにしたが、見るまに引掻き廻して皺くちやに爲たのを口へ持つて行く。周章てゝ母上がそれを取り返すと、わツと泣き出した。皆がハヽヽヽと笑ふ。

直きに泣き止んだが、姉樣の顔を見て、メソ〳〵溢つてゐる。

『ハヽヽヽ、乳が欲しくなつたな。』と父上がおつしやる。笑ひ乍ら姉樣が膝へ抱き上げて胸を廣げると、顔を突つ込む樣にして乳頭を探り、せか〳〵音をたてゝ吸ひ始めた。父上は皺を伸して新聞の讀み餘しに眼を移してゐらつしやる、兄は便所に起つ。

何時の間にか吸ふ音が聞えなくなると、太アちやんは既う眠つてゐる。ぐたりと頭は母親の腕に托して、何等の不安もなく眠つてゐる。『ハヽ、罪の無いもんだ。――どうだい茶でも入れないか。』と父上は先に立つて茶の間へ這入られる。皆も笑ひながら其後について行く。私は獨り殘つて、再び蒲團に寢かされた太アちやんの寢顔を凝然と視入つた。

あゝ小兒の寢顔! 何と神々しい、尊いものであらう! 閉ぢた眼は糸の樣に、堅く結んだ口はぽつりと朱點を打つた樣、そして鼻息微に眠れる其顔。一點の邪氣無く、些の不安無く、而して一切無我! あゝ眞

に神！　眞に神!!　私はそつと薄い毛布を懸けてやつて、亦無我の境に、尙もそれを覗入つた。

別れ

筑前　和田八千代

是れからは街てある。けれ共未だ此邊は我が村の內なのてす。兩側に家は並んて居るが町らしい大きな構えは少ない。間々には藁葺やら少さな瓦葺があつて、此の暑いのに戶締りさえした所がある。て明るくなつたと思ふと急に薄暗くなる。——恁麼物寂しい道を二輛の俥はガラ〳〵と走つて行く。偶々礫にても躓つたのか酷く躰がゆれる。而して其の音が妙に響いて何とも云へぬ寂しいような氣持ちになる。明るくなる度に後ろの姉さんの方を振り返つて見る、と姉さんも私の方を見て居られるので、視線が遇ふ、嫣然される。斯くて尙俥は同じく走つて行く。——私は今、五十日の夏期休暇を終えて歸校せねばならないので、姉さんに送られて今晩の終列車に乘る可く行くのてある。

ふと明るくなつたと思ふと金比羅神社の下を通るのであつた。一禮して右側を見ると、薄暗く細長いものが立つて居る「以東鬼塚村以西唐津町」と書いてあると思つたが、字は自分の影のために見へなかつた。愈々これて故鄕を離れるのだと振り返つたが、姉さんの居られるのを忘れて居たのに氣が付いた。けれ共其の時許りは姉さんを見ようとはせず、目をそらして朧ろげな村はづれの家を眺めたが、私の胸は妙に動悸が高かつた。ドロ〳〵と俥の音がする、少さな川の石橋を渡るのてある。と急に眩しい程明るくなつた、今賑かな大石町に入つたのてす。俥が急に速くなつた樣な氣がする。兩側の店の燈火は硝子戶などに反射してキラ〳〵光る。小間物屋、玩具屋、反物屋、飲食店、床屋と走馬燈のようにくる〳〵と四邊の景色が急激に變るので何事も考へる暇は無い。行く人を追ひ越え、來る人を押し分け、ジャン〳〵と俥は尙も走つて行くのてある。軈て魚町を通り拔けて札の辻橋にかゝる。眩しい光て眼が勞れて居たのが不圖燈火の無い處へ這入つたので、ほつと一息吐いた、と横ざまに涼しい風が頰をなでる。今迄汗ににじんて居た體が急に水のようになつて冷かになつた。橋の中程に三人五人と浴衣の人が團扇をハタ〳〵と音させて涼んて居る。長くも無い橋は直につきる。此度は京町てある。郵便局を通つて暫らくして書籍屋、其れから大きな宿屋を二三軒過ぎたと思ふと、俥は角燈の點つて居る方面にくるりと廻る停車場通りに出たのだ。茶店やら飲食店やらずらりと並んて居て、其の中から厭に色の白い女が盛に客を呼んて居る。旅客らしい人がぞろ〳〵と行く、店から出る人、這入る人、流石に發車間際は雜沓なもの、一直線に其の間を走ると愈々待合所の前に來た、梶棒が下りる。私は降りた、姉さんも降りられる。是れてほつと一息した。時計を見れば未だ發車に二十分前。顏の汗を一心に拭いてゐる車夫に切符を買はせ荷物を預け

た、車夫は二三度頭を下げて賃錢を押戴いて去る。私は不圖思ひ出して博多の叔母樣へ今夜三時に届く旨電報する。然して漸く改札口を出た。未だ列車が着き相にも無いのでホームの人の少ないベンチに姉さんと並んで腰を懸ける。あと四五分で姉さんとも別れねばならぬかと思ふと又急に悲しいような氣がする。氣候が惡いから養生せねば不可ぬとか、手紙は常に絶えさぬようによこして呉れとか一々姉さんは言はれる。この親切な姉さんとも年末休暇迄逢ふ事が出來ないのだ。汽車は凄じい音をさせて這入つて來た。待ちあぐんで居た數多の客は手荷物を携えるやら、迎のものは手を引き合ふ、又小供の名を呼ぶ、彼にどよめき始めた、聽て汽車は着く。驛夫は盛に驛名を呼ぶ。降りる乘る、



佳作 船長

名古屋 寺澤信子

荷車の音で雜然たる事數分、私が前部の方の空た所を見出して乘つた時はもう靜まつて居た。窓から首を出すと姉さんは丁度其の下に佇つて居られる。暫らく無言で居ると聽て發車の笛が鳴る。愈々出るのだ。胸の動悸が急に激しくなる（では姉さん！皆樣にも宜敷）（はあ貴方もお達者でね、道中はご用心なさいよ。）ゴトンと動き出す。最う姉さんとは三尺許り離れた。私の胸には今何事も考へる餘裕は無いのである。窓の戸にしつかり倚つて姉さんの顔を見詰めて居る。と次第々々に遠ざかつて行く。私はもう堪り兼ねて聲を限りに泣き度いような氣がする。思ひ切つて手に持つてたハンケチを打ち振る、と姉さんも手招きをされる。けれ共其れは唯つた一瞬時、ホームを離れると暗黒

である。最う姉さんのお姿は見へ無い。雖然私は茫然と猶停車場の方を見詰めて居た。

斯うして姉さんと私は別れたのてある。――一週間は經、一ケ月は經つた。徒然の折り故郷の事を思ふにつけ、私は直に此の時の事を思ひ出す。あゝ今頃は彼の懷しい姉さんは什麼して居らつしやるてしよう。

夕

松江女

「好えお湯だろふー。」お母さんは言ひ放しに、彼方へ行かれた。私は、それに答へないて、風呂へ入た。此の瞬間程、身も心ものび〳〵することとは、凡そ他にあるまい、といつも思ふことを思て、中庭の景色や、青々した背戸の樹木を一目に眺めて、扨て、自分程幸福者は、あるまいと、心から湧き出てくる喜悦と、滿足とを止め得られないのが例て在つた。

入り日は、今八幡岳へ這入ろふとして、深紅の光りを西の方一ぱいに投げてる。

何處からか味噌する音が聞える、鍋洗ふ音もする。日ぐらしも啼いて居る。すべて、夕暮れの音は、寂しい感じを人に與える。私は、暮れ方を好まない、併し何となく可懷みのあるのは、朝より夕方かも知れぬ。

クラブ洗粉の強い匂が鼻を打つた、同時に、美くしい戀の花を森の中に見付けてあこがれて居た。二三年前の私が心に見える。

彼の頃は、恰度今の私が、風呂へ這入て始めて覺える樣な、嬉しみをいつも抱えて居たのだろふと思ふ。

併し、折角見つけた花も私は、到々手折ることが出來ないて了た。ひとり子て育た私は、森に往く道を知らなかつた。例へ知つて居たにしろ、往く程の勇氣がなかつたのて在る。家の人々には吝嗇者と曰はれて居た私は、他の人から、好いお子だが少し撥ね返へりて坏と言はれた事も在る。全體に內氣てはなかつたけれど、やはり弱い名には洩れなかつたと見える。

何ても老いた人達の言葉さへ信じて居ればと、性質に似合はない事を考へて居た、私は、遂に、平凡な木の果を拾はせられて了た。甘い香、美くしい花の姿は、始終心から去らなかつたけれど……。

私にのみ咲いてたと思つた花は、其後、他の人に折られたのやら、嵐に散つて了たのやら今ては後かたもなくなつて了つた。

仄かな匂は殘て居ないものてもないが。花よりも果實の方が健實て、賴母しい味ひを持てゐると悟た時、私は、ほんとふに幸福な境遇に居たのて在つた。

それからそれと、空想の糸をたぐつて居た、自分が何處を何う洗てゐたのやら、さつぱり解らない。折々アルボースや、洗粉の香が鼻に觸れる斗り。

俄かにうすら寒さをおぼえたので、再び風呂へ身を沈めた時、少し沸きすぎた湯は、全く空想の夢をさまして了つたのて在る。

師走のホノルル

布哇　上土井定子

朝陽東天高く昇りて褻の窓より斜めに光線を射込んで中なるテーブルの半面を照してゐる其蔭の次第に狹くなり行く頃朝食を濟して手にはビスケットをさげてお正月の買物に出かけたのは師走の廿五日ホノルヽの各商店は競つて勉强の廣告を出してゐる餅屋の前を通ればお正月餅受合とか安價にするとか筆太く紅赤く書いてある菓店の前を過れば屠蘇あり』とか正月になくてはならぬ屠蘇とか鹿爪らしく書き出してある雜貨店に至れば諸品大勉强新荷着景品進呈大割引と大袈裟に書いてある其れ等の前を通る寒枯鳥の姿は懷中が空急ぎ白人の店舗にさしかゝる三間四方の硝子窓をさしのぞけば金時計金鎖貴金屬寶石入指輪靴帽子50：10：正札がついてゐるのを硝子の曇るまでながめてから書籍店頭に立ち新年用繪葉書四十一年當用日記發賣の廣告文を讀み下しては二尺四方の硝子窓をきよろ〳〵見ると色々の小說雜誌膏藥等が位置よく並べられてあるこゝの硝子は薄いから破れぬ先きにと歩を市塲に運べば生臭い香がプン〳〵遣つてくるチョンミミカン〳〵と支那人がしやべり立つるふと近寄つて見ればジッヤバニ――安い〳〵と招くので五月蠅と足を海岸に向くれば馬車電車が走つてくるいや自轉車の同胞自働車の白人等殆ど分間の餘暇なし間隙なく通る足音絕間なく響く車輪の音も漸く耳に響かぬやうになつて來たふと向ふを見れば太き煙突が見へたイヤ海が見へた運ぶ足は早或棧橋上ォヽ彼處がコーランチン……小樽丸はたしかあれてあらうと思ふて見てゐると沖の方から白蝶の翼をひろげて飛んてくる樣な小さき白帆がかけてくる其少し右に當つて舟は見へずに頭ばかり三つ太き波間からポカリ〳〵浮きつ沈みつしてゐる左の方より俄に機關の運轉する響が聞へると獅子のやうな聲を出して姿を驚かしたのでふと見れば一萬噸内外とも思はる大濕船が今棧橋を去らんとしてゐる船は港の中央へ後退今度は外洋を見かけて徐々行進を初めた姿は茫然として見てゐる間に沖合遙に去つたアヽ彼の船の出て行く折りに五才ばかりの子供の手をひいたる婦人がデッキの上に煙突の煙に卷かれながら名殘惜しさうに眺めてゐた。

四つ角

能登　岩城白露子

私の家は村の中央にあつて家の角は道が四つ筋になつて居る、こゝには十個餘の力持石があつて昔から若い者の夜遊びに出るところである。私の幼い頃はどこの家ゝ皆竹垣であつたのが今は多く杉の木の垣になり、草屋根であつたのが瓦屋根になつて、こゝにも近頃ポンプ小屋と火の見梯とが建てられた、この樣な村の姿の變つたのを見るにつけ幼い折の有樣が眼に浮ぶ。紅い夕燒雲が華やかに西の空に棚引く頃私はいつも姉

様に伴れられてこゝまで散歩に來たのを今もよく覺えて居る。

今宵私一人こゝへ來て冷かな力持石に腰掛けて居ると四五人の子守が親たちの野良の歸りを迎へに出て居てそれが美しい聲で子守歌を歌つて居る。

――あの山越えて谷越えて
　奥のお山に日が暮れて
　坊の土産に花上げよ
　一本折つては腰にさし
　二本折つては胸にさし――

今歌つて居る子守歌は幼い頃姉様がこゝでよく歌つて下さつたもので私は其時何故か淋しい感じがしたが今これを聞いてしみ〴〵と昔が戀しくなつた。

今宵は十六夜であるが月はまだ出ない、夕燒雲が薄らいて四邊は仄暗い、冷かな秋の夕風が吹いて居る。

農夫の鍬の先が白う光つて、家路へ急ぐのや前の小川に鍬や手足を洗つて居るなど皆昔に似た夕暮の景である。

* * * * * *

南の方から白い笠が見えて、旅にやせた美しい二人の尼様が私のところへ來た、年上の方が。

「一寸お願ひ申します、」と會釋して。

「松田宇乃様と云はれるお宅はどちらで御座います、」と尋ねるから、私はすぐ隣の家であると教へて上げると禮を云つて暫く私の前に立つて居たが年下の方が

「泊めて下さるかね――姉様、」と云つて歩み出した、二人は姉妹であらう。やがて松田様の家へ入つたが泊めて下さらなかつたのかすぐ出て姉様の方が向の家へ入り妹様は私の方へ來た、私が

「どうしたかね、」と訊くと。

「お留守でしたの、」と幽に答へた。

「まだ野から歸られぬのかね、後で今一度行つて見なさいな、」と云ふと頷いて居る、年は十二三であらう、その美しい顏には淋しい色が表はれて居る、私も何か知らず淋しい氣がして思はず幼い尼様の手を握つた、尼様は泪組んで居る、餘程疲れて居る様である。

「今朝どこからお出てたの、」と問ふと。

「堺の永光寺から……」と答へて私の膝に顏をあてゝしまつた、私も十二の年姉様と一所に永光寺へお參詣した時足が痛んで困つた事があるのを思ひ出した。

「露様彼家も駄目でしたよ、」と姉の尼様が歸つて來て云ふと妹様はもう姉様に訴る様に。

「泊めて下さる家が無いてしようかね、」と云ふ。妹様は露様と云ふのである、懐し相に私を見て姉様と一所に北の方へ行つた、そして。

「一夜雨露を凌がせて下さい願ひます、」と云ふ哀れな聲が聞える、どこでも泊めてくれぬと見えて二人は南の方へ歸つて行つた、二人は木賃宿へ入つた様であるが宿賃が足らぬのかすぐ出て來た、姉妹はどんなにか悲しいてあらう、また歸つて來て松田様の家へ入つた、

話聲がする「私もお母樣や姉樣が御在世てしたら、」と思ふと悲しくなつて來て涙が落ちる、今宵は姉樣の命日てある、私は最早堪え切れずなつて家へ入つた。夕飯がすむと方々の家から晩のお務めの鉦の音やお經の聲が聞える、松田樣の家にも姉妹の尼樣のお經の聲がする、私は安心して其お經のすむまて聞いた。

秋の月は白う冴え渡つて、草葉に集ふ蟲の音が哀れに思ひ出を多くする、明日はまた冷かな曉の風が墨染の衣の袖に身に泌む頃姉妹は手を引き合つて殘の月影を踏んて何地へか出立つのてあらう、よな〳〵の宿さへ定まらぬ身の姉妹が墨染の衣の袖に包む身の秋を偲ばれて私は泣いた。あゝ哀れ悲しきは秋の夕暮てある。

桑摘み

上野 大沼素女子

鐵爪をはめ籠をさげて、家を出たのが丁度四時てありました、濃い灰色した朝霧が、野の面一帶にかぶさつて居て、私共の甲斐々々しく冠つた手拭や、緋襷には、かゝると言ふよりは、降ると云ひたい位、あたりは朦朧として靜かて、この中を貫いてきこえるものは東天紅を知らせる庭鳥のこゑと、何にまぎれたのか、歸りおくれた夜の白鷺が、時々グウ〳〵とないて行くばかり、外には何にもきこえません。

裾からげて、心地よい素足を踏みしめ、露ふかい野路を、溝瀨川づたへに行くと、右手の岸ては眞菰の葉が、いやに齒ぎしりして居る。左手の稻田ては葉末に宿した露の玉が、足のひゞきて鈴をふるやうに散る。丁度、馬があゆむ度毎に腰につけた鈴が鳴るやうに。

空は青藍色に霽れて、所々に刷毛書きしたやうな白雲がたゞよつて居て、極く薄い黄色を帶びた東天には、紅色をした雲切れが、丁度伊豆七島の地圖ても見るやうに散在してます。

涼しい朝風を眞面にうけて畑のあたりへさがる後れ毛をかき上げながら、小山の裏手へ廻ると、其處が私共の桑畑なのてす。かゝへて來た籠の緒を首につるしてやがて桑を摘み始めました。

秋蠶の桑摘みてすから、春のとは違つて、根のまわりだけ摘むのてはありません、一本ごとにこわきへかへ込んて、下から摘み上げるのてすが、葉柄に葉の青い部分を一分ばかり殘して、摘むのを上手とするのてすから中々摘みにくいのてす。

始めのうちは、ポッ〳〵と音のするのが面白くて、衣服の濕ることなどは何とも思ひませんてしたが、籠に七分位になつた時分には、もう〳〵袖も裾もびつしよりになつて了ひました。が、それても構ひません、雇ひの女などは三人して鄙歌の合唱をして居ります、私共も美いちやんを相手に、孝女白菊の歌を合唱して居りました。

そのうちに籠も一杯になつて、こぼれる程になりましたから、女たちの脊負ふて行つたざるに打ちまけて、また後を摘み始めました。

もう二度目を摘みはじめた頃には、空の模樣がすつかり變つて、紅色した雲も刷毛書きしたやうな白雲もなく、たゞ一帶に鱗の形した白雲が、恰も紙張りの風船を片面から見るやうな有樣に、丑寅の方と未申の方とを中心として、引き合つて居ります。

まだお日樣は現はれません。

野の面にかゝつた霧も今はやうやく晴れて、あざやかな森の姿や、面白い山の形などがよく現はれて來ました。と、例の愛嬌のある馬子が桐生へ通ふのだろう、威勢のよい追分節が、松の木の茂つた、高尾山の陰から聞えて來ます。

其うちに、お日樣が出てゝ、桑の葉についた露の玉がきら／＼光りだす、私は其麗はしさに見惚れて、しばしは桑摘む事さへ忘れて了ひました、――、

女たちが歸りませうと云ふので、氣がついて見ると、一ぱいに滿ちた籠を背負ふて、もう二三間先きへ出かけて居るのです、それから大急ぎで後について、前の小山を廻ると、末の妹が『姉ちやん姉ちやん』と、しきりに呼んで居るのです。

友の變化

青森縣　西村みや子

今年十九才になる、美根子樣は、去年高等女學校を卒業して、今は家に居る、雨あられと降り來る縁談を、何日も自分自身にて斷はり、御兩親の御言葉は耳にも入れぬ、そして、終日遊ぶでもなく、勿論働きもしない、泣いたり笑ふたり狂人の樣である、三度の食事の外は己れの室に閉ぢこもッて居る、夕暮には時々近所の野山をさまよひ、草や花としきりに話してゐる、年に四五回廻はッて來る同級會の廻文に皆な友達がなつかしいの、學生時代が戀しいのと書くのに此の人計りは月と虫は我が親友だの胡蝶になつて菫の床に休みたいの、ショッペンハウエル氏が理想の男子だの、そりや變な事計り書くのだから會では變人變人と呼んでゐた。

例に依ッて、此年八月母校に於て、盛大なる同級會が開かれた。

冴々として優しい女が一寸ハイカラに裝ひ、演壇に登り、滔々と女子に交際の必要なる故因を論じた、隅の方からあのねー、まあー、あらー、えあの變人樣、と種々の聲が聞えた、それも理はり、唯々皆がぼんやりとしてきいた。

後で先生は我等皆に言はれた、人は境遇に依つて顔や心の變はるものですと、て私は思ひましたこんなにみにくい顔だからどうかして心許りも愉快に持つやうにと先々月美根子樣は自分から進んで、陸軍大尉吉田道男とか云ふ人と華燭の典を擧げました。

橋涼み

常陸　木村那賀子

入浴を終つて表の涼臺へ出て見た、家の中は大變涼しい風があッたのに、夕方になつたらそよともしない、

「随分暑いのね」と自分は思はず口走ると、妹が「姉さん大橋へ涼みに連れて行つて頂戴な」と云ふ、行きたいと思つて居た矢先なので、早速母の許しを受けて妹と手を連らねて家を出た、太橋まで行くには、約四町位はある、金井町と柳町の間にはさまつて、流れて居る勤行川にかけた橋で、可成長い橋、町通りをぶら〳〵來ると、家毎に椽臺を出して、家内中總出て涼むで居る、歩くのに何むだかきまりが惡い様なので、なるたけ下を向きながら行くので、稍ともすると人に突き當りさうになる、妹に注意されながら、やつと大橋へ來て見ると、流石に風がある、水の上を渡つて來る涼しい〳〵風が、廂髪のおくれ毛を、ヒヤリ〳〵と撫て、行く、何とも形容する事が出來ない程い〵心地がする、橋の上をずうつと見渡すと、此處にも三人彼處に五人なか〳〵のにぎやかさ、職人風の三人連れ、ラッパぶしを唄ひながら威勢よく行き過ぎる其あとから、書生さんの様な方が二人、嗚呼世は夢か幻か、を小聲でやりながら、ぶらり〳〵と歩いて行く妹が「あの歌い〵ね」と一人言のやうに云ふ、少し先へ二人連れて而もご夫婦らしい、欄干に身を持たせて、何か睦しさうに話して居る、男は白絣の着物に白縮緬の兵兒帶、女は中形の染の着物に、黒繻子と絽縮緬の晝夜帶を、き



佳作 講習所 名古屋 寺澤信子

ちんと結むで、丸髷姿女の私が見てさへ美しい、自分は思はず立止つて見とれた、妹に「姉さん何をそんなに見て居るの」と云はれて、初めて氣がつく、急に向きをかへ、欄干に身を寄せて、此度は川の面を見た、其れ迄は氣がつかなかつたが、此時は恰ど十七夜の月が皎々と水の面を照して居る、チラ〳〵と小波が、其度にお月樣がゆら〳〵とうごく、金波銀波の花の漣、云ふに云はれぬ美しい景色、先の若夫婦の事等はクッカリ忘れて了つて、河の面ばかり眺める、下の方をヅウ——と見て行くと、ちと東によつて筑波山が、クッキリと見える、空が薄い色なのに、山が濃い色なので、一しほ美しい妹も熱心に眺めて居る、そして時々「姉さん美いね」と云ふ、自分はいつまでも此處に居たいと思ふ、と同時に偶と氣がつくと、夜は大分更けたらしい、お月樣が自分と眞ッ正面に來て居る、橋の上を見ると凉みの方はおほかた歸つて了て、自分等と五組か六組……急に寂しい樣な感じがする、自分は何しても此齋の樣な景色を殘して行くのが、つらい悲しい、此所を去るに忍びない、けれど妹は淋しくなつたのだろう、しきりに歸宅を促して止まない、て歸宅の途についた、來る時は宜かつたが、歸る時は寂しい、起きて居る家はやつと五六軒、我家へついた時は恰ど十一時、何んだか、がつかりする、そして橋の上の凉しいのと、我家の蒸暑いのとがめつきり知れる、床へは入つてからもなか〳〵寢むれぬので、いろ〳〵の事を考へ初める、橋の上の若夫婦の身の上、官員樣か、それとも、銀行員か、會社へでも通勤する方かしら、何にしても羨しい身の上だと思ふ、とそれからそれと、自分の今の境遇を聯想する、未來の空想にふける、煩悶するとう〳〵一時をきく、妹を見ると、すや〳〵とよく寢入つて居る、嗚呼妹の年が羨しい、自分の其當時が忍ばれる、懐しい、戀しい、今一度妹の年になつて見たい……と自分は又悶へた。

寫生の道すがら

熊本縣　千代子

朝まだき寫生帖抱へて、朝霧流るゝ松高村の新道を急ぎぬ、玉と散る草の露に、紅緒の草履ジメ〳〵と濕して、足もとに打よする黄金の波の美しう、稻の香高うして、はても見えず、冷やかなる風一陣サッと袂をひるがへして、いと、すが〳〵し、未だよべの眠より、さめじと見ゆる鎮守の森、さては、夢みるらむ淡き一本松のあたりを過ぎぬ代赭色の藁屋も點々見へて、朝げの烟が、ゆら〳〵と空に入る、畵板、据ゆべく選み置きし、美し小川はさながら白絹の如う、涓々の音を立てて、濃きもやに閉ざゝれたる松堤の方に流れ行くやがては草刈女、わらんべの見物も多かるべし、急ぎ筆洗に清冽の水汲みて、畵の具とけど、忽起る戞々の音！見返へれば、村の若き衆肥馬に鞭打ちて揚々と過ぎ行くなりき。

『天』

花をかざして

河野槇子

やがて日は傾きにけり
日の通路のはてもなく
たゞよひ浮ぶ花の影
取れば取らるゝ野路にして
少女なればや
そゞろぎに路邊の花をかざしみて
うつゝなの笑み、血のゆらぎ——
冷たく迫る夕靄は
劒ふくみてつと刺しぬ

胸の潤葉はきれ〴〵に
溫かき巣は地に落ちて
我夢は破れはてにけり
衣の象の闇深く
消ゆる憂ひに身ぞ顫ふ
碎くる花のつゆよりも
脆きは夢のほゝゑみよ
微風は闇より溫う頰をなでぬ



眉にぞ落つる不朽の輝き
仰ぎ見れば高澄める天の碧り
雲の白きは見えながら
俯きてのみさまよふ野路に

髮のそよぎに
油ならぬ床しきかをり
幽かなれども胸にしみて――
まさるはたゞ憧憬のみなるを――
堪へがたきかな

弱きはげに花かざす子がさがなりけり

ああ彼方空より來り
暖かき胸より出てゝ
さすらひの故里遠き我姿
かへりみてはおのづから
泪にうるむ瞳をあげて
光させよとひざまづきぬ

殿薫の詩(評)

又曰く、藝術家は須く醉へ、醉つてゐる態度が乃ち詩である、自ら覺めやうとして、なまじひ平凡なる理性に囚はるゝやうなら詩は作らずとも可い、此作者、醉ふこと深く、醒むること淺し、幸いに詩の生命あり、願はくば少しも醒めずに歌へ(評)

『人』

薄き光

綠 子

黑きは暗の野の面、
蒼白みたる空の色、
あゝ茲にこそ黑髮を
腕に卷きて生と死の
綛絲を織る紋樣を
伏してや見なん世の相と。
不圖こそ見ゆれ星の珠、
懸け連ねたる生の絲
さやに動きて紅の
彩の浮びよ、紫の
渦の匂よ、
將は又黑き憂の出現よ。
今朝ひらき生の謎解くるを思ひ
更に又、
地の實相に萬象の眠の果は、
死の影と
顧みはすれ正しさの
憾何處にか隱れゆく。
眞洞の暗を訪れて、
想はきゝぬ茲ぞかも、
暗は默せり、
さはれ又薄光する海の底
探りて見れば浪の音は
(汝が肉をのみ彼は伺ふ。)

思索を要する作である、純然たる象徵詩とも言へないが、傾向は其方で、有明の「蠶のおもひ」に似た句法である、又少し洗煉すると透徹した好い作になつたらう、第二聯は最も好し、想像の自在を極む(評)

『秀逸』

つれびき

長野縣 しぐれ

五月雨のふりくらす、

うす寒き町の夕、
足毎に迫り來る、
暗の上にいと低き、
淋しみの譜をきざみ、
さらぼいし老牛は、
ほふり塲にひかれゆく――。

あな淋しさみだれの、
ふりくらす町の道
いづくまでつゞくかや、
とぼ〳〵と悲しみの
なげかひのふのゆらび――。

破れたる胸の戸に、
何物かそとよりて、
つく〳〵とうすやみは
すかしつゝ「ふ」のかげを
やがて又ふるう手に
古びたる米ヲロンを
悲しげにつれびきぬ――。

五五の調も手に入つて居るし、意味も新しい、何れ詩を愛讀して居る人の作であらう（評）

きれいと

羽後　菊池りう子

幽なる黴の香ぞする、
雨つゞき、幾月か、
小暗き土藏の片隅に、
すて置かれたる古琴は
絃のしめりに、
うめき居ぬ。

病人のつれ〴〵に、
そをとり出し調ぶれば、
あやし音色の凶しきかな。
（病女は凶鳥の羽音きくごと
眉うちひそめ見守りぬ）
朽ちはてし絃はたゞ性もなく
ふーと許りにきれぬ。
「汝も又人にすてられ、
我と我命たちしか」と
斷絃を胸にし抱き
よゝと泣きぬ。
三十路に近く獨居て、
小暗き室に病女は。

好い處を捉えながら、力が弱い、詩を作るには今少し根氣と精力を要する（評）

眼を病みて

東京　長谷川靜枝

入梅のやうな雨がシトシトと降つて、陰氣な日だ。目をねむつて凝と考へる――。
ポタリ――ポタリ雨垂の音が筧を傳はつて、幽かに響く――。私は魂の拔けたやうに、恍惚となつた。
何處か遠くの方で、コーンコーンと鐵を鍛へる音が、風の吹き廻して時々聞えてくる。
と、私は紅い焰の中て働く、

大勢の眞黒な男を思つた。
そうして生の努力と云ふことを、
泌々と感じた。
雨垂の音が急に忙しくなつて來た。
眼を開いて見る――。
見えない。
霧でもかゝつたやうに、
ぼーつとして――。
木の葉も花も、
みんな一色にかすんで居る。
あゝ私の眼――私の心の眼も
こんな風に、
もはや霞んで居るのでは無からうか。

口語詩の行はるゝに連れて、此種の作を多く見るやうになつた、口語詩は一時の流行でない、根底のある初めの運動だ、流行に應じて作つてみやうとしても、それは一時の人眞似に止まる、强ち此作が摸倣とは言はないが、獨創の領分は多くもない、而し上手なものだ、なか／＼好い處があつて棄てられない(評)

をとめ

下總　若杉とら子

華やかの春のうたげに
緋衣の處女幾人
伏目する袖に裳裾に
香りよる酒の昧、
甘しと思へばあゝ幾つ、
しひられし玉の盃
唇に運ばんとして
双の手はー醉ひなばと
私語あひつ
ゆれてこぼれて
苦からばと響きては、
高なれる鼓動の中に
叫ぶ聲――處女が寳は？何なるぞ、
生命の玉を傷くるな、
醉ひて
純白きを染めもせば
處女の汝は死するなり
あゝ處女の歡――
我知らず戰慄きて
盃を手よりすべらかし、
ふみ碎いてつと起つ袖の、
憂しや紅ー

此頃我が文壇の女詩人に繰返されつゝある處女の純潔を云ふこと、是も其を歌へる一つ、後の五六行太だ佳(評)

盲

土佐　石川きよ子

風こそ山に渡るらめ
さ蒼の梢さら／＼と
すがひゆく谷より谷へ。
青き世のゆうぐれて
ものゝ文わかちえぬ
「盲」は憂はしげにも休息らへる。
夕ぐれなれば重き心の
ひた疲れ憐たげに
愁ぞ見ゆる明らかに――。
うつむきて何をか聽ける
草原をのがれゆく
ものゝ喘ぎのかすかなるひとき。

谷底出て夕の色は
山腹に居ずくまり
しく〳〵と泣ける物ごし。
闇はも暗しまたゝけ
ど
萎へぬ心も木の莖も
草も木の葉も
あなあはれ「盲」はな
けり。
憂愁はひたに
山を包みて堪まじき
その匂
ひし〳〵と心をそそは
める。

新意なり、而かも浮薄なし(評)

櫟の切株

土佐　川島朝野

新體詩



佳作　川口湖畔　山梨　花田よしの

丘にして
未だ生若き心肉の
瑞葉ぞ茂る櫟の幹、
誰かそもそこに試めせし
斧の鋭さ、深き執着断ち割きて
敏衝の爛れ随蝕みつ、
皮の蝕みの瘢のあと
喰ひ入る如く樹を呪ふ。
呪咀に堪へず、
斃れにし死骸の紀
念、
切株よりぞ――
常悩む「一生」を懸し
み、
若き芽は東風にささ
やき
碧茂る、其若木古り
し想念に渦きて
明けゆく空に艶だつ
や、
若き色、霞の華ぞ綾
にさく、
奇し香の流れ我四肢
を
取りまくこゝち、あゝ襲ひよる。

切株の詩は恐らく初めてはないけれど、創意あらしめやうと努めた作者の労は甚だ多と

する(評)

雨あがり

神戸市　山本幽霞里

雨あがり、街のぬかるみ、
紙片や、草鞋、細くづ、
横はる、むさきむくろに、
「執」の香ぞまつはりくゆる。

やはらかき夕日、ひたひた、
そびらより我を照らせど、
何者かあと追ふこころ、
得ぞたへぬこころのなやみ。

うねうねと「劫」につらなる
輪の跡や、はみいだされし、
泥土のいたはしきさま、
うねうねと、はてこそなけれ、
たどりゆく右手のかたへに、
獄めく煉瓦の圍み、
鐵の門はくちをひらきて、
今「人」をのまんずけはひ。
片がははつづくにごり江、
水面のみ光にくるめけど、
濁りたる愁の底に、
何ものかひそむに似たり。

重たげにゆきかふ電車、
直からぬ軌道をまがる、
きしめきよ、こころの樂か、
なげきの緒かなしみの紋。

雨あがり、街のぬかりを、
喘ぎつつ、人をおもひて、
ああ倦みぬ。――斯くて、いま、
「日」は、落ぞゆく、「葬」の闇へ。

觀察も細かく、筆も新しい、詩歌らしい匂に乏しいのは矢張斯う云ふ作に通有の缺點で、毀ち否めない、(評)

かた馬車

下總　ゆき

一昨日も昨日も降りつゞいた雨は、
今日も止まないで
日が暮れる、
かた馬車はいつもの樣に、
成田並木を雨に濡れながら、
疲れて瘠せた體を重い車輪の音と共に、
こちらへ動いて來る、
私は乘つた、
中には一人の乘客も居らない、
馭者が一人首だれて默つて居る、
私は何にと無く此の人の身の上が聞きたく、
幾度か話しかけたが、
馭者は其の度毎に淋しい笑ひを洩らすばかりてあつた、
馬車は、あへぎ〳〵て宗吾へ着いた、
私はくはしいとは聞かなかつたが、
こう思はれて仕方がない、
あの人の二十年この方の歷史には、

其がた馬車にふさはしい事實がある
てはあるまいかと。………

新式の散文詩だ、口語詩と云ふよりもつと散文に近い、けれども一寸した調子がある（評）

夢の宮　大阪　香雲子

湖水の崖に波立ちて
白衣の美女は小船より
細き御手を差伸て
「君よ來れ」とまねきけり
美女が艶なる瞬と
左手に咲ける白百合の
床し優しきうなづきに
心動きて吾知らず
崖より我身躍せば
春風花の落る如
しばしは空に漂ひて
小舟の内に音も無く
降れば姫は「いざさらば」
涼しき御盤に自づから
船は湖面を辷り行き
鏡の如き水の上に
姫君の姿と白百合の
ゆるぎの影ぞ映り行く。
やがて蝶舞ひ鳥歌ひ
白薔薇紅薔薇亂れ咲く
樂しき園に着きぬれば
此れぞ妾が住居なれ
「いざもろ共に遊ばん」と
ためらう妾手を柔かく
手握りもちてゆるやかに
大理石もて造りたる
門のかたへにしるべしぬ
黄金の扉音もなく
開けば共に入にけり——
珠と輝く夢の宮居に

孤獨　石見　荻山哲子

灰色に暮れ行く日
工場の槌の音
聞き倦みて佇めば
市の人夢の如
うすら／＼行く中に
妾は只一人なり。
どよめきは遠方に
消えて行く後ろより
石鹸屋の廣告の
喇叭の音懶氣に
通り行く道の側
妾は只一人なり。
日は疾くに落ち果てゝ
電燈は青に赤に
中を行く電車馬車
男女づれ親と子と——
妾は只一人なり。

尼の歎　備後　甲田宗子

夕暮精舍の欄によりて、
わか尼乳房に秋をいたみ、
芙蓉の紅を人にとかず、
伽藍の朽壁歌はそめし。
低唱廊裏に人のなきを、
血ひえし唇うれひに噛み、
山寺の入日おもをそむけ、
誦するは何の賦『若き思ひ』。
許せ望郷はもとよりなり、
信や何行や何こゝに三とせ、
鐘樓の蔦道草に伏すも、
遂に人里戀しかりき。
昨日寺に入りし隱者云ひぬ、
『秋作おほく民は平和、
夕のむしろに快樂の酒、

とく山を下りて村に行け」と。
されば墨染の法衣姿、
今日も鐘樓に一人さむく、
暮れぬとちひさく六つを撞きて、
思ひは餘韻に永劫の不滅。
かくても秋思の胸ははれて、
今年もさびしう秋は行くか。

森の少女

阿波　中村かつ子

紫の水やたゞよふ小流れの――
汀べに咲く眞白なる
小百合の花はさながらに、
澄み渡るみづ色空に映ゆる如。

森の中――
木と木かさなる綠葉の、
涼風や吹く木かげにて
憩へる少女十八の
やわ肌人にゆるさねど、
冴えてぞひびく笛の音に、
うらわかき身を木によせて、
ほゝ笑む樣のしな高し。

＊　＊　＊　＊　＊

日はうする――
みづ色の空には雲の渦はして、
雨やあるらし……常夏の、
涼風馨る森の中――
木の葉の戰ぎかすかなる、
笛の遠音はふと止みぬ。
うた歌ふ森の少女はかなしげに、
うするる空の夕星や、
夕映雲の彩どりや、
うるめし眼にもあふぎては、
美くし面のかゞやきに、
何とはなしに憧がるる如。

雨の日

熊本　鹹よし子

灰濁める、醜雲は、
終日を、絡み居て、
滲々と、寂びれ音に、
雨の音、軒廻る。
雨の日の、うらさびし、
濕らへる、薄暗き室、
死の香り、漂ひて、
陰森と、冥府の如、
胸の傷、あゝ痛む。

たそがれ

赤坂　川島ちづ子

鐘沈む、――よろこびかはた悲みか
眼路はるか一ひら白き雲ぞたゞよふ、
淺茅生は凋落の刃にをのゝきて
薄暗き「不安」の霧ぞ野を圍む。

永劫に高鳴る千重の波、其底の極、
探り求めつ綾姫の秘む黃葉貝の
含める眞珠、七彩の光たぎらし
海の花麗かに照ると――星光る。

虫はとぶ――何處にか
迷ふとすらむ萍の白く浮べる古沼に
黑き羅羽の影映えつ、そは毒の
憂腦の表象、黃ぞり斑葉は地を慕ふ。

地を慕ふ鼠色の喪の衣「寂」の戯れ、
地を這ふ煙の姿こそ鈍の空ゆく
鳥の行手の我心、煩えに似たれ、
ひた／＼と歔欷ぐる聲は――夜の雨
か。

あゝたそがれの野路のいろ、之や息
息の緒たえん仙姫の瞬くけはひ、
夕づゝの光おつれば「禍の原」
荒野わたりて鐘は鳴り虫とび過ふ。

散り行く白蓮

大阪 政子

うき葉立ち葉は今日もなほ、
清きみ玉を握れるに、
花の命の短かくて、
早傪くも散りて行く。

暮れて門邊の片あかり、
水に浮びし花びらを、
星の光りに眺めては、
我に得堪ぇぬ想あり。

有明の月色やせて、
曉の風かほるとき、
戀ならねども戀しくて、
朝な〳〵に起き出でし。

あゝ白蓮は散り果てぬ、
夢より淡き香もとめて、
愁は絶えじ人の世よ、
快樂の醉のさめて後。

葡萄の樹かげ

福岡縣 井上あい子

渇きし紅の唇に、
味ひそめしうれしさを、
夕べ〳〵をほてりがに
乙女ながらのものおもひ。

あした葡萄のむらさきに、
つゆうつくしう布けるとき、
あくがれこゝろはからずも、
房におもひは殘しけり。

ちひさき胸にさゞなみの、
わくをおそれしわれなれや、
まだあげそめし前髮の、
おもへばわれに罪なりき。

舞踏室

芝 眞崎 靜子

美しき胸の飾りの土耳古珠、
小女等の胡蝶の如も、樂の音に
(ヸオロンとピアノの調)、——相舞
へば、
七彩の美し虹の花模樣。

聯ねたる珠と珠とはふと觸れて、
しづやかに暮れかゝる夜の夕闇を
小女等の歌ふが如き、優し音は
やわらかに胸の奧底にさゝやきぬ。

水晶の細きうなじの盃に、
紅の血潮を染めし葡萄酒は
健全を祝ふと充てぬ、わが前に、
花の如照る灯に輝きて。

胸薫る蘭麝の香のすゞろかに、
歡樂の人々めぐり漂へる
美しき、燭かゞやける舞踏室、
貴やかに月さし入るゝ玻璃の窓。

春の晝

三重縣 瀬崎せい子

春の晝
ふと見る樹間の黃金なす
蛛の絲にしむつむ花。
何處より
果たや、何處へ
さて知らず——
行くに有りしを。

微風に
絲はふときれ
花瓣は
散り行きぬ、又——

何處へか。
此時思ふ我が胸の思の絲と
なつかしき、君が笑ひと、痛ましき
風の荒と、しかすがに。

皿

讃岐　香川　青江

わき目よりあゝいかほどの
めぐみもてながめやるとも
いさゝかの希望の光り
活力を見出でがたき
灰色の小さき皿の
わが身かなし緋の帶すれど
七色の黒髮あれど――。

あゝされどわれ自らは
殊の外喜ぶなりき。
自らはたらふなりけり。
をもむろに注がれそめし
葡萄酒の皿に充つとき。
あゝしばし東の間なれど――

編物

川越　むらくも

春に糸あむたをやめや
むづくしかはた慰みか
ふと白き手を休ませて
あらぬ所を見つめつゝ
紅潮す顔をそむけては
人や來ると目をくばる
ほゝゑみやめてうつむきて
白き毛糸は又もあまれぬ

古沼

上毛　飯野　花子

夜の靈しづに青葉を搖りて、
天降るや寂しき調べは添ひぬ、
ゆら〳〵さゞめく水面の小波、
いまたつわが足夢路を踏みて、
想ふは太古のさまにしあれば、
さゝやく秘密ぞ古沼の心、
無象の神こそ幻にたて、
獸せるほだしはかのよの罪、
少女が黒髮亂れてながく、
久遠に曳きたる愁ひのきづな、
わが身を絡むと遠のく魂の、
寂しの螢火苦悶をすべり、
古沼は悲哀の調べをそへぬ。

闇おちぬ

志摩　奧野　きり

闇おちぬ、皐月のゆふべ野の小路
綠の色も、萋草もいとしなやかに

潤ほひぬ、一日の疲勞――
たづたづとわが行く足のたゆげさも
なかば忘れて何ならぬ誘はれごゝち
はた云はめ――魂のあこがれ
かゝる時ふと仄めきぬ、白銀の
うばらの叢ぞ夜の帳の華紋のさやぎ
面影ゝ朧ろげながら。
さてあれば、暗き心にしみじみと
あゝ柔らかき思ひ出はこの時にこそ
うかび來れ――香のさゝやきに。

夕の海

青森縣　葛巻りさ子

汝が胸深くこもれる秘密ありて
常刧夜をなす底なる泥岩影
黒蛇眠れる鱗の薄青透き
無限の寂寞墓原領ずと云ふ。
さはこの夕何の意、ああ海原、
遠波白帆入日の光うけて、
華やかな、平和のかげ、
たとへばまどろむ乙女の夢に似たる
よ。

「地」

産前日記

檜垣留女



七月廿五日。夫の休暇も後四日となつた、去年は海岸て御飯事の樣に赤飯や淡雪かん等を作らへたが、父上の前をはゞかつて其れも出來ぬ、午後待つて居た小包が來た、着物や胴着が七枚、皆揃ひもの、可愛いの許り、矢絣の唐ちりめんに紫甲斐絹の裏のついたちやんちやん、夫はひろげて笑つて居られる、外におしめと私に絣が一枚、子供のは行李にまとめる、夜、姉と妹へ禮狀をかく、夫は蚊帳の中へ螢二疋を放つ、風が涼しい。

廿六日。六時頃夫は魚を下げて歸らる、起きるとすぐ海岸へ行かれたさうな、五寸位の鯵十六て二十錢、お腹が動いたり張つたりするのて一眠りすると夫は居らない、三時歸る、之から鎌倉のおうめ樣（産神）へ參詣するとおつしやる、人のする事はせぬと思遣りがあると強いて五時半の汽車て行く、夕立模樣の空が氣にかゝる。

廿七日。朝の間洗濯して其れから夫に助けて頂いて土用干をする、少し早いが一日と苦しくなるので、夜無理に

横須賀へ誘ひ出さる、暑いやら苦しいやらでモーモー來まいと思つた。

●●●廿八日。國から寫眞と手紙が來た、無理はいかぬから早く老婦を雇へとあつた、此頃は眩暈がしてならぬ、お產で亡くなられた母上を思ふて神經が昂ぶる、夫はパイナップを買つて來て下さる「之はお腹の子が可愛いからだよ」と前置がおかしい、夜、椽で涼む、女の子ならばひろ子、之は私の望み、男子ならば夫に任すといへば、權兵衛が好いが、檜垣では語呂がわるい、やつぱり山本權兵衛でなくてはいかぬと、私はつい笑ひ出した。

本誌の讀者だからとて必ずお孃樣ばかりでない、若い奥樣も澤山にある、玆に產前日記の來たことも不思議でない、斯う云ふ日記は殘して置いて後に讀むと實になつかしいものだ、くどくなく、いやしくなく、隨分家內のことを書いてあつても、嫌に思はれない、好い日記だ(評)

『人』

八月の末

小石川　よし枝

●●●●八月二十日。朝高岡のお父樣に、出す小包を拵へてゐたら「仕方がないから張り物しませう、明日から學校が始まりや何も出きやしない、ほんとに私は張り物大嫌よ、だつて腰が痛くなるんですもの」「さうね、腰がいたくなつて私も嫌い、だけど母樣私しますよ、民江樣がいらしつた時は、すつかりして下すつてしかつたけどねえ」とお春さん、或は私のひがみかも知れぬが、あてつけとよりおもへないので、例の意地から頭痛をおして私がしませうつて、朝の八時頃から夕の四時すぎまで、十三反分張つた、實際中腰になるので腰もいたい、日向にてるので頭は一層いたむ、苦しいけど、あれ位でヘコタレたといはれるのが殘念故、夜は皆樣と一緒に雜談する。この日お粥に少し食事したきり、口中がにがくて、何もいけぬ。

●●●●二十四日。こゝでは却つて男の方がおやさしい、殊に先生の深切にして下さる事、けれど、お春さんは素より、米さんも夫人もけふは如何とみまつて下されたためしはない、床についてけふで三日になるけど、唯御飯時に、清が、左樣いつてくるだけ、頂きませぬといへば、さうですか、昨日もお茶の間で、「ほんとに厄介だわね、一寸働いちや二日も三日もねるんですもの、あれて學校へいけるのが不思議だわね、やはり我儘なんですわねえ」とお春樣の聲、「ほんとに我儘ね」、と十二の米さん「あんなじや仕方がないから斷らうかとおもふのよ、」これは夫人のお聲、すると又お春さんの聲で、「ほんとに斷つておしまいなさいよあんな人、」それからいろ／＼私についての話があつたらしい、けれど私は何も厄介者にきてるのじやないちやんと食費も持つてきてる、こちらこそ却つておせわしてるじやないか、

裁縫だつて隨分私がしてやるし女中のゐない時は臺所だつて、したし、夫人のおるすには赤ちやんのおせわだつてするし、
衣江さんのおつしやつた通り同年輩の人のない吉田先生のお家にすればよかつた、今更に後悔する。

●廿七日。日記をつける勇氣もないが、けふは百代さんがきて下すつたのでつける。
朝の九時から四時すぎまで、私のやつれたのに、まあおやせなすつたわねえ、と大きな聲を出されたのでハッとした、驚かれたのもむりはない、もと／＼肥えた方ではなかつたのだから、お晝は、夫人におねがひしておすしを取つて頂き二人で食べた、そして殘りは清にやつた、お歸の後米さんに、おみやのなしあげませうつていつたら病人の物なぞいりませんよつて、走つてゆかれた、夕方桂さんがランプをもつてきて下すつたので、あげた、皆さんとおあがり下さいつて、その時、けふ芝へ行つたからとつてきましたとて、好物の最中下された。

多くの日記文が叙事式であるのに、之れ獨り抒情式であるから目に著く(評)

『秀逸』

飼鷄日記

滋賀縣　若井きく子

●●●廿八日。心地のよい日である。今日もまだ雌鳥が卵を暖めて居る、鷄舍へ來て見ると十五六羽のアンダルシヤンが頻に餌を呼んで居る、小米を五合撒いて遣つた皆が爭つて嘴を鳴らし乍ら拾ふ。此鷄舍にハンバークが一羽交つて居るので、いつも喧嘩してならん、聽て米を皆食つて了ふと澤山のアンダルシヤンがハンバークをいじめる、翅をつゝいた鷄冠をつゝいたり何うも見て居られないので今日は外へ出して遣つた。向ふの畑でプラヤがコン／＼と戸を叩く、開けて外へ出すと皆竹籔へ駈けて行つた。裏の溜池で鵞が鳴く。
餌が盡きたので正午から餌を買ひに行つた。
今日産んだ卵の數は、アンダルシヤンが十二個、プリモースロック十八個、鵞が五個であつた。

●●●廿九日。十五個抱かして置いたミノルカが今朝は殘らず孵つて居る。ピヨ／＼と鳴くのが可愛らしい、雌鷄の羽根の間から澤山頭を出して外を覗いてゐる。
正午から雛の小舍を作る。忙しい日である。
アンダルシヤン十個、プリモースロック十七個、鵞六個

●●●三十日。今日は又とない晴やかな佳い心地のする日である。垣根の秋海棠が美くしい、朝顏の蔓は最う枯れてゐる、痩せた蝶が一羽飛んで來た、鷄につゝかれてすぐ死ぬ。背戸の柿が大分熟した樣だ、最う程無う栗も落ちるだらう？鷄舍の傍にある棗が珊瑚の樣に成つてゐる、百舌鳥が來て淋しさうに鳴く。

アンダルシャンに羽蟲が出來たと見えて、澤山の鷄が首を曲げて羽根をせゝつてゐる、急ぐ羽蟲の驅除をした。雛の大きく成るのが嬉しい。
今日は月末である。夜に入つて勘定をする。卵賣代金參拾五圓五拾錢、餌買代金拾五圓、差引貳拾圓五拾錢の利益であつた。

利益のある日記と云ふと戯談になるが、全く實用的の日記で、而して趣味も深い(評)

麻時　　福井縣　片山千里

七月十日。晴、餘り毎日の天氣ですから、溜の水を落さねばなりませんで……と上出の小母さんが云て來たので、母上と自分と藤野と三人で麻を撰つた。
十一日。晴、朝發二に筵や苫を苅りて、いつもの通り川傍へ蒸場を拵へさせ、藤野には舟に水汲ませて、自分は小麻三十二束と、へだをれ十三束に水を浴せて、昨日川へつけてあくを出させて置いた、菰と莚を着せて、藤野と二人小豆の草を取りに行く。今年は麻も少ないしむら出がして、困まつためにも會ふよりはと、晝と晩は入れぬ事にして、母上に蒸をくれて貰つた。
十二日。晴、藤野と二人で蒸をくれて、大ぶし小ぶし五十三束と赤め十七束とを入れて、二人が辻田の草を取りに行く、お晝も晩も少し早く上つて蒸をくれた。
十三日。晴、朝むく起にて蒸場を見たが、一昨日入れたのが上かげんなので、藤野には先だけ浴止めて下家へ出させ、大撰苧六十一束入れて、三人して小麻とへだ折を剝ぐ、中々骨が折れた母上は炊事の方もなさつたが、晝過ぎまでかゝつた。午後舟の水が無くなつたので、藤野に汲ませ、自分は母上と二人で蒸をくれた、三時頃から三反早稻へ草を取りに行く、晩には少し早く上つて蒸をくれた。
十四日。晴、朝早く蒸場を見る、少し强かげんなれど、ふしから落るといけないから、藤野に下家へ出させ、あかめはそのまゝ晝まで置く事にして、三人で剝ぐ、午後は藤野にあかめをまかして、自分は小撰苧七十三束入れて、昨日寢さした苧を煮る、母上は垢を落された。
十五日。晴、朝早く蒸場を見る、大撰苧剝ぎかげんなので其を出して、藤野に剝がせ、自分は剝いだり煮たり冷したり、母上は垢を落された。
十六日。晴、小撰苧七十三束出た、馴れ過ぎたので父上に煮たり冷したりしてもらつて、自分は藤野と競爭で剝いて見たが五束負けた。午後は藤野に蒸場をこはさせ、自分は垢を落し習つた、晩までに十三束、母上は三十二束。

兎に角特色があるから好い(評)

露の日記　　芝區　眞崎星堂

八月十日。早朝より起きて、野菜の蟲取り。

一家總出にて、裏の畑に行く。程よく濕める地の裸足に心地よし。どの草も皆重げに美しき露の玉を宿して、踏むごとにはら〳〵とこぼる。大きなる玉菜の葉の、ころ〳〵と露の白玉こぼるゝ下に、寸にも足らざる蟲の葉をかめり。かゝるを一つ一つ、葉の裏かへして取り行く。大方に取り終へて、足をそゝぎて朝の食事をす。垣根にからめる朝顔の十株ばかり、大輪の花、紫に紅にしぼりに、艶をきそへり。



伯母の草花いけらるゝを見る。

今日は夏に入りて、一番に暑き日なり。都の暑さは如何ばかりぞ。母上に手紙差し上ぐ。

夜に入りても風なく、暑さ堪へ難し。伯母と從妹と三人にて町に行き、夜店にて白百合花二株、買ひ來る。

●●●

十一日。曇、松島に行く筈なりしが、從妹の急の腹痛にて止む。

昨日の百合、朝顔の間に殊に美し。裏の笹籔の側に、露にしつぼり濕れて咲ける、名も知らぬ草の美しき花を折りて花瓶にさ

日記文

佳作　田舍の家　陸奥　立花とも子

し、従妹の枕邊に置く。
午前の中は甚だしく苦しみし従妹も、追々に心地よき樣になりて、皆も安心せり。
明日は松島に伯父と行く筈。
すみ子樣より端書はがき來る。
（去年の夏、仙臺の伯父の家にありし時の一節。）

正しく日記の體（評）

朝顔日記

神田　尾立浚子

●●●●
八月一日。晴、ひる過ぎ妹と共にお寺へ朝顔をもらひにまゐる。五鉢ばかり貰ひて歸る。五鉢の中「白翁」と云へるは白の大輪にて中央は薄すらと桃色がかつてあるとか、又水色に處々點々あるは絞なりと和尚樣に敎へられぬ。皆大いなる蕾を持ちて美し。夜靜子樣より繪葉書まゐりぬ。
●●●●
八月二日、よべ妹との爭に夜更して起き出てしは旭の影うらゝかなる八時なりき。昨日もらひし朝顔咲きぬ。「白翁」と云ひしは誠に美しかりき、紅は紫ならむと思ひて爭ひしが負けぬ。垣に咲けるまだら萌黄などもまじりて露を含める風情またなく美し。昨夜鈴蟲のなきしは此の下蔭なりしかとさがせども見あたらず若葉の下露猶の化粧するもいと興多し。午後新田の伯母樣來りぬ。
●●●●
八月三日。朝まだきより霧たちこめて雨降り來るかと思ひしに、やがて限なく晴れ渡りぬ。鉢の朝顔三つ咲

きぬ。一つは緋と紫との咲分なり。此の花は妹好きなりとて机上にすへぬ。午後春子樣の家を訪ひぬ。玆にも朝顔あまたありとかにて明日の朝見に來る約束して歸りぬ。夜和尚樣來りて面白き話種々うかゞひぬ夏草すゞしくなびきて、にくからぬ夜にぞ侍りし。雲だにも見えず。
●●●●
八月四日。野草刈の歸りにお秀百合の花を取りきてくれぬ。瓶に活くればそこともわかぬ香の身にしむを覺えてうれしかりき。午後夕雨ふり來れり。向ふの山に白雲のたゞよふさまもいと長閑なり。朝顔雨に打たれて二鉢たをれぬ。をしき事したりとて妹口惜しがりぬ夜、雨やみぬ。新田の伯母樣の處に行きて夜更くるまで話し暮しぬ。小夜嵐庭の梢を吹きて凉しき夜なりき。
優しき文體、朝顔のあはれなる姿に似たり（評）

歸る日記

若代初子

●●●●
八月十六日。明日は妹が行く。早いものだ。「けふ突然奥樣から、お暇を頂きましたから、一寸歸省いたします」といふはがきを得て、幾度か停車場に足を運んだのも昔となつて、虫もなき初め、合歡の花も散る今また別れる事となつた。午後から、みんなで行李の荷造りをする。「これを解く時は、どんなに嬉しかつたか」と妹がいふ。
「雨が降つたら、行かないでせう？」と小さい弟までがしみじみ、いつて妹の顔をながめる。「いゝえ、雨が降

つても雪が降つても、行くんですよ、また來ますから……おみやを澤山もつてね」と弟の手を握つて、いつた妹の目には涙がうかんでゐた。母は『よく奧樣やお孃樣の仰を守つてね……決して氣早やな事は、してなりませんぞ』と繰返す。何ても、ガミ〱いふ癖ながら、人一ぱい涙もろいわたしは、默つて夕暮の空をながめて泣いた。あゝかうして別れてしまふのだらうか？……人は。あす、妹に別れるわたしは、此秋から此家の人てない……と思ふとわけもなく昔が戀しい。『明日は早いから、眠りませう』といつてはまた語り出して、十二時を聞いた。どこかの村から盆踊の太鼓が、かすかに響く。

●●●●八月十七日。『けさからは、心がしつかりして、眠くも何ともない』といつて妹はもう仕度をした、空はよく晴れて、白がすりには涼しい位。迎に行く停車場はうれしいが、別れる停車場は悲しい。きのふに引きかへて、家の中はシンとしてゐて、母は、ボンヤリして仕事も手につかぬ樣子。夜は、ゆふべより多く虫が鳴いた、これからは涼しくなるばかり、唐もろこしの葉を吹く風の音も、もう夏のものてはない、田舍娘の踊り歌も淋しく聞える。

情のある日記(評)

田舍乙女の日記

大分縣　田代とみゑ

●●●●八日晴天、暑さ日に强し、未明母上とお茶の子を濟まして上原の畑に芋の根飼ひに行く、ことしは蔓の延び方よしとて母上は、お手入れのことにつき、諄々と語りたまへり、露まみれに働きて辛つと八時ごろすむ。

●●●九日晴、田の草の手間て糸さんところに行く、晝休みに絹子さんに手傳つてもらつて、蠶の尻を替へた、二眠後、だふやら、しけてゐたのが、今日は餘程勢づいて來たので、私は嬉しくつて、眞晝の暑さも我慢して堤の土手まで桑摘みに行つた、午後は一段暑くて、凌ぎ難し五時頃、俄かに夕立來る。

●●●十日晴。夕べ臺所てお仕舞してる時、明日は晝休みと、事振れの聲てあつた、私は何んなに嬉しかつたらうか、今朝は特に早起き、臺所、戸棚、押入などの掃除から、ご飯の用意や、裸足て水を汲んてお風呂を立てるやら、それは急しかつた、八時頃中學の兄さんから、女子文壇を送つて來た、母上と口繪を見てはなしをしました。

午後縫ひかけてあつた襦袢の袖をつけてゐたら、良子さん來る、二人て女子文壇を讀む。

文語と口語と錯雜して、文體は不一致てあるが、筆は眞摯(評)

三行日記

越後　阿部秀子

●●●●●八月一日晴。今日鉢の朝顔が咲き初めた、正午の温度

九十二度、蟬が鳴くので猶暑い、夕方芳子樣から御葉書が來て明日遊に被入るとの前ふれ。裁縫て暮す。

二日晴。朝庭を掃たら蟬の脫衣が十三、松田先生林先生に暑中見舞を差上た、午後汗をふき／＼芳子樣被入る、氷水御馳走する、四時御歸り、正午、八十九度。

三日晴。朝叔父樣の處へ御使に行つて來た。午後庭の杉の木にハンモック釣て女子文壇見ながら知らぬ間に寢入て蟬の聲て目がさめたらもう四時、正午八十五度

四日雨。今日一日掛つて單衣を縫ひ上た、夕方から雨が晴れ日も出たので涼しくて生返た樣、ハンモックに乘つてたら杉の木から月の雫がボタリ／＼正午八十度。

五日晴。午前芳子樣御尋したら御留守、仕方ないから叔父樣へ寄て十二時歸宅、正午には九十三度、暑くて玉の汗が流れる樣、夜になつてやう／＼息が吐けた。

六日曇。蒸暑くッていつそ一思ひに降れば好いと思ふてたら夕方から大雨大雷、その氣持のよい事寢る頃にはもう月が出てキリ／＼スが好聲て鳴て居た正午九十度。

七日晴。芳子樣被入て留守にしたわびを云ひながら、一週間許り何處へか行きませんかとの事、父に伺てから御返事致ますと申上げて置く、午後裁縫、八十三度。

八日晴。父樣に避暑の事伺つたら御許が出たので、午後から芳子樣へ行つて、鯨波へ十五日から行く事にきめて來た、夜御叔母樣被入る。正午八十七度。

九日雨。一日ビショ／＼降つてたので涼しくて好いけどしめつぽくて私嫌い、午後常夫樣(從弟)がハモニカ持て被入たのでヴアヰオリンを合せて面白かつた。正午八十度。

十日晴、終日裁縫て暮す、夜は月が好いので燈火消して唱歌うたつてたら、キリ／＼スも一しよになつてズーイッチッヨ／＼正午の溫度九十度。

要を得たり(評)

京の夏

京都　岩淵國子

八月十五日。今日はお盆て皆さわいて居るのが憎らしい、病魔はまだはなれないので朝から烏丸の醫師のもとに行く、堺町御門の邊りまで電車にのつてぶら／＼と綠涼しい御苑内の木陰を通りぬける、お池の反り橋の上から濃綠の水をのぞくと、我ながら淺間しい亂髮、淋しい水鏡、其歸り路一年合はぬ友訪づれて昔を忍ぶ、家に歸れば姉上見かねて髮結び下さる、銀丈長かけし桃割に結び馴れぬ鬢のあたり恥かし、浴湯して夕顏の露重きを鉢植のまゝ、み佛に捧ぐ、父上に見せんとて。

八月十六日。白紫淡紅と垣根の朝顏悉く開く、色鮮やかなるにつれても、露の干ぬ間の命なりとは、はかなき物と淚流るゝ、母樣のすゝめにて嵯峨にゆく、千鳥

の淵の岩陰に舟とめて携さへし詩の卷說いて讀く、舟人は午睡の夢圓かに丹波路に向ふ、汽車は彼方の山の麓走る、里の童は小さけれど巧に泳ぐ、やがて黃昏となりて物すごき千鳥ヶ淵は尙更暮れるに早い、山又山の西の空はオレンヂ色眩く入日の姿尊い、そつとハーモニカ出して吹いて見る、舟人は棹取り直して下る、苔むす暗礁中々に多くて、水は眞靑に、此所はよく人の死ぬ所と思ふと水馴棹までが人の手の樣にうつる、汽車の窓から如意ヶ嶽の大文字がよく見える今頃は四條河原の灯燈の火影美くしくさぞ賑やかてあらう。

八月十七日。 夏草の露まだ散らぬ曉、淸水に詣ず、八幡山の邊り、夏霞裾たちこめて東寺の塔かすかに、友染模樣の樣、何とも言へない朝は心地よい物よ、おみくじを上る、九十八の凶、思はずも淚が流れる、幾十の石階を下りて音羽の瀧は淸く凉しい、南園の靑葉淺綠の中に淡紅の百日紅花盛りて美くしい、椎の木蔭に腰かけて休らふ、やがて丹塗の鮮な樓門に旭がさす、あゝ今日もよい夏晴、一昨日結んで戴いた髮の根が落ちてたまらぬ程頭が痛む、早速床につく、又してもおみくじが氣にかゝる、ふと目がさめるともう四時、今日は樂に休んだ、夜念佛狂言見にゆく、末廣千人斬天狗釣中々に面白い、凉しい風が吹くと思ふと電がぴかりする、お百姓は此電をおよろこびなさるとの事。

人も京都、地も京都、文章は却つて京都式てない、はき〳〵して讀み易いが、折々文の聯絡が分らなくなる(評)

娘日記

神田森　千代

八月十二日。 昨日から降り續いてる雨は小やみなくまだ梅雨の樣にじく〳〵とぢれつた相に降つて居る、折角御日樣が顏を見て開かうとした朝顏もそのために「憎らしい雨だよ」と云つた風に各々半蕾てうなだれてゐる、朝飯後別に用もないので、今年の二月から今月迄御細工物につかつた小切のくづて、お猿を縫つた、ところが赤縮緬て五十八、白縮緬で四十六出きた、二時頃、妹の人形の着物を縫つてると、いきなり時計がとまる程の地震があつた、昨夜の强震と云ひ、今のといひ又どんな、大地震があるかと恐ろしくなる、おやつに母樣の製らへて下すつた豆入を戴いてゐると嬉しや、博子樣お出遊ばす、此方去年共立をお卒業遊ばし今は裁縫に通ふて被入る、お色白の目のパッチリとした、ほんとうに美しい方、その上御茶ても御花ても御琴ても何てもよく御出きなさる、私と外を一所に步くとまるてキレー水の廣告の樣だとは父が惡口、

八月十三日。 又雨、朝飯後、今川橋郵便局へ父の使て電報爲替を振りに行く、丁度九時なので、人が多い、戶口に立つて隣の松屋の方を見てゐると、横でいゝ匂がする、まあ奇麗な若夫人、頭の上から爪先まで流行物ずくめ、ゆつくり私の肩すれずれに松屋の方へいつた「まあ、」とうつとり見てるそのかざしたアイテツ色

の、頗るハイカラの洋傘の先に「六圓八拾錢」と正札が……、それが風の爲めに丁度、電氣開扇の樣にくる〳〵と舞つてゐる、私は氣の毒やら、可笑しいやらて、飛んでつて敎へて上げ樣と思つたが……、用をすまして曲り角で振りむいて見たら、矢つ張すまして、松尾の横町へ曲つていつて終つた、きつと求めてすぐ、正札のついてゐるのを知らずにさしたのでせうが、あの立派な奥樣が……道々ともすれば、笑ひたくなるのを半巾でかくして急いで歸つて來て、一しきりその話で、もちきりました照りもせず、降りもせぬので洗濯を見合して縫ひかけの私の白絣を縫ふ、此間母に戴いた、紅地へ大きい百合の形の縮緬で「オペラバック」を縫ふ、夕飯戴いてると爲子樣から御電話、お變りはないさうだ。庭に向つた三疊の隅でころがつてこつそり涼んでゐると「千代千代」と母樣がよんで居る又、用かしらと故意と目をとぢて、大きくいびきをかいてるとやがて足音は近ずいて「オヤ又この子は寢てしまつたよ」私は御腹がくすぐつたいのを我慢して狸してゐると「コレお起き、あした父さんが、小田原へ連れて行つて上げますつて、さあ髮結つたり、お湯へ入つたりしなくつちや、さあさあ」「アラーほんとー、」と飛び起きたので母樣あつ氣にとられてぢいつと、私の顏を見ていらつしやる、あー、狸を忘れてしまつた……、だけど小田原だから又、ホラに成りはすまいか、「まああきれて終ふ…」と仰る母樣の言を後に風呂へは入りおしまひしてから一寸、空を、見て今日造らへたオペラバックへ、花紙、扇子、鶴の羽根など入れきちんとして又よく空を見て、父樣に、念を押して蚊帳の中の人と成つたのは九時。

何うしても東京だ（評）

日記の一節

伊賀　伏見貞子

●●●●●

八月二十日。晴、昨夜の雨で今朝から急に涼しくなつた、小さい自分の書齋にも絶えず涼しい風が流れ込んで、窓のすぐ外のヒヨロ高い南天の木に、つい此間まで米粒の樣な白い小さい花が咲いてゐたのが、いつの間にやら青い小さい實に變つてゐる、これが霜に赤くなる頃には、もう今年もお終ひになるのだ、と思つた、背戸の畑でお母さんの鍬を使ふ音がする、お母さんは、よく〳〵畑が好きと見える、閑さへあれば鍬の音をさしていらつしやる、でも感心に今年はお茄子や白瓜が澤山に出來たので、お隣やらお向ひへ上げて、大層喜んで貰つたからゑらい。

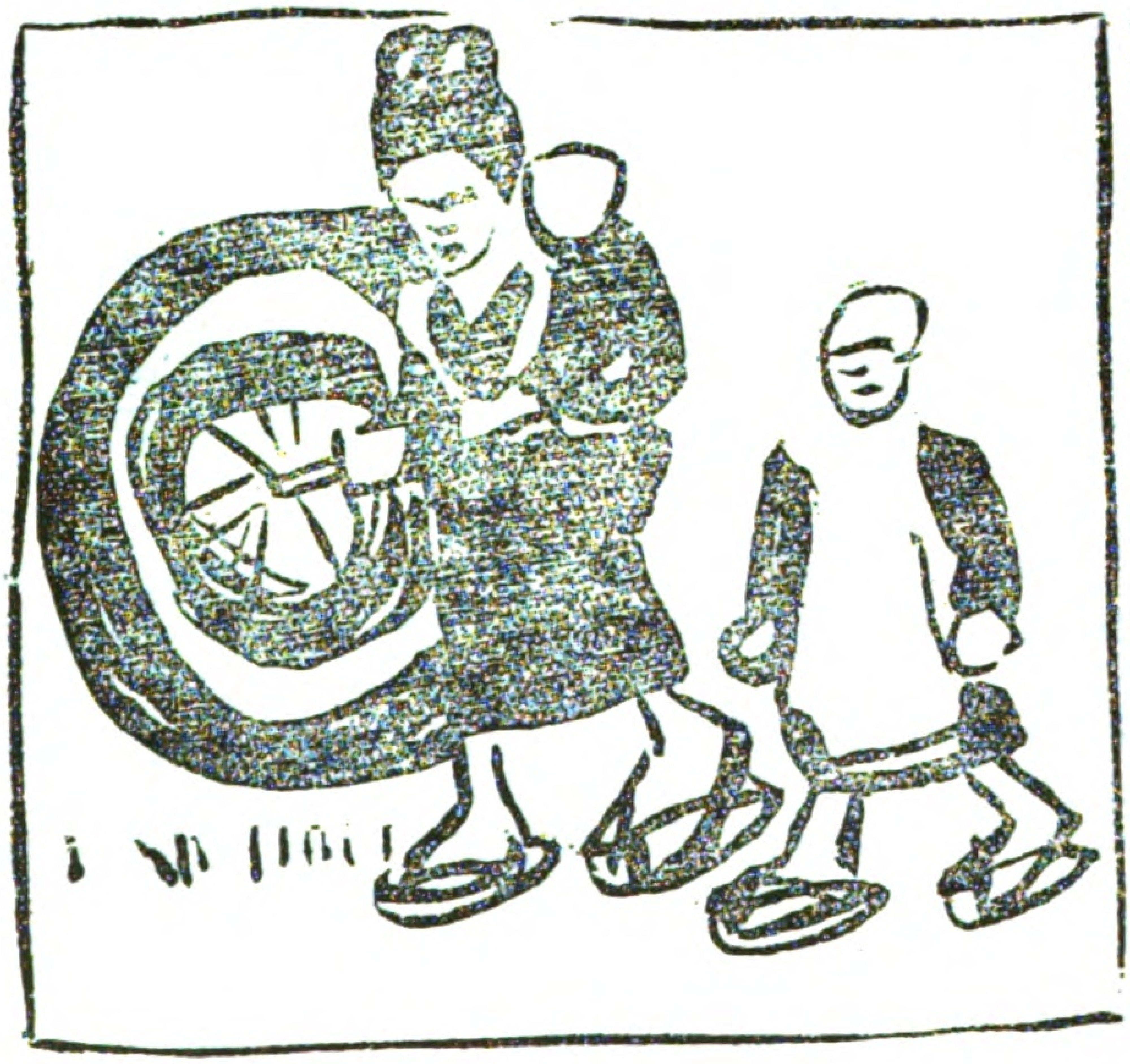
ガサッと玄關で新聞を投げ込む音がする、で急いで立上つて見に行く、いつもの通り三面から讀む、とまた自殺――溺死――電車に轢かる――と云ふ樣なの許り載つてゐる、數へたら十五六もあらう、あんなに人は死ぬのに自分はなぜこんなに命が惜しいのだらう？と言ふ樣な事をフト考へた、が自分は未だ死ぬ程の苦しい目に會はぬからだらう、そうして見ると、詰らぬと

口癖の樣に言つてゐるけれど、自分はまだ幸福者の部かも知れない……。と見ると表をゾロ／＼大勢の人が通る、何だらう？と思つて出て見ると、お寺詣りだらう羽織袴の男の人が五六人、續いて女の人も五六人、中に小供も交つてゐる、四つか五つ位の女の兒が美しく咲いた桔梗の花を持つて行くのが殊に目につく。誰も悲しさうな顏をしてゐる人が無いから可笑しい。

背後で柱時計が忙しさうに九時を打つ、だん／＼暑くなつて來た、日記の續きはまた晩に書くとしやう、庭の青桐で、つく／＼法師が鳴き出した。

才筆ではあるが、日記文は寫生文と違ふから 餘り不用の文字の多すぎるのは何うかと思ふ（評）

佳作　小督　青綠　松尾千代子



寺院日記

能登　北山柳子

七月十四日。くもり明日は盆家内總がゝりにて掃除にかゝる本堂はア道（役僧の名）母樣と私はくり松やは（下女）お庭とお墓そこで父樣は檢査役、皆奇麗に出來たとおほめになつた今日はほんとに氣持よかつた。

十五日。やゝくもり壇家の人は皆涼しい間にどや／＼お詣りになつた暫くはほんとに忙がしかつた午後は追夜も過ぎて父樣はお墓へ詣らふと仰しやるから皆打連れて後の山にのぼる母樣は早やお花や線香蠟燭ともす、父樣はお經お讀みになつた線香のけむりはすつと上つたり輪になつたり縮んだりして居る、ふと私はかう思ふた、父樣や母樣は此の石の下になつて了つたら何しやうと思ふと急に悲しくなつてお經のすむのも知らず深い／＼思ひに沈んだ何にぼんやりして居ると父樣に促がされてかへると門前には若い娘達がをどりのけいこして居た。

（評）寺のお孃樣でも考へに變りはない

朝顔日記

岩代國　菅野和子

六月十五日。隣の爺に習つた通り、苗床を拵えて、昨夜緣日で買つた朝顏の種子を蒔く。夕方水を注ぐ。

十六日。今朝も水を行らうと思つたが、腐れるのが心配なので廢した。何事でも自分の手を懸けたものゝ成功を希はぬ人はあるまい。
十七日。まだ芽がでぬ、棒端で堀ぢつて見た、元の儘である、あちこち探して見たが依然同じ。
十八日。きのふ堀つた土は乾いて浮立つてをる、朝顔の種子も上に乘つて現て居る。手で壓付て水をつぐ。
十九日。白い葉が見える、あまり小さいと思つたが雑草の二葉だつた、憎らしいから拔つてやる。
二十日。あまり生へぬから爺にきくと、雨降らなければ、二週間もかゝるとの事。
三十日。頓と忘れてゐたやう、久振てみたら、黑帽子(種皮)を脱して皆出揃つて居る、手を拍つて喜ぶ。
七月二日。雨ふる、どんなに清々したか、一際伸びたやうに見える、子葉の間から芽が生え始めた。
六日。早く花を見たくなつた、一枚の芽が漸く朝顔の葉らしくなつた計り、なか／＼成長が緩い。
十日。葉が二枚になる、威勢もよく、莖も太い。
十五日。五寸程に伸びる、芽のふくれない所は恰度蛇の頭のやう、何か手寄物を狙ふやうで、優しい。二三日たつて隣の爺に御禮に二本送る。
廿一日。土用休暇で歸省した弟に、栽培を一任した。
廿二日。弟は鉢に移すといふから、枯さぬやうにと注意して鉢を買つてやる。
廿五日。弟の考案で帆前船の繩手が出來た、これに三本で滿艦飾するらしい。
八月一日。枝がさす、なか／＼繁茂してきた。蕾ももつた。
四日。蕾が筆の穂位になつたとき、四節目にまたついた。蔓に絡まつた方にも一つ、これもつぎ／＼に。
五日。爺が來て一本餘計だといふ、蕾のないのを、たつ子さんにあげた
七日。朝花が咲いた、大きい輪の花瓣が裂けてゐる、これからは朝寢ができない。

朝顔日記は澤山あつたが首尾を完うしたものは此作を第一とす（評）

湯治日記

山口縣　新田泰子

九月三日。朝の空氣が何處となくしんみりとした冷たさを見せて、けふから秋がたつたやうな氣がする。さう思ひ乍ら手桶に汲みあげた水を見ますと、何時よりか甚く澄みきつてゐる。――豫てから、私は右の足趾が痛かつたのが今朝は一しほ痛い。歩くたびとり／＼と胸にこたへる。それで近所の石井さんに診て貰うと、これは挫骨神經痛だ、でこれをとお藥を呉れる。お母さんは一圖に「矢張りお縫ひが影響つたのだ。」と決めて甚くお心配なさる。お藥を服用して先に寢む。
四日。朝ご飯を戴いてゐる所に杉尾様がお出てにな

る。私のこの樣子を見られて「あゝ、それは氷田の鹽湯がいゝわ。」と仰言る。すぐ樣行くことにする。近いのだけれど俥に乘る。行きがけに石井さんへ伺うと、それは良いとのこと。――氷田の鹽湯といふのは湯槽に潮を汲むで沸かすのてある。來てみると何處も病人は多いとみえて中々の雜踏てある。私は其隅の方に居ると、二十五六のお内儀さんらしい方て「まあどうして」「いけませんねえ」と親切に仰言る。ご自分はご產あげくて來てゐると仰言つた。

それて幾らか足の疼痛も薄らいだやう。湯屋を出たのが四時過ぎ、澄みきつた空を白雲が流れて、路傍の秋草には黃蝶が一つ羽を休めてゐた。

●五日。朝からお湯にゆく。唯足が痛い許りて氣分などどうもないから、かうしてゐるのは無暗に損なやうな氣もする。雖然矢張り身體が健康ならてそと思うと、どうかして一時も早く快癒りたいと思ふ。

お湯は至つて淸潔てある。それて三時間餘浴してのち、其歸途に石井さんのお宅へ上ると、未だ別段異つたこともないやうだ、と仰言る。お藥を貰うてかへると、そのまゝ直ぐ寢むことにした。

平凡に似て平凡てない、書き方が引締つてゐる(評)

夏ぐさ

府下　鈴木春子

●●●●八月三日。晴天、ふと目が覺めたので今日ばかりはと直ぐ庭に出ると、邊りはまだぼんやり朝靄に包まれて、じい〳〵とねむさうな蟬のこゑが聞えるばかり。手に持つた金盥つと下に置いてぐるつと背戸を廻つて奧庭に行く。二三日前から浴衣の裁縫に追はれて、少し見なかつたひまに生垣のそばの白百合はすつかり散つて了つて、茶色ぐんだ花瓣がぶら〳〵葉に引かゝつてゐる。尊い女神の御すがたにまがふ彼の淸いうなだれ咲きの面影、しみ〳〵思ひいだされて……

●●四日。晴天、ものみなを燒きつくす樣な午後一時の日影に、庭の濃みどり淺綠だんだら染めの木立の、黑い更紗模樣のやうな影は、さながら地に深く彫りつけられたやう。朝の程は勢よかつた紅蝶花もぐつたりしほれて、糸鷄頭のはなばかり紅ばんだ葉をさゝ勇者ぶり勇しく打ちかざし、やりの樣なえび茶色の花をほこらかにすい〳〵出してゐる。私もいつまて斯うやつて居てはと裁板の前に座つたが、だら〳〵汗が流れて仕樣がない。近所の工場て鐵のばす音が喧しい油蟬のこゑに交つて、があん〳〵と耳に響く。

四日の方が上出來(評)

日記の一節

大阪市　高間もと子

●●●●八月二日。今日は電鐵開通式の第二日目なので、叔父さんも叔母さんも夕暮から花電車を見に行かれた。私は昨日行つたので、今日は留守番だが別に用もなし仕樣がないので、涼しい風にリボンを吹かせながら表の

将几に涼んで居た。やがて時計は八時を打つて暫らく「火事だ、火事だ」と小供等が云つて走つて行く、續いて男の人も四五人バタ／＼と南へ走つて行く。ふと私は西の空を仰いだ、と少し南の空は赤う／＼火の光りが映つて居る。北へ走つて行く男の人に聞くと天神橋筋の西の方だと云ふ私は胸をとゞろかせて壺屋町の派出所に馳けて行つた、見上る西南の空は赤う／＼なつて居るが思つたより遠くの方であつた。派出所の前では人がワイ／＼と騷いで居る、巡査は悠然とベルを鳴らして授話機を耳に當てながらニコ／＼と何事かを話して居る。人々は空を見上げては振り返つてじれつた相に派出所の内を覗き込みながらつぶやいて居る。

「眞當に遲をまんな」と何處かの小僧さんが言ふと、「さうだんな、走つて行く方が早よをまんな」と又一人が得意相に言つて居る。二人はやがてひそ／＼と何事かをさゝやいてニコ／＼笑つて居る。派出所の前は人の聲である、その人の中を提灯持つた人や持たぬ人や、法被姿や色々の人が走つて行く。鐘の音は未だ止まずに鳴つて居る。人は皆空を見上げて居る。西南の空は未だ元の儘である。やがて巡回話しをして念をおして、授話機を掛けてベルを鳴らしてニコ／＼と硝子戸を開けて入口に突立つた。

人々の目は待ちかねた樣に巡査の顏に集る。巡査はニコ／＼として「渡邊橋のアーチが燒けて居るのじや」と云つた。「渡邊橋！」と一トが問ひ返すと巡査は「フン」と云つて内へ這入つて了つた。鐘の音も止んだ。

人々は四方八方に分れて、走つて行く人もぶら／＼歩いて行く人もある。人の姿は次第／＼に派出所の前から去つて行く。

私も内へ歸つたが、ふと叔父さんや叔母さんの事を思ひ出して、次第／＼に火の光りの薄らいて行く西の空を眺めて歸りを待つて居た。

寫生文として見ると、なか／＼面白い、火事の樣子、見物の樣子、巡査の態度、皆活きてゐる（評）

日記の一節　麻布區　細谷杏子

●●●●●

八月廿二日晴。霧の晴なばさこそ暑からめと忍るゝ蟬の聲々を聞つゝ御二階の掃除をすまし御琴の稽古へ行く今日は秋の曲手琴四段を習ふ、歸るさ糸屋に寄て鼠絹糸を廿錢求む。いつも乍の不愛想さ加減何方が賣手やら買手やら熟々呆れてお神さんを見たり、縞御召袷小袖の表縫上て四時より夕食の仕度に掛る、獨乙ビフテキは上出來と賛られしかど御芋の酢煮は失敗しき而も千六本に刻まんとて左の子指を切る中々に痛けれども度々の事とて餘に恥しと思ひ人知れず、そと藥付置く、湯浴して庭におり立ば父上花壇に水かひて在せり、ま垣の朝顏明日は百廿一とやら咲なば數や添らん等語ひつゝ葉多かりし花の命を一つ／＼に摘行ぬ。笹瀧川（岩角に觸ては思ひ／＼に流れ行く庭の池水笹葉に似たればとて斯は名付し）其笹瀧の散滴に濡し忍草を

端近ふ釣せば涼うも吹風に凛々の音は添て築山の燈籠火點に明う成行く、夜御琴を復習ふ。

●●廿三日晴。今朝妹御不淨に行んとて臘燭の火を失し掌を焦す御祖母様は糠味噌に冷して生玉子塗ればよしと言るれど中々に痛々と言ふ、學校にて習ひし應急の手當も斯う成ては問に會ず教科書取出て彼よ是よと調ぶる中に東雲の空は白う成にき。早々山田様へ連行くに「手の糠ミソ漬は餘り感心しませんなあ」と御笑なされ斯る時には何油にても油を塗れよと教へ給はる服用すべき事ぞと思ひぬ。本郷の文子さん來られピンポンして遊ぶ古雜誌御目に掛等して四時頃迄語り暮しつ。女子文壇八月號の新體詩「物の寂しら」を誦じ行くに又しても氣掛りなるは夜雨先生の御言葉如何遊ばされたるにやと心もとなし。夕食後福岡の姉上へ長き手紙を書く。廿日の月は檜の木蔭に空高う掛りぬ、夜は更たり騷々しかりし道具屋の御念佛も何時しか沈靜に消て犬の遠吠蟲の聲々秋は夜より來らんとす。

輕妙洒脱、忘れ難い節がある（評）

蜘蛛の智恵　下野　穴原みつ葉

●●廿日。蓮の花を折らうと思つて、夕方お池へ行きますと。水面に垂れた柳の枝から、明日あたりは咲き相な蕾へかけて、鎌つき蜘蛛が夕餉の餌をあさるべく大な網を張て待つて居りました。

すると、風をきつて飛んで來た蜂が、いきなり其網にひつかゝりました。どうする事かと見て居りますと、蜂はブーンと羽叩きして暴れ狂ひ、くもは絹絲の様な白い太いねばる絲をだして卷き殺さうと爭ひました。が遂々蜂は逃げてしまひました。

後でくもは、慌しく匍ひ廻つたが、どうしたのか、ぱたりと下の蓮の葉の上へ落ちて了ひました。すると不思議にも其葉がだん〳〵すぼまつて、遂々袋の様に堅く口を塞いで了ひました。其中で寢るのかと思つて居りますと、聽て、さつきの蜂が多くの蜂を連れて飛んできました。が、くもが居ないのでさんざんに其網を破つて、今度は件の葉へたかつて唸て居りましたが、五分間ばかりで引上げて了ひました。後で其葉を採て見ますと針で突いたやうな穴が一面にあいてゝ中をあけて見ましたらば、くもは小くなつて竦んで居りました。

日記と稱すべきものではないけれど、面白い描寫だ（評）

冬の日　濟國　中島ゆき

●●九日。木曜、晴、七時御出まし馬のいぶき白う見えて手綱もち給ふみ手のいかにひゆらんと見ゆ、お掃除すまして花に纏はすべきものとりそろへなどする程、短き冬の日脚は早うもま上になりぬ、午後東關外に、外山様小川様を訪ふ、枯木立と泥家のこゝかしこに散見する外は、遮るものとてなく、所謂朔北の風身をさす様也、俥は風をきりてゆくがいとゞ寒ければ下りて歩

む、道は例の灰の中を行く樣なり、雪の朝雨の夕、夫君が馬上の御ゆきかひ、いかならむと思ひやるも寒し

●十日。金曜、九時御出まし、照る日稍潮う大氣もさながら凍れる樣なるに、寒暑表零下六度を示す、日本郵便とゞく、はがき封書とりまぜていと多かり、正子樣より例の輕快なるお筆に、なつかしき事の數々をかしうつらね給へり、打もおかれずくりかへしよむ、五時夕餉のしたくはてゝ暖爐に炭さしそへてまち參らする程もなうお歸り、けふ來し文の事新聞紙上のこと樣々樂しう語りかはしつゝ食事すまして御かへり言かく、

●十一日。土曜、晴れたり、例の大掃除やう〳〵すみたるころ、島奥樣御こし、何やかやお話の末、小袖一つ仕立つるに一日もかゝらぬと仰有る、どの樣にして遊ばせば其樣にお早きぞとうらやまし、我らもせめて其半だに早き手もたば、あれもこれもとくぬひあげて好める書ども思ひのまゝに讀まゝしものを、

四時過お歸り、おひげま白う凍りて針の樣なり。

夜は土曜なれば皆打よりて、故國のことゞも語りかはす、暖爐の火と共に話聲も盛になりぬ、はては歸りてみたやとたれも〳〵いふ、親はらからもたぬわれらも流石になつかしうて。

此日記い作者は清國直隸省保定府と云ふ處にあり、異境の空はるばると寄せたまひし日記、殊に味ひの深きを覺えた（評）

ちぎれ雲

失名

濁つた音、優しい音、清い音、艶やかな音、寂しい音、崇高な音、靜かな夜の氣を破つて、洋樂の音が高く、低く、ゆるく、急に――。

月なき夜の灯火は常より華やかにかゞやいて――。自分はうつとりと窓によつて、華やかな灯の色を見ながらその音を聞いて居た、そしてこのまゝ、あの美くしい花にかこまれた天國に昇つてゆくような氣持に――實に靜かな夜だ（六月廿二日日記の内より）

○

月の出る頃、海邊を一人で逍遙ふた。

海の方はぼんやりと暮れかゝつて歸りをいそぐ舟の帆かげも淡く、欸乃の聲が何の音かと思ふほど清く涼しい。

東の山の端からは十四日許りの月がはや黄いろい光りをはなちはじめた。

そよ〳〵と軟かい涼しい風が渡ると、そのあたり一面に咲いて居る夕化粧の花がゆるくうなづく、きら〳〵と露がこぼれて、優しいなつかしい花の匂ひが靜かに流れる。

あまり靜かで寂しいので、思ふまい〳〵と思つて居た雪雄さんの事をまた思ひ出して泣いた――（七月二日日記の内より）

雨後の日記

信濃　青葉

教案も立て終つたので、夕立の晴間を見て、靜子さんとぬかるみの道を袴の裾をかゝげながら歸つて來ると、兄樣は未だ見えない。風呂敷包を机の上に投げる樣に置いて、仕度もそこ／＼に夕飯の仕度にとりかゝつた。燈火のつく頃漸く兄樣が歸つていらつした。途中で雨にあつて朋友の所で休んでいらつしたとの事である。夕飯後茶をさしながら「今日の雷にはほんとに驚いたわね。」と云ふと、兄樣は思ひ出した樣に「さうさう、僕は今歸りに落つたあとを見て來たが、全くひどいな。稻などまるで眞白に枯れてしまつてた。」とおつしやるのを聞いて、妾は思はず身震した。あまり蚊が居て苦しいので庭へ下りると、空は葡萄色に暮れ初めて居る。西の山の端は未だ薄明く、今日の名殘を止めて居るに、もう



佳作

水汲み

栃木　栗原とみ子

長い夏の夜は東の山の頂を離れて熟柿の樣な冴え渡つた月が輝いて居る。狹い庭を超えて向はもう稻田である。青黑く思ふ存分に茂つた稻田の水の間には月の光がきらめいてともすれば、螢かと訝かられる。數丁向ふにこんもりと黝んでをるのは柴山森である。夕立あがりの故か、森は周りと云はず、草叢と云はず、幾千となき螢の群れ飛んでをるのは物凄い中にも何となく詩的である。青臭い臭がすうと鼻をついて、何とも云へぬ厭な心地がする。「螢もこい／＼山吹も／＼」あゝ何と云ふよい聲だらう。たしかに聞き覺のある聲だ。森の彼方には黑い影が三つ四つ動いてをる。

なま暑い風がすーと髪の後毛を吹いて急に闇くなつたと思ふと、月はもう雲の中に隱れてをる。「信濃の國は十洲に境連なる國にして。」勇ましい軍歌の聲が手にとる樣に聞えてくる。ほつと氣がついて見ると、自分の足はいつか學校の手前

迄運ばれてゐるので、驚いて來し方へと引き返した。

歸省中の四日間

千葉縣　大崎ゑい子

八月廿四日。雨、今日は自分ながら可笑しき日なり。午後女子大學生のハイカラさんのK君と町の大家のお孃さんのM君と私と三人して買ひ物に出づ。玩弄屋で笛や太鼓、八百屋で牛蒡蓮根、籠屋に行つては屑籠、荒物屋で締木草鞋を買ひ、唐物店で何、化粧店で何にと百色百品の買ひ物に町を搜りけるは、いと〳〵面白き風情なりしと友に笑はれたり。こは明日の同窓會の福引品なり。

廿五日。雨、朝戶繰る間もなく二三軒隣の叔父君來り叔母急病と告げて歸る。兩親は直に行きたり。午後留守居にて懷しき同窓會にも行かれず。徒然なるまゝに盆栽の手入をなす。六方野原より持ち歸りたる桔梗の花一つ咲きそめたり、女郎花は明日咲くべし。

廿六日。晴れぬ、父君も母君も叔母君の葬式に參られたり。訪る客あり、先輩のYO君なり。留守居なればゆるりと話し給へと促す。此君よく古い事を繰り返す。耳に蛸の話を今日も語られ、頻と出る欠伸を辛く拒ぎぬ。

廿七日。晴、午前父君と稻田の見廻りに行く。小川上る鯉を取りそこねて口惜しがりたるが、妾にもいと欲しかりき。午後漁士渡世なる裏の主人來る。赤ら顔の肥えた大男、まるで仁王樣の候補者の樣なり。夜K君とM君とを訪ふ皆不在。歸來灯を點じて花袋集を繙く、讀み終らずに就寢。

嫁ぎし翌日

横濱　ちあき

昨夜は嬉い樣な恐ろしい樣なまるで半信半疑で寢に就いた、眼を醒すとお母樣はもうお目醒のご樣子、母屋の障子に丸髷の影がチラ〳〵映つて居る、時計が六時を打つた、昨日結つた島田がグラ〳〵する、いつもならば五日位は持つのにと思ふとハッとした、着物を代へてると室が煙草くさくなつた、いつの間にか旦那樣が床の中で敷島をスパリ〳〵上がつて居らつしやる、私は急いで母屋へ御命を受くべく往つた、母樣は昨夜はおつかれだつたらうと仰言る私は赫とした、何かご用をと云ふと、今日は別に何もしないでよいからお化粧をしろと仰言つて六疊ばかりのお部屋へ導かれた、此處はお化粧間なのかしら、昨日運ばれた化粧道具が皆ならべられてあつた、程なくして松やが朝飯を告げに來たので再び母屋へ往つて母樣と旦那樣と私と三人で戴いた。

論文

「地」

實用文と趣味

花子



實用文とは讀んで字の如く、事實のはつきりした、意味のよく透徹するものであれば、其れて足る事ですが、亦一面趣味、俗に云ふ面白味のある手紙は、用事を傳へる以外受信者に快感を與へるものであります、

趣味と申して殊更文を練り字を撰み、技巧的に趣味を顯す必要はなからふと思ひます、何處迄も實用文の主旨に適ひて、傍ら一種の娛樂を（娛樂と云へば語弊はありますが）伴はせば足るのです、

例へば、誕生日に親しい友垣を招待するとせば、其案內狀に料理の献立を書き加へたり、轉宅若くは新築の家に引移りし報知文に、粗圖を挿みて庭園から座敷の模樣を書入れるとか、旅行先より勝地の楓葉、花瓣、松葉などを封送し、繪葉書に名所舊跡のスタンプを捺したる、或は何か校正中なる事を想像せしむる爲に、返書を朱筆にて認める等、其他其國特産の紙に、音信を傳へ來る者、揚げ來れば數へ切れないでしよふ、

是等は別に六ヶ敷もなければ、文才詩才のない方ても出來得る至極簡易てあつて趣味ある手紙のやりとりだらふと思ひます、よく美文だか手紙だか判斷に苦しむ樣なものを、消息文とか實用文とか申して、拜見する事がありますが、是等は遠隔の地から或る詩友と詩友とが眞の特有の風光やらお里自慢を並べるには適するかも知れませんが、親とか目上の知人に、肝心の用事をそつちのけにして技を弄し、極彩色の繪卷物を繰廣げた樣な手紙を差上るのは、却つて失禮に當るだらふと思ひます、要するに、殊更文體を飾らず共、前に陳べた樣な工合に心懸けたら、其處に女らしき味もありましようし、趣も生ずる事と思ひます。

其處がむづかしい點て、或る人は飾りが勝ち、或る人はまるつきり味ひが無いと云ふ風に、何うも適當な音信文は見當らないものです此文章は心得になります、擧げた例も面白い（評）

『人』

私

攝津　みなしご

私は今年十五歳て、府立の女學校の一年生て御在ます。

はて、私はどんな、性格の少女てしやう？

母樣は云ふ「お前はいつまて經つても、ねんねえだねえ」と、

父樣は云ふ「泣かぬ時は、至極しとやかな、お孃樣だが」と、

姉樣は云ふ「糸ちやんは氣質が柔順で、そして、慈愛心に富んてゐるのねえ」と、

お友達は云ふ「荻野さんはいつ見ても、落着いて、お孃樣然とかまへて入らつしやるが、理屈家には、少々困ります」と、

先生は云ふ「貴女は文章が上手てすし、何でもよく御勉强なさるから、私は大變悦んてゐるのてすが、もすこし、しつかりなさらなくてはいけませんよ」と、最後に私が、斷案を下す、

私は世事にうとくつて、ちよつと眼の球の光る人を見ても、恐しいと思ふ程だが、家ては氣に入らないと、よく、泣いてすねて、皆を困らせる。學校ては不活潑て、體操の點は何時も丙、おまけに理屈つぽくつて、どこに一つとりえと云つてはない、と云へばそれきりだが其實これて何處かに他より勝つてゐる所もあるやうに思はれる。

つまり私は好いところもありますが、平凡な處もある人間て御在まして、賢いと云ふ程てもありませんが、又、決して馬鹿てはないと信じてゐるので御在ます。

飾らない自己の告白には相違ありません且父や母や友人や先生の批評を並べたのは氣が利いて居ます、第三者となつて「私」を批評したのも一寸思ひ着きてす（評）

『秀逸』

常識

野の花

世の人から一言の下に「女學生は駄目だ學校へ行つて

何を習つてるのだらう」と言はれるのは何故でせく？即常識に乏しいからだらうと思ひます。例へば、先生に今國家では如何なる大事がありますか、縣内にはどのやうなことがありますか、等ときかれて滿足に答へ得る人は幾人ありませう？、現在私共もきかれました其時に手を上げたのが七八人でした、そして一人一人立つて答へましたが滿足に答へた人は、其中やつと一人か二人でございました。すべてが世の中の人に對してこの通りです、ですからいろ〳〵のことを言はれるのも無理のないことでせう。

私共毎日〳〵學校へ通つて敎科書に依つて勉强さへすれば學生だからそれでよいかといふに、決してさうではありません。敎科書に依つて勉强し、學校に通つて勉强するのは、ほんの處世法の骨ばかりです、骨ばかりで世に處してゆくことができませうか、否、出來得べからざることでせう、それに肉をつけ皮をつけて始めて、立派な人となるのでせう、ですから、學校、敎科書によつて熱心に勉强する以外に、實際的智識を得て所謂コンモンセンスを養ふことに務めねばなりませんそれにはいろ〳〵法もございませうが、一端を申せば來客の時にはなるべく邪魔にならないかぎり、父母の側に居て種々の話を耳にし、又老人等の話は何の年老が等といふ心を起さずよくきゝおき何事も多方面にせねばなりません。それから暇がある時は雜誌類を讀むのは勿論のこと、新聞もよまねばなりません、しかしそれも小説や、三面記事のやうなものばかりよむのでは何の効もないと言つてもよいのです、だから政治、敎育、實業、論説等すべて廣く渡つてよく見て、又よく記臆してそれをすべてのことに利用してゆかねばなりません。かくしてたならやがて人の妻となつても失敗することが少ないだらうと思ひます。

常識を說く方だけあつて、議論も極く常識風です、皆さんも此通り心がけて居られたなら世の中は間違なく送つてゆかれます（評）

女子の缺點

海棠女

女子にも男子にまさつた德が御座います。また日常の動作の上にも男子よりすぐれた點があります即ち綿密と云ふとなどは女子が常に家庭を整理して行く上に大切な大切な事で一日も缺てはならない事で御座いますしかし私等凡人にはまゝ缺てはゐまいかと思ふとがあります。例を上て見ますと。私たちが裁縫をしたあとには必ず一二本の針が落て居ます。女學校の裁縫敎室では殊にたくさん、時には尖つた方が上につき立つて居る事が御座います是を見ますと身振ひが致します、針のやうな小くてもきら〳〵光て居る物を取り殘すとは粗忽なのでせうか、見えないのでせうか、何事によらず綿密で有ましたならば斯やうな事はない筈です、女學校などで針にしるしを附ける事をお進めになりますがそれでも名前のついたのが矢張落て居ます、つまり其女がふしだらで綿密でないからでせう、ほんとに些細なとては有ますけれど危險でもありますしまた其

人の人格も知れて淺ましく女としてうら恥しい事てはありませんか。又女は忍耐力に乏しうあります、昨日まて榮えてゐても家運が一變して昔の榮華は一炊の夢と化して家も倉も人手に渡るやうになりますと。婦人の落膽は何に例へませう、毎日々々なげき悲しみ愚痴ばかりこぼして、不運をあきらむる勇氣なく、貧苦と戰ふ氣象に乏しく、不幸の境遇に落入りたるかなしさ恥しさを耐へ忍ぶ元氣のない婦人が世の中にはよく有ますがつまり意志が薄弱なのてす、鞏固なる精神に忍耐力を養ひたいものてす。ことに物價の騰貴して居る此頃、中流以下の家庭てはさなくとも經濟が困難てありますが、かゝる時意志の鞏固な婦人が家を整理してゐたならば不服不滿をおさへ虚榮心に打勝て萬の艱難を耐へ忍んてきつと成功するてせう、しかし意志の薄弱な忍耐力のない人てあつたならば決して出世する事はあるまいと思ひます、てすからどうしても意志を強くねりきたへなければ成ません、そして昔の人の、柳の枝に雪折れなし、と云たやうに女はどこまでもやさしくあつて内には岩をも挫ぐ程の勇氣のありたいものです、大さう生意氣なやうてすが此頃の女學生のお方の墮落などなさいますのもつまり意志が薄弱な爲に色々の誘惑に引き入られるのてせうと思ひます、てすから私たちも精神の修養をおこたらず勉めて鞏固なる意志を持つて女として恥しうない操を立てたいものてす。

（眞面目てす、論據が堅固てす、斯う云ふ方が女子教育家になられると好いと思ひます（評））

東京の女と關西の女

京都　濱部風窓女

江戸つ子と京女とは名高い一對て有りましたが時代の變遷とゝもに、兩者とも其の面影が段々と消えて浮薄と成り、美はしい長所が無くなる傾向の有るのは返す返すも殘念て御座います、是も社會の要求や、生活狀態が變つて來てやむを得ませんのてす、然し全然消えたわけては有りませんから、感じたまゝの長所と短所とを述べて見ませう。

關東の女を才子とすれば關西の女は君子て有りませう、前者は活動的て、後者は靜養的て有ります、前者は義が堅くつて俠氣に富み、後者は從順て親切に滿ちて居ります、鳥渡、假に人に例へて見ると前者は幡隨院長兵衞て後者は少々大袈裟てすが中江藤樹とても申しませうか、前者は交際術に長け社會の表面に立つて活動を好み、陰に陽に夫を扶け、後者は家を好み一家の經濟をはかり、子女の教育に勉めて夫を扶けるのてす、一朝逆運來つて非境に陷つた時に前者は勞働もし或は幾千里の怒濤を事ともせず、異郷の地に出稼ぎする勇が有るとすれば、後者は孜々と針仕事をし、或は彼の苦界に身を沈める事をも辭し無い決心が有ります。

前者を淸楚或は意氣とすれば、後者は濃艶或は上品て有ります、是を惡く進めると前者は下品と成り、後者は野暮と成つて仕舞ふのてす、又兩者とも入道を踏み

間違へて惡く成ると、前者は莫連或は毒婦と成り、後者は姑息となり又は妖婦と成るのです。兩者共短所を矯め長所をお互につき合せたならば嘸かし完全なる人間が出來るだらうと思ふのであります。

東京の女と關西の女とを比べた議論はしば〳〵聞きました、穩健な議論を言はうと思へば恐らく此邊でせう、最も東京の女に就て多少の異論もありますが、先づ大體は斯う云ふ傾向があります（評）

僥倖心

常陸　福田八重子

近頃福引の流行には驚きますね、甘く行くと十八金のヲッチだとか指輪だとか、丸で棚から牡丹餅が落ちて來るやう。妾もツイ廣告に釣り込まれて、要りもしない品を幾ら買つたか知れやしない。自分ながら馬鹿々々しくなりますの。考へて見ると可笑しいですよ、當りもしない內から當つた積りで「次の同窓會には妾もダイヤを嵌めて參ります」なんて、友達に云つたことがありますの、迚も無益だからあきらめてしまわうと思つても、新聞廣告に大懸賞なんて出て居りますと、妙に妾の眼に映りまして、すぐ小間物店へ驅けて行つたり賣藥屋に使を遣つたり、それは〳〵何て自分はこんなに僥倖心が强いのかしらと、ほと〳〵呆れてしまひます、あんな事は一切止してしまつた方が可いと悟つても、どうしても止められないのね、之が人間の弱點てしやう、その人間の弱點に付け込んで利益を得やうなんて、商人も中々隅には置けなくなつたのね、隅に置けない所か、うつかりして居るととんだ馬鹿を見せられる。

妾の弟も困りますの「今に百圓に當るから自轉車を買ふの」なんて云ふんですもの、考物の解答位ならまだ可いが、それが長じて福引附きの物なら無暗に買ふやうになり果ては良くない事に手を出すやうになられては困りますわ、妾は決心しました、今日からは欲しい物があれば相當の代價を拂つて買ふ、拂ふことが出來なければ買はぬ、是非要るものなれば貯蓄して買ふと、こう決めました。

新聞屋も、勸業銀行も、政府も一所になつて人間の弱點に付け込んで僥倖心の養成に盡力して居ますのね。

福引萬能の世の中とは言へ、早く氣がついて福引ものに冗な金を使はないやうに決めた方が、つまり好い福引を引いた一人です（評）

詩人としての與謝野晶子

靜岡市　根岸良子

少しく明治文壇を知れる者は、歌人として――否な新派歌人としての與謝野晶子を知るであらう。

現今、我が新派歌壇に空穗、柴舟、薰園、葉舟、みづほのや等一々擧げて數ふべからず、されど、詩才縱橫なる晶子に及ぶものなきを如何せん、元、我は「みだれ髮」一篇に依りて、初めて晶子其人を知つたのである、と同時に、彼れの處女作として『みだれ髮』一篇を擧げざるを得ないのである。

名勢漸く揚らんとする時の著『小扇』に於ける彼れの歌調のやゝ變遷したる『毒草』に於けるも又、されど、前

二者は到底過度時代の作品とより外認め得られないのである。

「戀衣」一篇は確かに彼れの堂に入りたるのもの、圓熟したる歌調は推重すべきものである、併し昔日の忌憚なき赤裸々の、奔放なる體度の見えざるは憾みとする、猶此集に於ては漸く彼れの新らしき一方面に向ひつゝあるを見る。

彼れの歌調は、桔梗のそれの如くしなやかなるに非ず夕月夜ほのかに香ふ、夕顏の――ゆつたりとしたるに非ず、只、奇犠は彼れの牲命として見る可きものだ。男子を男子と思はざる彼は、明治の新派歌壇をして彼自身をして代表せしめた。

終りに我れは、近著「戀衣」中に納められたる「花に見ませ玉のごとくもたゞ中に男は女をつゝむうるはしき蓮」を幾度か謳歌するのである。

明星派の女王（クイーン）、新派歌壇の晶子女史、幸に自重あらんことを……。

斯んなに四角張らずとも、もツと手やはらかに女詩人の評なれがいたかつた（評）

母の罪

大阪　露　草　女

論文などゝむつかしい事は存じませんが、只感じました事を一言、今更事新らしく申までも御座いませんが我國にも子供の教育には餘り重きを置いて居ない奥様が有ます、例を上げますとから云ふ事が御座いました。名前は申上られませんが某大尉の奥の間の庭に打つ水が縁先に出して有ますと七つに成る令息が其のバケツに顔を入れて一生懸命に水を飲んで居られますのが妾の目につきました、て「坊ちやん其様な事なさると母様に叱られますよ」と申ますと、「叱るもんか母ちやんだつて土瓶の口からお茶のむよ」妾はハツと致ました、國家の干城たる武官の夫人に此んな方が有るんですもの況んや下の婦人に於てをやです、又存じて居ます齋の先生の奥様、大變な氣儘な方で朝から先生と爭ひの絕間なし近所の手前もはづかしいと思ふ位ですが、其方が何所へ行かれますのか毎夜毎夜お出ましに成るのです先生もよく知つて居られますが、うるさいから知らぬ顏して居られます、するとこれも七つになる坊ちやんが、「母ちやん夜、あるオツチヤン所へ行くの止めになさいな」と、何所で見たのか聞いたのか、「此の子は馬鹿だ馬鹿だ」といつも仰つしやる先生の前でから云つたのです奥様も驚かれましたが夫も夫と思はぬ方ですし、それより先生の御立腹直ぐ奥様は離緣に成ました、先生の奥様とも有るものが夜遊びとは何事でせう、子供と云ふものは恐ろしい者で御座います、見た事聞いた事知つて居る事、場所もかまはず申ものです、これは誰の罪でも御座いません、皆母親の教育の不行屆から起るのでは有ますまいか、父親は外に出て働く言はゞ外交官、子供の教育は重に母親の責任ではないかと思ひます子供は親の爲す業を眞似致します、子供

は育てにくい、恐ろしい者として育てましたらこんな間違も少ないと存じます。

活動と天職

徳島市　中村東雲

人は生れながらにして活動の性を持つて居ます、稚兒は呱々の聲を上げるや否や蠢々として五體の靜かな時はございません、之れ人間活動の初期てあります、漸く長じては、之が次第に衝動となり、願望となり、遂に意志となつて、彼の黄金とパンを得んがために、終日の勞苦も辭しない樣になります、之れは極めて少數の例外を除きて、誰も脱し得ない普通の軌道です、然しながら只之丈けては、未だにはかに人間の天職を全ふすべき要素を具へたと言ふ事は出來ません、何となれば、彼樣な事は他の動物ても尙ほ具有して居つて、其慾望の種類こそ異なれ、之れを得んがために獻身的冒險をする事は、却て彼が吾に勝る事があるからてございます之に依つて之を見れば、人間計りてなく、一般の動物は皆活動すべき天授の機關を持つて居ますので、決して安居荏苒に世を送るべきものてはありません、各々自分の賦



佳作　うしろ姿

美濃　山澤孝衣

性に適合した逕路に入つて、舉世の力を揮ふべきものと思ひます、而も其事業や利己的でなく、廣く社會を中心に取つて、幾分にでも社會向上の資になる事が出來れば、以て己が天職を盡すに庶幾いと申されませう、然り、人は生れながらにして活動の性を持つて居ます、而も之れが終生の行爲に隨伴して、始めて人の生命となるのであります、あゝ、活動なる哉、活動は實に人の生命で、名譽、地位、富、長壽等あらゆる人生の快樂は、皆活動によつて生み出されるのでございます。

女子の體育

備前　松本もと

女子は美しいものとしてあります、其美しひと云ふのは何處が美しいのでせう、房々とした黒髮、輝く眸、涼しい聲。又は表情に富んで居るからでせう、然らば女の美なる點は女子全體としてゞなく、其一部のものではありませむか。殊に其頭部に偏して居るやうです。然し完全の美人は决してそんなものではありますまい、眼、鼻、髮、皮膚ばかりでなく、其肉體、言葉を換へて言ひますれば體格美がなければなりますまい。今日何人でも、日本女子の身軀の倭小なることは認めて居るでせう。どうしても今日の男子位の身長でなければならぬと思ひます、西洋婦人の美しいのは、その金髮よりも、眸よりも、すつくりと高いあの姿ではありませんか。

私は日本の女子の體軀は年々に短くなつて行くやうに思へます、勿論男子もさうでせうが、娘よりも母親が丈の長い着物を着るのは珍らしいことではないやうです、こんなこととては、二十五世紀の日本人は一寸法師の日本人に變つて了ふかも知れません。

既に一般に女子の體軀は倭小なものと定まると、偶々五尺以上の女子があると、不具に近いと見えるものです、却てこの立派な女子を今少し小形ならばなどゝ思ふやうになるものです、蚤の夫婦などゝ云つて立派な婦人を目するのは誠に滑稽の至であります。

如何にして日本女子の體格を偉大ならしむる乎と云ふ問題は、中々重要なものであると存じます、天下の經世家、教育家、醫師の一番、考へねばならぬことゝ思ひます。

家庭の婦人

山口縣　吉田美代子

とかく、今の新智識を受けられた婦人方は、理想通りの家庭を造らうと遊げすから舊幣の舅姑の感情を害うて遂にはかなしい沙汰に及ぶのです。又、里の家風を直ちに、婚家に持ち出す樣の事など儘破緣の原因となるものです、何處に嫁入ても、我家の家風と同一と思つたら間違てす。ことごとく家風と云ふものは異つて居升ですから、婦人は里の家風を、すてゝ、婚家の家風に從ふべきてす、「郷に入りては郷に從へ」とは此事てせう、家風に付ては家人が教師です、雅量を以て、

之が教を受け、快活に柔順に、角立てず之に從ふのが、教育ある婦人てす。

家族は、愛を以て結ばれた社會てす。例へ、各自、心が合はなくとも、はなるゝことは出來ません、と申して、反目して暮すのは愚かの至てす、てすから相愛する道を講じて平和な家庭を造るのも、婦人の心次第てす。所が、良い敎育を受けられた婦人は、「己が己が」と云ふ心が出て、理屈を以て家人に對せられるのてす實に、いむべき事てす。理屈は家庭の禁物てす。理屈が出れば從つて善惡いよ／＼明白となり、愛も薄くなる理てあります。

いかに、愛情が必要といつても、夫にのみ偏すれば、家内に風波の起るのは免れません。我國の家庭組織ては、自ら、一種の公私のあるのは心得ねばなりません多くの婦人は、知らず／＼、夫に偏愛して、他の家族を疎んずる傾向がある樣てす、斯くなりますと、家族の者が、我に對する、言容、動作に、危險の色を帶びて些少の事にても、理屈が出るてしやう、此際理屈を以て對するのは、敎育ある婦人の取るべき道てはありません、無智の人のなす事てす。よろしく反省戒愼せねばなりますまい。反省して若し、我に罪がないと認めても「負くるは勝ち」柔よく剛を制す、益ありて損なしてす、難を堪へて、婦人の、道をつくす者が、あつぱれ賢婦人と申されるのてあります。

垣のぞき

羽鳥しらなみ

ある知人の家の子供十二の女の子が頭て十の男の子六つの女の子の三人兄弟が、喧嘩を始めると、非常な惡口を吐いて聞くにも堪えぬやうな下等な言葉なので、何處てどうして習つたのかと、眉をひそめた事があつたのに其後、其子供の母親が、子供を叱りつける時の口吻が先にきいた、子供の言語そのまゝなので、母の感化はかかるものかと今更ながら危ぶんだのてあつたまた或家の御夫婦は、お愛想がよくつてお口前がうまくて、陰てあれこれと批評するが癖てあつたので、人々から敬遠主義をとられてゐる方てあつた、その子供達が學校から歸ると、先生の一擧一動を父母に語りて批判するのを見て、かういふ親御は自分と同じ型の子を、作りつつあると思ふた事もあつた。

また同窓の友の某子さんがおかたづきなすつて御兩親のお氣にも入り、圓滿に行つてると聞いて間もなく、御不緣になつたといふ其理由を聞けば、其方の實のお母さんは梅毒のある爲に去られた方てあつたのが、その事實が婚家にきこえての御離緣といふに、もう一生どこへも行かぬといふ友の心も推しはかられて、お可哀想てならなかつた。

思ふに、善にまれ惡にまれ、母の子に及ぼす勢力範圍には、私等少女心に豫想したそんな狹いものではないらしい、やがて妻となり母となるべき私等の責を考へ

れば、悚然たらしむるものであるてはないか、實に處女時代の修養や準備は忽にして居られるものではない徒に男子に倚るべき運命と思ふて、色艶にのみ浮身をやつさるゝお孃様よ、お互に氣を付けて、口にのみいふ良妻賢母ならて、其實を全ふするやうに心掛けやうてはありませんか、たとひさしが出過ぎたゝお白粉が濃過ぎるのが能でもありますまい、古い言葉かもしれないが一時の榮を限りとして、散り果つる櫻花よりも、常盤の色の緑こき松の姿の方が私等の理想として、尊むべきものてはありますまいか。

文藝上の傾向

紀伊　今藤ふさ

近世文藝上に現れたる傾向と申しまするど、何人も近代的幽鬱と言ふを否む事が出來ますまい。二三年來の日本文藝の總てに、此の暗い影が漲ぎり渡つて居ります以前のが皆貴族的てした。文藝は自己の思想を信ずる事、自己一身に在りて自己に異なるものは、萬人にも亦異なり、とエマルソンが云へる如く、自己に異てあれば貴族的も樂天的も否む事が出來ないてすが、時代思潮は遂に現今の如きものを作つたのてす。

露國ても以前は樂天的な、寧ろ露人の特色が失せたやうな物てしたが、一度びゴーリキー出てよりは、下層社會のどん底まで描破された。

然し其の描寫法と云へば、極く困難てす。あく迄ても眞を守らねばいけない。てないと、木に竹を接いだ樣な物に成つて、到底非哀を語る事が出來ません。又近代は人生の苦痛にともなつて、隨分人間の心理が復雜になつて居ます。だから觀察が鋭利てないと、作者そのものが作中に囚れて了ひ、讀者は其の模索に困しむのてす。

以上の要求て、日本文界の覺醒とも云ふ可き、彼のナチユリズムが起りました。明治文學史上に特筆すべき大傾向てあります。

自然主義と云へば、兎に角肉感を起させる文學のやうに世人が誤解してゐますが、只だ一材題の開陳にすぎぬ。決して實行奬勵てはありません。

要するに以上は、只だ文藝上に現れたる傾向を說いたのみ、自身に於ても滿足出來なく、又た論文と云ふ可きてないのてすが、行數制限もある事てすから、譲しんてこゝに筆を擱き、敢て不完全を謝す次第てす。

つまれけりすてられにけりふまれけり　すくせつたなき名もあらぬ花
いひしらずうるはしかりきしかはあれど　短かく消えし夢なしぞ思ふ
なゝまゝになれよと且は思へどもなどこの思ひ打すてがたき
胸に滿つ　わがこの思ひなくばいかにやすけかるべきさびしかるべき
とこしへににげゆく影のあと追ひてむなしき道にうき身つかれぬ

（あけぼのより）

和歌

きし子

『天』

那智の瀧雄雄しき君がおん手とりおん手
抱きてあふぎ見しかな

女から見て男の强さうな處を歌ひ得たものです、場所と云ひ、姿と云ひ、歌の調子と云ひ、殆んど間然する處がない、劈頭此作を得て歌壇振ふ（評）

『地』

大阪　鈴木房子

夕月は君に向ひて身を忘れ世をも忘るゝ
我に影しぬ

「夕月は」の句を第四、五句の間、乃ち「我に影しぬ」の上に持つて來て見ると意味は直ぐ分ります、此歌は甚だ麗かで、少しも奇拔な處は見えないが、身も世も忘れてゐたのに、ふと自分の影の月下にさして居るのを見たと云ふので、深い味ひがあります（評）

『人』

牛込　平塚白百合

秘め置きしまゆはあらずて靑貝の文函か
ろらに蝶まひ出ぬ

才氣のある歌、整ふた歌（評）

『秀逸』

○百の灯の一つ一つに九十九の消ゆてふ時のまぼしに似る　大阪　梅本龍子

○遠近の山のあはひに濃きもやのかゝれる頃を　若狹國　早水その子

○暗の道に灯一すぢ光して君とあふべき扉ひらきぬ　山城　松田胤子

○うら庭の一むら芒穗に出てゝうひ〱しさや初秋風に　滋賀縣　池田芳江

○朝顏の花より葉よりこぼれたる露は少女の黒髮にしむ　福岡縣　大庭たか子

○美濃國　山澤美知
夕日照る海面をあまた白鳥の大白蓮の散る樣に飛ぶ

○若宮八重子
野の水は七つの溪の白百合の朝の香のせて流れ來しかな

○豐後　江口かを子
我が眸の力に靡き戀すてふ文から千束得し誇かな

○阿波國　大久保桂子
さびしみの洞より出でしまゝをして秋川白う流れ行くかな

○瀨崎せい子
心から築きし宮を心から又くづしやる日も來るかな

○岩手　つぼみ
やどり木に咲きたる花の命にもたとへても見つわが嬉しき日

○福井縣　吉田歌子
癒えがたき病と知れどたまゆらも死をば願はずあさましきかな

○上毛　伏島直子
ともすれば君に逢ふ日のせまりきていと面はゆき心地す我は

○尾張國　花子
照りつくる大講堂の石だゝみ石には白き光射返す

○大阪　寺本てい
人にそむき世を今こゝに住詫のわれにもさくやおしろいの花

○若狹國　津田瀧子
我が胸の葬りの鐘の音は悲しみのこしまえにける哉

○備前　松本もと女
あたゝかき血をわかしめよとやみの胸にかえせよゆく秋の野よ

○尾道市　石原文子
若人の胸に咲くてふ紅の花の芽いつかわれにも萠えぬ

○金子かたえ
まやみ夜をひそかに捨てし戀のうたあゝまた持て來今朝のうしほ

○美濃　山澤里子
初秋や白き花咲く糸萩の垣の中なる家をし思ふ

○土佐　梶原翠美
玉の肌日にてらされてゆあみする人美くしき夏の日のひる

○大阪府　岡田豐子
もつれつゝも仲よく開け朝毎に赤と白なるあさがほの花

○名古屋　足立さはえ
戀よそは神のときます歌のみ名とかし黑髮人の世のため

○磐城　川上靜子
野にもゆるたゞ一つ火の火を慕ひ急ぐがごとく人を戀ひけり

○津島　森下花子
彗星の億劫逢はぬ光いま消ゆると思ひ君は嘆くや

冬子

○すゝき野の夢のやうなる夕月にほの見し人の忘られぬかな　上總國　山口　芳子

○白樺の木立に薄き霧かゝり湖より吹きぬ初秋の風　大阪　百田　文子

○うす絹につゝまれ霧の中をゆく心地に人を戀ひて世にゐぬ　大阪　あき子

○もの思ふ小窓のあなた夕空に星が引きける火の色の紐　筑後　井上あい子

○十二間灯はなやぐ青簾琴の音にこそ夜は更けにけれ　むらくも

○沼べりに友と語りてたそがれぬわかれん事のたゞ哀しうて　大阪市　山内　溪子

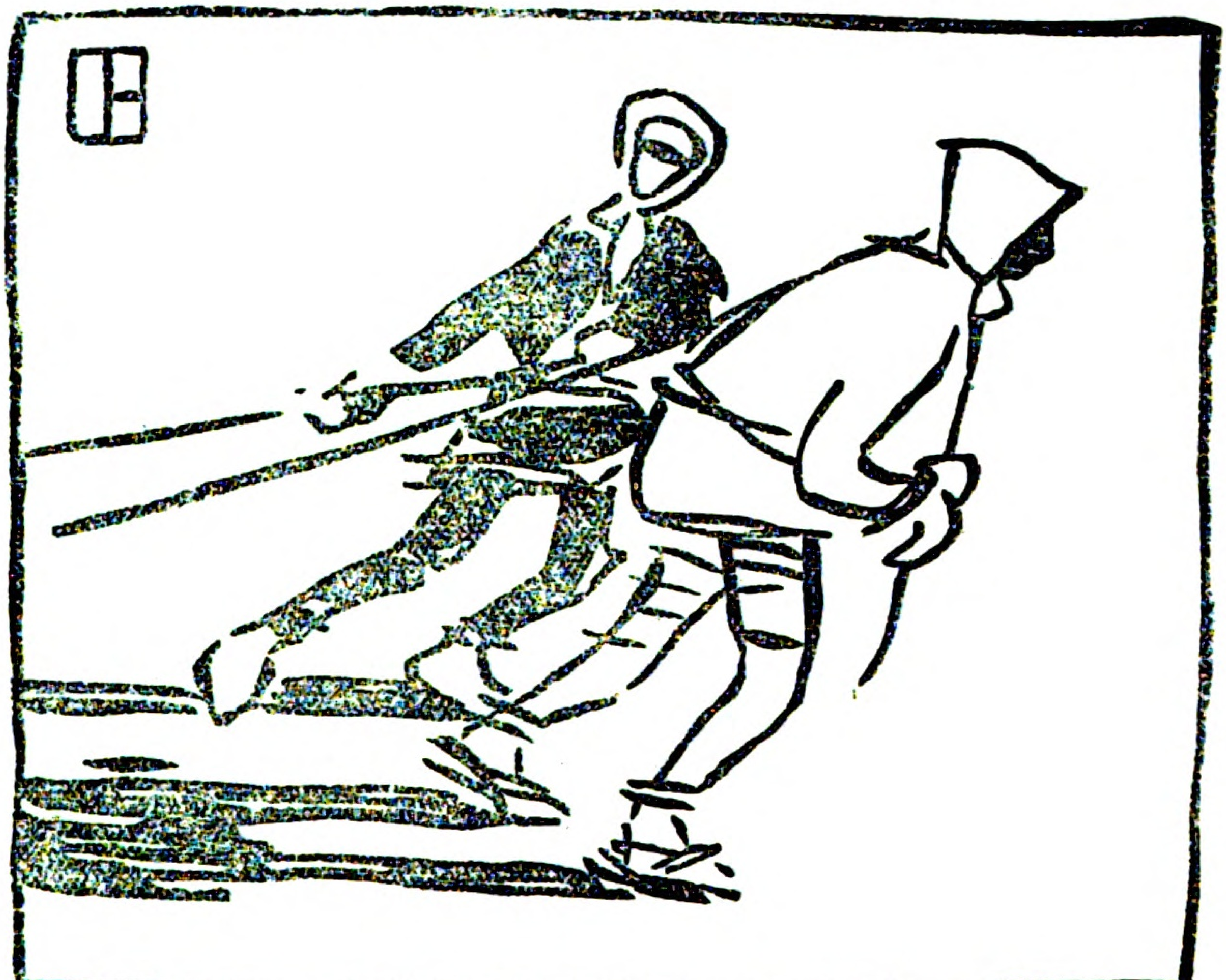
○東の海みな黄金の波をしぬ入りくる船によき人あらむ　靜岡縣　川山よしえ

○うらゝけき小野のなよ草つむ少女十五の袖に雄蝶狂ふも　上野國　阿部　清枝

○紅罌粟の紅燃ゆる初夏は若き詩人の心にも似て　下野國　栗原くに子

○人の胸を沙漠のなかのオシアスと慕ひよるなり戀に飢えし子　土佐國　中平かめ子

佳作　水夫　青森　立花とも子



天上の不滅の花は闇えもて野に立つ我れを咒へるごとく

○背寐して夜長をかこつ老人のかたへに臥して物思ふかな　高知縣　穗岐山はる

○しろがれの小鈴千よろづ一ときに振り出しつゝ滿地虫なく　土佐國　川島　朝野

○朧つぼにわかき女のたゞ一人ましろきはだに黑かみの散る　府下　影法師

○あゝこの夜燃ゆるは星か燈火か花のやうなる君がまなざし　堺市　岡野　千枝

○いかにせん飛ぶすべ知らぬ人の身はたゞかりそめの面影に見よ　野の花

○黑髮の夢に亂れて戸に倚れば我れと我が身は幻とこそ　東京市　細川　榮子

○我夢の七歩の庭を君と云ふまぼろし來りたえず名を呼ぶ　豐後　吉良　靜子

○明に居ば人の怖ろし暗きにゐる蝙蝠のごとく樂しめるわれ　岩代　大河原春子

○草刈の唄も曠野にたそがれて三日月淸うちぎれ雲とぶ　下野　三浦　梅香

○消えもせずさあれふたゝび燃えもせずひそ〳〵いぶるものうさを泣く　名古屋　原田　琴子

神戸市　井口その子

○つま琴はうれひの音して黒髪の人にせまりぬ萩ちる夜なり

滋賀縣　若井きく子

○十三絃ごとにこもる美くしき魂のしらべに舞ふ少女かな

麻布　三浦美紗子

○秋の風わが六尺の黒髪を吹き靡かせて香の國に入る

信濃　駒澤みつ女

○濃き霧は旅の山路にかゝるとき峰より吾を呑みに來し哉

下谷　桐の葉

○かなしみを胸につゝみて岸に立ち流るゝ水をおそろしと見ぬ

伊賀　岡花子

○こほろぎやむかし大家が家跡と傳ふる畑の夕露の路

常陸　山下靜子

○天の園葡萄のしづく流るを山家に賞翫するも

東京市　佐藤いつ子女史

○わが胸は深山がくれのほの暗き森のこずゑにかくれ咲くはな

佐賀縣　交野こはぎ

○紡車を繰る音きこゆなり川添の桑の園に圍まれし家

大阪市　鹿島あや子

○夜や長き思ひ出に寐ぬ我一人この淋しさを君は知らずや

愛知　野菊女

○丸窓や妹病みし其日なり島かげさしてたちまち消えぬ

常陸　大久保愛花子

○君見し日榮の光は輝きて宮居に入りし嬉しさに居ぬ

福岡縣　大坪ゑい子

○光りよはく黄金矢なげし日はおちぬおもひはとほき雲のかなたに

美濃國　飾島敏子

○世に人に忘かれたる身にしあれば伏屋にすぎし君がかどかな

茨城縣　山下白百子

○古里は竹の中なる草の家に數遍りする夜ぞ月うすうきせ

四谷區　淺野かつ子

○ほろ〳〵と紅葉みだれてひよ鳥のなく山かげに秋の雨ふる

秋田縣　田口柳子

○霧罩むる湖のほとりにひとり立ち太古をおもふ寂しさに居ぬ。

秋田縣　大沼紅花

○白百合の花を抱きて雲に入ると君とかたりし一時思ふ

肥後　桑本やを子

○わが胸の波高まりぬ妹の逝きにし夕雨しきりなる

石川縣　琴子

○あゝうれし紫陽花咲ける古椽に野風薫ずる美しき家

琴子

○そよ風に明き月散る水の面に歌思ふらむ小さき姿よ

近江　文角うた子

○旅人は蟲の鳴く音と草月の二つを愛でぬ白萩の宿

岐阜市　篠田とみ子

○み親もつ我は少女子一首を君にいらへのにぶり勝なる

佐賀縣　嶺女

○ト／繁る花野の中に逍遙して君と語りし時思ふ哉

東京　野の水

○我がおものやつれかくすとともしびのくらき小かげに泣く一人かな

秋田　江橋安子

○たそがれに曠野さまよふ心地して生てふ途に一人息づく

芝區　長谷川靜枝

○この少女悲しからずや三年をいつはり笑みぬ逢ふ人ごとに

本郷　朝井松子

○葉がくれに咲く朝顔の小さき花をうれしとぞ見ぬ小雨ふる朝

紀伊　岡村幸枝

○戸によれば灰濁りして大空は暮れてゆくなり寂しきいろよ

入谷の里　千代子

○戀人のやつれし頬をそと吹いて小蝶一羽を迎ふ秋風

鹿兒島市　岡磯貞子

○をみなへしおほし尾花の二もとと結びても見む歌のひも

○　紀伊　横瀬靜江
山晴れぬたつ河霧や里こめてやがて夕日とともにうするゝ
○　大阪　伊藤女
絵日傘の下に三尺棠の花の姿弱にかげろう立つも
○　兵庫縣　花園笑島
そことなくかの天上の花の香のほのめくおぼえ君と語りぬ
○　神戸市　山本幽霞里
君が文炎になげぬ恐ろしきけぶりのうちに笑ら君見る
○　福岡縣　ちよ子
君と云ふ日は照り榮えど心はや萎れぬ花咲くすべもなき
○　筑前　和田やしよ
我が思ひ流れ／＼て末はただ悲しき海に入らんとすらむ
○　下野　黑須輝子
月は今峯を離れて昇るなり稲の葉波のゆた／＼と打つ
○　京都　北村はな
病みし日に物書きそめし文机を抱きて泣きぬ十八のわれ
○　大阪　梅村愛子
何となくたゞ何となく我むれにもだえ覺えしゆふべのゆめよ
○　山形縣　鈴木正枝
青葉かげ谷間の瀧のしぶきにてこゑうちしめる時鳥かな
○　豐後　菅原尾花子
世にまさぬわが戀君の魂に似てなつかしき秋の夜の星
○　安原そと子
くちなしの色に匂へる女郎花つゝしみふかくみえにけるかな
○　神田　尾立俊子
亡き人の戀しきあまり奥津城の冷たき石に頬あてゝ見ぬ
○　羽後國　佐藤蓮子
雨の音靜かなる夜に目閉づれば戀しき君の姿仄浮く
○　樺太　眞田のぶ子
雲とわれ手に手を取りてかたらひし其日の色のあぢさゐの花
○　熊本縣　峡よし子

まぼろしのかげなるきみを追ひゆきて不安の森の徑にさまよひぬ
○　千葉縣　原良子
輿に乗りてふれても見ばや夢を白き花なるみ迷の霧に
○　神戸　のぎく
またもよべ悲しき夢を見たりけり君にすがりて濱ゐるきせし
○　美濃國　山澤政女
紅の薔薇開くと思ひけり戀なのたまふ君が唇
○　岩代國　瀧本なみ
山の陣大篝火をたくに似てたゞあか／＼と夕日の燃へぬ
○　水戸　重子
熱き日の白百合薫る廣庭にしろき蝶舞ふ風ゆるうして
○　武州　近藤とく子
山姫のかざしなるらむさゆり花わが世のちりの更にかゝらで
○　京都　岩淵園子
思はずも涙ながるゝうれしき日くす師はつげぬ病おもしと
○　大阪　西戸政江子
たとふれば岩間にさける白百合よ人の觸えも知りまさぬ君
○　三重縣　糸子
風の間に銀燭たてて舞姫の歌ひ興ずる行く春の宵
○　阿波　中村かつ子
天かける白鳥見てはひたぶるに母の肌戀ふ島守少女
○　下總國　川奈部ゑい子
秋淋びしかゝる夕は花と云ふ花にもまさる君に會らむ
○　大阪　宇和島豐子
秋姫のほがらの聲に秋の風山も野原も皆覺めてあり
○　大分縣　宮崎てる子
小夜更けて小川の流れ靜かなる音絶々の水車かな
○　赤坂區　川島ちづ子
野なる虫もゝ千の笛に息こめて秋の夜を鳴く茅原の中に
○　芝　しら萩
いたつきになやませたまふ父君のみこゝろしらで子等のさわげる

伊賀　伏見良子

○ひら／＼と病葉散りぬ冷やけき地を安らかの住まひとおもひ　愛知　緒方和江

○うつゝなの心に萌えし珍花の香に酔ふここちわれをのゝきぬ　越後　宮澤みさを子

○ありとある悪はわが身にせまり来ぬ力堪へりや悲しきおもひ　土佐國　高橋佳君

○さまよひや不安の胸に手をおきて空にかゞやく夕月を見る　大阪府　祝綾子

○秋の水にふりし欧反古流しやりて暮れゆく鐘を聞く夕哉　上野　大沼紫女子

○相愛の人の運命をかへり見て罪かと己が身をかへり見ぬ　上毛　浅香いよ子

○萩の花咲きそめてよりむらさきの色に流るゝわが背戸の川　三重　笹木千代子

○遠山にはや照り染ゆる日を眺め朝の霧濃き川沿ひをゆく　靜岡市　根岸貞子

○わだつみの果に夕日は沈みつゝ藻の花ゆらぐ夕凪の海　牛込　渡邊磯の灯

○穂すすきの白き波立つむさし野に富士さやかなる神無月かな　伊賀　うた子

○尊くも神のなさけに咲く花の燃ゆるが如し君の唇　大阪　四戸政江子

○痩えたれどいましばらくは許しませこのみだれ髪結ばんまでは　茨城縣　今泉磯千鳥

○ある夜ふと毛繻子の襟に君が面ふがき／＼ぬいと臨にも　大阪　芳野

○灰色の霧ひくうして黎明の光またたく氏神の森　京都市　堀尾ふみ子

○暁方や白菊咲ける垣根より消え行く星を我眺め居ぬ　讃岐　高橋かつよ

○おばしまの白衣の女俯向て森の街見ぬ蝙蝠の飛ぶ　秋田縣　村萩女

○罪を得て罪を知らざる日を思ひ罪と知る日をきみ恐れけり　千葉縣　相川あきら

○小雨降る青葉若葉の湯の宿に君を思ひて一日二日　能登　竹園花子

○あなかなし君は我身に燈しか生命の若芽燃えつゝ消ゆる　大阪府　守部君子

○きゝなれし昔話りを聞きにけり秋の雨ふる乳母がやどにて　三河　ふみ子

○恥しの心も今は昔にて母と言はるゝ身となりにけり　安藝國　きみ江

○罪作る小さき町の家毎に亂れ寄るゝ白萩の花　廣島　友末靜枝

○朱の欄に春日流れて廣前の潮の淺みに鹿の子遊ぶ　甲斐　藤森もろゑ

○雨過ぎし軒端の山のこずゑより夕日こぼれて蜩のなく　久留米市　すみれ子

○日ぐらしの聲もすゞしくふき落ちて山風きほふゆふたちの雨　兵庫縣　富士田章子

○あつき血の胸にあまりて頬を染めて君と逢ふ夜のうらはづかしき　近江　平田道江

○鐘の音にこもるうれひのおも影もみゆるが如し秋雨の窓　金津　白井綱江

○そゞろにも菊の香せまる朝の戸に病るわが夫淋しう笑みぬ　本郷　靜紅

○秋雨や昨日の人の戀しさに堂にのぼりて法華經誦しぬ　土浦町　稲葉萬子

○傾けし笠に銀杏をのせて行く旅人戀し霜月の夕　三重縣　古志むら子

○思ひ出はさびし枯野の大銀杏むかしのごとく黄にして立つも

○　伊賀　山村龍子
夕まぐれ子のむづかるに戸を出れば
たま〳〵逢ひぬむかしの友に

○　山口縣　深山艶
さらでだに悲しきものを亡き人の事
思はする秋の夜の雨

○　越後　みさ子
ふるさとや友と遊びしさとみちは昔
のままにいちご色づく

○　三重縣　村上靜子
吾死なば魂は殘りて寃ともなりてつ
れなかりにし人にむくいむ

○　茨城縣　久保田春江
午に近きみ寺の靄は靜にて小鳥の聲
に栗の花散る

○　肥前　大石美登里
嫁ぐとて飽かぬわかれを泣きし日な
りひれもす獨り秋の雨みぬ

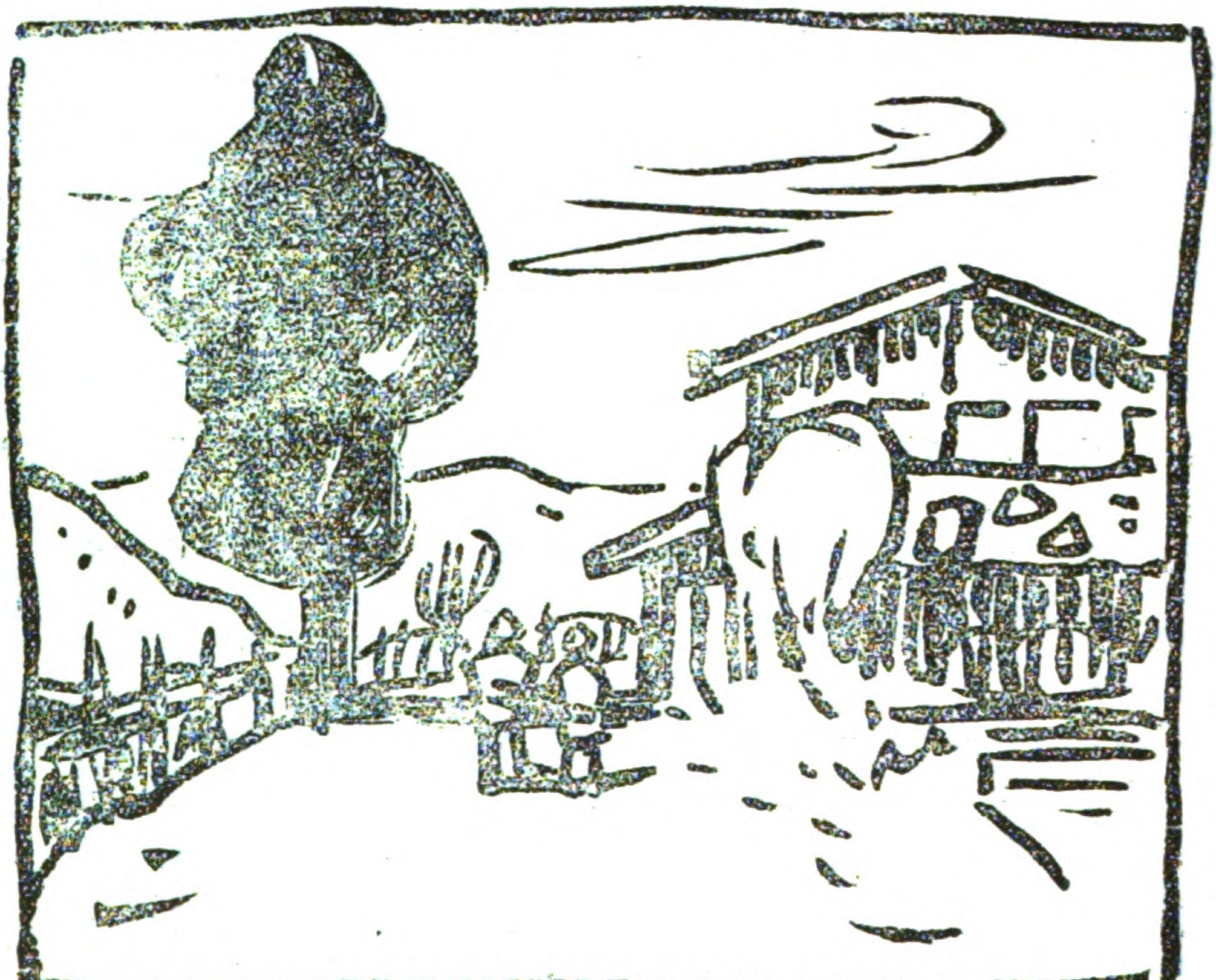
○　青森縣　竹野秋子
涙ぐむ不安のいろひ見ゆれども冷え
し心の君にはよらじ

○　越後　かほる
さゝ川に鮎とる人のうしろかげなぎ
さに遠くうすう月しぬ

○　遠江　倉田泣花
もろともら肉の香戀ふる身なられば只
憧憬に生む吾が齡

○　秋田縣　佐々木閑子
日毎〳〵み空は冷えて山々は皆紅の
錦となりぬ

○　遠江　井口増



佳作　村道　青森　松尾千代子

病みませる母をみとりて夜もすがら
もの思ふまどにこほろぎのなく

○　羽前　栗花
恥ぢらわてもの云ひ得たる悦喜と恐
れに一人涙流しぬ

○　近江國　竹村光枝
蟲も皆なげくが如しくだけたる戀を
野に泣くくろがみの人

○　長崎　江副野百合子
明星の光うすれて朝もやのなかに聳
かる童の見ゆる

○　横濱　ちあき
曉の鐘のこだまに音そへて咲くは氣
高き白蓮の花

○　愛知　林露子
母君の逝きたまひしは去年の秋今宵
の如き月まろき夕

○　上毛　飯島きよ子
白萩の清き白露掌にうけて朝化粧す
る愛らしき妹

○　上野國　飯野花子
ゆく秋に痩せしわが影松のかげとひ
とつに消えて丘の日沈む

○　福島縣　紅葉子
嬉しきは悲しき夢をみたる夜の醒た
る時の心なりけり

○　京都　大谷津みれ子
たゞ一夜小萩ちる夜にたゝずみてこ
ころゆくまでもの思はゞや

○　神戸市　大澤ゆかり
亡骸に油を盛りて寃はわれの胸にて
青き火をもやしぬる

河内　竹田敬子

○

乙女子のまゝごとすなる裏庭に白菊咲きて靜かなり　長崎市　石山溪花

○

秋涼し此里に住む人みなは女に見まし萩かきの家　山形　河原榮子

○

我生は山の少女よ今日もまた杉の林に落日をみる　岩代國　菅野和子

○

昔ささげし深山はいまだ春なれや老ゆとも見えぬ鶯の聲　横濱市　安川久子

○

虫聞きつまろ寢ながらに秋の夜のあはき灯影に歌思ひ見ぬ　鳥取縣　桑本きさ子

○

わが胸はいま夕暮か君は見えず寂寥といふ黒鳥の鳴く　美作　性金恭代

○

聖者住む御山の寺に鐘なりて麓七村いま時雨する　芝區　天野星子

○

ふるさとの母と思ひて先をゆく人追ひゆきぬ秋くるゝ街　靜岡縣　福地茂登

○

あゝ今や大日輪ぞ昇ります富士の高嶺をあけに染めつゝ　熊本縣　淵本すて子

○

たきつ瀬の音をきかずは山姫のさらせる布と見てやすぎまし　横須賀市　登喜子

○

秋の雨侘しき宿を思ひつゝ思はぬ人に戀せられぬる　秋田縣　佐藤花江

○

秋の日は藻の香たゞよふ山寺の裏の古沼うすうてらしぬ　茨城縣　中山道江子

○

思ふどち出逢し夢のふとさめてそゞろ戀しきふる里のそら　武藏　弁田雪子

○

母と住む若き給たくみ病室し傾く軒に秋の雨降る　信濃　紅ばら

○

さびししと人は泣きたる其宵を戀の珍花うれしと咲きぬ　岡山市　今東小鶴

白鳩を放ちやりては夕空をしばし見守りぬ白衣宮守　福岡縣　天野いと子

○

涙より外の手向けはなかりけりたゞありし世の思ひ出されて　盛岡　四戸節子

○

今の間は冷たくもあれ我が胸はいつかは燃ゆる日の神のごと　神戸市　萩原秋子

○

ともしびに衣縫ふ針の寂しげに二人語らふ秋雨の家　芝　廣瀨多美子

○

いづこにも宿りかれてかをちこちと雨ふる中を迷ふ螢は　京都　絹引眞砂

○

まぼろしに面こそ見ゆれ今は世に亡き友こひし秋の夕暮　尾張　成田いし子

○

魔の神が呪の聲と怖氣しぬ眠られぬ夜の松風の音　茨城　西野春枝

○

波に動く燈火のかげ美しや夕潮のぼる河添の宿　伊豫　福井白百合

○

梅雨はれて向ふの山の近く見ゆ戀しき母のおわします里　青森縣　西村みや子

○

失戀を胸に包みて親友のとつぐ夕べを我ははなやぐ　旭川町　小林喜代乃

○

夕立や谷間小暗く落しげく冷たき風に百合の香ゆらぐ　石見　武志松子

○

山吹の花こそにほえ雛うたひ小家ぬちけふる秋の雨の日　宮城縣　露の子

○

あれはてし峰の古寺鐘こめて秋のあはれをとふ人もなき　青森縣　馬場ちよ子

○

君まてる家にピアノの音をきゝて棹さし急ぐ黄昏の湖　尾張國　岡田久子

○

萩の原月さえ〳〵と夜は更けぬれぶれる草の露もうごかで　長野縣　竹花やす子

○

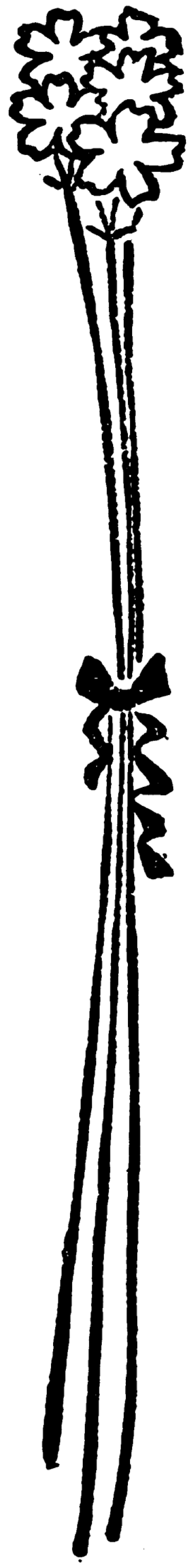
紅に桃咲き出てぬ故郷のわが兄上のみ心に似る

「地」

お伽噺

兎と狼

井上年子



ある日の夕方でした、一匹の兎が狼の窟へまいりまして、

「狼さんなんと旨い金もうけがあるが行かないかへ」と申しますと、強慾の狼は何の異存がありませう。二つ返事で承知いたしました。

狼は命よりも大切な金財布を首に引掛けて、兎に從ひてまいりましたが、ある山の麓の地藏樣の傍までまひりますと兎が、

「狼さん此所だよ、此地藏樣の前へ其の金財布を夜通し置いてごらん、朝までには屹度持切れない程お金が這入つてるよ」と申しますと、慾張りな狼はだまされるとは露知らず、大切な〳〵金財布を地藏樣の前へ祭つて置きました。そして其の側へ寢ころんで番をして居りましたが、夜半頃になるとグウ〳〵寢て了ひました。すると兎はそつと金財布を盜んで外へかくして置きました。

軈て夜が明けますと、狼は今朝はあの財布に山程お金が這入つてるだらうとホク〳〵もので、地藏樣の前を

見ますと、驚いた、お金どころか財布まで、かげも形も見えません。そこで狼は狂氣のやうに成つて、其邊をうろ〳〵探して居りましたが、何うしてもありません。とう〳〵果は兎を捉えて、

「おのれ惡い奴ぢや、貴樣の爲めに大切な金財布を無くして了つた。さあ返せッ！返せッ‼」と喰つて掛りましたから兎も驚いて、

「まあお待ちなさい、私は何もお前さんの財布を無くさせようと思つて連れて來たのぢやない。けれど私は財布を盗んだ奴は知つてるよ。お前取返しに行く氣かい」

「何、知つてる？ぢや行くから連れて行つてくれ」

「宜ろしい私に從ひてお出てよ」と兎が先に立つて今度は其山を奥へ〳〵と登つて行きました。すると一つの谷川へ出た。水は恰度瀧の樣にゴウ〳〵とものすごい音がして、岩に當つては白馬を飛して居る。恐しい矢を射る樣な急流です。そこへ一本の朽ちた木が橋の樣に横はつて居ります。身輕な兎はすぐに其木を傳つてする〳〵と譯も無う向へ渡つた。

「さあ狼さん其木を傳つてお出て、大丈夫だよ」と云ひますので、狼も安心して渡りかけましたが、何がさて半ばも渡らないのに早やメキ〳〵と大きな音がして、忽ち折れて了つた。狼は橋が折れたから堪らない突如深い谷川へづぼんと落込んで了ひました。

兎はすぐと我窟へ引返して、皆に此事を話しますと皆大喜びて、あの慾張の狼を退治たとは目出度い目出度い、祝へ〳〵と云ふので、一同狼の窟へ集つて大酒宴を開きました。

下

翌日狼はぬれ鼠のやうに成つて歸つてまいりましたが、兎を見るなり引捉えて、

「おのれ惡い奴め、宜うも乃公をこんな目に逢はしやあがつた。もう堪忍は出來ない」と云ひ乍ら突如大きな袋の中へ押込んで了ひました。

「おのれどうして谷川へ投込んでやるからさう思へ」と怒鳴り乍ら、其袋を背負ふてドン〳〵谷川へやつてまいりました。すると兎が、

「あゝもし狼さん〳〵」

「何んぢや、今に成つて何んと云ふても駄目ぢや、默つて念佛でも唱やあがれ」

「いゝえ私は今更助けて下さいとは云ひませんが、只一言云ふて置きたい事がありますので……」

「何んぢや、何んな事ぢや早く云へろ」

「外ぢやありませんがね、あの地藏樣で無くなつた財布は私が盜んだのですよ。そしてあの門の横へ埋めて置いたが、今頃は誰かが堀つてるだらうと思つてね…」

「えッ何んだと、財布を門の横へ埋めて居いた？待て待て一遍歸んで取つて來てやらう」と狼は袋を其所へ放つて置いて、ドン／＼引返して了ひました。馬鹿な狼は袋の口を括つて置かなかつたものですから、兎は譯も無く袋から脫出しました。そして草や木や石や小砂や、種々のものを宜い加減の重みだけ詰込んで



置いて、さつさと何所かへ逃げて行つて了ひました。

狼はやがて歸つて參りましたが、そんな事とは知らずに、

「やあおのれ惡い奴め、宜うも／＼おのれ」と腹立まぎれに突如袋を引摑んで谷川へ投込みました。

其夜狼は平日のやうに寢て居ると、

「もし狼さん／＼」と云つて雨戶をトン／＼叩く者があります。

「誰ぢや、誰ぢや」

「私だよ、兎だよ、一寸此所を開けて下さい」

「えゝッ兎？兎？」

「あゝ兎だよ、川へ投込れた兎だよ、けれど幽靈ぢやないよ、金もうけのお話だ

よ」

狼は小氣味は惡いが、金もうけと聞いたので、恐る〱雨戸を開けました。中へ這入つて兎は、

「狼さん私はね、お前さんに川へ投込れてから飛んだ金もうけをしたよ」

「何、金もうけをした？」

「あゝ金もうけをしたよ、それはかうだ。川へ投込れてから私は龍宮へ行つたのだ。すると王樣が大層珍らしく思召して種々お聞に成つた後、また遊びに來いと仰言てお金を澤山下すつたよ。これ此通り、で私は畏つてお前を連れて來る樣に申上て置いたが、お前行かないかえ」と申しますと慾張りな狼はもうよだれたら〱、

「行く〱行くから連れて行つて呉れ」と賴みました。

「宜しい連れて行つて上げう。ぢや袋を持つて私に從いてお出て」

そこで狼は大袋を脊負ふて、兎に從ひて參りました頓て彼の谷川まで來ますと、兎が、

「さあ此の袋の中へ這入るんだよ」と云つて狼を袋の中へ押込んで、口をしつかり括つて突如川へ突落しました。

矢を射るやうな急流は、見る〱内に狼を卷込んで見えなくなつて了ひました。

大きくて惡な狼は、少ひさくて賢い兎に、とうとうだまされました。

これなら幼ない子供に話しても喜こんで聞くでせう、お伽噺の目的に適つてゐます(評)

『人』

蟲の相談會

大津市　内田八千代

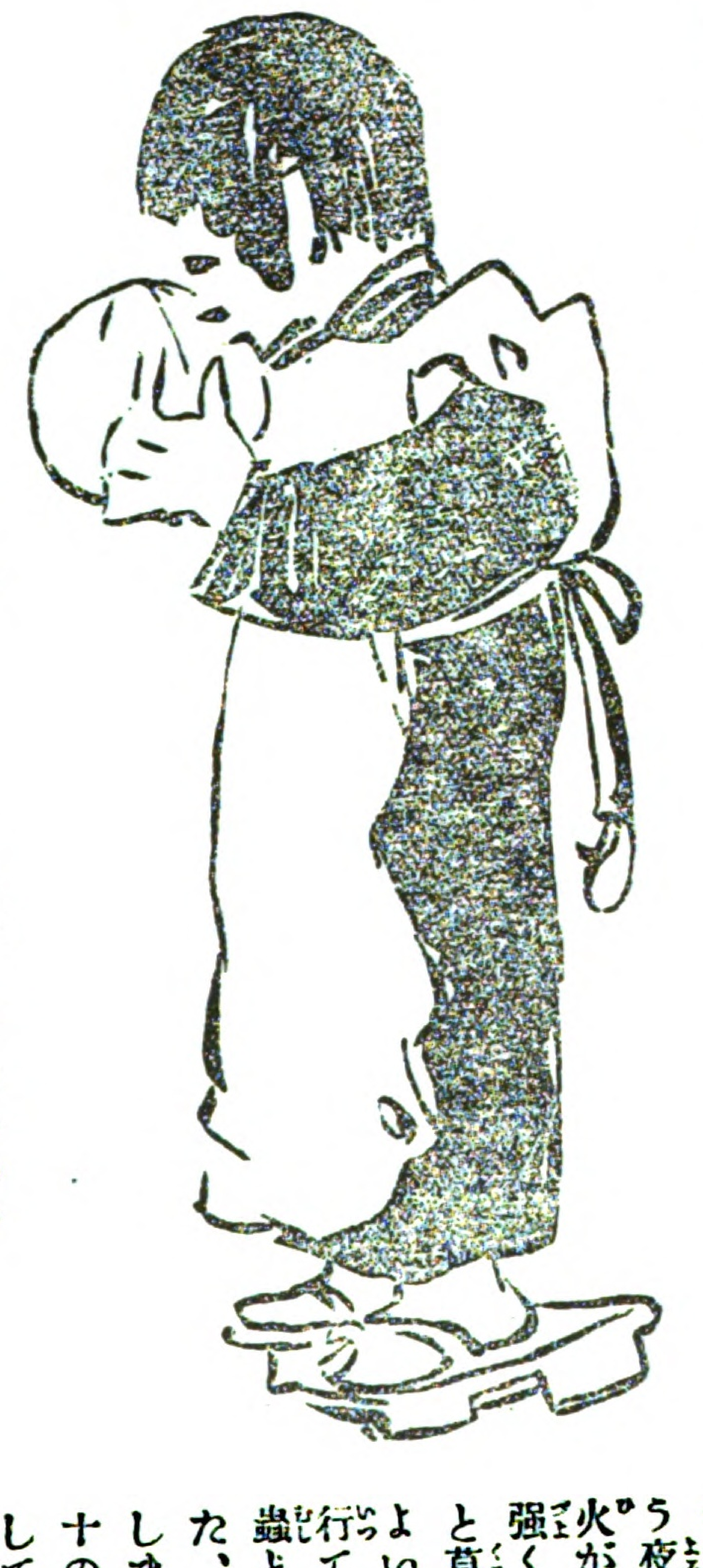
太郎は大層蟲が好きで、いつも虫を取つて來ては、殺生を致します、お母さんや、姉樣が叱つてお止めになつても聞きません。夏休みになりますと、もう毎日毎日近所の子供と、虫を取り歩き、蜻蛉の首を拔いたり、蟬の羽や足を取つたり、かはいさうな事ばかりして本などは見た事もありません、それで、太郎の家の庭には、蟻一疋も居なくなりました。

一番澤山仲間が殺された蟬と蜻蛉とが相談して惡太郞を困らして遣うと思ひましたが、味方が足りませんので、彼方此方を廻つて、虫類を仲間に入れました。

先づ花畑へ行きますと、美しい蝶が飛て居ますので、蝶に此事を話しました、蝶も太郎を惡んで居ましたので、直に賛成しました。そこで、三疋が大きい倉の所へ來ますと、蜂が熱心に巢を造へて居ました、蜂も仲間入しました、倉の横へ下りますと、蟻が一心に食物を穴へ運び込て居ました蟻にも此話をしまして、こゝで五疋になりました。前から兜蟲の強いと云ふ事を聞て居ましたから、之も仲間にしやうと、五疋連れて山へ出かけました、道で野原を通りますと、蟋蟀が呼びまして、之も仲間入しました。夕暮に山へ着きまして、兜蟲の居所を探して居ますと、向ふに、何か澤山集つて居ます、見ると兜蟲ですから、其話をしますと、兜虫は、今日も惡太郎が來たので、此所へ逃げましたと云て、大層賛成しました。山を出ますとだん／＼、暗くなつて來ました、すると向ふに火が見えますので、行きますと螢でした、之も賛成しました皆のものは、もう夜になつても火が在ると、心強くなりましたと草の間で大層よい聲がします行て見ますと松蟲と鈴蟲とでした、此も仲間入しまして、此に十の蟲が集りまして、明日の午後、愈相談會を開く事になりました。

明くる日の午後になりますと、皆大きな松の木の上に集まつて、席に着きました。

蜂（得意の聲て）「諸君、今日はよくも御集り上さいま



佳作　母の下駄

和歌山　日田みつ子

して御苦勞樣。さてさて惡いのはあの惡太郎です私達は、もう仕方がありませんから、皆が一時に、惡太郎の廻りを取り卷て困め樣てはありませんか」

蜻蛉「實によい考へてす、私達が皆一時に攻めたならば、如何な惡太郎も降參するてありませう。ては私達一族は羽が達者てすから、惡太郎の樣子を伺ひに行きませう」

兜虫「私達一族は元來武家て、遠い昔此天下を取つた源平二氏の子孫てあります。それて鎧、兜に身を固めて攻め込んて、惡太郎をはさみ切つてしまひます」

蜂「ては、私達は惡太郎に取り付き、此劍て、顏や首筋を刺します」

螢「皆樣が色々と引受けて下さいまして、有難う存じます。私は若し、夜になつた時には、火を點して敵を誘ひ、又敵の在所を明かにしませう」

蝶「ては、私は晝に、ひらひらと舞つて、誘ひ出します」

鈴虫「私も聲て惡太郎を誘ひ出します」

松虫「ては、私も」

蟻「私は食物を運びます、又私の庫には、多く食物がありますから、食物の盡きる心配はありません」

蜈蚣「足が達者てすから歩くことなら皆さんに負けません」

蟬「皆さんが賛成して下さいまして、漸う相談がきまりました、どうか、宜しく願ひます」

一同（蟬に向ひ）「ては、あなたは皆の指揮をして下さい得意の御笛て」

これと丁度同じ時に、太郎は何時もしない晝寢をして居ました、――あたりは、廣い〱野原て、太郎は今ひとり、其中を徘徊つて居ます、何處かに、松虫や鈴虫の美しい聲がしますので、太郎は、ぼんやり聞いて居ますと、向ふから「進め」と云ふ聲に、先には蜻蛉が案内をして、其後には、兜蟲が、鎧兜をつけて山の樣に進んて來ます、蜂の一群が劍をそろへて、勢よくやつて來ます、流石の太郎も、之にはおそろしくなつて逃げ樣としますが、走れません、遂に、皆太郎のまはりに來ました。蜂はいきなり顏や首筋に取り付きまして、刺します、兜蟲は、得意のはさみてはさみます今や、太郎をさんざんに苦しめるのてあります。「常の惡事を知れ！」と云ふものがあります、太郎は逃げられず、もがきもがいて居ます。――太郎のお母さんは、次の間て、縫物をして居ましたが、一寸手を

止めて、太郎坊を見ますと、寝床にもがいて居ますので、走つて行つて、抱いて起してやりますと、まだ「降參だーー」と云ひます、漸う目が醒めて、お母さんが聞きますと其夢の話をして「お母さん、もう虫は殺しません、こわい／＼」と云ひました。それから太郎はすぐに、蟲の相談して居る木へ行きました。丁度相談が濟みまして歸らうとする所でしたが、太郎は、皆を呼び寄せて「今迄は、わるい事をした許してくれ、もうこれからは、殺生しないよ」と云ひますので、皆安心して歸りました。

太郎は、殺生をしてはならぬと云ふ事を、深く感じまして、此後生きものは少しも殺しません、却て之を愛して、又一心に勉强しましたので、學校では一番になり、校長樣から褒められて、褒美を戴きました。

これから、太郎の家の庭には、花に戯れて、美しい蝶がたくさん舞ひ、草の間には、螇蚸が飛び、蟋蟀が鳴き、池に映つた松の木には、蟬の凉しい聲がして、蜻蛉が飛び、夜になると、螢火は丁度星の樣に飛び交ひ、松蟲は、金の板をたゝき、鈴蟲は銀の鈴をならしました、めてたし／＼。

お伽噺は斯んなのが罪が無くて、然して話工合が面白いと思ひます

お伽噺

奇抜でなくても話の運び工合に興味を持たせれば好いのです（評）

「秀逸」

をしどり

静岡縣　土屋いそ子

むかし或る所に、大變正直で仕事に熱心な、百姓がありました。所が、今年三十近くにもなるのに、お嫁さんがありません。親類の人達は、いろ／＼心配して漸くある所からお嫁さんが、參りました。この嫁さんはなか／＼、きりようがよくて、讀み書きも出來るので百姓は大變喜びました。が、この嫁さんが來てから、少しも仕事をしません。そこで嫁さんは、自分に見とれて居るのだなと、かうさとつたので何かよい工夫はないかと、考へて居りました。すると或る日この村へ一人の畫師が、入つて來ましたので、嫁さんはすぐに畫師の宿を訪ねて、自分の姿を立派に、書いて貰ひました。そこでそれを、婿さんに見せて、どうかこれを私と思つて、明日から仕事に出てくれと云ひました。そこで翌日から、この畫を持つて仕事に行く事になりました。ある日百姓は、例の畫を持つて出掛けましたが、急に大風が吹いて來てとう／＼畫を吹きとばしてしまひました。するとこの畫は。此の國

の王樣の大庭に落ちました。王樣は自分の國に、こんなよい女があらうかと、しきりに見とれて居りましたそこですぐに乘物の仕度をして、國中を、探がさせました。やがてこの村へ來て、とう／＼百姓の嫁さんは見つけられました。家には婿さんは居りません。自分一人なので其の譯を話しましたが、役人はききません致し方なく、親類の人を集めて、相談しましたが、王樣の事ですから仕方がなく、それでは夫が歸つたらよく譯を話してくれといつて、乘物に乘つて御殿へ連れて行かれました。話は戻つて、仕事から歸つた百姓は近所の人から是れをきゝ、大變に悲しみ又すぐ御殿をさして旅立ちました。やがて御殿へ着いて、面會を求めましたが、王樣はどうしても嫁にあはしてくれません。男はもう口惜しいやら、悲しいやらで、門の外へ三日、三晩、座り通しました。この樣子を見た王樣は非常に腹を立てゝ、無法にも男を、簀卷きにして、池の中へ投り込んでしまつた。するとその明日から、この池でをしどりが、樂しさうに泳いで居ります。王樣はこれを殺さうと思つて、いろ／＼とやつて見ましたが、どうしても死にません。嫁はこの事をかげながら聞いて、今迄ふさいで居たのが、一層烈しくなつて自分も又、池へ身を投げてしまいました。王樣はさあ女が居なくなつたと云ふので、手分をして、探がしましたが見へません。するとその居なくなつた翌日からをしどりが又一匹ふへて、二匹で嬉しさうに遊んで居ります。例に依つて鐵砲でうちましたが、矢張死にません。仕方がなくて、池の水を、皆かい出すと、どうでせう。簀卷にされた男に、嫁が、ぎつしりかじりついて死んで居りました。日本にをしどりが出來たのはこれが初めださうですとさ。(をはり)

或は其地の口碑ではありますまいか、作者の獨創とすれば實にうまいものです(評)

石地藏と熊蜂

熊本市　近藤春子

太郎樣も其のお隣りの良夫樣も、今年十一の腕白盛りて、もういつも／＼、朝から晩迄、飼犬のポチを引つ張り廻はし乍ら、惡戲ばかりしてゐました。近所には外に、三藏樣や忠雄樣や、茂君留次君等が居ましたけど、まだ九つ位の人達計りなんですから、二人の威張り方と云つたらありません。

今日も例の通り、太郎樣のお庭に、皆が寄つて戰爭の眞似をしてゐます。太郎樣は攻擊軍の大將となり、

良夫様は防禦軍の司令官となつて、各々獲物〳〵を提げて、口々に強い事計り罵り合ひ乍ら、さア一大激戰が始まりました。太郎様が聲を枯らして「忠雄君は其の松の木から、ポチを連れて攻め玉へ。茂君は、其の梅の木に隠れてゐ玉へ。」と號令を掛けてゐます所へ、姉様のお静様が、餘りの騒々しさに出て参りまして、「太郎様、又そんな亂暴な遊び方をして、もし皆様に怪我なんかさせたら如何します。あら忠雄様危いつ早く御逃げなさい。其の松の木には大きな蜂がゐますのに」。と言はれて、ハッと忠雄様が身を退かうとする時遅しで、先刻から、エー腕白奴がと言はぬ許りに、大きな目をギヨロ〳〵させてた二匹の蜂は、ブーンと飛んで來て、忠雄様の額口と、ポチの耳とを、嫌と云ふ程刺しました。

サア大變、忠雄様の火の付いた様な、けたゝましい泣き聲、狂ひ出さん計りのポチの吠へ方、取り敢ず、お静様は忠雄様を介抱して居ますと、防禦軍迄が何事かと出て参りました。

「皆様もうこんな亂暴な遊は止して、そして決して、松の近所に行つてはなりません」。と言つて聞かせますと、何がさて、負けぬ氣の良夫様、躍起となつて、「何アに忠雄君泣き玉ふな。僕が仇打ちしてやる」と棒切れを打ち振り様、皆がとめるのもきかずに、直ぐ様走り出しましたが、又候、熊蜂に返り討ちにされて、大聲揚げて泣き出しました。仕方が無いので、家の中に連れて來て、冷したり薬を付けたりして、色々介抱してやりましたが、刺されたところは見る間に脹れ上りました。見てゐる太郎様始め外の人々も、餘りの事にあつけに取られて了ひました。

其の夕方の事です。誰だか知れませんが、例の松の木の近所で、ヒソ〳〵話し乍ら時々は笑聲までします。

「蜂二、人つてまあ弱ひ者さね。乃公等が一刺すりやアン〳〵泣き出してさ。あれでも、近邊では、腕白者の大將ぢや。ハヽヽ、ブーン」

「ブーン、蜂三汝の言ふ通りだ。もう明日から、乃公達の天下さ。愚圖々々吐かしや、誰彼の容赦は無いからね。」腕白者の大將でも、一刺に遣つ付けたと云ふので、恐ろしく意氣込て自慢話をしてゐるのは、晝間、の二匹の蜂でしたが、實際其翌日からは、小供一人の影さへしません。偶ま家の太郎が参りましても、ブーンと追つ掛けますと、足早にスタ〳〵逃げるのでした

それから二三日も過つてから、非常な元氣で、又二匹

の蜂が威張つてゐます。
「オイ蜂三、もう宜けねえぞ。ど奴もこ奴も憶病者ばかして、逃げてばかり…。」
「處が蜂二、一人法圖もねい氣强い奴が居るさ。見ろあの藪蔭にさ。先日から身動もしないで立ちづくめだ餘り乃公等を輕蔑してる樣な鹽梅よ。」
「何だど、怐々すんない、明日の朝にでも行つて、泣き面掻かせるばかりさ。」
其夜が明けて、まだ朝霧のほのかけてる間に、一匹の蜂はブーンと、羽音も荒らかに、藪の方に飛んで行つて、そこに淋しう立つてる石地藏に、コツンと打ち掛り乍ら、ジカッと全身の力を籠めて刺しましたが、如何した事やら、劍がポッキと折れまして、遂う艸の上に平伏つて了ひました。軈て、ま一つの蜂が、前のよりも、尙勢猛く、件の石地藏に衝き掛りましたが、餘り元氣で打ち當つたものですから、五體は片々に碎れて死にました。
程無く霧も晴れて、朝日がうら〳〵と照り出しました二匹の大蜂の刺したのも、忘れた樣に、御地藏樣は、相變らずの、莞爾顏て、ゐらつしやいましたとさ。

前の太郎と良夫との話が少し長きに過ぎるやうですけれど、書き方が面白いから飽きません、石地藏の處は實に可笑しい、子供のなかしがることと受合(評)

天の宴

上

三重縣 古志むら子

今日はお月樣の御誕生日だと言ふので、月宮殿では一大祝宴會が開かれて、先づお日樣を始めとして、御子孫のお星樣をお招きになつた。
お日樣やお月樣やお星樣が悉皆揃つてゐらつしやるので、廣々とした宮殿は、隅から隅まで眞晝間のやうに照り輝いて、種々なお星樣が今夜を晴れと美しいお召物を着飾つて、これこそ眞物の綺羅星の如くに御殿中に並んで居るので、其の美しさは、目も眩むばかり—今や祝宴の眞最中と見えて、彼方でも此方ても音色の床しい月琴の樂が盛んに起つて、それに連れて花のやうな乙姫樣が、此處に十人彼處に二十人輪を作りながら、「月の舞」を舞つて居る。其の長い袖には、蝶も戯れるかとさへ疑はれる。一仕切舞樂が終ると、正面の一段高い處に並んで、其席を占めて居たお日樣とお月樣の前へ、お星樣の面々が順々に出掛て行つて御祝詞を申上ると、お二人が輕く頷くのを、合圖に、玉の盃て保命酒のお流れを頂戴して又元の席に復つた上、山

海の珍味に增した天上の御饗應に預る。

此光景を宵の中から羨ましさうに眺めて居た叢雲や雨雲や蝶々雲や入道雲などいふ雲の連中が、いよ／＼癪に障つたものと見えて、「オイ叢雲！お前も先刻からあの月宮殿の宴會を見てるだらうが、乃公はあのトノ助やお月の高慢面が一體氣に食はないんだ！同じ天に住つてる仲間の乃公達を除物にして、自分達ばかり面白さうに飛んだり跳ねたりしてるが、どうだ？此腹癒せに是から一番彼處へ押掛けて行つて、思ふさま邪魔をしてやらうじやアないか」と雨雲が眞黒になつて怒り出すと、叢雲も白い齒を剝き出して、「左樣だとも……、是から一つ押寄せてゐつて、あの宴會を皆な眞闇黒にしてやらうや」と相談をした。



下

いまゝて何處に行つて居たのか、姿を見せなかつた彗星が、呼吸急き切つて月宮殿へ駈け込んで來た。「皆さん大變でございます！あの入道雲や蝶々雲なんていふ可厭な雲が隊を組むで、此御殿を目掛けて押寄せて參ります」。雲かの一言に今の今まで樂しさうに笑ひ興じて居た誰彼は、等しく顏の色を變へて、未だ雲が押寄せて來もせぬ内から、御殿が

佳作 玩具賞　駿河きよし

聞く淋しくなつて行くやうに思はれ、此盛大な宴會も忽ち火の消えたやうてあるのを、遙に御覧になつたお日様は、其の大きな額に太い筋を寄せて、「何！雲が此月宮殿を襲ひに來るといふのか。雲が襲ひに來るからとて、何もそんなに驚き狼狽てるには及ばん、雲が攻めて來たら、最う一倍我々の光を强くすれば、何でもない事じや」と泖と眼を見開き給ひて、「これ〳〵皆の者！然う怖ぢ恐れる事はないのだから、今までの樣に舞も舞ひ歌も歌ふて、倘一層愉快に今夜の祝宴を續けるが可い」何程お日樣のお言葉でも、是ばかりは平氣て澄して居られないので、稚星共は一齊に顫ひ上つて「お日樣は口先てはあんなに强い事を仰るが、實際雲が懸ると何程私達の方て輝さうと思つても、光線が遮れるから駄目でございます」と密々聲。

處へ最う雲の軍勢がどし〳〵進んで來て其爲め星の二三十は瞬く間に、姿を消して了つた。此光景にお日樣はます〳〵御立腹になつて、先づ北斗七星にあの雲を追拂へと御命じになると、先刻から何事か考へてゐらつしたお月樣は、其の時お日樣に向つて、貴方のやうに左う力づくて雲を平げて了はうとなさるのは、憚りながら間違つて居りはしませんか。同じ天に住つて居ります雲を、今夜の祝宴に招かなかつたのは、此方にも不公平の罪があるのでございますから、此所へ參りましたら、出來るだけ、手厚く接待つてやりましたなら、彼等も喜んて今夜の祝を共にしてくれませう」讐に報ゆるに恩を以てする飽まで善良なるお月樣のお言葉に、流石のお日樣も成程と合點して、それから雲等の爲に新に席を設け肴を多くして、其の來るを今や遲しと待つて居た。

勢ひ込んて月宮殿の戸口まで雲が押寄せて來ると、星の一同が整列して居て、恭しく御殿の中へ導き入れた上、軈て手厚い饗應をした、案に相違の接待に、左しも拗けた雲共は、最う此宴會の邪魔をする處か等しく立つてお月樣の萬歲を唱へた。めでたし〳〵。

想像が豊かて、文才があります、意味は大したこともないけれど、文の好い故に採りました(評)

鳴子と案山子

丹後　高柴小靜

或る田の中に、よく笑ふお轉婆の鳴子女と、沈默家の溫厚な案山子郎とが居りました。一日退屈のあまり鳴子女の方から、例の通りきやら〳〵と笑ふて愛嬌を振蒔き、「もし〳〵案山子郎さん、今日は好い天氣になり

まして氣が晴々します、如何てす何か面白いお話てもありませんか」と聲を懸けますと、今まて厳めしい貌をして弓矢大事と持ちながら稲穂の上へ目を注いてゐた案山子郎も、敵手ほしやの折て「ア、鳴子女さんてすか、さうてす秋の天氣は誠に心持のよいものてす、山河の眺望も亦一しほてすナ」とくるりとこちらへ向きなほつた。すると鳴子女は「お互に恁して夜から晝へ立ち盡しに田の番をしてゐますが、誠につまらないことぢや有りませんか、眞個につく〲厭になりましたよ。貴殿は何んともありませんてすかと稍上氣たやうになつて云ふ、案山子郎も大に同意を表して「鳴子女さん、そりや僕だつて職務と思へばこそ假令辛勞と思つても堪忍して居りますが、厭と思つた日にや一刻も恁うして居られませんよ。」と平常の沈默に似合はず氣焔を揚げる。「さうてしやうネ、妾も何時から此處を逃げ出したいと思つてますけれども、恁うして四方から引き括られて居りまして女手ては如何することも出來ませんから困まつてゐますのてす、何か好機會がありましたら、貴殿どうか後生てすが、妾を連れて逃げて下さる譯にはまゐりませんか、ネ貴殿如何てすか」と潤んだ聲て最後の答を求める。案山子郎も自分も其氣が無いのては無い恁う云はれてみると後へ引かれん場合てあるから、「さうてすか、貴嬢がそんなお思慮なら僕は何處までもお供しませう、宜しいてす、引受けました。その内に何か好機會がありませう」と相談は玆に決つて、後は世間談に移り不相變きやら〲と鳴子女の笑ひ聲が野一杯に響いて居ました。

その晩から空模樣が變りまして大風雨となつて二日も三日もお止みもない、川水が俄に增して來て今にも堤防が切れると、村々ては鍾太皷を鳴らして騒ぎましたが、到頭支えきれずに堤防の一箇所が崩壞れて濁水は滔々と侵入し、見る〲野面は瀰漫たる泥の海となりました。そこて案山子郎と鳴子女は此時こそとちやんと牒合つてありますから、手を引き合ふて出水の流れにまかせて、だぶり〲と浮いて行き大河へ出て了ひました。こゝは流れが急てすからずん〲と早く下つて行きます、初めて見ます沿岸の風景に目をきよろつかせて、「此橋は立派だネ」「この町は長い〲町だ」などゝ樂しさうに流れるだけ流れましたが到頭大海へ出て了つた。「こりや海といふところぢやないか、話に聞いてはゐたが隨分廣いもんぢや、あちらを見てもこちらを見ても水ばかりて、何だか心細いナ」「さうネ、大きい波

が來て恐いことよ、確然して居らんと二人は離れ〳〵になりますよ、氣を付けて下さい。」と云ひながら波に漂ふて居りましたが、漸次波に押れ〳〵て磯端へ寄り着きまして砂の上へ打ち揚げられて了ひまして、綿のやうに疲勞れた身體を夢現に五六日天日に晒されて居ますと、恰度そこへ汐木拾ひに來てゐました海士がこれを見て「これは好い焚木だ」と拾つて持つて歸りまして「おまい等は田圃に居れば、また來年も引き出して使ふのぢやけれど、漁士には用が無いから燃してくれる」と云つて、釜の下へ入れて焚いて了ひました。

話が一筋ですから、能く整ふて味ひもあります(評)

白銀の冠

大阪　薮　鶯

お澄は深山の炭燒女です。毎日〳〵頭から灰を一升も被り冬でも襦袢一つで汗水たらして一生懸命働いてゐますけれども貧乏で何程かせいても追付ませんお母樣と妹三人を食さすには迚も追付ませぬ。勿論妹逹も姉を助けて小さい乍ら出來ろ事は致しますが。それに不孝にも或夏の初にお母樣は熱病に犯されました、固より辛行なお澄や妹は力の限り介抱しましたが、お金がないのと山家の不便さに途方にくれて居ました。一日お母樣が何か冷たいものが食べたいと云ので町へ出て行きました、山又山を越えて遙々廣い野を通ります時、山の中で育たお澄は何と云樣のない好心地になり氣もはれ〳〵と大きくなつて大層元氣が出ました。やがて遙か向に茂た森の中にお宮のあるのを見出しました、日常神佛を信じてゐるお澄はお參りに行きました何卒お母樣の御病氣が一日も早く治ります樣にと一心にお祈して又ゆきかけると不意に森から涼しい風が吹て來て、道端のタンポヽの花のすがつた後の羽根の樣なものがパーッと散て、お澄の頭上に落て附きましたするとお澄の身は急に輕くなりフワ〳〵と宙に上り始めました、それから森の木の香をのせた神風が歌唱ひ乍らお澄の身をどこかへつれて行て了ひました。

家では皆が何を買てくれるだらうと待てゐますと、意外に早く戻て來たのを見ると、まあ魂消しました。お澄の頭には白銀の冠をのせてゐるので、パッと御光がさして眩い樣です、手には水晶の器の中に雪を一杯入れたのを持て居ます、恰ど神樣の樣です、皆夢でないかと思ひましたが正しくお澄でありました。お澄は委しく天へ上た事を話しました。天の神樣からお前は孝行者よとお賞の言葉を賜り此雪を貰ひましたが、お母樣がお食りになると毎日一日〳〵とよくなるのでありました、此事がパッと世間に廣り王樣の耳にも入りて終々妃となりましたと云事です。

少しもたくんだ處が無い、不器用なやうで何處かうまい味ひがこもつてゐます(評)



書簡文

「天」 京より

三浦美沙子



今日て京都に五日居ることになります。名所めぐりも致しました。夢のやうにたゞうか〳〵と日を暮して旅のやうな心持も致しません。兄上義姉上の御優しさにあまへて、駄々ッ兒が久し振りに歸省した氣て御座いますから、旅に出れば寂しいものときめて居た私には何だか寂しくないのがあつ氣ない位。

夫はさておいて京都はすつかり氣に入りました。東山の寺々めぐりも宜う御座いますが、白河、岡崎、田中村などに却つて忘られ難き京の町はづれのなつかしさが籠つて居ります。町の中の寺、家つゞきの陵、見るもの皆昔を語つて居るやうて御座います。町の中へ入れば一様に古風な栗色の低い家並の何所からでも、東山、西山一帯の山が明るく見えます所は東京などでは夢にも見られぬいゝ感じが致します。如何しても京都の景色は皆繪てす。しかし繪には斯うゆつたりした、古寂びれた、ぼけたやうではつきりした所のある京都の空氣はあらはれまいと思ひます。詩てす、歌てす、京都の町すべ

てが物語です、京都の空氣を吸つて見ないものに京都はわかりません、つまり見物する所では無く、暫くでも京都の町に住つて、京都の古寂びた空氣を吸つて京都と同化する氣でなければ京都の味はわからないものだとしみ〴〵さとりました。思はずも大變な京都論めいたものになりました、此次は面白い御報知を致しませう。さようなら。

言ひあらはし方が上手だから、ほれ〴〵となつて了ひます、手紙だか、美文だか、そんな面倒な區劃を離れて、たゞ〳〵新しい香りのする好い文章です（評）

『地』

みな運命と

火曜　越智ますみ

暑しとかこちし夏の日も何時しか涼風の身に泌むころと相成り袷綿入の仕度に心せかれ候ころしも御許さまには何の御變りもなくてか、先達ての御手紙には馴れぬ荒仕事に朝は星を頂きて夜は月影をふみての働き足が棒の樣になり……と認められしを讀みもてゆき候時の私が胸は只々御可憐しさに覺えずも涙し申候。海老茶の袴に巾廣のリボンかざして學校通ひなされし御許さまがお百姓のお嫁さまにおなりなされむとは思ひもかけず候ひき、御許さまとてよもそれが御理想とやらむには候はざりしならむと、み心の内おもひやり參らせては深く〳〵同情いたし申候。さりながら照江樣、いつも私が申上げ候ごとく、現の世のことは何も〳〵みな運命を支配あそばす神樣の御仕業に候へば、如何程悶え苦しみ候とも、小さき人の子がだふして思のまゝになり申べき、ましてや御兩親樣を始め皆樣の定めたまひし只今の御身の上、年寄じみし事を申樣なれど何も約束ごとゝ御諦めなされ、今の御境遇に御滿足なされ候が御身にとりて此上もなき幸福と存候、わけてよそながら承れば御良人さまは元より姑御さま御同胞みなさま、御優しき方々にて御許さまを大切に被遊候由、何よりも〳〵嬉しき御事と陰ながら誠に安心いたし申候。世には錦の褥に坐し山海の珍味を食しながら、良人の親兄弟は無論のこと、力と頼む良人にすら冷遇されて、涙のうちに日を送る哀れなる人も少なからずと聞き及び居候を、よしや體は辛くとも、一家悉く睦じくその日〳〵の勤めを終えて、打笑ひつゝまどゐいたし候樂しさには、何物をも代えられまじくと存じ上げ候、誰れしも嫁しての後は處女時代の戀しきものゝ由に候へば過ぎ來し方を偲びて泣くは強ちに御許さま一人の罪にも候まじけれど可成その樣な事を思はずに御子の一人も早ふ設けられて、樂しく幸多く御暮らし遊ばされ度それのみが私の願に御座候。

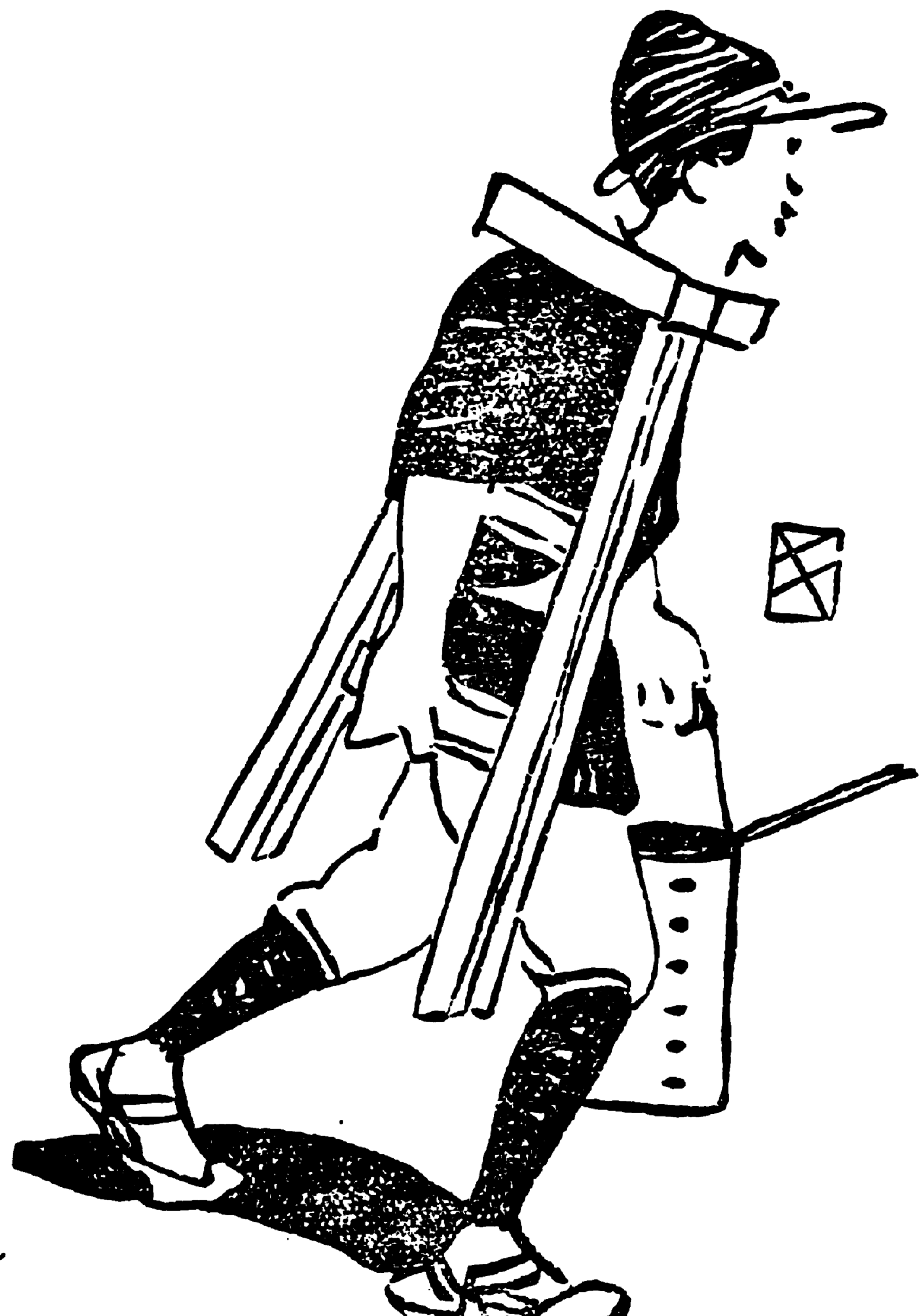
此手紙に何の奇もない、妙もない、あたりまへの事をあたりまへの文字で書いてあるだけだが、あゝ遂に多くの女子は皆此の手紙を受取らなければならないのです（評）

「人」

妹に

京都 撫子

御手紙嬉しく拜見しました、御機嫌よろしくて何よりてす、私も御蔭て變りなく過してゐますから御安心下さい、ほんたふに三千さんも、こんな思をして居るかと思ふと悲しくて堪らないよ、「山の奥にも鹿がないてゐます」なんて、それはさうでせう、どこへ行つたつてよい事計りてはありません、而しねそれも心の持ち方次第よ、何事にても滿足することが必要です、どんな立派な人でも其身分に滿足しなかつたら不幸てす、貧しい勞働者でも嬉んで働けばそれて幸福てす、てすから三千さんもこれからは決してつまらない考へなど出さないでね、叔母の仰せをよく守つて何事もよろこんでなさいよ、叔母様の質はよく知つて居る、ずい分つらい事もあるでせう、けれどもそれだけにお世話して下さるのですもの、決して不足など思つてはいけませんよ、解りましたか、え私だつてそれは悲しい事も泣にも泣けぬ口惜しい事もある、しかし親のない身であり乍、人の情でかうして不自由なくくらせるかと思ふと、どんなにかうれしく思



書簡文

佳作 點 煙夫

駿河 きよし

よよ、三千さんお前もさう思つてね、時節の來るのを樂しみに勉强をしませうね、一度逢つて色々話したいがね……來年の春こそは、どうにかして歸りませう、そして二人でお墓參りをして其時にたんと話しませう、今から樂しんでゐます。
未だ／＼かきたいことはつきませんが、夜はだん更けてきましたからこれで止めて、又隙があればゆる／＼出しませう、尚此後とも體を大切にね、まして時候のかはり目などは充分用心しないといけませんよ、そしてまたおきに寒くなるから、綿入なども早い内に用意して、成るべく人の世話にならぬやう、人に笑れぬやうに、なさいよ、それでは左樣なら。

これでこそ姉なり妹なり、思はず涙こぼる(評)

「秀逸」

琴の主に

大阪　木村春江

名のみにてはよもしろしめさじな、身は先つ日求め給ひし琴の先の主にて候。
彈初めてより十餘年、母なき後は母とも姉とも將友とも思なしては、悲しき調に涙を誘ひ、ゆかしき節に昔を戀ひつ、月の夜頃は母在す方に登り行く覧餘韻にせめてもの心遣りと致し居候ひしに、なき後の寂しさ、いとゞしう心ひかれて御邊さまよひしは、昨夕を數へて七夜に御座候。
夜毎の御すさびも、とめし琴音にあらねば、あかね心に歸るとしては、たゆたひし門に、白鷺一ッ飛びて、垂れし柳のゆらぐ折しも、ひゞく狹衣の一曲、是が正しく、我「月魄」(こは愛琴の名にて候)の音色とこそ承り候へ。「麻のさ衣うちたへていとゞねられぬ秋の夜」とさりとては淸らけきみ聲の調に、さしぐみし涙は脆くもこぼれ候ひし。我愛でし曲は殘月……あはれ君がみ聲に、み手に、「さめて」のあたりの一節をだに承はりほしうこそ……さはれ今宵限り此地を去るべき身は甲斐なき願に候よさばかり愛でし琴なれば、復こそ我手にむかへむものと、人しれずちかひ居しが。並ならぬ御爪音に今はそゞろに、君のなつかしう。中々に、琴の譽も之よりとこそ存ぜられ候へば、手許に殘し置つる品々今改めてさし上候。

一、卷物一卷「月魄」の由來記し有候
一、琴柱一組、月魄と共に其當時より傳はりしもの
一、ゆたん、琴箱に習ひてわざと我定紋はつけ不申、裏は松年畫伯の名に因し筆、凡て亡母の好に御座候

外に琴爪一組、之は我師檢校より傳へ來しものにて彈き古したれど、月魄ならで我心のひゞき傳ふる琴はあらじを長に愛て給ひてよと身に替ても願ひまつりし上は我に有ても要なき品に候へば、以上の品と共に幾久しう御受納被下候はゞ嬉しうこそ
今し銀杏に秋風見えて又してもしのばるゝ御邊にも候

かなかして。

文の高雅、優麗、國文の消息としては殆んど間然する處はありませんが、少し小説めきたるは如何と思はれます、事實とすれば世に傳ふるに足る逸話でせう、想に依つて作られたものとすれば、其才を愛す（評）

松茸に添へて

攝津 寺部君子

みえ子様私昨日お伯母様の家へ茸狩に行て來ましたの、直ぐ裏の山に一番澤山生えるので其處へ行きましたが誠に平地も同様ですから下駄穿きても行けさうでした、這麼處は少ないのです、松茸の生る處は大抵深い谷ださうです。美しい小松の中に松の枯葉を破いて出て居るのを見ると、毎日見なれて居る人でも嬉しい相ですもの、偶に行た者は夢中に成つて、遠近驅け廻つて常なら髮が破れるとか何とか思う様な處でも平氣て行て來ますの、後て思うと能く那麼處へ行た物だと思ひましたよ。初めの内は豆粒の様なの迄て殘さず取つてお叔母様に小言を言はれましたが仕舞には那麼のは取れと言つても取らぬ位澤山有りまして面白う御座いましたよ、清ちやん等はこけつ轉びつ走り廻つて人の邪魔計り仕て面白がつて居るのです、其に可笑かつたのは、清ちやんが大聲て姉さん〳〵て呼ぶ物てすから態々行て見ましたら、私此麼可い塲を見付けたから知らせて上げたの、早く取りませうと誇り顔てすの、成程苔計りの可い松茸が行列仕て生えて居り升の、妹が一つ取つて、此松茸足が無いと言ふのです、此は怪しいと取りましたら矢張足無し餘り不思議ですから割りましたら中からボーッと煙が出て、ふは〳〵ですの、眞個に可笑しう御座いましたよ。此松茸は私等が無暗に取りましたので揃うては居りませんが御裾分け致し升、そして此の柿は未だ熟しては居りませんが、普通のと違うて只珍らしいと言ふだけて貰つて來ましたの、てすから味は有りませんが御目に掛け升、什うか御笑覽下さいまし、何れ御目に掛つて色々御話申升、左樣なら。

この位の自由に筆が廻れば、手紙を書くにしても苦はない、手紙だから考へ考へして書くやうでは實用にならない、此文は然うでもないやうです、思ふことがすら〳〵と書けてゐるやうで、少しも滯つてゐない、而も讀んでみるといつしよに茸狩に行たやうな氣持がする（評）

程近き叔母の許に

上毛 納尾子

叔母様、今朝やうやく馬の子が出來ました、特徴も有りますし、たけも大きくつて、私などにはさつぱりわかりませんけれども、大さうい丶子てすつて、父上や兄上など大喜びてす、もうね見物人が大勢來ましたの、今も四五人居ります、叔母様も早く入らつしやいまし、早く御らんになると罰があたるつて皆さんが云ひますから、おそくとも今夕迄には入らつしやいまし、母さんもまつて居りますし、私も此からおすきな御馳走を

こしらへて置きますから、今ね叔母様、馬の子がお乳をのんで居りますの、何て可愛いんてせう、ては少しもはやく御出で下さいまし。

叔母さんに會つて口で言つてるやうです、口語體も此邊までこないと眞が出ない（評）

札幌に着きて妹に

札幌　大縞つね

十二年目にて、我を哺みし母なる都に歸り候。汽車を下りて南に往けば、兩側にアカシア樹並びて‖我幼き記憶を辿れば、父上のステッキに手頃と思ひし樹が、今は美しく蒼天を蔽うて、其蔭なる三層四層のペンキの壁に、いかにも清新なる如何にも優雅なる色を彩なすに候はずや。十年奮知の街の、斯く美しく發育したらむとは思ひも掛けず候ひき。人ならば互に手を取りて泣きしに候はむ。

長き私の漂浪の中に、馴れし都も多く候ひしが、函館は漁師の町にして小樽は商人の港。而して今札幌はお**役人の都と感じ申し候。大かた市民は其町内の上様を**學ぶものに候。もと官吏の社會が**其趣味知識抔の點に**於て、漁師商人に異るものありとせば、札幌市が前記諸港よりも美しき風化を得しは、あながち不思議の事にも候ふまじ。是やがて此札幌がより多く都市の品格を具ふる所以にも候ふべし。街路の整地、建築の按排等にも、北方の壯大なる自然美に對して能く人工の美を發揮し得たりと見ゆるもの尠からず候。又工場の管理に就ても商店の設備に於ても色々進歩したる組織の御座候ふ由。島渡往來を見るも、他の諸港ほどに雜駁なる風ふ之無く候。高官の御夫人を始めて、手桶さげたるおさんお鍋に至る迄、例の庇式ふくよかにて能く顏面の隆起と均齊を得たりと存じ候。縞は荒きが多く、輝く丸帶を胸高にお太鼓に締めて、裾廻りの一層しなやかに窄みたるは、正しく殿方の細ヅボンの骨格線に似通ひ候。私は流行の華やかさに眼眩んで申すには候はねども、都民の品位を保つ上よりも、こは適はしき限の嗜と感じ申し候。

猶いろ〳〵聞えたき御物語の候へども、只今訪問の御約束も御座候へば、後便にと書き遺し申し候。かしこ。

單に知つた振りを言ふとだけてはないやうです、何處か男の言ひさうなことが多くて、女の手紙らしくないのが缺點てせう、「漂浪」だの「庇式」だの女自身が言ふとすれば少しおてんばてす、其代り札幌の觀察はなか〳〵宜しかつた（評）

飛んだ心得違ひ

常陸　櫻香女

時節柄さぞかし多忙て御座いませうね、此の間の御手紙師範學校へ入學したいとの事てあつたが、光さんそれは飛んだ心得違ひてすよ、そりやね我家見たいな財産のないとこのものには至極適當てすけど、月給とりなど〻云ふものは決して幸福なものてはありませんよ、分けて女の小學教員、さくさへ忌てす

全く天から授つた幸福を自ら捨てた、尤も哀むべきものですよお前などはまだ社會と云ふものを見ないからでせうが、小學の女教員などには恐らく愉快な家庭を作るなどゝ云ふことは出來ませんよ、それは社會の境遇が然らしむるので、女教員その人の罪ではないのですが。

どうぞ考へなほして下さい、靑春時代よ誰しも虛榮にあこがれたい時代です、不完全な社會はかくして靑年男女をあやまらせつゝあるのですから仕方がないです既に私なども其一人で救ふべからざる深みに入つてしまつたので御座います、あなたは私を幸福だと思つて居りますか、知己もない他鄕に迷つて淋しく泣いてゐる私を、え、光さん、親の手前近所の手前仕方なしに旅に出てゐる私を幸福だと思つて居りますか、皆自身が作つた罪虛榮にあこがれた罪その報とあきらめてゐるものゝ、弟や妹に姉ちやん〳〵と呼ばれてなつかしい兩親の膝下に汚れなき田園生活を營んでゐる、心安いお前等の身が眞實にうらやましいですよ。

それから若しお前が家を出たら、あとはどうなりますか母上の勞苦……どうぞよく考へ直して見て下さい、私はもう、こんなになつてしまつたのですから仕方がありませんけどお前だけは家にゐて立派によその人に笑はれない樣にして下さい、そして運命拙なき私の分まで孝行して下さいな。

大姉の妹なら其決心を翻すだけの力が此文章にあります(評)

柿に添へて

埼玉縣 中村勝子

姉樣お變りはありませんか、宅も皆無事ですからごあんしんん下さい。

あの姉樣が學校にお歸りなさつた頃にはまだ靑かつたお庭の柿、此頃は大層、おいしくなりましたから、爺やに賴んで一籠お送りいたします。此柿をとるには誠に可笑しかつたのですよ。三ちやんが木の上でとつたのを、落さないやうに、私は風呂桶の上で受取り、花ちやんは、袖をしばつて、お尻捲つて下に落たのを拾ふ役と定まつたのです、て三ちやんが登りかけると、ワッといふて急に飛下りましたので驚いてみますと、しらずにナメクヂをつかんだのですつて、私はそれが可笑しくて〳〵柿を受取るたびに笑ひ出し、しまいには笊を、ころがり出しましたので、下にゐた花ちやんの頭にコロ〳〵當つて花ちやんは泣出す、三ちやんは木の上で「姉樣はなんだい大きななりして」など怒つたり又花ちやんがサルとカニの話にカニの樣だと笑つたり大騷でした。どうぞそのおつもりでおあがり下さいさよなら。

終の一句、全篇を活かす(評)

手製のようかん

下谷 桐の葉

光子樣しばらく。

今日はずゐぶん涼しい事ね、其後御病氣は如何、私も

是非御見舞に上りたいし、それに少し御話しもあるのですけれど、貴女も御承知の通り例の事でもうしばらくは御伺ひ出來ないのよ、ですから使て失禮ですけれど、あしからず御思召して頂戴ね、それから此ようかんは今朝からかゝつて、私がこしらへたのよ、自分で自まんするのではないのですけれど、割においしく出來たのよ、貴女はかねて御好と伺ひましたから、少しばかり差上ます、何とぞ御たいくつまぎらしに召し上つて頂戴な、色々御話はありますけれど御目もじの折にゆづりませう、折角御病氣御大切にあそばせ、毎度くどい様ですが、あまりつまらない事を御考へにならない様になさいね、さよなら。

部會の人でないと書けない（評）

呼び返された

福岡　板牧よね子

美智子さん、あなたはほんとに罪な人よ、此四五日夜もろく〳〵眠むらないで、踊らうか、踊るまいか、と散々戰はした揚句、出來ない我慢して、踏み止まつて勉強と決心してゐたものに……例のお上手なお筆に乗るものかと、威張つては見たものゝ、鎭守の祭、河原の夕涼、と並べられてはもう堪へられない、殊に朝の海濱のお詩には、血も魂も躍るやう、折角の決心もゆら〳〵と崩れて、弱い！と叱つしつゝも、遂に荷造りに取りかゝつたんですもの、同じ踊るのだつたら一日も早く踊つてたのにと。思ふけれど今更仕方がない、明日の一番で立つから、是非お迎ひに來てゝ下さいよ、此度はあなたが呼び返したのだから、踊つたらあちこち引つ張りまわすから、そのつもりにして入らつしやいよ。さよなら。

親しい仲とは分る（評）

父上に送る

廣島縣　和田靜枝

金を溶かすが如きけふ此頃の暑さには緑の樹蔭に涼風戀ひて、自然を友に閑雅に富める田舎の地に、避暑致し度きは誰れしもの事なるにわけてや煤煙と塵埃とに埋れたる都の地に御起居遊ばさるゝ御父上様には嘸々御難儀なる事と、毎夕軒の風鈴響く夕顔棚の下にはから交る〳〵御噂致し居候。稲の梅雨の頃は連日絶え間なく降る雨に水嵩増して、心を配り居り候ひしが幸ひにも七八日前よりはたと雷の音の歇むと共に霽れ揚り候故ほつと胸撫ぜおろし申候。其後は頓に暑さ加はりて殊に心に懸りし四郎五郎は焼け付くばかりの好天氣にて稲株もめつきり殖え、丈も一尺三四寸に延び候。やがて金鈴の垂穂の波漂ふ餘、はや眼前に髣髴致し居り候。昨日も薄紫の花咲き揃ひし茄子畑に立てゝ例の平作は、ほたりと笑する鍬を朝日に炫がしながら元氣の宜い聲で、奥様この調子でいつたら今年は豊年踊もやられます。と、私等を笑はせ申候。田

の水見は私と綾ちやんとの役目にて日一日に黒くなる萬頃の稻田の上を滑り來る涼風を浴びながら毎夕怠りなく見廻り居候。昨日は始めて竹やの教導にて新しき手拭姉さん冠りに朝風涼しき時に田草取りに出て候ひしが、稻にて顏刺さるゝはまだしものこと蛭に嚙まれ候故もう〳〵一度にて懲り申候。綾さんは兼て贈つて戴きし帽子を冠りながら黒くなるのもかまはないで、花採りに餘念なく私の手傳にて押花も大分出來申候。御父上樣に覧せてあげたいから早く御歸りになれば宜い。と毎日申居候。此の撫子は綾さんが採集した內で一等可愛いのださうですが私にみせない綾さまの手紙と共に御送り申上候御父樣の常々仰せ下さる通り、とりわけ衛生には氣を着け涼しき間に復習致し居り候、女學校は九月五日より開校に相成り候。別紙は一學期の成績表に候間御覧下され度、御父上樣に別條なきかと御飯の器をあらためて筆擱き申候。かしこ。

佳作　岐阜　[illegible]り



行きとゞいて、餘裕があつて、嚴肅を失はないやうにと努めて居るやうだが、只少し、無用のことまでも言ひすぎはしますまいか（評）

拙き一曲

一處女

今宵御兄上の君が御誕生遊ばされし御祝にとて數ならぬ妾までも御招きに預り誠に忝けなく存じ候。承はれば川崎樣の御琴御許樣のピアノ御妹樣のオルガン三好樣の手風琴それ〴〵御得意の技を振はるゝ由、幸ひ七月十五夜に候らへば月下のうたげのいかばかり華々しう候らはんと只嬉しさの心に餘り申候。さはれ君よ彼の樂器の王とも云はるゝヴアイオリンをば音樂に趣味薄き妾に命じ給ふとはさていかなるお心違ひに候や、蔭山樣藤見樣永井樣などクラスにて名高き音樂家のおはし候ものを、されど最早やかくと御定め給ひしものを今更否み奉るもいと恐れ多ければ御壽ぶきのみしるしまでに拙き一曲を奏てゝ御笑ひの種と致すべく候。

宇都宮　栗原とみ子

萬づの御話は御目もじの上にと先づは取りあへず御返事のみ。かしこ。

戯曲とは斯う云ふ文章でせう（評）

氣を取り直し

紀伊　櫻瀬靜江

去る七日發の御手紙慥に頂戴仕り懇々の御諭し、今更ながら有難く咽び入り候。思へば唯夢にて候、「四十日の後には」と友達と手を握りかはしていそ〳〵と歸るや否や、家の破産、つゞいて父上の頓死、悲ひといはうか、哀といはうか、妾はあまりの事に涙も出て申さず候ひき。されどかくなる上は纎弱いながらも此家の主人公、一時も油斷すべきにあらずと氣を取り直し候ものの、生れて玆に十八年、箸より外に固き物を持ちたる事なき身には桝持つ事も覺束なく、兎や角と案じ煩ひ候ひしも、習ふよりは慣れとやら、近頃は雨降りの外は毎日休まずに畠より草刈りて牛飼ひに餘念なく、殊に十日程前に生れし小牛、產まれてなか〳〵可愛ゆく、丁度姉妹を得たる思、且來春にもならば少くとも五十圓には賣るる由承り、それが樂にて堪へがたき肩も、痛き手も、それ程には、なき樣に相成申候。村の人やお友達は、お氣の毒に、可愛相にと、色々慰めくれ候へども、人間萬事塞翁が馬の例もこれあり、何事も天命なりと思へば、さ程の苦痛もこれなく候、

其上近來は母上が殊の外若やぎて、總ての師ともなり、友ともなりくれ候故、親の膝下の暖さは、到底他に比ぶべきものこれなく候。

右樣の次第にて、追々と農事に慣れて面白く相成候へば、御安心下され度、尙母上も達者に、妾もまた何とも考これなく候へば養子の儀は今暫く差控え、せめて家運が、少しにても回復せる後の事に致し度候へば、何卒左樣お承知下され度、先は御返事まであら〳〵。をば樣はじめ皆々樣へよろしく御傳へ下され度候。

身の上の大事件もさら〳〵と捌けて書いてある、餘り感情一點張の手紙よりも此方がさつぱりしてゐる（評）

煩悶

奈良縣　中富よしみ

あゝ懷かしの我友よ戀しの我友よ、草深き吉野の山奥にあはれ果敢なき運命の手に弄ばれて、なやみもだえる薄倖兒を知り給はずや。妾が姉とも敬ひ奉る慕はしの君樣よ、願はくば妾が苦衷を察し給ひて一片の同情をたれ給へかし。

去年寄宿舍の緋桃の下に惜しき別れを告げてより、故鄕にかへりて一身を委ねし田園生活の、妾が理想にあらざるは貴女樣もよく知りたまふ所にて、常々申す如く田園生活の趣味は都人の空想のみにして、實際の無味乾燥なる事は中々に想像し得べくもあらず候へ共、父の命なればやむを得ず、あるは炎帝の猛威のもとに、あるは風雨の烈しき中に、山より出てゝ山に入るの日

月を拜しつゝ鍬とる業を勵み居り候ものゝ、心は絶えず理想の國に遊びてあたら貴き人生をかゝる山奥に朽ち果てしめんの心惜しく、殊に新聞等に掲載の卒業入學者等の列記せる中に知れる人の名を見たる時、又は在學中の親友の消息を得たる時の如きは、靑春の血氣湧きたつばかり小さき胸に迫り來て理想を追ふの心矢の如く、父に願いていつかは再び學びの道をいそしみ、理想を現實せんと僅に一縷の望を樂み居たりしが、あゝ運命の神は妾を見捨てたるにや、今朝父は妾を呼びて當地の某農家に緣付くべく强られ申し候、あゝ我若し父の命に從はんか、我が精神は全く死滅して僅に動ける形骸に過ぎざるものとなり終らん。されどされど今父の命に逆いたるとて必ずや我前途に强き光明の輝くにあらねば、理想も抱負も潔く棄てゝ境遇の奴隷となり、たと何事も滿足の二字に甘じなば必ずや無限の同情と慰藉とは湧くものと存候へ共、此滿足は我にとりては實に不可能にして、さらばとて今如何に決心すべきや、あゝ妾はたゞ煩悶憂愁の手に捕はれつゝ有之候。

あゝ同情ある君樣よ、行く手の共に暗黑なる二筋道に迷ふ妾を不幸と思召して、行くべきはいづれか眞情こめたる一言を此薄倖兒に下し給はらば、妾は如何に恭く拜承し申すべき。先はみだるゝ想ひに覺束なき筆とめ申すべく候、あら〳〵かしこ。

少しかたすぎる、論文式の手紙だからとて、もう少しやはらかに書いて貰ひたい（評）

叔母さん

伊勢 小蝶

叔母さん私ねそれは〳〵嬉しい事が出來てよ叔母さんもうれしい事なのよ、それは今度姉ちやんに赤ん坊が出來るの、來年の二月に生れるんですつて、昨夕母樣から聞いて私飛び上つてよろこびました、早く二月が來ればいゝのに……。私ね赤ん坊をおんぶしてお隣の光ちやんの樣に遊びに行きたいの、そしてあの叔母さん赤ん坊は男てせうか、女てせうか、兄ちやんは男だと仰しやるのだけれど私は女の樣な氣がします、それて二人がかけをしたの、どちらが勝つてせうね、女の子だつたら淸ちやんと名をつけるといゝのね、山村さんの孃さんも淸ちやんと云ふのだから。何にしても私うれしくつて〳〵ね、叔母さんもキツト嬉しいてせう。

少し、おしつけて、わざとあどけなく見せやうとする氣もあるが、現に肉情の映つた手紙てす（評）

風流線の御禮

但馬 八尾子

種々の想ひ抱きて、暮れゆく雲を飽ず眺め候ふ折柄、御許樣よりの、繪葉書と、小包とを受け取り申候。御慇申上べき言葉もなく、只御地の空望みて、感謝の淚にむせび申候、寂しらの、境より救はれし身は、昨夜急ぎ文窓に倚りて、御志の「風流線」、拜見致し候ふ

か、承りおよぶ、明治文壇の驍將、紅葉門下の異才、きゝし言の葉の、一つ〳〵想ひ合され候。篇中鞍ヶ嶽、異形のもの、など作者の君の忍ばれて、獨特の筆の樣に拜し候ふが、祕使、紫しらべ、鷲籠、さては綾の皷など、誠に懷しく存ぜられ候。續きは存じ申さねど、土龍と、村岡の關係、芙蓉夫人と、巨山との夫婦中、前者は不明瞭に、後者は此の消息の、餘りに簡にすぎし樣にも存じ候。女子文壇中、御許樣のお作、白荻の一篇をば、飽かず〳〵繰返し申候。

御悼ましき文字白荻、御許樣の明暮を洩れ聞く身は、人知らぬ、同情の念の胸に迫りて、御許樣が、或る物を得んとして惱み給ふ心の、文にあらはれしよと、忍び參らするだに、涙にて候ひき。

修養なき身の、兎や角と申出て、失禮いたし候。委しき批評は、知る方におまかせ申して、只御禮のみ聞え上げ候。

寂しき星月夜を、哀れに細き蟲の音のみ、しきりときこえ候。

厭はせ給へや、想ひ出多き秋にて候へば。かしこ。

存外氣取つて居ないから、おもしろく見ました(評)

渚

松山市　草村登子

ゆふべこゝへ來ました。

靜かな土地です。空氣も奇麗だし、魚も鮮しいし、夏など嘸好いだらうと思ひます。

昨夜、汽船がついて、ちら〳〵と水にみだれる街の灯をみたとき、妾は何とはなしに泣きたいやうでした。靜の中で、母樣の手をしつかりと握つてゐました。ゆふべは夜どうし眠られませんかつた。

今朝はまた、早く起きて濱へ出ました。袖を風にはためかして、渚から渚へさまよふてゆく。けさ、今朝妾ははじめて、波の音の單調でないことを知りました。遠く遙かの彼方から、無限の浪をきざんて不斷につたへる、湖の響にじつと耳を傾けました。

幸子さん――妾はまうとても駄目です。こんどの轉地だつて、母樣や醫者にすゝめられて來たまで、たゞ來たまでゝす。まうとても駄目でせう。この頃は何にでも感じ易くなつて、じつとしてゐても、いつも涙がこぼれます。

幸子さん――妾はこれから、出來るだけ度々お手紙をあげます。そして妾のその便りを、やはり『渚』と名づけて下さい。獨歩の『渚』は遂にあのまゝとなつて了ひました。妾の「渚」もいつまでつゞくことが出來るやら。

妾はこの頃、獨歩の作ばかり讀みます。そしていつも泣きますの。「渚」それはもう、後を書く人がなくなつて了つたのです。獨歩は哀れな人です。「渚」は哀れな人のあわれな便りです。妾も、また妾の「渚」も……。

幸子さん――妾は、あなたが、妾の病氣をいとはずに、

妾の手紙を讀んで下さることを知つてゐます。どうか讀んで下さいよ。この、この手紙が或ひは妾の最後の便りとなるやら、それさへ知れないので御座いますから。

文學的てすけれど、是は又是て好いので、同好の人どうしが往復するのに却つて惑を深くするでせう(評)

十月の末

丹波　菊藤かずゑ

日中は袷てもさほどに思ひませぬが、朝晩はまあほんとに冷える事てすね。ことにもう十月も末の事てすから、あの北海の寒むさを一時に吹き集めるかとも思はれる空ッ風が、毎日〳〵骨組の荒い障子をゆすぶつて、あの三國が嶽に白いものが間もなく下りるてあらうと、故郷の事を想像しますと、お父上お母上はお病身の上に老體故、姉上樣計りお世話がやけるてあらうと、いつても思はず涙がこぼれて、親友の森下さんなどに不思議がられることが度々ありますのよ。

妾も來年の三月にはこゝの女學校を卒業しますので、其時には、これ迄苦勞をかけました御恩の萬分の一なりと報じたいと思つてゐますから何卒それまて御心棒して居て下さいませ。

弟儀一はいかゞ暮し居りますやら、復習の餘暇には手に合ふだけの事御手傳はせなされ度、妾からも呉れ呉れ言つてゐたと傳へてやつて下さい。

學校も一ケ月餘りいたしますと、試驗になりますので、其下さらへに急しう、赤ん坊にも何かしてやらねばならぬと思ひましたが、思う樣に隙もないので、こんなつまらぬ涎掛け一つ、お送り申します。何分にも嬰兒の事故、風を引かさぬやう大切に、又あなた樣もわづらはぬやうお願いたします。

良人始め、父上母上儀一にもよろしく御つたへ下されたく。書きたき事は山々あれど、先づはこれにて筆とめ申し候。あら〳〵。

ちよ子

姉上樣

宜い手紙てす(評)

山のやうな浪

本鄉　田村花霞

兄さんは何故今年は避暑に御出てなさらないのと阿母樣に私し聞きましたの、そしたら嫌だと仰有つたつてねえ兄さん、ほんとうてすか、さぞ御一人て淋しいてせう、だけど爺やが威勢がよくつて話し上手だからそんなてもないてせう、大そう涼しくなりましたするから、もう一週間もしたら歸らうつて阿母樣がいつていらしつたわ、私し毎日早く起て霧のやうな飛沫を浴びてそして隨分深い處までいつたの、其時はほんたうに恐かつたの、だつて透き通るやうな眞白な浪が山の樣に押し寄せて來たんてすもの、だけど私し嬉しいわ、來年も來たいつて阿母さんに御願しましたら、まあ來

年のこと今からつて御笑ひなすつたわ、光やもその時笑ひましたの、生意氣だわねえ兄さん、だけど光やが何時でもいろんな貝を澤山拾つて與れますから、私し怒らなかつたのよ。

今日も靜代姉樣と光やと金剛石の樣に光つて居る貝や、色々の繪具を溶かずに落した樣な貝や、靑く眩しい程燦々した貝だの、小さな眞白な奇麗な貝を澤山私しには重くて提げる事が出來ない程拾ひましたの嬉しかつたわ、それから五色の貝が幾つも〳〵固まつて、隨分大きな牛に似たのを拾つたわ、發見したのは私しよ兄樣、夫れねえ兄さんの御机の飾り物になさいな、御土産に私し持つて行つてあげるから、敷物は歸つてから私し兄樣の好きな色の毛糸で編んであげませう。私し眞黑になりましたの、黑ん坊だなんていぢめちや嫌よ、きつとよ兄樣、避暑も黑くならないと倘いゝけどねえ、名物の柚羊羹も御土産にするわ、爺やにも澤山やるつていつて下さい。

庭の菊はおきに咲きさうでせう、兄さんの學校は何日から始業します、私しはその前の日歸ります、一日も此處に長く居たいのよ、歸つてから種々御話します、さよなら。

言葉つきがあらいから地方の人などは、驚くかも知れませんが、兄の前だからとて殊更に改まる必要はないので、ふだん斯んな風に話してゐるなら、是で差支はない（評）

御存知の私書齋

大阪市　久田浪子

こかげになくせみのいとあはれに日影もやゝ短くはや秋の景色のたちそめて燈火の下親しく相成申候休暇中は暑さにくるしめられ文よみ筆もつ業もなほざりにいたし候故二三日前よりやうやく机に向ひちりにまみれし書ども取り出て當學期の敎科書一と通り復習いたし候にわからぬふしの多く如何せんものと案じ居り候就ては今晩より又例の會讀はじめたく此度は私方にて居間は御存じの私書齋と相きめ申候いとむさくろしくは候へども母家とは少し離れ居り夜分などはまことに靜にて興至りいさゝか夜更候ても別に家内のものにはさわり之なく迷惑致す者は妾のみに候へば花子樣の御宅にて會讀催し候時の樣に御遠慮遊されぬやう念じ上げ候毎晩の事とて餘り人の多きはかへつて復習のさまたげと存じあつれは貴孃樣花子樣幸子樣御姉妹の都合五人のつもりに御座候又會讀いたす書物は皆樣と御相談の上にて取りきめたく餘はお目もじの上きこえ上ぐれば午後七時頃より必ずおこし下され度待ち奉り候。なんかしこ。

七草

愛知縣　佐分富美子

折ふし御許樣にはいかゞ過させ給ふらむと、御したわしく思ひまゐらせ候、扨て今朝ほどそゞろ歩きに後の

山へのぼりしに、分行く道の右左りに、秋草のいとうるはしく咲き出てたる様、又なく床しく候萩のやさしく紅白入り混じりて咲き亂たる、枝のうねりは道行く人の足を止めさせ、撫子の朝風にゆられて、眞紅の露がこぼれそふ、葛女郎花の露をうけて、活々しく、眞紅の中へ黄色の混はりたるも美しき、桔梗の花の、氣高く、美しき藤袴も可愛や、尾花、苅かやの、丈長きなど、とり／＼なるに見すてかねて手折り行くまゝにこれをもかれをも、とつひに七草取揃へて露のこぼれぬ様たもとに受けつゝ、歸り候へば露のひぬまに、御覽じ給へとて、持たせ上候、御活花の料にもなし下されば、どよなう嬉しく存じ候。御許様には、常に佛家のみおこもりの由、是非一度御暇の節、御都合遊ばされて、御氣晴らしに、御越し下され度、御待ち申上候。あなかしこ。

佳作 子守



茨城 坂野よし子

父の登山を祝はれて

滋賀縣 磨志緒

父の登山を祝ふとて、わざ／＼御使を下され且誠に重寶なる御品を頂き父も大悦にて「之を山上にて取り出し、四方を眺めたらさぞ愉快だらう、」と申され候誠や富士が峰にて御來迎の双眼鏡を取出し十三州を只一目に見下したる時の心地如何にと、想像いたされ候、本日の手紙によれば早「御殿場に着し、いよ／＼明日笠を被りゴザを着手には杖脚絆に草鞋てふ、いでたち剛力つれて登山する、」との勢よき報知參り候。定めし今頃は頂上にて頂きし眼鏡取り出し、人一倍壯快に感じ居らるゝならむと存じ居り候。出立の際の話には「十七日頃歸る」と申され候いづれ其時には御知らせ申すべく候間、是非御越しありて日頃きはめ給へる地理御參考の一端ともなし下されたく

候先は御禮かたく〳〵御知らせまて、かしこ。

雛鳥に添へて

京橋　大崎ひさめ

今朝しも讀書の窓に近う、黄と白とに斑をそめし雙羽やさしき雛のおぼつかなげの歩みもて、母戀ひわびて道さがすにやあらむと思はるゝがいぢらしうて、暫し小籠におとめおき候。

妹はいつか花の蔭にて見たることとこそあれ、たしかに徹様の御手飼よと申し侍り候。思はずもこちらの庭に迷ひこみたるものとこそ存じ候へ。さぞや心細からむをまいてタマのともすれば戯れもせむを。さあらぬ中にとりいそぎ御送り申し上ぐるにて候。さらば。

英國に留學

小樽　岩谷たね

清らかな水を硯に受けて一筆申上候御子息様には近日英國ケンブリッチ大學へ御留學遊ばさるるよし目出度およろこび申上候國内の旅行にても案ぜらるることに候をまして御一人の輝房様を千里の海原隔つる外國まて御つかわし遊ばさるゝ御心よふてこそ御思ひきり遊ばされし御斗と我兩親に比べて御うらやましく存じ候年月のたつは早きものなればやがて彼地の大學を御卒業遊ばされ御歸國なさる日も遠からぬうちに候さてなにかな御餞別をと存じ候へども別に思ひつきも之なく候へば御懇意にまかせ誠に失禮ながら金子一包差上申候尚御暇乞に參上致すべきは本意なれどさだめて御取込の御事と察せられ候へば態とさしひかへ申候。かしこ。

留守居の夜

札幌　齋藤れい

文子様今夜はほんとうにいゝ晩ですね！月もいゝし風も出て來ましたしあんなに暑い暑いってこぼした日中がをかしくはありませんか？さうさう今夜は十三夜だったてすものね。

あなた今夜何をして居らつしやるの？こんなにいゝ晩に。やつぱり御勉强？それとも例の文才に富むで居らつしやる頭をねつてお在てなさるんてすか？あんまり熱中すると頭が惡くなりますよ！私ね今夜は留守居番てすの。お父様は用事にお母様は親類のところに御祝ひ事があつてお手傳ひに行きましたし店の小僧と弟や妹達ばかりてすの。弟や妹なんか叱る人が居ないものてすから大騷ぎてす角力をとる座敷中をかけまはる笑つたり怒つたりして居るんてすよ。あなたもし御用がおありなさらなかつたらいらつしやい！何か皆て遊びませう！是非ない御用がおありなら仕方ありませんけれど。ね。是非いらつしやいな！。さよなら。

塔の澤より

横濱市　清水ふみ子

雪子さま。箱根塔の澤よりお便り申し上げ候。昨日三時間汽車に搖られて國府津に着し、又二時間にして塔の澤に着し候。同行は父と弟と三人。

汽車を下れば電車。電車を降れば又人力車と約五時間は揺られ通しにて候、文明の利器も悉く倦ぐみ申候。來て見れば、これがと態く箱根山にてさ程箱根々々と人が喧傳する程の所にも無之く。只水の清きと湯の加減の宜しきが何より嬉しく存じ候。されど君よ、塔の澤の夕は殊の外美くしう候。蘆の湖より流るる早川の岸に臨み、頗る風致に富み候、早川のせゝらぎ月を砕く夜、孤影飄然と阿彌陀寺の逕を逍へば、つくねんとして何をか啓示する老松も壯大なる寺院も悉く夜の闇に秘められて、萬籟寂としてたゞ聲なく、天上に月と星との瞬のみ。この天地に生くるものは一人妾のみにあらずやと思はれ申候。

されば獨、思に堪かねて森を逍遥う詩人も有之候とか。

宿の番頭の雲助の述懐を一寸きゝしまゝ御傳申し候。

『東海道は五十三次、此の雲助が居ねへぢやあ、縮にも双六にもなるんぢやあねへ。女連れの遊山旅。花一つ折るにも、此の雲助が手傳はねへぢやあ收さまらねへ。おゝよ。こゝら一面は俺等の巣だつけい……』と後に聳ゆる箱根山を指して笑ひながら番頭が輕口。弟も他のお客も、もつとやれ〳〵と申し候。話すものも笑ふに、聞く者の可笑しさ。御察し下され度候。

塔の澤の夕は涼しく候。只今は第二日目の夕に候。月は圓う、風は涼しく、此處の夕こそは、眞の塔の澤に來て居る心地致し候。

先は月の清き小窓に。塔の澤よりの第一信。かくの如くに御座候。頓首。

奉公先より

近江　竹村光枝

秋も早や半と相成候故、妾の里の柿も既に熟せる事と存じ居り申し候。京は今日この頃、町は只だ蟲賣の聲のみにて賑はしき裡に淋しさを覺え候。

妾が上京して早や既に三ケ月餘と相成申候。始の間は家の勝手も相知れず誠に困り候ひしが、只今にては何から何迄て奥様の言ひ付け通りに成し終へる様に相成候て嬉しく日を暮し居り候。

郷にありし時はいつも母様に呼び起され居り候ひしが京に來りて未だ一度も起されし事無之毎朝五時頃に眼を醒し候、是れや實に氣の張り居る爲と存じ居り候。

いつも母様の膝元に甘へ居りし妾なれば、毎朝の拭き掃除、殊に大きい家にて辛苦を覺え候ひしが、是れも習慣と相成候て、今は左程にも覺えず候、仕事の暇間々々には奥様より裁縫の教を受け居り申し候、夜は御主人様の御寢の後、一時間餘りの御暇を貰ひ候て、空氣洋燈の明るき下にて手習ひを致し居り候。京は毎月一日と十五日が休み日にて、その日は一日の御暇を貰ひ、京都の名所を見物致すが例と相成居り申し候。妾も大分京都の名所を覺え申し候に付、今度母様の御上京の節には叮寧に御案内申すべく候。

乍去本日午後三時頃、母様よりの小包正に落掌致し候袷二枚と帶一筋、傍に寶丹齋一包、實にや子を想ふ親

心、お心込めての御送物、妾は思はず涙を落とし申し候。未だ申上たき事は山々に候へ共、夜既に深かければ想ひに任せず、洋燈の火も細り候まゝ、心殘して筆止め餘は又の後便に申し上べく候。かしこ。

花束は來春

四谷　網野田都子

天つ大み神の作らせ給ひし夏の定めとは申しながらかばかり暑き今日此の頃如何に過させ給へるにやと思はぬ時とては露程もなく一度御便り致し御氣嫌の程伺はばやと日毎に思ひ居り候へどもはこばぬ筆の悲しさには心のみ思ひまどひてかくは御無沙汰にのみ打ちすぎ候段何とぞ惡からず思召し下され度候。御兄上樣を始め御姉君達にも御すこやかに御暮しなされ候や。私も至極丈夫にて日々庭の掃除に顔色こがし居り候間他事ながら御安心下さるゝ樣。さて私事今の夏こそは昨春よりの御約束に從ひまゐらせ御許樣の御理想の田園生活とやらに入り申す筈の處急に親戚の方に參る樣相成り誠に困り居り候ひしが親戚にて是非に來て給べと切なる頼みにより誠に〳〵申譯是なく候へど御宅に參上致す事は思ひあきらめ候間何卒〳〵御許るし下され度候。私も今年こそはと樂しみ〳〵て待ち居り候ひし故親戚に參り候ひてより夜毎、月影淡き曙に君と共に裏園の紫の露含める愛らしき葡萄のもとにそゞろ歩るきして學び屋の事共語らひあかし又は月淸き夕暮川邊に掉さし入合の鐘聞きながら光りまばゆき螢を追ひ散らす事などのみ夢み居り候。御許樣にもさぞかし御心落させ給ふならんとは存じ候へども何とも致し方なく候間何とぞ來春の櫻咲き初む頃まで御待ち下され度。來春こそは必ず〳〵參上致し澤に芹つみ野原に花束作りて共に樂しき月日を送り申すべく候間此の度のみは御あきらめ下さる樣願上げ候。されど西と東に分れながら共にながむるは只月のみと思へばいとも月影の戀しう思はれて御許樣にも今頃は月のもとにて十三絃調べさせ給へるならんなどとのみ思ひ居り候。思ひの十分の一も記るされず誠に悲しき限りに候へど此れも我が筆の拙さと此にて筆止め申候。

おもひたまへ御胸の島に櫂足らずされど往なれぬながされ人を

おもはぬを罪と知る日の君おもひ涙ながれてはてなき日なり

君まさぬ端居やあまり數おほき星に夜ざむをおぼえけるかな

白き羽の幾島飛べば山頂の燃いざよひぬ秋の湖

かゝめゐるわたつみ見ればいだかれて飛ぶ日をおもふさいはひ人よ

（舞姫より）

俳句

「天」

掛稲に國分寺の塔遥かなり　相摸　柚木白菊

此景は忘れられない（評）

「地」

想はるゝ心地に君と納凉けり　福井縣　片山千里

氣の利いた言ひかた（評）

「人」

ふらり〳〵さゝがに姫の落もせず　山梨　藤森師恵

さゝがに姫と働かせたのでをかしさがある（評）

『秀逸』

水仙の花に僅かな日ざし哉　名古屋　足立さはえ

星飛ぶや秋の夜明を徒に　常陸　山下馥子

蟋蟀や下女が縫ふ手の覺束な　伊賀　岡花子

華厳瀑布にて

凉しさや水音山を動して　常陸　齋藤光子

鶴小屋の雨に崩るゝ芙蓉哉　本郷　山崎ふく子

雲裂けて野は秋風となりにけり　長崎市　天ヶ瀬さだ子

白露や夜毎に夢の美くしき　芝　長谷川靜枝

トンネルを出て丶時雨に驚きぬ　奈良　中富よしみ

たそがれて女とあひぬ薄原　豐後　菅原花子

名月や冷たき寺のまろ柱　美濃　山澤里子

化粧して汗になりけり夏祭り　土佐　翠美女

畦草を引くや裸に呉蓙をきて　岐阜　鷲見喜子

山寺の太鼓を借りて踊かな　秋田縣　泉田秀子

秋の蚊の打としもなく減りにけり　越後　藤原富子

白粉の乗る肌寒し春の風　羽前　星萬里子

朝顔の花に呂蚊帳のゆらぎけり　鳥取市　桑本きさ子

朝顔や垣にちら〳〵ほし　本郷　しづえ子

山村につゞく大原芒ちる　信濃　駒澤みつ女
宵月に寄せくる潮の光かな　備中　篠原しげ子
亡き姉の浴衣つめたく疊む哉　横濱　安川久子
火粒の雨に花火の頻なる　秋田縣　大友しん子
姉病んで鬼灯徒らに熟しけり　岡山　今東雪子
秋の花こぼるゝ頭に眼を病みぬ　美濃　飯島敏子
秋の雲南南と亘りぬ　北海道　文子
虫の音に眠りこけたる兎かな　南多摩　大井慶子
初雁や月を過ぎりて南へ　盛岡　四戸節子
澁柿を剥いてもみたる少女かな　神戸市　渡邊ゑつ子
妻もなく九月の蚊帳疊みけり　越後　藤原鶴子
電や厩に長き馬の顔　長崎縣　酒井つや子
横町の夜火事に舟の集ひけり　肥前　服部男子
金を掘る洞の響きや秋の山　大阪府　親美子
舞ひまふて風に乗る葉や神樂月　駿州　望月初子
秋の風御堂の鐘の古び哉　小石川　小川はつえ
蓮の花鐘の響にゆらぎけり　沼津　入代美代子
水園の水音白し秋の風　麻布　三浦美沙子
七草をのせたる秋の團扇かな　上總國　牧野とよ子
たそがれぬ底なし沼の水の面　府下　影法師
降り出すや居ずまひなをす雨蛙　南品川　町田のり子
萱草の花うち咲く夕立かな　兵庫縣　富士田章子
山茶花の垣に足袋ほす男かな　埼玉　幽香子
松脂の木肌流るゝ暑さかな　北海道　矢萩常子
空青し水青し波に飛ぶ千鳥　大阪市　高岡もと子
紅絹うらの二尺の袖や花のかげ　大阪　伊藤綾女
夏草の中にけだかし百合の花　大阪市　秀兒
かはせみや曳く人もなき四手網　茨城縣　靜子
實にならぬ草の花咲く殘暑かな　群馬縣　平柳登興志
秋の月鏡は湖上を流れけり　神戸市　山本幽霞里
醍多村や花野の中にわび住まひ　茨城縣　宮本楓子

夕暮を靜かに散るや栗の花　岩手縣　熊谷文子
塗頭の軒大なる藩四散　長野縣　松尾久子
石竹や縁下駄赤き小庭先　下谷　宮澤志邦惠
葛の花岩にからみぬ淵の上　廣島縣　和田靜枝
おばしまや月に美人の假粧かな　滋賀縣　池田芳子
小春日や椽の障子に虻の音　岩代　佐瀬ふぢ子
東宮の行啓うれし花火哉　伊賀　關本きし
なつかしや葛籠の中に秋の反故　伊豫　娃子
かけ渡す虹の高さや雲の峰　土佐國　中平かめ子
秋の夕凭りもたるゝ柱かな　高知縣　種枝山はる
朝貌や垣より垣へかたつむり　尾張國　梶田花子
籔のなか夕日にひかる紅葉かな　神奈川　山本さき子
月今宵靜かに松の翠かな　三重縣　古志むら子
馬の尾を吹きさばきけり秋の風　靜岡縣　川山よしゑ
夏木立繁みが中の社かな　山口縣　深山鶯
蜩や黄昏の雲美しき　福井市　山崎久尾
病む母の菊咲く日和まちにけり　千葉縣　大木しげ子
刈草に白い蝶飛ぶ暑さ哉　豐後　內山佐惠子
軒下にわらうつ門や蜻蛉とぶ　長門　藤井韻子
リボン紅く白萩させる女學生　岡山縣　廣江寧子
電線に樂譜つくれる燕かな　福岡　好子
快き馬上の風や夏の月　靜岡縣　伊藤靜枝子
絵日傘に愛らしき兒の使かな　常陸　久保田春江子
蜩の靜になくや朝の寺　下野　大原みつば
秋の寺山門とづる音高し　青森　天內孤子
朝ぎりに消へ行く人の足の音　栗子
秋の蝶危く猫を逃れけり　秋田　佐々木岩子
端居して假粧冷たき夕べ哉　熊本市　近野春子
塵塚に髪のぬけ毛や秋の風　大阪市　梅本龍子
夕立やテニスの網に殘る露　名古屋　伊藤ひさ子
奥の野や西も東も蟲の聲　秋田　渡邊みのる

秋風にれくたに裂な吹かせけり　下野　三浦梅香
時雨るゝや紙漉く美濃の少女哉　近江國　竹村光佐
よき戀の文使ひらし春の風　下野　山仁よし
夕顔や自炊の煙細そぼそと　羽前　湯野村千代子
鷄頭の紅映す滾　陸中國　黒澤美律
化粧する今朝は身にしむ秋の風　神田　林霞子
秋雨や佛をさがす無住寺　大阪市　大野村子
たゞ一人遺書を開く夜寒哉　本郷　しづ江
物種のふくろのごみや秋の蝿　京都市　三線子
秋の塔なかぬ鳥のとまりけり　埼玉縣　中村勝子
床下になくこうろぎや秋さびし　下谷　細谷けふ子
闇迫る寺や藪蚊のうなる音　大阪　百田文子
乞食のおきているなり今日の月　横濱市　石井芳子
秋寒や鏡を包む古錦　會津　松川月子
咲はれて捨てる菊も交りけり　相模國　鍋田美代子
大利根や汀に暮るゝ蘆の花　下野　小川靜江
日傘さす女ものうき草履かな　河内　竹内敬子
まだ知らぬ里もありけり夏氷　安房　くに子
よわ／＼と萩にすがりぬ秋の蝶　鹿島市　山本文子
星祭る机上に笹のゆらぎ哉　長崎市　石山曉舟
亡き姉のこと思ひ出す菊の花　名古屋　吉田たま子
雨晴て雫たまりぬ菊の花　日向國　鶴丸輝子
下げ髪の西瓜抱ひて畫寢かな　豊後　立川つや子
滿山の紅葉榮えたる古城哉　麴町　しげ子
秋立つや今朝新寮に鐘の音　青山　瀬戸光子
秋の富士今朝の鏡にうつりけり　横須賀　登窓子
草の戸に上人宿す燈籠哉　岡山市　坂本はまよ
草とつてあらはになりし桔梗かな　大阪市　松葉要子
嫁入や夕顔しろき總の窓　京橋　ゆき子
蟬の聲森一層や晴模樣　東京　野の水
日盛りや峠にかゝる馬の汗　兵庫縣　初枝子

下駄さげて渡るまひるの夏の川　美作　岡田秋子
緋の袈裟の大僧正や萩の雨　遠江　六角吹子
火すらしき鐘の遠音や冬の月　静岡縣　きよし
道淡ふ成つて咲きけり街路の萩　愛知縣　野々垣靜子
春風や歌よむ窓に櫻ちる　大阪府　春枝
猿鬼きな泊めて柿出す月夜かな　上州　大沼素女子
咲く萩も散る萩も浮く秋の水　京都市　鳳尾ふみ子
蜘蛛の巣やきら／＼光る露の朝　肥後　山本露子
夕雲や水彩畫家の筆のあと　大阪　紅女
禪寺に遠磬ばかりや秋の風　但馬　郷名みれ子
夏木立茶店街道のお休所　長野縣　竹花やす子
葦萩や萩や芙なおしわけて　上野　紫紅子
繪の如き夕榮の寺や葉鷄頭　福島縣　秋田みどり
鸚鵡ならぬ鳥に物言ふ鳴子引　加賀　山川なみ子
道はたの柳垂れたり牛の角　上總　鈴木梅子
殘月や朝顔多き女家　千葉縣　馬場ちよ子
見せに來た手には殘らぬ初霰　京都　上野こと
卵產んで鳴く鷄や蓼の秋　福岡縣　淺原よし
よく出來て案山子と見えぬ案山子哉　青森縣　西村みや子
草深くひそみて秋の蛬かな　福井縣　北利子
姉妹揃ひ浴衣て踊り哉　大阪　宇和島豊子
夕立に屋根の小草の賑ぎかな　大分縣　田代とみゑ
掛茶屋の庭狹うして萩の花　秋田　國松操子
驛使の能き妻持ちて老にけり　秋田縣　寺島はん子
駒鳥の胸にしみ入る高音かな　土佐　白梅
魚河岸に殘る燈や明易き　秋田縣　荻村かの子
夏の月踊りの婚を評しけり　埼玉縣　黒田習子
畑の中桐四五本の若葉かな　石見　武吉まつ子
鳥飛んで水を離るゝ柳かな　愛媛縣　松村るみだれ
紅葉たく烟の中に人見えぬ　田ヶ波津子
葉柳の重たさうなるそよぎ哉　會津　齋藤ひろし

短文

『天』いな妻

鹿兒島　みゆき

只、かりそめの時のま、かなたの森、こゝの野美しく輝いた。光れるよ水、輝けるよ露、田に實るか黄金の稻。此時。宇宙は神の造り給へるものにして宇宙の萬物は皆神靈なりといふ句が胸にうかんだ。

胸のひらめき

『地』何處かへ

滋賀縣　若井きく子

袷を縫ふて居るとパサリと青桐が一葉落ちた、障子の破穴から吹き込む風がスーーッと淋しい音をたてる。萩の窓に凭れて居た美ちやんが不意に『秋に成ると鶯や燕は何故隠れるのだらう』『冷たい風が吹くから暖い國へ歸るのだよ』さう、妾も何處かへ行きたいわ」

何處かへ行きたい人！世間には何の位あるでせう

『人』雲

小石川　小川はつゑ

暑い眞中、私は綠陰深き岡の上に立つた、ふと天を見ると果しなき碧瑠璃色の空に、大きな蟠りとなつて眞白な雲が靜に動いてゐる、熟と凝視て居ると青空が動いてゐるやうだ、倘見てゐると今度は私の立つてゐる岡がだん／＼地の底へ沈んで行くやうである。

眞晝の恐れ

「秀逸」

桃色珊瑚　　土佐　石川きよ子

妾共の幼さい時分、月のよい晩などは必つと「お月樣(月灘の轉化)桃色、誰が云ふた海士が云ふた、海士の口を引きさけ」と言ふ可愛しい聲を聞きました。それは土佐の海で採れます一番よい桃色珊瑚が、この月灘と申す處で採れましたから、邊の人が秘密したものだと申します。

珊瑚も採れよ、歌もうたえよ

七草　　本鄕區　籟子

雨の野道え行く。里川は大分水を增した、汀の山萩の花の餘りしほらしきに、偶と七草を集めてみたいと思つて、お山の方へ大まはり。七草は揃ひました、其かはり家へ馳け込んだ時は、花の袖も私の袖も重いほど濡れて居ました。

雲の雫、實の雫

荒たる翌日　　青森縣　馬場ちよ子

荒れにあれた昨日の海は、今日は汕を流したやうになつてをります、難船は濱にあがつてをります。空は高く雲一つありません。沖の方に白帆が見えます、其の船を見ながら村の馬子が、思ひ出したやうに唄をうたつて、小松原を急いで行きました。村の子供等はのそ〳〵濱にやつて來ました。

海から打上られた藻草、陸には吹飛ばされた枝や木葉

時雨　　三重縣　古志村子

細い細い絹絲の樣な時雨が、音もなう、土の中へ靜かに、泌み込みます。春になつてから、ふうわりと若葉に萌え出て、優しい蝶のしとねとなるのでせう。

淋しい庭に、希望あり

秋の日　　丹波　菊藤野菫

圓い丘に佇んでゐると、一谷前の疎らな雜木林越しに彩やかな夕陽が映えてゐる。渡鳥が二羽頭の上を、北の方へ飛んで行く、夕風に靑い薄がさは〳〵と靡いて秋の氣が何だか胸に一杯泌み入る樣な日である。

悲しい詩が出來さう

我の存在　　常陸　金子せい

兄あるは心强きもの、姉あるは心嬉しきもの、妹あるは心たのしきもの、弟あるは心よきもの、而して父母あるは此の總てを合したる心地するものなり、更

に「我れ」の在るはこの總てに優りて感謝すべきものなり。

好き意味に感謝せよ

朝顏夕顏

京都市　武部柳葉

天氣の好い日には朝顏が朝早くしぼみ、夕顏が夕方後く咲く、曇つたり雨の降る日には、朝顏が晝過ぎ迄咲いて居る夕顏も四時頃になると咲きます。

うまれつきが弱い

山

上野　大沼染子

霧が晴れると、丸い山が角立つてくる、頂きの松に、鳥が飛んでくる、九十九折りの峰割路を、農夫が上つて行く、下りて來る、麓の街道を馬子が通ふ、郵便配達夫が走る、馬車の喇叭が聞える、斯くして靜かな山にも人間の活動が映るのです。

拓かれるだけは島になりて

私の望

岩手縣　横澤清子

靜かなさびしい夜には、ひとり月を眺めながら、私はいつもこんなことを思ふのです。

―遠くに居る人、近くに居る人、私の知つてるだけの人が、今何をして居るか、どんな心で居るかを、同時に知る事が出來たなら」と。

出來るやうになるでせう、靈魂の働きで

煙筒の巣

張津みなしご

今朝二階の窓から空を仰ぎますと、向ひの燐寸工場の高い／＼煙突から、煙がさかんに、揚つてゐますのに其頂邊から、二尺程下つた煉瓦の間へ、一羽の雀がチヨロ／＼と入りました。まああんな處へ巣をかけてゐるのでしやうか、小鳥に似合はぬ、大膽な考へと感じました。

雀の西洋室

私の村の天氣

岡山縣　海棠女

霧が深くて空も山も一體に灰色て。只八幡山の森だけが青黒く聳て居る日は必ず宜天氣になり日がかつかと照ます。そして太陽は七時過て愛宕山から出のです。又早くから霧が晴れて向の山も後の山も青々として常より近く見え穴の色が非常に綺麗な時は必ず雨です。まんが一よければ曇天とした蒸暑い日なのです。

而して心持は

飛驒の町

飛驒 むら子

露吹く風もそぞろに物寒い秋となつたので百姓の多い我町はせはしくなつた。先づ第一田畑の作物の取入れ、それから茸狩に栗拾ひ小梨取、まだ柿おとしに、焚火こひしい冬の用意のまき拾ひ只もう我身をわすれて雪のふらないうちにと一心に動くのである。

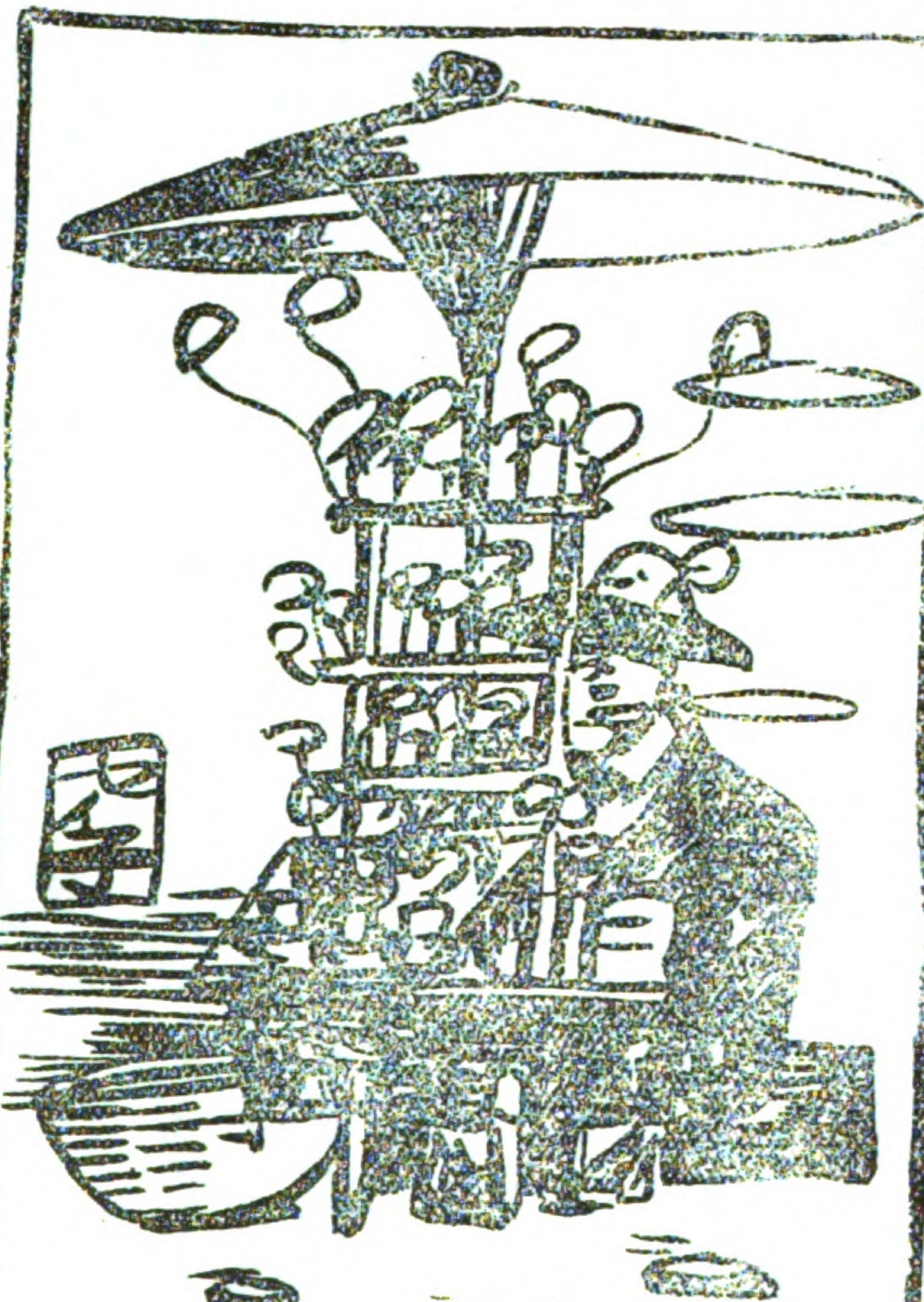
秋、高原に立つ

短文

うたゝね

信濃 こてふ子

ローズの薫りゆらめく、机に寄つて暫、私はうつ／＼と…。何時とも知らず私は、清い星の花の咲き亂れて居る樂園に來て居ました。何處からともなく床しいリリーの薫りがすると思ふと、氣高い百合姫が澤山の菫を供に連れて、キラ／＼する星の花を押し分けながら出て來られました。そして何時か私は百合姫と手を携へて、ダンスをして居るのでした。



佳作 賣物や 水戸市 土田せい子

天上の榮華

望み

京都 撫子

誰でも感じたまゝの文章が作れて、見た儘の書がかけて、思ふまゝ美しい聲で、歌が唄へて、そして華かな家に住む事ができたら、それて、もう想ふ事はない！

詩集

武州 近藤とく子

花の様な孃様方のお作り遊した新體詩の傑作だけ、毎

に「我れ」の在るはこの總てに優りて感謝すべきものなり。

好き意味に感謝せよ

朝顔夕顔

京都市　武部柳葉

天氣の好い日には朝顔が朝早くしぼみ、夕顔が夕方後く咲く、曇つたり雨の降る日には、朝顔が晝過ぎ迄咲いて居る夕顔も四時頃になると咲きます。

うまれつきが弱い

山

上野　大沼染子

霧が晴れると、丸い山が角立つてくる、頂きの松に、鳥が飛んでくる、九十九折りの峰割路を、農夫が上つて行く、下りて來る、麓の街道を馬子が通ふ、郵便配達夫が走る、馬車の喇叭が聞える、斯くして靜かな山にも人間の活動が映るのです。

拓かれるだけは島になりて

私の望

岩手縣　横澤清子

靜かなさびしい夜には、ひとり月を眺めながら、私はいつもこんなことを思ふのです。

「遠くに居る人、近くに居る人、私の知つてるだけの

人が、今何をして居るか。どんな心で居るかを、同時に知る事が出來たなら」と。

出來るやうになるでせう、靈魂の働きで

煙筒の巣

張津みなし

今朝二階の窓から空を仰ぎますと、向ひの燐寸工場の高い〳〵煙突から、煙がさかんに、揚つてゐますのに其頂邊から、二尺程下つた煉瓦の間へ、一羽の雀がチヨロ〳〵と入りました。まああんな處へ巣をかけてゐるのでしやうか、小鳥に似合はぬ、大膽な考へと感じました。

雀い西洋室

私の村の天氣

岡山縣　海棠女

霧が深くて空も山も一體に灰色で。只八幡山の森だけが青黒く聳て居る日は必ず宜天氣になり日がかつかと照ます。そして太陽は七時過て愛宕山から出のです。又早くから霧が晴れて向の山も後の山も青々として常より近く見え穴の色が非常に綺麗な時は必ず雨です。まんが一よければ曇天とした蒸暑い日なのです。

而して心持は

飛騨の町

飛騨 むら子

露吹く風もそぞろに物寒い秋となつたので百姓の多い我町はせはしくなつた。先づ第一田畑の作物の取入れ、それから茸狩に栗拾ひ小梨取、まだ柿おとしに、焚火てひしい冬の用意のまき拾ひ只もう我身をわすれて雪のふらないうちにと一心に動くのてある。

秋、高原に立つ

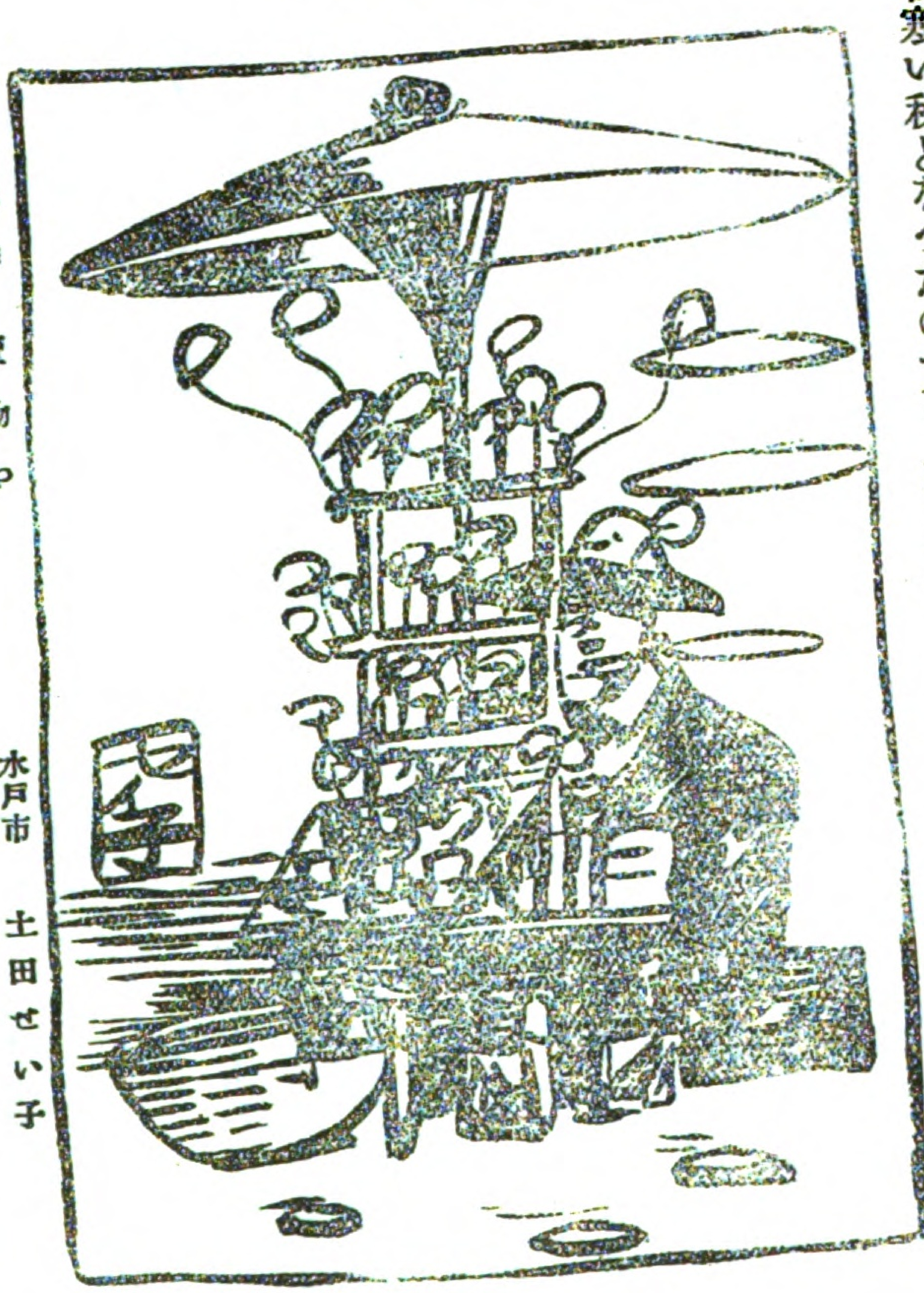
うた丶ね

信濃 てて ふ子

ローズの薫りゆらめく、机に寄つて暫、私はうつ〳〵と…。何時とも知らず私は、清い星の花の咲き亂れて居る樂園に來て居ました。何處からともなく床しいリリーの薫りがすると思ふと、氣高い百合姫が澤山の菫を供に連れて、キラ〳〵する星の花を押し分けながら出て來られました。そして何時か私は百合姫と手を携へて、ダンスをして居るのでした。

天上の榮華

佳作 賣物や



水戸市 土田せい子

望み

京都 撫子

誰でも感じたまゝの文章が作れて、見た儘の畫がかけて、思ふまゝ美しい聲で、歌が唱へて、そして華かな家に住む事ができたら、えれて、もう想ふ事はない！

詩集

武州 近藤とく子

花の樣な孃樣方のお作り遊した新體詩の傑作だけ、毎

短文

號書き寫して置いたのを今日數へて見ましたら丁度三十篇ばかりになりましたから、私は美しい表紙をつけて立派な詩集を作りました、そして此の詩集の名は是非女子文壇の記者樣につけて頂き度いと思ひます。

詩集『燃ゆる花』

保護色

大坂　木村春江

咲き殘る朝顏を數へて居た時、恰度、枯葉の樣な蛾が土にまみれて居るのを見つけました。そつと拾ひ上げた弟は艶々しい紫陽花の葉に止まらせ樣としましたのに、蛾は側のやにだらけの桃の幹に……。

庭の前が都

バイオリン

樺太　眞田のぶ子

キーと美しいバイオリンの音がする、何やらお隣の露子さんらしい、あの涼しい清い聲で高く低く歌ひはじめた、背のすらりとした、ふるいつきたいほど佳い樣足、髮をかつてう佳い束髮に結び、やゝ首をかしげて眞白い手で品よく彈いて居る立姿が目に浮ぶ。

白銀の絃を掠るやうな響

蓮の花

廣島市　山本秀子

朝早く起きて、前の堀を眺めると、蓮の葉の重なつた間から白い花や桃色の花が澤山開いてゐます。涼しい風が吹きますと蓮の香がして心地よくあります。向の家は蓮の青波に浮いて居る樣て道を行く人も見へたりかくれたりして畫を見る樣に美しいです。

此繪は動く

山づと

君代　菅野和子

暑いから嫌だといふのを無理に、美代ちやん連れて裏の苺林に行く。これは自分等幼少時代に苺の木が林のやうにあるから名たのみ、今はどうかと思つたら二三本昔の名殘をとめて居つた。枝を裏がへすと、それは大きな紅い酸漿のやうなのが、房々なつた居た。

取るも惜く、取らぬも惜く

秋來

伊豫　曉子

裏の柿は色づき初めて草叢では鈴虫が鳴く。秋はもう目にも見えて來ました。暑さ嫌ひの私はほつと蘇つたかの樣！さあ、みどり樣初江さんきし樣へ夏中の御無沙汰のお詫を初めとして、こゝかしこへ出歩かねばなりませぬ。私のたんすの引き出しは今暫くあけてに忙しいのです。

あけてもからの人さへあるに

短文

光の力

岐阜市　篠田とみ子

慥、机の上に置いたと思ふ燐寸、荐りに探し廻つても更に手に當らない、困つた處へ母上が燈りを見せて下すつたら一時に二つも三つも出て來た、やれ嬉しや、だが、今私が書いて居る原稿も同じく暗夜の手探り同然、光が發行されると、思ひ當る事ばかりだらう。

諸嬢が心の光

由井が濱

横濱市　安川久子

砂白き由井濱邊、貝殼に砂を盛つて餘念なく遊んで居る四つ位の女の兒、友禪縮緬の長い袂を肩で結んで、紅緒の千代田草履をちよこ〳〵させては、母樣の前へ行く、丸髷姿の神々しい、繪の樣な母樣は、滿面に笑を堪へて、ぢつと其樣子を見つめて被在る、私は恍惚と其光景にみとれた。

別莊の人

私の家

備前　松本もと

野中の小村の、古い大きな無格形な家ですから、一人で居る時などは、淋しい位靜です、昔から磨き込んだ椽に秋の日がさして、藁の香のプーンとする頃から裏の柿の木で百舌が鳴きだします。

家庭

夕暮の町

名古屋　三浦ろく子

夏の強い夕日は、倉の白壁と電柱に名殘をとゞめて居る。勢のよい聲をして鰯賣がくると、彼方からも此方からも、御神さん達が、皿を持て買に出る。やがて皆が戻ると、鰯賣は聲高く横町に曲つた。向の家から夕餉の烟が低う、闇い狹い町を這ふて居る。

秋に近い

寄宿舍

札幌　忠子

私の寄宿舍は札幌の西の方にありまして、何年か立つた雲を突く樣な楡木の數本に圍々夏になりますと只綠葉の爲めに舍の硝子窓まで掩れ如何に蒸暑き日も育嵐吹出てほんに心持良いのです生徒は六拾人て七時十二時五時に食を終え舍監は二人居て九時に眠るのであります。

黒髮

長岡市　岸根初子

みどりの黒髮など、美しいものゝやうに思つて居乍ら、一寸ご飯の中に毛が交つてゝも、ヘツと胸を惡くし、居間に毛が一本落ちてゝも、もう身がぞく〳〵しますの。

お隣の奥樣

埼玉　むらくも

宅の隣りに若い御夫婦が住んで居られます、奥樣は都の女學校を卒業された方だ相て、一番鳥のなく時分には御門を開く音がします、まわりにちりの落ちて居るのを見た事が無い、夜は樂し相な笑ひごゑがします、奥樣は女學校等に隋落生が居るのを殘念に思召すてしやう。

秋の夜　　豊後　菅原尾花子

花子さんは近日中に前途有望なお方と御結婚なさるさうで大變なお悦てある、萩子さんは病みがちてしたが遂に四五日前死なれました、そのよろこびとこの悲しみとがゴッチャに絶えずまぼろしにかかる、秋の夜の月も曇りて、こふろぎがしきりに鳴く。

野道　　京都　濱部風窓

日はもう暮れて仕舞つた、澄みきつた大空には四日月が淡く懸つて宵の明星がキラ〳〵と瞬いて居る、船岡山、衣笠山、愛宕山がヌーボー式に段々と薄く成つて遙か健勳神社の常燈が螢火の樣に見えたり隱れたり、前を歩いて居る妹の足が雪の樣に白い。

眞晝　　大阪市　高間もと子

杉の木の蔭に小さい店が出て居る。汚い布の上のバケツの中には桃や梨や瓜が浮いて居る。菓子箱には、少し許り菓子がある。梨や桃が五ッ六ッ轉つて居る。おばアさんが眠さうに座つて居る。客も居ない。社の前に職人體の男が手拭を顏に當てゝ眠つて居る。側への草の上の桃の皮には蟻が這うて居る。

稻田　　信濃　小林美喜代

私しの住みます村の東は廣々とした稻田で朝早く出て見ますと霧の中に大弓を持つて居るのや破れたみの笠で立つて居るのやそれは面白い案山子が或は濃く或は薄く見えて。田の所々にたま〳〵空砲が聞えます。雀の群はあちこちに逃げ廻わつて居る。朝から晩迄此んな風ににぎやかです。

樂屋　　羽前　鷄頭女

妾は觀劇の度、樂屋に近い所に場所を定めます。今迄舞臺上で悲劇の敵同志の役者が、尊あひに其の衣裳の儘樂屋で談笑しながら寄せ太鼓を打つ樣が見ますと、何んとも云へぬ奇異の感に打たれます。

雲の帶　　信濃　世津子

此山の邊では、鳥帽嶽に雲の帶がかゝると、必と雨が降ると申ます、二百十日も二百二十日も無事に過ぎた今、雨が降らうが、劍が降らうが、さして心配もない里人からは、忘られた樣に見る人もなくなつたが、今日此峰嶋して斷るかと思うと何より心配で朝から山ばかり眺めて居ます

立秋　　埼玉　幽香子

秋が來た。裏山の楢の實がこぼれる、雁來紅が赤む、雜木林に女郎花が咲く、栗が裂ぜる、蟋蟀が蚊玉の樣な翠れる、茸の香がする、淋しい夜風は枕ををとづれて、梟は夜一夜鳴きつゞける。秋は此里から、立初めるのではあるまいか。

雨後の海邊　　能登　岩城白露子

雨が止んだが空はドンヨリと曇つて波が靜かに岸を洗つて居る、白帆船が二艘水を割つて馳せて居たのが島影に隱れてまた北の方に表はれた。沖へ漕ぎ行く漁船を蓑着た海士が笠で袢に招いて居る、千鳥が波を低う樣になつてパッと飛んで行く。

鬼灯　　府下　大井文子

「これがわたしの」
「さう、わたしのはこれ」
庭の桔梗の傍に、四五本の鬼灯がある。開花遲速を異にして、實となつて二つばかり、抜き出て大きくもう少し赤らんでゐる。英いちやんとお隣りの芳ちやんは、毎日鬼灯の傍に立つて、何時時分眞赤になるだらうれと、さゝやき合ふ。

夕顏　　三重縣　荒木千代子

夕暮方私は裏通りの淋しい町を通りました、とある家の店先に鉢植にした夕顏が一輪、薄暗い中に浮き出た樣に咲いてゐます、フト私は去年亡くなられた姉さんを思ひ出しました、姉さんは態んな夕暮方こんな夕顏の花を枕許に置いて……と、私は思はずホロリとしました。

栗拾ひ　　府下　小黑しゆん子

私の家には栗の木が八本許りあります。わけて庭先のは一番早く實りま

す。毎朝栗拾ひが、樂みで朝寢なんかしては居られません。時には提灯をつけて拾ひに行くこともございます。

私の願　上毛　納　尾　子

雛のひなを其まゝ紫檀のお机の上へおいて花はホワイトローズと桔梗をさし佐々木先生の玉琴と晶子先生の白光と女子文壇とをかはる〲見て居たい。

大鋸　赤坂　川島千鶴子

ねむたげに響く大鋸の音、赤い鋸屑は幽な音をしてハラ〲と吉さんの胸から脛へかけておちかゝると木の香は芬と鼻を撲つ、啼きしきつてゐた蟬の聲はパタリと止んで谷川の音は愈高い、七月炎盛の日射は茂つた樟の葉を透して大鋸の刃にキラ〲照りつけてゐる。

夏帶　大阪　露　草　女

これも勉强だと思つて白羽二重の片側を買つて來まして早速畫室に廣げました、太筆に墨を一パイふくませてペタリと一筆、書き終つて見ますと我ながら惚々とする出來ばえ、墨繪の雲龍恰から昇天の勢を示して居ます、これが今年のお盆にしめる私の夏帶です。

うれしい日　近江　大角歌子

私は今日、お兄樣の所へ行くのです。お白粉をいつもより濃くつけて、口紅をちよつとさしました。髮は、すきなマガレットに結ふて、巾の廣いリボンをさしました。着物は、一番すきな水色絣に、白茶の夏帶をしめて、門を出ました。ほんとにうれしい日です。

葡萄　大連市　林　正　子

チーフー產の葡萄は、粒が大きくて房が長く味が眞實によろしいから、苗木を持つて歸り、家は取り去られ雜草のみ生ひ茂る故鄕を一面の葡萄畑とし日々衰へつゝある彥根町をおこし、夏は四方に輸送する葡萄籠を驛前に山と積み江州葡萄の名を得たいと思つて居ます。

蔦　常陸　木村那賀子

初茸よりもえらい得物を、と祖父が茸狩りの歸るさ、取つて來た庭の蔦植てから最早五年、座敷から眞正面の垣根に七八間位いの場所に一ぱい蔓延し、夏は綠り滴る樣な青葉涼しく繁り、秋は錦をかけたやうに紅葉する美しさ。

自然の音樂　本所　さつき

私の家は、東京市中最も、工場の多い所で、御座いますから、朝から、夜まで、工場の職工が、器械をゴー〲と、運轉する音がするかと思へば、又こちらでは、大工の、カチン〲、トン〲、等といふ音も、致します、時が來れば、ポーと笛の音もします、是等の音も、聞方で自然の音樂とも、聞く事が出來ます。

私の家　佐賀市　田中要子

私の家は萩垣をめぐらした南向の家です、四方は稻田に面して家から一町ばかり離れた所には諸富に通ずる並木の國道が東へ長く長くつゞいて居ります、お天氣のよい日椽に出て眺めますと繪日傘連や鐵道馬車の行くのが木の間をすかして繪の樣に見えます。

小川　名古屋　郁　子

私が背戸の小川で洗ひ物をして居ますといつも種々な物が流れて來るのです、春は櫻桃の花片や蕾の束などが流れて來ますし、夏は笹の小舟や青葉で作つた草履などが、秋は赤い紅葉や黄ろい野菊などが流れて來ます、冬は其邊りが美しい六つの花で色彩られます。

平和のわが村　德島　關みね子

百戸に足りないわが小村、村長さんは世話好きで村の爲に駈けまはり、先生は親切で生徒を可愛がります。人は皆純朴で氣候はよく今年の豐作を祝ふ歌聲は此處に彼處に湧きかへつてをります。小川の水車は始終此平和の村を讃める讃美の歌をうたつてゐるのです。

母の手紙　大阪市　高間もと子

皆はもうとうに寢て了つて鼾の聲さへ聞えて居る夜中を暗いランプの心

かきたてゝ、硯引き寄せ泣きながらお書きなさつたのがこのお手紙だらう、と私はお母さんのお手紙の來る度にかう思つて泣きます。そして始めて親の恩の有難さと云ふのを知りました。

一人が三十分

備後　中山八千代

聯隊が近くに移つてから兵士の通る度に、農夫が鍬を止めて見てゐるので、私はかう考へて見ました、村の農夫が皆で四百人として、三十分づゝ遊ぶと二百時間、之丈あると一日に十時間働いて二十日、丁度一人で麥を一反作る間遊ぶので、麥が三石計り損になると。

年

埼玉縣　中村勝子

彼方からきた學生と通遊ふ時私は顔を見合せて、ハットして伏目になる彼方も赤くなつて一寸振向て行つて了つた。あれても幼い時は、てゝごとして遊んだものだが、年はいつの間にか二人を遠ざけた。

薔と野菊

徳島縣　富田玉代

私は野邊に咲く花て、春は菫、秋は野菊が一番好きてす、さほどうるはしい、花てはありませぬが、只優しく可愛らしいのてす私は、菫や野菊のやうになりたいのてあります。

病室の夜

福島縣　石井ばら子

此樣な時もしも妹が――あの懐しい――側に居て呉れたならと何となく悲しくなつて來て、あゝ此病！と忍び泣に泣いて居たが、ふと思ひ付いたのは先刻の優しい便り、「姉樣早く全快なつて頂戴、今度の日曜には屹度參りますから」。室外はまだ雨がやまぬらしい。

夕顔

大阪　和歌子

私は夕顔の花は嫌だ、何故だか自分てもわからぬ、姉さんが今日は三つ咲いたからつて呼んて下さると、お椽の椅子に腰をかけて暗くなるまで見て居る事もある、多分花さんが病氣の時咲いて居たからいやなのかもしれぬ、何しろ私は嫌ひだ。

田舍の道

秋田縣　佐々木貞子

私の毎日學校へ通ふ一里の道は、極惡くて、半分は鉄、半分は茫々と雑草の生えた針の樣な細い道てす、私いつも之等に妨げられて縫ひ〳〵行くと、家を出る時同時に出たお日樣はづいと高う登ります。

朝の海

大阪市　西村しげ子

朝の海の靜なこと丁度青氈を敷いた樣てす、其靜かな海を澤山の漁船が沖へ沖へと漕いて行きます。未だ今漸く船を下してゐる親子づれも御座います。水平線には雲が綺麗に彩られ太陽の頭が些し出て前に白帆が幾つともなく浮かむて居ます。

姫のいたつき

徳島縣　西野花菱

細い〳〵絹糸の樣な雨が降て、むし暑い朝だ事。星のお祭りからもう二週間も過ぎて居るのに、どうしてこう毎日暑いのだらう、もしや……もしや立田姫樣が御病氣て、夏姫樣はお歸りになれぬのかしら。

私のお庭

後志　伊勢いつ子

飛石づたいに行きますと、私のたんせいして、つくつたお庭があります淡紅色、白、紫、色々の朝顔が、此小さいお庭を、我物顔に咲き亂れて居ります。お池のそばには、初成りのおんこの果が、四つ五つおいしさうに、なつて居ります。

かひこ

下野　みつ葉

節つ子や、かくらんして頭の明くなつた蠶を、捨てるのも不憫だから柔い桑の葉を摘んで飼養て置きましたら、美事な繭を七分通り作りました

百姓

山城　入田文子

父はいつも百姓は結構ぢやと申します、今年一反の田て豆が二十圓西瓜て二百圓取りました、西瓜の次は蕪て、三十圓位は……其次は麥が四俵取れなけりやといつて毎日鋤鍬を寶にして野へてます、西瓜の肥代四十圓いりました、百姓は結構なものゝ心配てあると私は思ひました。

朝

名古屋市　長瀨鈴子

一番の雞が啼いた。

まだ薄暗い、寶生寺の鐘がボーンボーンと、寂しく鳴渡つて來る。鳥が庭の桐に來て哀しさうに、カウヮく\く\と啼く、あゝ、叔母さんはどうしたてあらう。

涼しきもの

四谷　織戸田樹子

よく取片づけて塵一つなき座敷に、火をつけぬ岐阜提灯の下げられたる。照日をよけし木かげの茶屋に、筧の水うけて心太冷したる。廣く清きガラスの器に、金魚四五尾入れたる。この三つのものはみるからいかにも涼しさうて、私は大好です。

好きな時

下谷　落葉

四季の中冬は寒くて嫌だし、春はのぼせて嫌だし、夏は暑くてなほいやたゞすきなのは秋ばかり、秋は涼しくて氣もちの好い上に、およめに行つた姉様が、二年つゞけて赤チヤンを產んだから、

菊作り

河内　竹内敬子

金盃銀盃をならべた様な菊畑の傍に筵を敷て日向ぼつこし乍ら爺様の自慢話が始まつた、ノヮ婆様これ程迄奇麗に花を咲すにはなみ大抵の事ぢやない。此時花が動いた、爺様吃驚して首を延して見ると、菊より背の低いおけしの花子が無心に菊をむしつてゐる。

佳作　信樂燒　　近江　竹村光枝子



新刊もの

周防　博子

御父様や御母様は、女なんかは、字は知らんでも可いと云はれますけれど私は什麽して、書物雜誌が見たくつて頭が痛んでも、病んでも、死んでも皆んな殘らず、新發行の書物雜誌が見たいのてあります。

秋の暮

但馬　堀名みね子

小窓によれば秋の暮雲低ふ飛びて、世はなべて薄墨の色、晴たる空、星四つ五つまたゝく、夕べの靜寂は彼方より野を越え山越え川越えて垣の萩の間にやゝとびそむ、風そよ吹らし軒草のさゆらぐ音かな。

結婚

大隅　笹川滿子

義理にせまられてあんな返書は送つたものゝ、まさかかう事を急がれやうとは思はなかつた。昨日着いたお母さまの手紙、私はどんなに驚いた

らう!!昨夜は一夜ばつちりともせず。考へた、が何と考へても私はいやだ!と云つて今更……あゝ何としてよいやら!

蛙

福井縣　吉田梅子

誰が忘れて歸つたてあらう、菅笠が一つ、夕闇の中にほの白く見える。
よく見れば蛙が一疋その上に兩手をついて、歌申上げてゐる。空はまばゆい程の星月夜なのに、まさか雨を呼ぶ歌でもあるまい。

盆踊り

大阪市　楠友枝

今年は豐年である、村の若い衆は揃いの浴衣に、白手拭の頬被り、櫓から口説く粋な聲は向ふの山へひびく、踊子は手を振り、足を振つて櫓の周圍を踊り廻る、稻田からは涼しい風が、サツト吹いて來る、恁うして盆の夜は更けて行くのである。

朝とく起きて

臨摩　瑞枝女

朝露深き淋の戸をそとあくれば、かけ渡したる蜘蛛の巣の、さながら白き素絹の光りあり。中に眠れる女夫蜘蛛は、新婚の夢暖かにして、あはき姿の月影は、西にほゝ笑みてゐましぬ。

私の過去

埼玉縣　黑田增子

母の懐に無邪氣て幻の如く生長したるが四年、懸も知らず世を安樂に過したのが六年、漸く惱みを覺えて世を厭ひさうして嘲つたのが十年て、斯樣にして廿年の月日を夢て送りました私の、今改めて玆に得ました物は、理想通りの新ホームてあります。

かみなりぼし

南千住　大須かの子

毎年、夏日照がつゞきますと、母樣は、此樣に雨が降らないては、水が無くなつて、仕舞から、かみなり干をして、雨を降らせやうと、おつしやつて、白瓜て、こしらえますと、必ず其日のうちに、夕立がありますそして、澤山降らなくても、お役め的にポツリとてもきつと、降ります

毎朝の勉め

府下　影法師

お祖父樣がお目ざめになると一所にはだしになつて裏の畑に行つて草を取つたり昨夜取つておいた白水をやつたりいたします、それがすむと椎の木の下の流て足を洗つてそれから朝飯をいたゞきますの、これが私の休暇中の毎朝の勉なのです。

人の妻

美作　河島光子

私は今度他家へ、嫁かなければならぬ。人の妻となるのである。是れは女子たるものゝ、義務である。けれどもさうなれば、好なカルタもとれまい、ラケツト持つて飛び出す事も出來ないてあらう。嬉れしい樣な、悲しい樣な!

古き寫眞

千葉縣　三森ゆき

本が蟲に食れない樣にと今日虫干をする。
手文庫の底から一册の寫眞帖が出ました、開けて見ると皆私の、紅葉の樣な手て母樣の乳房を握つて居るの、切下髮、ハイカラなひさし髮、島田、あゝどんなに變つて來たのかと頬笑まれた。

晴れた日

阿波　中村かつ子

涼しい風の吹く日、眞晝の光に映えた椨の木の緑したゝるやうな小枝の上て、小さな蟬が一つ、じい〳〵なく。其下の小川ては、淸水が玉のやうに流れる。向ふの雜木林の上を見ると、小さな白雲が一つ、綿のやうにふわりと止まつてゐます。

讀書

京都　柳川英

妾は常も、夜十一時頃迄、讀書に更けつて居ります、寢所は二階てありますからキゝゝと音がしますと早く寢よと大喝せられます、昨晩も讀書に更けつて居ると父が靜かに上つてこられまして未だ寢んのかと叱られました。

鋸山

千葉縣　芳枝

ドクエが疎に在て、㯃が茫と茂つてる所を右に見下し登つて行けば、乾いた石塊へ出る。ふり仰ぐ。と、金饗の如に凸凹した崖が甚く高い。所

々に松がある。皆美しい。傍には瀬がザヾと落ちてゐる。崖下には尺以上三四尺の石佛が一杯。大概首がない。鼻が捩とする鋸山五百羅漢であります。

父上の喜び

伊賀　山村龍子

此夏裏の畑へ、一本の日車が生へまして、大きな美事な花が咲きましたので、父上が大さう悦ばれまして、今度生れる姉様の兒が、屹度男の子だと、毎日樂しんで居られます。

湯桶の月

茨城縣　せき子

夕顔の棚に着物をかけて、御湯に入らうとすると風呂にはまんまるの御月様が浮いて居る。月を分けてざんぶと入つた。夜風が吹くと灯が消えさうになる、青葉の匂ひがして、螢が一ッ迷つて來た、母家の方では絶えず妹の笑聲が聞える。

車

東京　朝倉笑兒

醫者の横乘りするのが人力車、あはれ相なのが八人乘りのガタ馬車、重苦しひのが荷車、商店小僧の自轉車、怪物の樣な汽車、贅澤なのが貴族富豪の黒塗二頭馬車、近頃流行し始めたのが自働車、飛び入り勝手に詰込むのが電車。

夏の朝

三河　富美子

東の空も次第に白みかゝつて甲山の紅く染まつた朝でした。何千町歩とある廣い〳〵青疊の樣な田圃の稻は、昨夜あらぬ濡衣を着せられて、欲に露を含みましたが、斯う云ふ事に馴れた太陽の、判決に潔くきら〳〵と光り出しました。

まア

栃木縣　小林芳子

一昨日からかゝつて漸つと仕上げた紫陽花の一枝、まア美事なと花瓶に挿してホット一息、出來上つてよと梅子さんまで一寸知らして歸つて見れば、無慘！　葉も花もメチヤ〳〵になつて莖ばかり、そして其莖には、アイウエオと眞黑く書いた短册がひら〳〵と風に搖られてゐた。まア：

朝の道

小草子

町をはづれて三丁ばかり湯きけぶりの立のぼる家、まがきの雜草には、朝つゆしつとりと、あゝ朝顔はあつてほしいと思つた。

月の夜

紀伊　今藤ふさ

既う學校へも行きませんと決心したが、女は弱い者です。…此弱い心を誰に聞て頂きましやう私の胸は裂るやうです。机に靠れ聲も立てず泣きました。

庭には月が靜かに照つて梧の白い葉が折々飜へつてゐる。…只だ切々と虫の聲。

草取り

熊本縣　千代子

朝露にシツトリした御庭を素足で踏むと、ジメ〳〵と音がする、日の出ぬ内にと皆と草取りを始めました、弟達はお池に近い所に陣どつて、草は取らないで、わるさ許りして居ます姉樣は御自分の花壇の方から、私は朝顔の垣根の方から取り始めました、お父樣だけは御庭の眞中から。

田舍家

福岡縣　こぼれ萩

妾は淸水山の麓に細い畑りを立てながらも、樂しい月日を送つて居ますかやぶきのあばら家や孟宗竹が取りまいて、青葉のトンネルがあちこちに通つて居ます。十間餘り離れた峰の上から落ちる瀧の音が、とう〳〵と木の間を縫ふて聞えます。瀧壺にはおい留が泳いで居ます。

妹

大阪府　鏡枝

私が暑中休暇て歸つた時、妹は我につかまつて『姉さん歸つたの、もうあちらへ行かんと家にばかり居て頂戴よ』と言つて、今日まで側を離れた事はありません、今度また學校へかへる時には妹は必ず悲しさうに泣くてせう、妾さう思ふと可愛さうで….。





英詩と愛戀

野口米二郎

▲愛戀は人生の一大事件

英文學を研究すればする程『愛戀』の文字が多いのに驚かざるを得無い、愛戀を除いては英文學なしとさえ言へる、年々出版される小說並に詩又は劇は皆愛戀を經緯として居る、過去の文豪の詩を見てもテニスンにせよロセッチにせよブラウニング、バイロン其他如何なる詩人の作を讀んでも多少接吻とか抱合とか或る想像とか或は現に存在せる戀人に對して眷戀するとかの文字が入つて居らぬものは無のである。若し英國の詩人て其の除外の例を求むるとならばヲーヅヲースだ（コルリッヂは愛戀を歌は無かつたとして有名てはあるけれども）三篇の愛戀歌あるのみてある。英國のみてなく佛國伊國獨逸西班牙共に同じく愛戀の文字の上に文才を發揮して居る。小說に於ても然りて、近代に於て無愛戀の小說を書いて有名てあつたのは、數年前南洋サモアの孤島て死んだスチーブンソン位て愛戀なき小說は成功せぬ出版と認められて居る、所て西洋諸國ては皆な愛戀そのものを一大事件と考へて居ると云ふ事が分るのてある。唯文學の上に於て彼等が興味を有して居るばかりて無く彼等に對しては愛戀は實際問題てあるのてある、西洋諸國は

各自妻を擇み良夫を定めるのて、日本の如く仲人に依頼するのてはない、それに結婚期の男女には競爭もあるし又煩悶もある、如何にクレーバーに如何にワイズに愛戀するかの問題は彼等の日夜苦心し且研究せざるを得ない所の問題てあるのてある。彼等はこれを詩に學び小說によつて勇氣付けられ又敎へられる所があるのて、自然その種の文學を愛讀する樣になるのてある。

▲北方の愛戀と南方の愛戀

愛戀文學と言つても一樣てはない、散文と詩とが、その形式が違つて居る如く散文にあらはれた愛戀と、詩に歌はれた愛戀とは異なつて居る、詩の文學には散文の文學に許されないところの自由がある、隨つて詩は詩とし散文は散文としてその特色を發揮し得るのて全體から言つて一樣てないのが文學の爲めよろこぶ可きてある。愛戀と言ふ大眼目に於ては同一でも國に依つて其發表の仕方が異て居て夫れ〱の特色をその文學に見る事が出來る、今例を引いてみる、北方の愛戀はその空氣の如く冷かて、嚴肅なもので南方のものとは異つてゐる、英國の愛戀文學は他日妻となる可き女を土臺とした物が多いのて、結婚前の苦心、煩悶、競爭などの聲てある、そうして其他の愛戀は絕對的に許されぬと言つてよい位てある。こゝに善惡二人の女があつて、一人の男を競ふとして、惡い方の女が勝利を得たとなつたらば、公衆は其文學に對して惡感を抱かざるを得ない、其は勿論宗敎心からも來て居るてあらう、その習慣(?)は十八世紀以來のもので今日でも左樣てある。然るにこれを佛國に見ると大に異つて居る、佛國の文學には所謂放蕩分子が多い、特に小說には結婚後の云はゞ不良なる愛戀の變動を書いたものが多い、斯る文字は英國ては許されぬけれ共佛國ては不思議にも思はれぬ、然しそれは佛國は英國より道德上劣國てあるかと言ふ理由にはならぬので唯社會の組織が異つて居るからだといふ計りてある。佛國の女は英米の如く自由を許されぬので、若し自由を得たとし

たらば其は結婚後の事て、自由を得てから女の人生に於ける誤謬とか自由とかを小説家が取つて以て其材料にするのてあるから、佛國伊國又は西班牙等の文學にはデボウチエリーの分子が多い理由てある、其他の理由もあるが南方の人種則ちラテン人種は北方の文明より古い文明を有して居る、古い世界則ち希臘羅馬の感情を今日ても存して居つて、其の時代の人が感じ思つて居つた情熱を今日ても持つて居る、故に英國人などが思ひもよらず又行ふ能はざる所のものを平生として實行するのてある。而して北方を見ると、北方は又南方と同じく古代の思想情念を存して居て、其事情と形式こそ多少變化しては居るけれ共、其根本に於てはあまりに變つて居らないと言つてよい、例を擧げると、スカンデナビアン文學を見よ、古い時代海上を暴れ廻つた海賊の王が愛戀に對して感じ實行した所のものをテニスンやメレデスやブラウニングは歌つて居るてはないか、彼等は一種の愛戀則ち結婚を以て結末を告げる、愛戀と妻と良人との間の愛戀を歌つて居る。其他の愛戀は不良なりとして歌はぬ、この點は英國の詩人ばかりて無く丁抹、那威、獨逸等北方の詩人を擧げて皆一樣てある、愛戀を以て人生の一大事件と信じて居る南方と北方との愛戀問題に關する相違は人種の血の内肉の内にあるので如何に宗教の力でも文明の力でもてれを變化するとが出來ぬ。而してこゝては日本の愛戀に關しては云ふ必要がないから何とも云はずに置く。

▲最も美に最も高く最も大いなる力

小説は人生の聲てあるけれ共、小説より詩の方が文學としてはより高い形式と認められて居る。然して以上の相違は詩の上に於ける方が小説に於けるより更に著しく顯はれて居る。ラテン人種の詩人は古昔オヽガスタン時代の詩人の如とく頗ぶる自由な愛戀觀を有して居るし、北方の詩人は二三の除外例はあるけれ共、概して嚴肅な制限を守つて居る。併し何れが善て何れが惡かと言ふ問題は他日に讓つて此處ては云はぬ。愛戀則ち「ラブ」と云ふ文學の意義に就ても南北其意義に

於て廣狹がある、ラテン文學者はラブを以て禽獸虫魚より高きは『神の戀』まてを其中に入れて居る樣ではあるけれ共、英語の文學て愛戀は男女の情熱と男女間の友情とを意味するのてある、よく英文學を讀むと人は『眞實なるラブ』と云ふ文字に遭遇する事がある。この眞實なる愛戀と言ふ文字は多くの場合に於ては肉慾の情熱を意味して居ない、男女特に夫婦間のフレンドシップを意味して居る。然れ共英國の詩人の歌ふ所の愛戀はその友情ではなくて、情熱則ちパシヨンである。情熱滿足の結果として完全なる友情は湧出して來るのである、けれ共、詩人はこれを歌

一等　まひこ　和歌山縣　稗田みつ子



はずしてパションのみを歌ふのである。英國のパションとはサファリングの情熱を云ふのである。サファリングとは愛戀的時期に於て其の目的を達せしめんとして煩悶、苦心、爭鬪するを云ふのである、心理學上から言つても愛戀の男女は不思議な情熱に入つて居るのを發見するのである。愛戀せぬ以前に於ては其人を見ても何んにも思はず感ぜなかつたのに、愛戀を感じ初めてからは其人は宇宙間最も美に最も高く其人の聲は天地上最大なる音樂と聞えて來るので、此時に於ては理解力は何等の力もないのである、而て一朝愛戀を感ぜぬとなると、過去のゆめの如く感じ又思つた事も跡形なく消えて了ふ、實に不思議な精神情態の云はねばならぬ。この不思議なる有樣を詩人は捕へて以て詩にいれるのである。人生中これ程美て驚ろく可き經驗はないので、何故に美て驚ろく可き經驗であるかと言ふのに、この短き時期の間に於ては、他の時期に於てはとても感じ行ふ事の出きぬ所のものを感じ行ふことが出來るからである。一言て云ふと愛戀に入つた男女は犧牲と興味を感じて無我慾になるのである、この無我慾と云ふのが愛戀の神聖なる所であらふ。若し愛戀に落ちた男がありとせばその男は女に對して如何なるものも犧牲に供するに躊躇せぬであらう、實に美なるものといはねばならぬ、テニスンの名句があり。

Love took up the harp of Life, smote up its
chords with might,
Smote the chord of Self that trembling, passed
in music out of sight.

實際我々の一生は愛戀に依つて我慾と云ふのを亡ぼすことが出來るのである、無我慾と云ふことは引いて哀憐、慈悲となり又責任を重んずるの感念と成つて來るのである。愛戀から起つた精神上の感情は最も高尙なるものである。美や藝術に對する感念も美は美だが中に愛戀から得たセンチメントには及ばぬ。然し翻つて考へて見ると、美と善との間には密接に關係して居る所のものがある。キーツは眞理は美て、美は眞理だと言つたが、眞理は善として常に顯はれるのである。美を感ずる念は不知〳〵の中に人を善に導く、單に戀

人の肉體上のみの美を見て嘉ふのも結局に到つては大なる教育となるのてある。其よりしてより高き美を感じハートとマインドの美を知るにいたる事が出來る故に異質に愛戀をする事が出來るものは幸福てあると云ふ事が出來るのてある所謂精神上の修養も其より得るとが出來る。又愛戀は男子に有つて高尙なる勇氣を與へる。女に對する犧牲——物質上のみならず精神上の犧牲は神聖なるものと云はねばならぬ、故に詩人がこれを題目として歌はむとするのも無理はない、高尙て美なる愛戀は人をして理想の存在を認めしめて、自分自身も美なるアート其物を成し得ることが出來る。藝術上から云つても美なるアートは何物てあるかと云ふに、犧牲其物をインスパイアするものに外ならないのてある。古今東西を不問、大なる藝術



二等　秋草　　駿河　きよし

は犧牲の力によりて現在より更に大きく高き存在の地位に至るの方法を敎へるものである。これを敎へるもの實際問題では愛戀の外はないので藝術上では愛戀を問題としたものに外ならぬのである。惡い方面を觀察したらば愛戀そのものにも幾多のウイクネスもあらうけれ共槪して愛戀に入つた男女は、美であると云はねばならぬ、少くも英國ではそう信じられて居るのである、則ち愛戀は高尙なる想像を生み引いて美なる觀念を生ぜしめる。勿論愛戀は動物的發動が其主となつて居らうけれ共少しも之によつて愛戀の價値を減ずるのではない、眞正なる愛戀は動物的發動の地位を服せしむる程有力なものであるのを知らねばならぬのである。

▲テニスンとユーゴーの詩

愛戀を歌つた詩人は數多いけれ共、最も美なる一人はテニスンである。テニスンの作にモードと云ふ劇詩がある、其中に左の句がある。

"She is coming, my own, my sweet
Were it ever so airy a tread,
My heart would hear her and beat
Had I lain for a century dead,
My dust would hear her and beat,
Were it Earth in an Earthy bed,—
Would start into life beneath her feet,
And blossom is purple and red!"

此句は必ずしも詩人慣用の誇大の言辭ではないので眞率の聲は言語の裡に發見せられる。又愛戀其物は常に誇大なものである、女の足音は死人を復活せしむるの力なるや否やを問ふの必要がないのである。又そういふ事を想像することは出來るのである、此詩の眞實の意義は女の聲や容貌や足音や其女のタッチーは男子をして愛戀は生や死と等しく大なる意味あるものと思はしむるのである。男子に對する戀人は少なくとも英語國に於ては女神とまで思はれ其力の大なるは無限であると感ぜられて居る。此詩則ちモードからは例に引

くの句章其數甚だ多いのである、テニスンはかりでなく特にユーゴー等もそうであるが愛戀のイルユジョンは人をして其の結果如何を思ふの餘地あらしめざると云ふ美を說明して居る。愛戀に入つた男女は精神上の耻辱とか名譽の失墜とかを感ずる餘地がない程感情の動物となるのである。

ユーゴーの美なる愛戀詩の一篇がある、其は題して The Song of Sophocles Before the Battle of Salamis と云ふのである、題目のソフヲクレスは十六歲の少年で兵士として戰場に行ねばならぬ時の詩である、此詩の最後の句はこうである。

"I pray that thou, whose minister in the soul,—
Thou whom the lightening follows in the heaven—
I pray thou wilt first choose for me
Some fair girl with gentle eyes."

ソフヲクレスは戰爭に行のは平氣であるけれ共、戰場にゆく前に誰か美はしい少女を愛戀して死にたいと云ふのである、よく少年の情を顯はして居る。

▲アトランタの競爭

希臘の傳說にアトランタの競爭と云ふ美なる物語がある、アトランタと云ふのは希臘の王樣の娘で國中一等の美人と認められて居た、この美人は非常に走ることの早い女であつた、國中至るところから妻にと求めるものがあつた所が王樣は法律を發して競爭に勝つた者の妻たる可しと云ふことになつた。兎てもアトランタに勝つものは無かつた。一人の青年ヒポメネスと云ふもの愛の神から三箇の林檎を得て、競爭の時これを持つて走るとした、愛の神はヒポメネスがその林檎を落した時にはアトランタに拾はせると云ふ事にして競爭場に出た、果してヒポメネスは落した、アトランタは拾つて彼の手に渡した、斯くして遂にその競爭に勝つて彼はアトランタを妻とする事が出來たと言ふ話しである。此の話の裡には眞理がある、其は人生は一種の競爭に外ならぬ、愛戀は競爭そのもので兎ても其結果や後などを振りかへつて見て居る餘地はないのであ

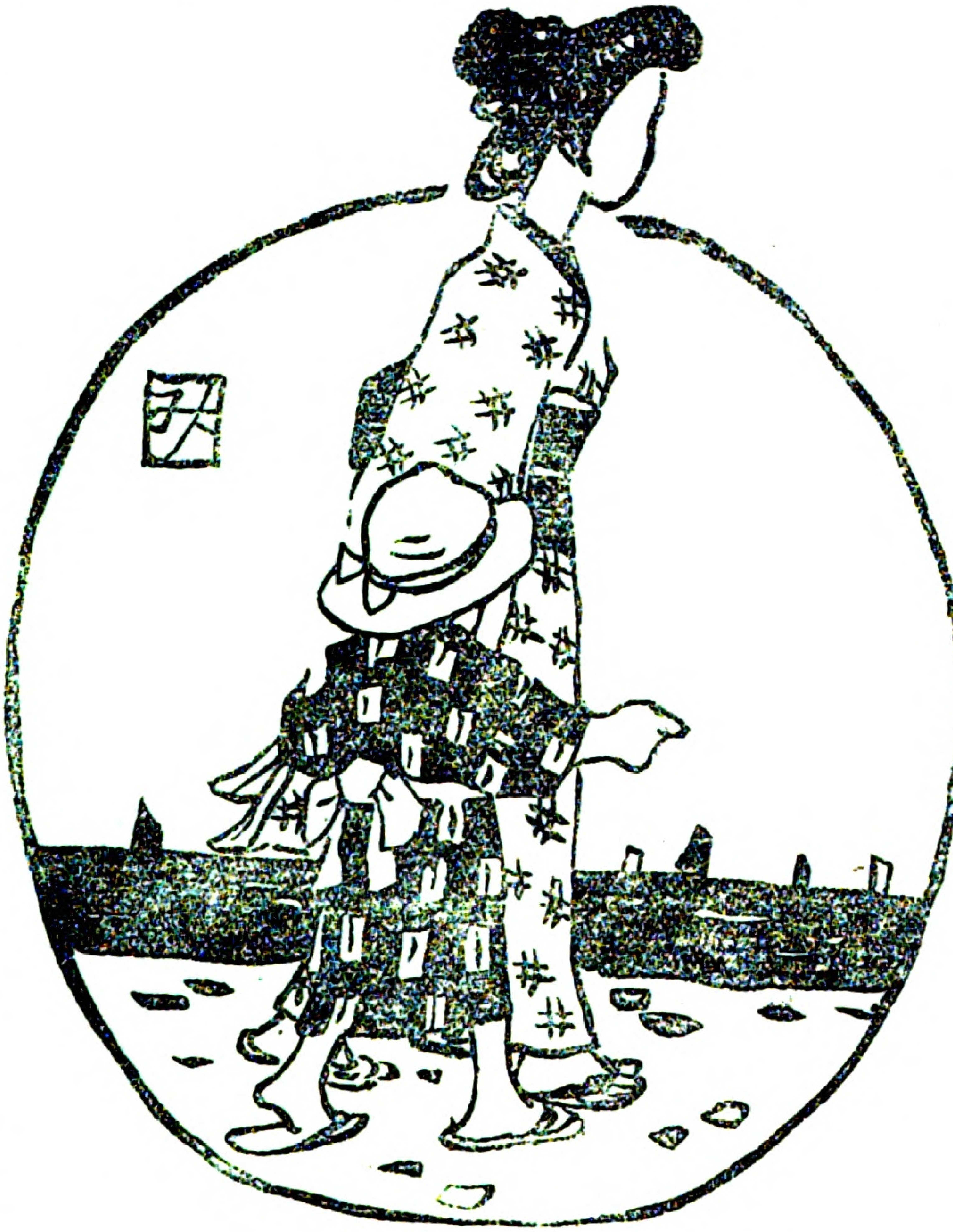
る。女の爲なら如何なるものをも犧牲とするを意とし ないと云ふ靑春の時期がある、其時期に於ては、生死元より論ずる所でない、後から考へて見ると、慄然たる事が多いのを感ずるであろう。斯る傳說、神話は今日に於ても生きた神として歐洲では受け取られて居る、之を題として詩に作つた詩人は少くないのである。

▲・・・・・ロセッチ兄妹の詩・・・・・

ロセッチに有名な短篇がある、題して Sudden Light と云ふ。其詩の意味はこうである、『自分は何時又如何にしてと言ふ事は分明ぢやないけれ共、此處を知つて居る樣に思ふのである。家の前に生えて居る草や、海岸に打ち寄する浪の音、又港に投げられた光線等、舊知の樣な感がせられる。それは長い〳〵以前に於て自分の物であつたかと思はれる、或はこの世では無かつたかも知れぬ。然し一分間も前汝が鳥の飛ぶのを見て居た時、そうだ、汝が首を曲げた樣子は今も記臆して居るのである。それは恐らくは數千年も以前であつたかも知らぬ、思ふと何かの幕が自分の眼前に落ちて自分の記臆が奪はれて居たのか、突然今其記臆が顯はれた樣に思ふのである。若これが實際で、過去の時代に於て我々が愛戀して居たならば來る可き將來に於ても同じく愛戀の出來ない理由は無いぢやないか、幸福を將來に於て繰返し、將來に於て晝夜共に幸福なるを得いと云ふ事はあるまい、』と歌つたのである、愛戀を過去に於けるイルユヂョンと結び付けるのは英國の詩人の好んでする所である、考へて見ると人を愛戀すると云ふのは、其人の中に過去の想像を想起すといふ情が籠つて居るのは實際である。彼等詩人の如く美的な觀念からでなくても現にそうゆうことがあるのである。ある田舍へ行つてもたまには前に來た所ぢやあないかと疑ふ事がある如く、自分の戀人は以前、見たり又、愛した女ではありはせんかと感ずることがあるのである。愛戀を心理學上から硏究すると仲々美妙なとを發見するであろふと思ふ。ロセチのみでなくその觀念を歌つた英米の詩人は多いのである。

愛戀に依つて過去を思ひ引いて未來のライフを想像する詩も少なくない、未來のライフを想像するに當つては、實驗の力がない故全然想像に托するの外はない所謂るドリームスに依るの外はないのである、クイスチナ、ロセチの美はしい詩がある、題して A Pause と云ふ。其意味を散文的に飜譯するとこふてある。

『女が死んだ、所て荒んだ女が横はつて居る、部屋には死人に捧げる花が飾られて居る、女の幽靈はこれを見てゐる、然し幽靈は見て嬉こびもせねば又悲しみもせぬ、唯考へて居る所のことは死んだ時其現場に居なかつた戀人のことばかりである、幽靈は戀人は今でも自分を戀して居るだろうか、自分の死んだのを聞いて實際悲しんで居るだろうかと云ふとを心配して居るのみである。死人の横はつて居る部屋の外では鳥が歌つて居る、窓の向ふに見える光つてる野



三等　夕風

三河國　近藤道江

ては農夫が仕事をして居る、彼等は仕事をなしつゝ話をして居る。然し女の幽靈は彼等には何等の注意をも拂はぬ、幽靈は戀人のことばかり思つて部屋に止つて居る、幽靈は戀人の來るのをまつて居る、すると戀人は來た、其足音を聞いた戸をあける音を耳にした、幽靈は戀人を見るや否や、愉快を感じたのである、すると幽靈はたちまち天國の花の香を嗅ぎ、自分の頭の周圍には天女に於けるが如く後光の輝くのを見て眞實なる天國、愛戀の天國は自分の有てあるのを感じた。」と云ふのて最後の句はこふてある。

"At length there came the step upon the stair,
Upon the lock the old familiar hand
Then first my spirit seemed to scent the air
Of Paradise;—then first the tardy sand
Of time ran golden;—and I felt my hair
Put on a glory and my soul expand."

▲戀の思ひ出

愛戀と記臆に關する詩に於ては英詩の數甚だ多い、バトモーアと云ふ詩人は二冊の詩集 The Angel in the House と The Unknown Eros て自分の愛戀を歌つた、前書は自分の實驗を經緯としたもので後書は愛戀を主とした詩の集である、愛戀の詩集としては天下に評判のものだ。ブラウニングにも愛戀の詩は少くない、或る詩の最後の句にこふ云ふのがある。

"She sleeps in peace beneath the chancel-stone,
But ah! so clearly is the vision seen
The dead seem raised, or Death has never been,
Were I not have alone."

然し自分の戀人の死んだのは永い〳〵以前のことだ然し記臆はあきらかてあるのてあるから恰も時間は動かずに居たか或ひは死者が墓所から歸つて來たかの思がする、唯それは記臆のいたす所てあるのてあろふ、實際に於ては孤獨てあつたのてあると云ふ意味てある愛戀と記臆とを歌つた詩の一部てある。愛戀に幸福なるもの許りはない、不幸なる愛戀に落るとが少くない

然る時は其の失望、落膽、不幸の記憶は永久に新しきと思ふてあろふ。爲めに人生は暗黒な府と感じて一生涙と共に居るような有樣に成つた人も又少くない、又これを題として歌つた英詩の數も非常に多いのてある成功せる愛戀を得ると世界は自分と共に笑ひ、樂み、從つて愛戀から宗教的觀念さへ作るに至るとがあるけれ共、一たん失望してその愛戀が不幸に終つて失心するとてもあると世界は自然に面白くなくなると共に宗教的觀念の力を失なふに至るのてある、人間の情熱たちまち冷却して自然と自分を樂ましむるの力なく、厭世的傾向に近づくのを見のてある、靑年の時期は英語國ては少くも愛戀の時期と認められて居る、愛戀の經驗なきより不幸なるはなしとしてある。若くて死んだ詩人にキーツと云ふのがある、不幸なる愛戀をした詩人だ、彼は死ぬまて愛戀のゆめをみて死んだのてある死んだ數日前に作つたソネツトて後世まて逸品と許されてゐるものがある。その最後の句にこふある。

"To feel forever its soft fall and swell,
Awake forever in a sweet unrest,
Still, still to hear her tender-taken breath
And so live ever—or else swoon to death."

テニスンの愛戀歌の多くに佛蘭西の影響があるけれ共、このキーツの愛戀歌は希臘式てある、彼程希臘の美と、精神を一身に集めたものは少いのてある、彼はこのソネツトて星の如き永久不死の精神と光榮とを與へられて自分の戀人と永遠に一緒にゐたいと願ふたのてある。

客前錄

大町桂月

●この夏、隅田川にて、水泳競技ありて、選者都合二十二人、中四人は女子なりしが、第十八番まてはすべて、男子に占められて、女子は四人ながら、みな後になれり。男子は男子の特長あり、女子は女子の特長

あり。深く海底に入りて、鮑を取ることは、女子、男子にまさる。陸上にても、水上にても、競走競泳することは、女子、到底男子に如かず。これ生理上自然の約束也。

◉馬にても、駄馬には牝馬が適し、乘用、馬車用には、牡馬が適す。人とても、動物也。天、動物に兩性を賦せるは、それ〴〵特別の意味ある也。よろしく女子の長所を以て、男子の短所に當るべし。女子の短所を以て、男子の長所と爭ふは、愚なる哉。

◉女子にして文藝に秀でたるもの、古今頗る多し。今玆に試に淸少納言の枕草子と兼好法師の徒然草とを比べむに、二者ともに、同じく隨筆なるが、隨筆として、時を異にして、同じく傑出す。文學上の技巧は淸女或は兼好の上に在り。軟文學としては、枕草子がまされり。さらば、兼好は、文士として淸女の下にあるかと云ふに、否、必ずしも然らず、方面が異なる也。

◉徒然草には、哲理あり、達觀あり、情道あり、洒脫飄逸の趣もあり。枕草子には、たゞ才女の感情を見る。到底女子は、主觀的のもの也。客觀の餘裕なき也。男子は、よく客觀して、茫漠平淡なる處に、其長所を見る。もし男子にして、あまりに主觀的にして、あまりに狹隘にして、感情に偏し、毫も客觀の餘裕なきものは、如何に文藝といへども、これ男性の短所を以て女性の長所に當らむとする也。文士がそんな男ばかりなら、女子萬歲也。

◉女子にして軟文學に長ぜるものは多し。不思議にも、哲理を研究して、「人生可解」とか云ふ書をあらはしたる女子ありしが、さる頃、自殺せしこと、新聞に見えたり。死を以て人生を解釋するぐらゐな事ならば面壁九年の必要もなく、名僧善智識が難行苦行する必要もなき也。憐れむべし、彼女は、たゞ机上の人生を解したりし也。

◉男性と女性とを問はず、實驗より出でたる感情を正直に告白すれば、文字生動して、文學として人を動かすもの也。それも、机上の感情にては不可也。實驗上の艱苦悲痛、文字に寫せられて、絕好の詩となる。

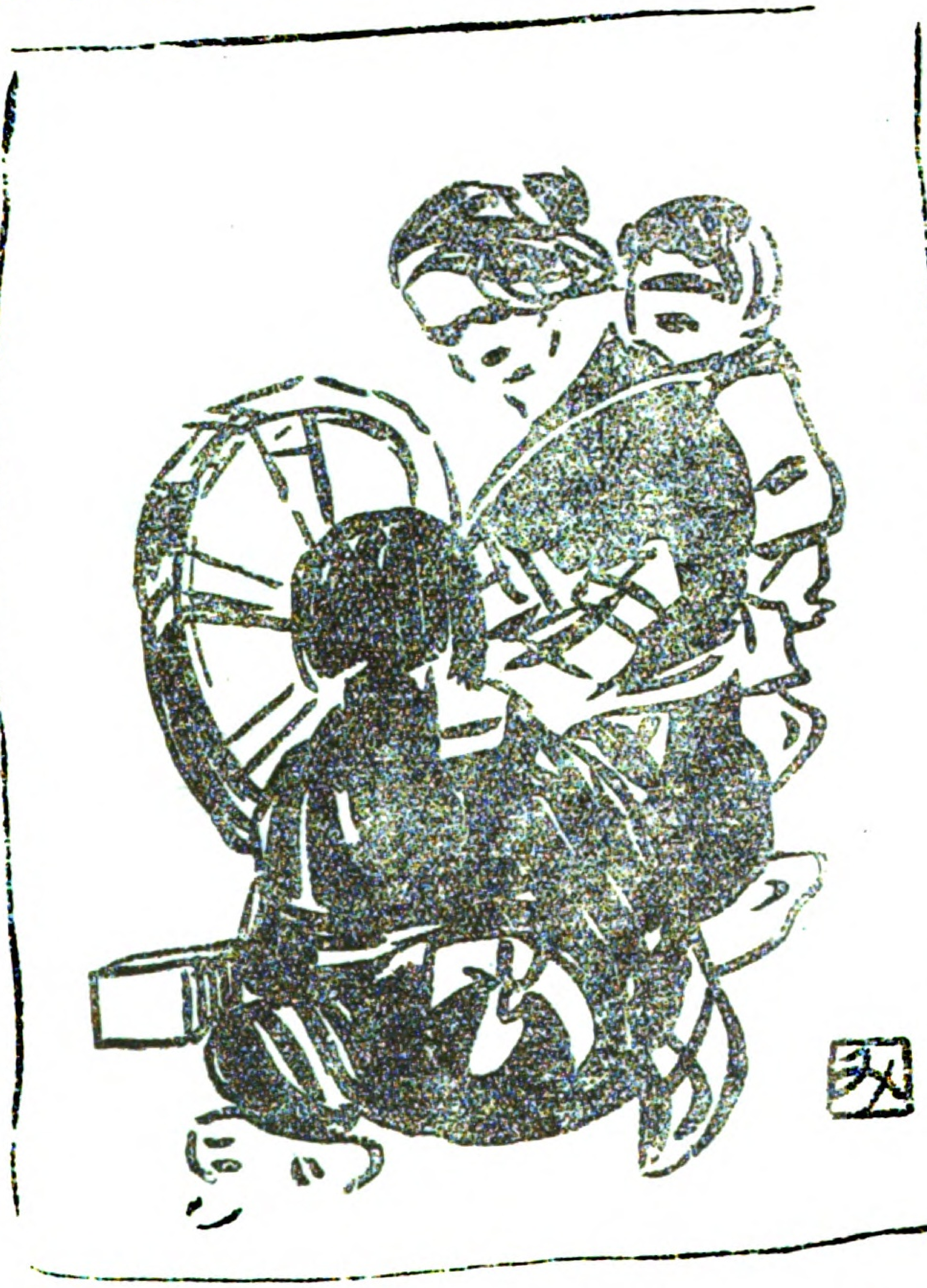
安坐閑賴、たゞ虛榮心と動物性との滿足を求めむとするものは、到底、眞の詩人たるの資格なきもの也。

四等　貧の人

◉一般の女子、もしくは、男子にても社會に活動する人、もし安心の地を求めむとせば、眞宗、淨土宗、耶蘇敎のやうな他力宗につくべし。自力を以て大悟せむとせば、恐らくは野狐禪たるを免れざるべし。

◉我儘とか、放縱とか、不羈とか云ふことは、詩の上には一種の趣味あるもの也。もし轗軻不遇を覺悟して、物質外に超然たるつもりならば、文士としても面白きもの也。されど、それが世の中に通るほどに、世の中は寛大なるものに非ず。文藝を嗜むもの、請ふ一考せよ。女子は、なほ更也。

和歌山　稗田みつ子



◉規則正しき科學の事にても、時に例外あり。まして、人事は、なほ更也。吾人、平生一般の規則によりて、言論を立つ。一般の人はかくするが、都合よかるべしと云ふだけの事也。例外となりて、埒外に飛び出すは、其人の自覺に任すの外なき也。

作中の意味

（選評に就いて）

小栗風葉

▲私は今まで二三の雜誌に集つた短篇も見たことはありますが、「女子文壇」のは殊に結果が面白さうてす何にしても若い人が書くのてすから、正直で、眞率て當て氣味がない、隨分若い人の作の中には、花袋君の作を眞似るとか、白鳥君の風を摸するとか、或る作家の風にあてはまつたものが多いのてすが、「女子文壇」にはそれが少い、書かうと思つて書く、だから存外表れて居る處があるのてす。

▲それから集つた作を見て居ると、ちよい〳〵吾人〳〵の知らぬ事が出て來ます、人間を描くにしても吾人の氣着かない一寸した動作に巧いのがあります、其處て女が駈出したとか、男が斯う云つたとか、あゝしたとか兎くそれは僅かな事てすが成程と思はしめる處がありります、素より題目も小さい、範圍も狹いけれど、書く者が見た通り、聞た通りを書くのてせう、自然と其處に眞の聲が響いて來るやうてす。

▲それと云ふも皆自分のことを書いてゐる、幼稚ても、單純でも精一ぱい自分の感じた通り、見た通り、考へた通りを眞直にわきめもふらず書いてゐる、中には讀んでゐて氣の毒に思はれるやうなのもある、又中には何を捉えて書いてゐるのか分らないものがある、中心の無い、意味のない、只ある事件を寫生したと云ふに止まるやうなものがある、或る一派の人ならそれても好いと云ふてせうが、私は矢張何ものか意味のある作が欲しい、其方が眞實の作物らしい氣がする。

▲私の方へ見える女の方でも小說を書いたから見てくれと云はれて、見ることもありますが、何うも作家にならうと云ふ氣があつて書くのと、單に書いてみやうと思つて書くのと、其處に相違があるやうてす、小說志願者の書くものは何うも或る作家の型をねらつたりするから、却つて作り物になりすぎて、巧みてあつて

も、成程女の觀察點は違つたところもあると首肯かせるやうな作が少い、其處へ來ると「女子文壇」に集つて來るものには眞に女の書いたものらしいのが多い、取るに足らぬやうな作の中にも其がある。

▲多くの作が單純であり、一本調子であることは、前言ふ通りですが、此或る事件なら事件を捉えて、小說に作り上げると云ふ處に、一つの呼吸があると思ふ其事件を書くのに自分の考へ、自分の感じばかりでおし通してゆかうと云ふのは、必ず成功する途ではないので、例へば此處に女教師が周圍の迫害に遭ふ其心中の苦悶を書く塲合があるとする、事件はそれだけでもそれを右の端から見て書くことも出來る、左の端から見て書くことも出來る、併し其中心を捉えて、そこに何等かの人生の意味を見出さなければ其作の價値がない。それは邪道だ、有の儘を書くのが眞だと云ふ人もあるでせうが、私は然うは思はぬ、何も意味を先に考へて置いて事件を附會る必要もないが、事件を書くのに何の意味もなく、寫生式にすきうつしにするのは小說作家の態度ではあるまい。

▲だから或る事件を書かうと思ふ時には、直ちに自分の感じ、自分の考へばかりで、一本筋に書いて了はずに、其處は一歩退いて、靜に、冷かに其事件の內容を能くコンデンスして、而してふつくりと豐かに書き表はすのが眞實だらうと思ひます。（文責在記者）

隨筆文學

（女子に適す）

島村抱月

暴風雨の翌日、小枝や木の葉が道に飛んでゐる牛込の奧に島村抱月氏をおたづれした、さしあたり女子と文藝と云ふやうなことに就ては、考へたこともないからと言はれ、二三の當座のお話をされた、左に摘記するのがそれであります（記者）

▲女子開放問題と云ふやうなことを興味の中心として書いたものは未だ日本にも現れないやうですナ、イプセンが歐羅巴の婦人讀書界に持てはやされるのは、

脚本でも小説でも其問題が多く中心になつてるからてせう、最も英國の女流作家エリオツトもそれですが、此方は何だか凄いやうです、顔を見ても男のやうてす。

▲近頃の閨秀作家ですか、英國にもあることは随分あるやうですが、それほど有名な女は少いやうです、先あウヲードでせう、最もウヲードも今の新しい自然主義の運動には與りませんから、舊い方に屬する作家てせう。

▲何にしても女はセンチメンタルが其本質てすから詩などの方が可か知れません、明治の作家では一葉てせうが、一葉の作ても抒情風の處が良のて、矢張センチメンタルの文學です。女子の作は何うしても然うなるてせう。

▲大作と言はれる紫式部の「源氏物語」でも、矢張其傾向があります、大きい作と云ふもの丶畢竟は斷片の話を集めたやうなものです。

▲只驚くことは彼の時代に、一婦人の身で彼れ丈のもの丶作つたと云ふことは、世界に類がありません、而かも其れが自然主義の精神に適つてますから驚くに足ります。

▲清少納言の書いたやうな随筆ですが、あ丶云ふ風のものを今日の女流作家が書いたら好からうと思ひます、随筆などは最も女子の文學に適してゐます、一向見ませんが然う云ふものを皷吹するのも可からうと思ひます。

▲そりや脚本でも小説でも女子に傑作が出來ないと斷言する事は出來ませんが、何うしても男子のやうには行かないかと思ひます、何事もやつて見なけりや分りませんから行つて見ることです。(文責在記者)

女の俳句

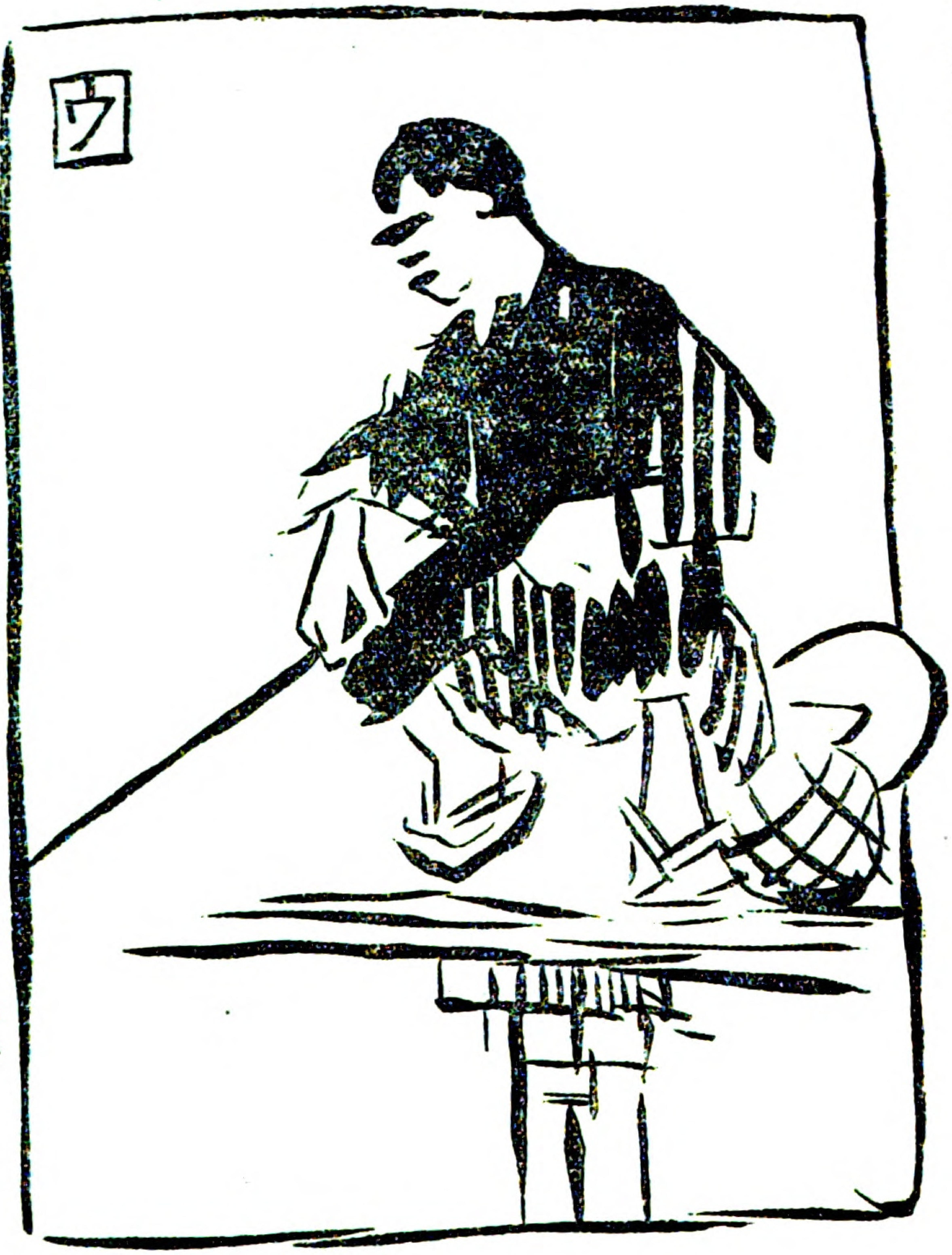
内藤鳴雪

▲女子と俳句とに就いて何か話をせよとのことであるが、是は嘗て度々他で話したこともあり、今改めて新

しいことを云ふのは、聊か困るのであつて、又同じことを繰返すのも餘り面目てありませぬから、寧そ古い女子の句ても解釋することにしませう。

これも他て或は解釋して居て重複するかも知れませぬが、そこはお斷りして置きます。

この解釋をするに先だつて、女子の性質とても言はうか、それと男子と異つた點を述べて見ると、本來女子と言ふものには、天然の職分、乃ち男子には無い處の特別の職分を持つてゐる。それは何てあるかと言ふに男子が外へ出て働くと共に、女子は内に居て家事を辨ずる、而して子供を孕んて産んて、それから或は年頃まては主として女子の手て、はぐゝみ育てゝ行く此事は單り人間のみてなく、高等なる動物も皆其通りて、頗る面倒なる役まはりてあるけれども、太古



五等　釣

水戸市　北川うめ子

より造物主が女子の方へ此れをいひつけて居る。此役目を太古より女子たるものは引受て居るから、性質が其等に適つたものとして出來てゐる。骨格筋肉の發達から、皮膚の柔軟なる所から、意識の働きや、感情とか、思慮とかも右の職分を盡くすに適合して出來て居る所から、男子に比べると、柔かであるし、細かであるし、執着が深く、或る點には特に氣の着くと云ふやうなこともある。それであるから女子たるものは何處までも、天然に出來て居る其役目を盡し、餘力あらば男子と同じやうな事業を手傳ふこともよからうし、其他自己の娯樂とすることなども、女子相應のものを選んで爲し易いのを爲せば宜のである。それが文明の發達とか云ふことの結果は、女子にも學問をする機會が出來て、發達しなかつた智識も急に發達し、知らなかつたことも覺えると云ふ風て、女子の側ては頗るめづらしいと云ふ所から、何ても是等の知識學問を應用して、男子に負けぬやうしたい、男子をへこましてやらう、壓してやらうと、之が西洋から來て日本も追々此風になつてきた。是も物の情勢として無理からぬことてはあるが、さらばと言つて、前に言つた家事を營むとか、子を産んて育てるとか云ふことが、男子の方へ引渡されて了つたのてもない、以前の如く女子の方に負擔されて居て、嫌と云つても自然受け持たねばならぬのであるから、此の役目をしながら更に男子と同樣なことをしやうとするには、男子の一人役に對して、女子は少くも一人半役を勤めねばならぬ。果して女子の身心が男子よりも五割も優れてゐるか何うか。女子は男子より或る長短あるに拘はらず先づ飽まで劣つた方になつてゐる、數理に於て許されぬから、一時智識や學問が發達したからとて、餘りに圖に乘つて、男めいたことを世間に出て爲てみやうとするのは、身の程知らぬ不都合なる次第と云つてよい。

少々話が岐路へ入りすぎたが、そこて俳句は一つの美を歌うものて、單純なる目的としては、人々の娯樂慰藉に過ぎないもので、之は其他の文學と同じわけて人生にはあらゆる逆境があり、煩悶があるから、その

まして居ては生命も續かぬ所から、何か氣を轉じて、其境遇に居ながらも、聊か餘裕を存することを求めるには、己と利害得失の關係の無い美と謂ふことを歌ふに如くはない。其美と謂ふことを歌ふのは凡ての文學のしごとであつて、其文學の一部として俳句があるのであるから、やはり右のしごとの種類に屬して、美を歌ふことを目的としてをる。さすれば女子に於ても、日常生を送つてゆくうちには種々な逆境も煩悶もあるのであるし殊に感情の鋭敏て、思慮の緻密な性質にあつては、男子以上にも苦しく惱む時が多いのである。早く言へば嫉妬が起る、邪推をする、例のヒステリー等も起る。其場合に處して、何かその境遇を免れることがなくてはならぬ、有形的には免れずとも、せめて精神だけても免れねばならぬ。それには私から云ふと我田引水かも知れぬが、俳句が一番適當してゐる。何故なら單に文學としても小說を初め、長い文學もある又音樂、繪畫、演劇等のこともある、是には多分學問もせなければならぬ、金も擲たねばならぬ、これが出來る女子なら格別、其他の者にあつては、したくても出來ず、又家事に忙殺されて時間があてられぬ、であるから是等の故障が聊か無いものを求めるなら、何うしても俳句より外に可なるものがなからうと思ふ、即ち只十七字で其言語も通常の言語で足る、なほ少しはむつかしい言語もあれば宜いが、それとて毎日眼に觸れる新聞の文位を讀みわける力あるものなら不自由はない。そして考へると云ふことも、右の如き短詩形であるから、子供に乳を吞ませながらも、縫物しながらも、臺所の仕事、洗濯、張物等をしながらも、考へることが出來る。斯樣に一つごとに心を寄せて、其歌ふ處は何等世間の深い喜怒哀樂等のことてはなくして、多くは花鳥風月、其他人事を歌つても何處かに淡泊て洒脫て、心を浮き立たしめるやうな方に傾向を持つことが、本來此の短詩形の性質てあるから、是を弄びつゝ、又た仕事に從事して居れば、大したる學問も入らず、金も入らず、時間も費さずして前に言ふた氣を轉じて、逆境煩悶の地にありながら、娛樂慰藉を得られる

ではないか。してみれば此俳句を弄ぶと云ふことは、女子として唯一の誰にも出來るたのしみと言てよい。而して其作の上に於ては如何なることを歌つても聊か妨げぬ。前には女子が男子と競爭して、男勝りの仕事をして、一番男子を打ちまかさうとするのは、いけないと言つたが、俳句の上では如何なる事を歌ひ、男子よりも勝つたことを作つて、男子をして瞠若せしめても、何等の不都合も無い。好い句を作る爲に男子より五割まさりの勢力が入ると云ふてもない、前に云ふ如く、家事や育兒の勤めを欠くと云ふのではない、出來得る範圍に於て男子をうちまかすことが出來ると云ふことは只俳句の上のみに云ふのである。女子に此上學問をする機會があつて、女子の位置を高め、男子を驚かすやうすると云ふことは他にもあつて、出來得る機會もあらうが、其側らには、女子たる役目がおろそかになるとか、無理なる精神を働かせて勢力の不足を感ずるとか云ふこともあらう。それらの事なくして女子の氣焔を吐いて差支ないのは、此の俳句のみと云つてもよからう。此點に於て私は女子に俳句をおやりなさいとすゝめるのである。

而してなにも是非とも男子に勝たうとしなくともいゝ、本來が娯樂であるから無理な奮發するにも及ばぬ只己れの周圍、己れの感じを十七字に表はせば宜いので、つとめて虛心平氣で其れを歌ひつゝあるうちには女子の性質、境遇に適つた面白い句も出來、男子の考へ及ばぬやうな好い句も出來る。

それらの結果が古來女子の俳句となつて傳唱されて居るのであるから、此女流の俳句を解釋すれば、それらの事も分るであらうし、其歷史を辿り、趣向を學んでゆく時には充分俳句に造詣する栞ともなるから、そこでこれから右の句解をするのである、句は凡て秋色の作である。

戀せずは猫の心の恐ろしや

此句は春季に屬する猫の戀と云ふものを詠んだのだが、結局猫そのものを詠んだ詠物と云つてもよいので猫と云ふものは一寸見ると、人に媚びたり、あまへな

つく處は優しさうにもあるが、其實なか〳〵獰猛て、鋭き爪を持つて、鼠などを取り食つて、口つきを血むぐれにして居る處などは隨分荒つぽい、殘酷なる性情も見える、外形は兎も角、心は恐ろしい感じのするものてあるが、それが今、戀をしつゝ雄は雌を慕ふて優しく泣き叫びつゝある處を見ると、如何にもあはれて、優しげな處がある、つね〳〵鼠などを捕り食ふことなどは忘られて了う、此の戀をすることがなければ、猫の心は何處までも恐しいのてあるが、此事の爲に此恐しき感じが無くなることてあると云つたので、斯う云つてみれば、誰にも分ることてはあるが、男子ては斯樣な方面から猫をうつし出すことは出來がたい、男子なら恐しいものは虎とか狼とか云ふてあらうが、猫が恐ろしいなど云ふのは何れも女性の方から見るべきもてある、此處等が自然に女子のものに對する一種の傾向を現はして居ると云つてよい。

井戸端の櫻あぶなし酒の醉



七等花實

三河 近藤入重子

是は人口に膾炙する有名なる句であつて、此人の極く幼少な時に詠んだと言ひ傳へられてあるが、成程措辭を見ても何處かあどけない態があつて、子供の詠んだ句として、此句には價値がある。句の意は井戸端に櫻が咲いてゐる、其櫻の傍を酒の醉がふら〱として居る、ある場合には其水を汲んで飲まうとする、それをみてゐるとあぶない、井の中へ陷りはしなからうか氣遣はしいと云つたので、是ゝ男にも感じぬこともなからうが、女として此感じを起しやすいのである。而して其の己れが花見に出掛て、それを目撃した即席の感を述べたとすると、幼少なる秋色が眼前に現はれて來るやうな感じもある。是は前の句に比べると句としてはすぐれても居ぬが、子供の作として其性情を表はして居るから、次に解釋をしたのである。

　親も子も同じ蒲團や別れ霜

別れ霜と云ふのは、もはや時候もだん〱暖かになつて、霜の降ることもなくなる、其際聊か又霜の殘つて居るのを云ふので、けれども未だ霜が殘つて居ると云へば、聊か寒さも感じるのである。昨今は暖氣にもなつたが、此夜は又霜が降つた、もうお別れの霜であらう、親と子が同じ蒲團で寢て居る、周圍の寒さを感じる處から一しほ親子の間が睦じく、情合が通うて居ると云ふ感じがすると云ふことを言つたので、是も勿論秋色の身のことて、母親の子を愛する處から、斯樣な場合に一つの詩の趣向として歌はるゝことになつた是も男子ては一寸思ひ着きにくい趣向のやうに思はれる。

　雨垂に袖もあやめの匂かな

折ふし軒端にふいてある菖蒲に雨が降るので、雨垂が其菖蒲を傳つて雫となつて落ちる、其處へ折ふし出かけて袖を濡らした、其濡れた袖にも菖蒲の匂がして居ると云ふのてある。此季節の感じが一寸面白く表はれて居る、是も袖に菖蒲の匂がするなどゝ云ふことは男が言ふては頗る似合はしからぬ處があるが、女性として優しく似合はしくなるのである。

　佛めきて心おかるゝ遊かな

此句は蓮の花を見た感じて、此蓮の花は何處かに佛めきた處があつて、他の花よりは何處かに畏く、敬ふべく、乃ち心おかるゝ感じがすると云ふので、勿論蓮は極樂の七寶池に開いてゐると云ふこともあり、數多の佛が蓮臺へ座してゐると云ふこともあつて、其等の聯想から誰しも此感はあるが、やはり心おかるゝなどゝ歌ひなした處は、何處かに女子の性情が表はれて居る。

交りを紫蘇の染めたる小梅哉

是も詠物て、例の梅の實を漬けて其れに紫蘇を交ぜて、紫蘇の色が染み附いて梅が赤くなつてゐる、其さまを詠んだものだが、其處を擬人的に言語を使つて、紫蘇と小梅とが親しく交つたので、其爲に色が染み合つたといふので、諺に朱に交はれば赤くなると云ふこともあるが、細い處へ觀察を下して、而して優しく其趣を歌つた處は、是も先づ女の氣着く趣向の方に思はれる。

簾さげて誰待つならむ涼舟

夏の期節に川端に涼舟が浮んでゐる、それは屋根舟てあつて、簾が下つて居て内は見えぬけれども、其趣が何か人待がほて、其待たるゝ人は誰であらうか、誰を今待つてゐるのであらうかと、ねたく心にくゝ感ずる處を言つたのであるが、言葉つきと云ひ、斯樣な觀察も女にふさはしい着想てある。

箱王が指さす雁や暮の鐘

これは歴史的の句てあつて、箱王は曾我の五郎が幼少の名て、それが或る夕暮に入相の鐘が鳴り響く頃、雁が天を渡つてゐる、それを指して彼の雁には兩親と子とがある、自分等には只母ばかりて親が無いと云つて兄弟て悲み合つたと云ふことがあるが、そこを詠じたものである。而して單にそのことを抽象的に敍したのては、歴史の一節としか思はれぬのであるが、此句の敍法は恰も身玆に在る如く、其塲合箱王の擧動を目前に現はし、雁の聲や、鐘の聲やも聞くが如く敍してある。其處て既に陳腐なる歴史の話なるに拘はらず、此句を見ると新しい感が起る、此は詠史の上に參考に

なる句であるし、猶ほ不幸なる孤兒のありさまを詠じた處が、女性の詠史と云ふことにもかなつてゐる。

　　後の月指喰ひは誰そ松が岡

後の月は誰しも知る九月十三夜の月、松ケ岡と云ふのは鎌倉地方に在る尼寺である、此月夜に松ケ岡の尼寺の樣を詠じたので、數多の尼が集ふて月見をしてゐるが、此中に指喰ひをしたものは誰であるか、是非其人も居るであらうと云ふのである。此指喰ひと云ふのは源氏物語の雨夜の品定めにある女が、嫉妬の餘り男の指に喰ひついたとあるので、それを取つて嫉妬深い女と云ふことの代りにしたので、つまり尼寺などに居るものは、既に世の逆境を經來つたものが多い、定めて嫉妬の爲に髮を削つた者もあらうが、それらの比丘尼は何處に居るかと云ふことである。同じことでも斯樣な物語などの言葉から引くと一つの趣があつて、單に松ケ岡、後の月と云ふ以上に餘情が深くなる。此句などは多少學問もなければ詠ぬことである、其學問が何處までも女性的に現はれて居ることが知られる。

手紙の文章

横瀬夜雨

女の人にはどんな手紙を書かせたらいゝかと聞かれは、矢張故意に作つたのよりかお化粧せぬのがよいといふ外はない。けれど何ぼ素地が尊いからとて、齒の浮くような、てよ、だわを會釋なしにつかはれてはお坐がさめる。

女子文壇は長い事諸孃の作物を集めて書簡文も隨分公にされたが、見受るところ如何にも作る傾向があつていけない。誰だか奉公にやつた弟に贈る文を書いたてせう、すると其模倣したのがいくらもあつたし、そうかと思うと何處かの燈臺守が兄妹ただ二人孤島に住む寂しさを人に訴ふる文を書いて、記者に女ではないやうなと暗に針を刺されたともある、作文の助になる以上作るもまねるも絶對に惡くはないけれど手紙とい

ふ本來の意義を失して美文の領分を犯すのは考へものだ。文に巧拙を問ふのからして第一間違つてゐる。

入賞　賤の女　名古屋　三浦ろく子



『一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな、馬肥やせ』は古來書翰文の上乘なるものとして傳へられてゐるが、女かこれを手本にしては物騒だ。『お許し被下度、お許し被下度、お許し下されたく候』とくりかへして泣て認めた、宮が涙の文はどれだけの力があつた。狀袋の横腹をぴり〳〵やりながら「拜讀仕候」もひどければ、

悲しくもない僻に「涙」の字をやたら投つけるのもをかしい。手紙はつまりその人の心の鏡である、化粧室に於ける女の方の化粧術の秘密は知らないが、手紙に現はれるおもかげは消さうとしてもさう鳥度には消えはしない。

さる女同胞の南の濱の花ある方に來たのがあつた、伴の男その友にあてて

姫達のさしも焦れて見え候。風情の捨てられぬもかかる時の用意に候か。花は劬はるものと聞及び候へば、即刻の御出馬免れぬ所と思さるべく候。道夫。

と書いてやつたのも氣が利いてゐるが、三の娘の十六なのが「雨の日に候とも、おはしまさずとはゆめ〳〵思ひまゐらせず候」は心にくいとも思ふ。おなじく五の娘の「あしたもまたにらめくらをしましやう。さやうなら」には失笑せずにはゐられない。十四になる四の娘の「姉樣達がみんなあなたをよい方だと申候、私もさう申候、うそならば道夫さんにても誰にても聞いてごらんなさいまし」はまさに破瓜期に入らんとする少女の面目躍如たりといふべく、「また、おさんぼうを折てあげますから、それから鶴と、さんばさうと、それからほうかけ舟だの、天神さまだの、色んなものを折てあげますから、きつといらつしやいよ、こないともうあなたとはあそびませんよ」とした季の娘のはただ可愛い。惜いとに一の娘二の娘の文は知らない。或塲合には候文に爲ねばならぬともあり、ある時は口語體でないと言ひ盡せぬとも有るかはり、平凡な事柄を通信するにしても、誠意の籠つてるのと、浮の空で筆を執つたのとては先の人の心に及ぼす反響に大へんな異がある。手紙を證文同樣に心得てゐる人や、おつきあひの義理に迫られてしたためる人は論外で、悲しめるを慰め、病めるをいたはるばかりでなく、喜怒哀樂をりにふれ時につけての感じを他人につたへようとする程の心がある人なら、僞はらずかざらず有りのまゝに認める筈である。「ございます」では力が弱いと思つたら候と書くべく、「悲しいわ」とせぬと情がうつらぬようだつたら、遠慮するとはない。秋の時候の挨拶を遁

べるのに春霞たなびき渡りてとように、ぐど〳〵と書初めるよりか、すぐに秋の風物を捉へて、例ばこほろぎが鳴いてゐるとか風が冷たう〳〵吹きますとてもしたのがよい。なるべくは、どんな時どんな風にしてゐて書いたか、雲を仰いでは人遠き里を偲ぶ、草を踏んでは花散る野を思ふように、やさしくしほらしくかきさして牛に摑く位の才は有つてほしい。

今、手元に人の子の手紙がいくらもある、二つ三つ拔いて見よう。

――さん

わたしは毎夜夢を見ます、その度に衰弱して行くのを感じます。抑へつけられると身動もできず聲を立るともできません、そして屹度その前に幽に自分の名を呼ぶ聲が聞えて、溫かな人の呼吸が耳に觸れます。ふだんから感情に鋭いたちなのに、物思に耽るのがくせて、女の身にあり勝の空想も、わたしのは華やかなのではなくて、野原のような人も無く草木もない寂しい境に、居るともなしにかくれて居つて或物の影をやたらに懷しむのです。ゆうべも蚊やて母と話してゐたら、誰だかそつと寄りそうて胸からはすに押されるような氣がして、またしても名を呼ばれた。弱つて行くならいゝわわたし。

實はかうしてあなたに手紙をかいてゐるにも耐ない。髮など結びたくもないし、兩手を胸にしづかに瞑想に沈むのがいつち好きなの。人はうるさいものわたしは世に對し人に對する愛も情も冷えてしまひました。

――M

彼女は肋膜を犯されてゐたので、大患身に迫りてやうやく昂まれる熱は內と外とより肉身を焦し、美しき口から「人はうるさいもの」と言はしむるに至つた。まだ疾めりとは知らぬ刹那の悶えがよう現はれてゐる。

病氣になつてから、氣短かにはなつたが無邪氣にもなつたと母が言てるさうてす、本とうてせうか。

わたし細工物が好きてしたのでせめておそばにおいて頂くように肱突か寫眞かけなりと致したいので

すが。

手紙なら叔母がかいてやると申ますのを自分で書いて見たくて、まことに失禮でございますあの仰向にのそべつてかいてゐます、下を向くとせきが來ますから。て一寸かいては筆をおきおきして墨なんかつかないてせう。それにところ〳〵紙の裂けてるのは筆を持つたまゝ、叔母と話してる間に口でなめて破つたり裂いたりしましたので、叔母は失禮だつて叱りますが、かきなほすよだけは、どうぞ。

——V

指をなめて障子へめとを明けることはよくやるが、これは手紙をなめて穴を拵へたなり人に贈つたのである。まつ白な敷布の上にまつ白な枕をかつて、ねたまんま氣なりにかいたらしく、絶望したてもなくせぬてもないところがあはれに讀まれる。

二つとも同じような手紙だが、人によつて異ならねばならぬ筈の例に擧げるのだ。『消息往來』にしろ、『作文全書』にしろ、病氣見舞の文の手本は有らうが、自分がとつつかれたから、かう書けとは敎へてあるまい、(有つたにしてもまさかその通りかくものはなからう)だが思うたままを筆にのせて、景をつくらず情をかざらずば、文はじめて異なるを得べし、天眞流露すれば文盡きて後も意は盡きず、一路の春風ながく胸にかよふておのづから人に忘られぬものとならう。

短いのが必しもいゝのではない、長かるべくして長いのはどんなに長くてもよむに飽きぬ。

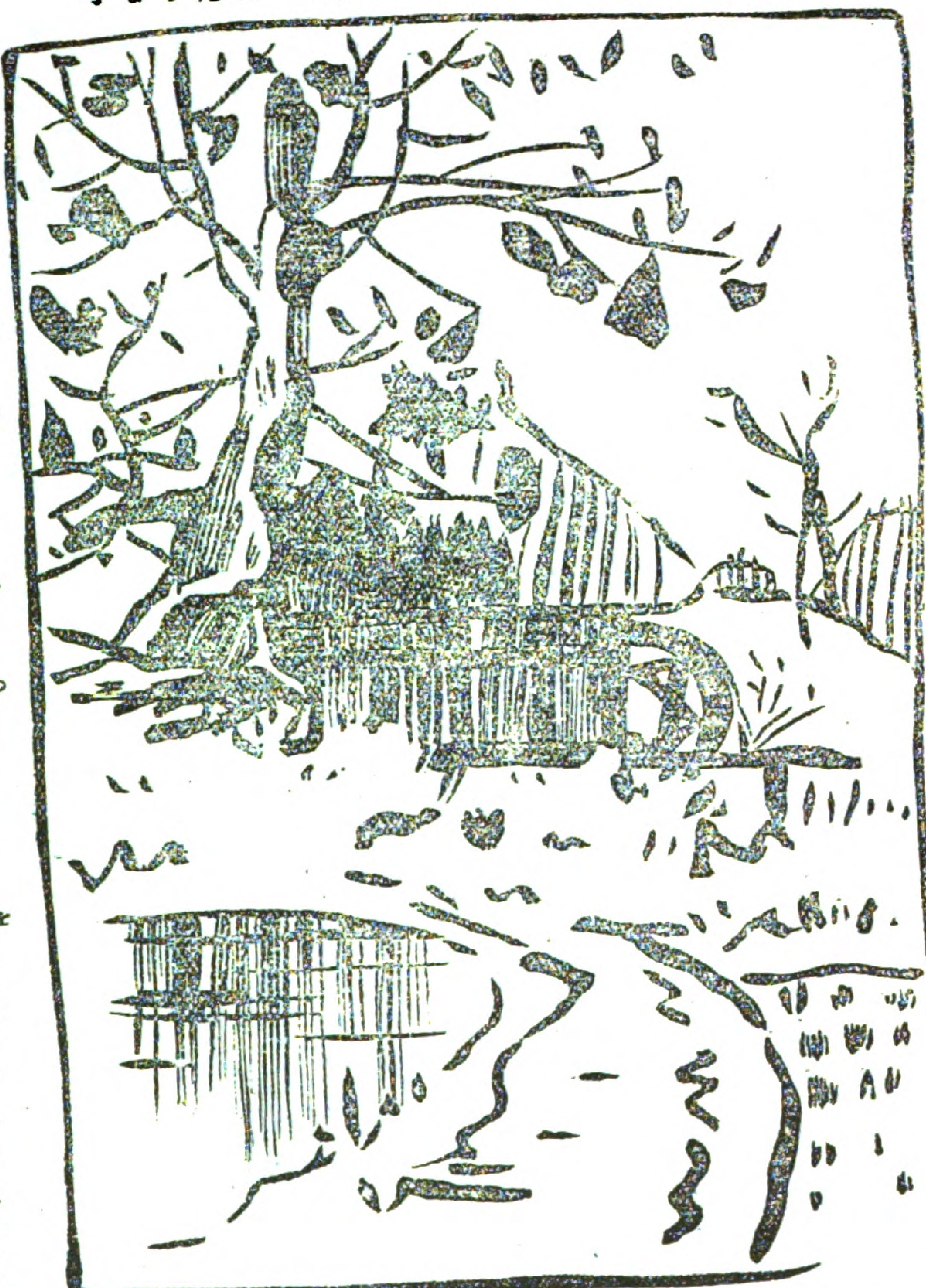
『即興詩人』のアントニオに遺した女優アヌンチヤタの文は淸く美しく涙はよむに隨つて流れる。

……死は既に我が胸に迫り候。血は、我胸より漲り流れ候。いま一回轉して漏刻の水は傾け盡さるべく候。人の傳へ候ところに依ればエネチヤ第一の美人は君がいゝなづけ妻となり居候由に候。わが死に臨みての願はお二人永く幸福を享け玉はんことのみに候……。さらば〳〵アントニオの君よ。過ぎ去りしは苦痛、現在せるは安樂にして末期は今と存じ〳〵私の爲めに祈禱したまへかし。

「金色夜叉」の宮が文も血をそゝぎ骨をけづりて書いたのだらうけれど罪は遂に容されなかつた。

アントニオは戀人の死を知りて傷心のあまり一たびはエネチャを去つた、が貫一は一歩に一たび裂き二歩に二たび裂き裂いて裂いて宮が文を寸斷した。人の手紙により て心を鍛へられたことも多いが、傷を負ふたこともすくなくはなかつた これまで明暗二つの途に出て入りて寂びしきひとりの野にさまようて居つたけれど、それもよし、これもよ

九等　里の水車　青森縣　松尾ちよ子



し、多勢の中には詩の評をなぜ早くして下さらないか名もなき田舎人と思ふてか、などいやみを言うて來るのもあつた。夏にならば早川の流れに鮎を釣りて參らせんと約束して忘れられたのもあつた。かくては常陸を訪ふて夜雨莊に宿れることすらある女の、朱を加へて返してやつた詩がたまたま不足税になつたため「受取がたし」と附箋して戻して來たのもあつた。それまではどんなにか淺からぬ人々の志をよろこびては、その手に成つた手紙をなつかしきものにしたらふ。ことに生れて始めて不足税のために受取を拒まれてから誰の手紙も見るのがいやになつた。がそれもよし、これもよし、あとて逢ふた時顏を赧らめるような文句はだれても入れぬ事。似て非なるいつはりの同情言なぞ書かぬ事。

たゞ眞なれ。

「ちやるめら」の響

河井醉茗

上田敏氏の作「ちやるめら」と云ふ新體詩は材料と云ひ、思想と云ひ、調子と云ひ、能く揃つて、好きな人には暗誦されて居ると云ふ程の好い作ですから、玆に聊か註脚を加へて見ませう。

題の「ちやるめら」と云ふのは飴屋の吹く笛のことです、元來支那から傳つて來た笛で、チヤルメラと云ふのは支那の北方の言語らしい、管は木で造り、歌口(口にあてゝ吹く處)と、頭の方は金物で出來てあるのです、支那のちやるめらは能く繪にある通り、喇叭のやうな形狀をしてゐますが、日本の飴屋の吹くちやるめらは、もつと製造が簡單で、薄い鉋屑に彩色して造つたのもあるやうです、一般には唐人笛と言はれてゐます。

薄日のかげも衰へて

風冷かに雲低き
鈍色空の夕まぐれ
はづれの辻の片すみに
ちやるめらの聲吹き起る

秋ならば末、冬ならば初めてす、鈍色空は鼠色のやうな雲に覆はれた空て、曇つてゐながら雨は降らない薄く射して居た日影さへ雲深く沈んて、もう日が暮れるのか知らと、往來の人は倉皇さうに夕の支度にかゝらうとする頃、町の十字街頭に突如として唐人笛の響が高く起つた、吹き起ると云ふ言語が如何にも突然に笛の音の響き渡ることを表はしてゐます。

初めの節のゆるやかに
心を誘ふ管の聲
音は華やげるしらべかと
思へばあらず、せきあぐる
悲哀の曲のゆりびきに

吹き起つた唐人笛の初めの節廻しは甚だゆるやかて心もそれに誘はれてゆくやうだから、華やかな、はればれした聲が續くのかと思つたら然うてはない、悲しげな哀な調子になつて來たと云ふのてす、「管の聲」は笛の聲と云ふに同じこと、「華やげる」は華やかな、「あらず」は然うてないと云ふこと。「せきあぐる」はゆりあげると云ふやうな意味て、能く女などが泣く時にないじやくりをしますがあれてす、あゝ云ふ調子に悲みがこみあげて來るやうに笛の音が響く、「ゆりびき」は搖曳と書きます、響とか、音とか後へ長く搖り曳くことて、「搖曳に」と云つて言語の上にも後へ餘情を殘すやうにしたのてす。

みそらかけりてあの山越えて
越えてゆかまし夢の里
よしや、わざくれ、身は現世の
衆にまぎるるとかめびと
有爲の奥山路嶮し。

此一節は前の節と全く意味が違ふので、只唐人笛の笛の調べを詩に表はしたものと見てよいのてす、けれども全然かけはなれた事てはないので、笛に事寄せて

飴屋其人が自分の境界を歌うて居ると思へば歌の意味は分ります「みそらかけりてあの山越えて」と子守唄らしい調子でうたひ出す處は、何うしても子供を對手に飴屋が歌ふ笛の聲です。それで自分は果敢ない人世を飴屋渡世して渡つてゐるが、人世の山は深く險しい、世渡りは難しい、寧そあの山越えて海越えて夢のやうな里に行つて了ひたいと、斯う云ふ意味です。「ゆかまし」はゆきたい「よしやわざくれ」のわざくれは職業、よしやは「よし」と云ふも同じことでまゝよ職業だから仕方はないけれど、云ふとになります「現世」は現世の世の中です「榮にまぎるる」の榮は世の中の榮えて居ることとて、世間の人は皆それ〳〵立派に、榮華に、面白さうに暮して居るが、自分は其中にまぎれこんで了つて在るか無いか分らぬやうな、しがない飴屋風情であるがと云ふので、次の「とがめ人」はとがめらるゝ人と云ふ意でせうが、何も飴屋に咎のある譯はない、只世間並より零落た身の上を咎められると云ふ位の事でせう「有爲」は佛教の言語ですが、先づ人世と云ふ位の事に取つて置いて宜しい「奥山路險し」は人世の行路難をさしたので生活の困難を言てあるのです、此「有爲の奥山」と云ふ言語は誰も知るいろは四十七字の中にある句で「有爲の奥山今日越えて」乃ち「吾世誰ぞ常ならむ」の次「淺き夢見し醉ひもせず」の前に入る句です、いろはの文句を引いて來た處なども多少子供らしいと云ふ聯想に伴ひます。

響はるかに鳴りわたる
あふまが時の薄あかり
飴屋の笛にそぞろげる
子供心もおのづから
家路をおもふ二の聲に

辻に吹いてゐる唐人笛の響は更に高く聞える四邊は薄暗くなりかけて來た、飴屋の笛に集つて來た子供等も、さすがに家へ歸らうと思ふてあらうが、笛は又次の聲を高く響かせた。一聯の意味は然うです「あふまがどき」は「逢魔時」と書くので夕暮の事です「そぞろげる」はそは〳〵と浮立つてゐること、て、夕ぐれ方

の暗く淋しくなつてきたものだから、面白さうに集つてゐた子供達も、自然家へ歸りたくなつたらしいと云ひ、「家路をおもふ」と云ふ處で句を切つて、其時、二の聲、乃ち第二の調子を吹出したと云ふので、又笛の調になるのです。

夢の浮橋、あらなつかしや戀し、なつかし、虹の橋いつし何れの日に架初て涙の谷の中空を
雲につらぬる反橋か

十等　秋の山路　南多摩　込谷紫宵女



前の曲に「越えてゆかまし夢の里」と云ふ句があつたから、その夢から聯想を引いてゐます、夢の浮橋は戀しくなつかしい虹の橋であつて、悲哀の谷の上高く架つてゐる、いつの日から架つてゐるのか知らないがと云ふので、此一節の叙事の意味は然まで飴屋に適切なものではないが更に歌らしくなつてゐます。笛を吹いてゐる間は夢の浮橋を渡つてゆくやうに想はれるとの意味であつて、又現在の世はつらく、涙の谷底のやうな氣もするが、仰げば中空に夢の橋が架つてゐると空想に憧憬れてゐる態もあるのです。「いつしいづれの」のいつしは何れと云ふ語を強める爲に副へたので、つまり何時の日に

と云ふこと、「涙の谷」も別に大した理由のある句でなく、中空と云ふ高いものに對象させて谷と言つたので雲にまで連なる虹の反橋の美くしさは、夢の浮橋が象に現れたものであらうと云ふので、此一節は凡て空想的に構想されてあるのです。

細き金具の歌口に
かなしみあふれ氣も、萎えて
折りまはしたる聲のはて
忽ちくづれ、調かはる
ああ、ちやるめらの末の曲

小さな細い笛にも、溢れるばかりの悲みが湧いて、氣も心も絶息るかと思ふばかりになつたが、悲み極つて忽ち調子はくづれ、末の一曲を異つた曲で吹き初めたと云ふのです。「細き金具」は前に云つたちやるめらの歌口に附けてある金具です、「萎えて」は悄れること「折り廻したる」は笛の響が曲折變化してゆくこと、「聲のはて」は其ちやるめらの響の終に、忽ち調子がくづれたので、「ああ」と云ふ感歎の言語を置いたのは、其調子の變つたことに感動したのです、

「やぶれ菅笠、しめ緒が切れて
さらにきもせず、すてもせず」
人に思のなまなかあれば
夢に現を代へ難き——
えい、なんとせう——あだごゝろ、

此の「やぶれ菅笠締緒が切れて更に被もせず捨てもせず」と云ふのは徳川時代に行はれた俗謠、人と云ふものにはなまじつか人らしい意識があるから、現在の世はつらいと云つた處で、勝手に是を夢にすることは出來ない、やはり現在の世に生きて居らなければならぬ、えい、マア何うしたらいゝだらう、斯んなあだ心をと云ふので、少し放縱な意を現して居ます、やぶれ菅笠の唄も同じやうな意味を昔の人が歌つたので、笠の緒が切れたので、被るのもつまらないやうだし、さらばと云つて捨てることも出來ないしと云ふので、是も世の中に戰ひ負けた人の想でせう。恰度此處へ適宜るので挿入たものでせう。「なまなか」はなまじつかです

「夢に現を」は「現を夢に」も同じことゝて、現世を夢に代へたいけれどゝ云ふのです、此句の下に――を引いてあるのは、此處で言語は斷落を告げてゐるけれど、意味は長くつゞいて居ると云ふとです、次の句の――も「えい、何とせう」と云つて、此言葉は切れたが、意味はつゞいてゐるので、「あだごころ」と云ふのは他の心です、空想でもいゝでせう、現實を離れやうとする心です、而て此の「あだごころ」と云ふ俗語で全篇をつゞめてあるやうな氣もします、あだ心を戀のあだ心と取つてはいけません、此處では然うじやありません。

扨て「ちやるめら」の詩は此れで終です、説明すれば是だけの事ですけれど、此詩には説明の出來ない詩の生命が活動て居るので、此詩を讀みかへし。歌ひ返しすると、ちめるめらの響が自然と聞えてくるやうです、自分も或る淋しい夕ぐれの辻はづれに是を聞いて居る心持になります、此心持を單に言語の上のみでなく、なだらかに成功した五七の調と、古い俗謠調と錯綜して一種あはれに優しい調子の上に表はした處が、詩歌の貴ぶべき所以です、所謂情調の生きて流れて居ると云ふ處が此詩の生命です、私がくだくだしい言語て説明するまでもなく、諸嬢が此詩を幾度も歌はれたならば自づと合點が行くでせう。

因に云ふ、「やぶれ菅笠」の唄は我國小唄の元祖とも云ふべき隆達節の中の一首です寛文延寶の頃、菅笠節と稱して此唄に節をつけ、専ら世に行はれたと云ふことです、隆達は慶長元和頃の人で、生國は泉州堺一派の俗謠を新興し、後世までも流行しました、其作つた歌は隆達節と名づけられて、多少徳川時代の隨筆ものに載つて居ます。

まひる野より

窪田うつほ

海のはな山の花もて路敷かむ夢もて來よや夜を守る神
眺めをればあやし五つに九つになりても見する一花水仙
秋風や路に立ちてはふりかへる老女の頭な白くも吹くかな
朝宵の秋さぐりて秘め置きしうれしの夢の消ずやと惑ふ
摘みし草に誰が名負はせむ佐久のゆふべ千曲の川の北に流るゝ

記者より

○賞品の發送 當「文壇の光」懸賞入選者には凡て來る十一月二十日に規定の通り懸賞の金品を送ります、入選者はそれまでに住所氏名を成るべく詳細く通知して下さい

○寫眞に就いて 入選作家の中で前の「文壇の花」に當選した方の寫眞は出しませんでした、又新しく當選した方でも遠隔の地で間に合はなかつたり。故障があつたりして載せ得ない分もありました

◎優勝者の住所 筆蹟を木版に取つた爲め地名を示さなかつた方の住所はしげ子（麻布）田中久子（本所）白井壽千代（三河）岡田美千代（小石川）稗貫美津子（臺灣）勝子（信濃）佐藤萬壽子（日本橋）河野槇子（四谷）檜垣とめ（相模）花子（大阪）井上年子（備後）三浦美沙子（麻布）等です

雜報

○定期増刊 立田姫 來る十一月十五日發行の定期増刊は例の通り毎月の本誌に掲載し能はざりし多數の優秀傑作と新に募集した脚本、詩歌文章に關する面白き記事などを集め釘裝を凝らして發行いたします御愛讀を希ふ

◎婦人界 婦人界の昨今は甚だ問題に乏しいやうです、女優問題に就いては方々で議論もあるやうですが多くは教育家の立場から論したもので、藝術家の方面から立論したものは少いやうです、其外結婚問題、職業問題など先づ大勢にはさしたる變動も認めません。

◎文學界 文壇も寧ろ本年は昨年に比べて淋しい感があります、新進作家も要するに二三の人が立脚地を定めたことになり、自然主義の聲も世間的に惡い意味に騷がれた方が大きくて、思潮としては多少の覺醒を與えた位のことで、もう此問題も言はなくなるでせう、更に來るべき活動は何でせうか、例年秋より新年にかけては何事か新しい運動の起る時ですから吾等は刮目してそれを待つてゐます。

懸賞贈額

▲甲種（短篇小説 美文）
天賞…金參圓
地賞…金壹圓五拾錢
人賞…金七拾錢

▲乙種（お伽噺 日記 文新論 文實 用文 新體詩）
天賞…金貳圓
地賞…金八拾錢
人賞…金四拾錢

▲丙種（和歌 俳句 短文 圖畫 餘興 滑稽 歌論 學校生活）
天賞…金壹圓
地賞…金五拾錢
人賞…金貳拾錢

○各種とも發表翌月廿日に總べて正金を以て贈呈す

明治四十一年十月十二日印刷
明治四十一年十月十五日發行

文壇の光に限り
定價金貳拾錢

不許轉載

東京市京橋區大鋸町十一番地
編輯兼發行者 野口竹次郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷者 石川金太郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所 株式合社 秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地
電話〔本局六〇七番〕
女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

小說もあり文章もあり詩歌もあり文學一通り

のものは揃つてゐます。皆之れ花の如き女子が大懸賞の應募熱心に作られたるもの眞に文章速成の最新良書なり

大好評

懸賞傑作
文壇の花

▲全書冊▲洋裝▲大判▲紙數▲二百▲五十▲餘頁▲入賞▲肖像及び原色▲作家▲寫眞密刷▲睡蓮▲石版彩色密刷▲花苑▲皆美麗の口繪▲澤山

▲定價金貳拾錢▲郵稅壹錢五厘（郵券代用壹割增）

本書目次

附錄

◎空前の大安賣

諸大家選評（四六判五百頁）

女子懸賞文集 第二

國學院學士小森松風先生著（菊判二百卅頁）

▲定價卅五錢 特價金貳拾錢 郵稅六錢

美文作法

國學院學士小森松風先生著（菊判二百卅頁）

▲定價四拾錢 特價金貳拾錢 郵稅四錢

言文一致文範

報知新聞記者中村木公君著（校長肖像入）

▲定價四拾錢 特價金貳拾錢 郵稅四錢

實地精査 女子遊學便覽

▲定價參拾錢 特價金拾五錢 郵稅四錢

右の外『玉蟲』及『朝ばれ』は既に賣切れ申候

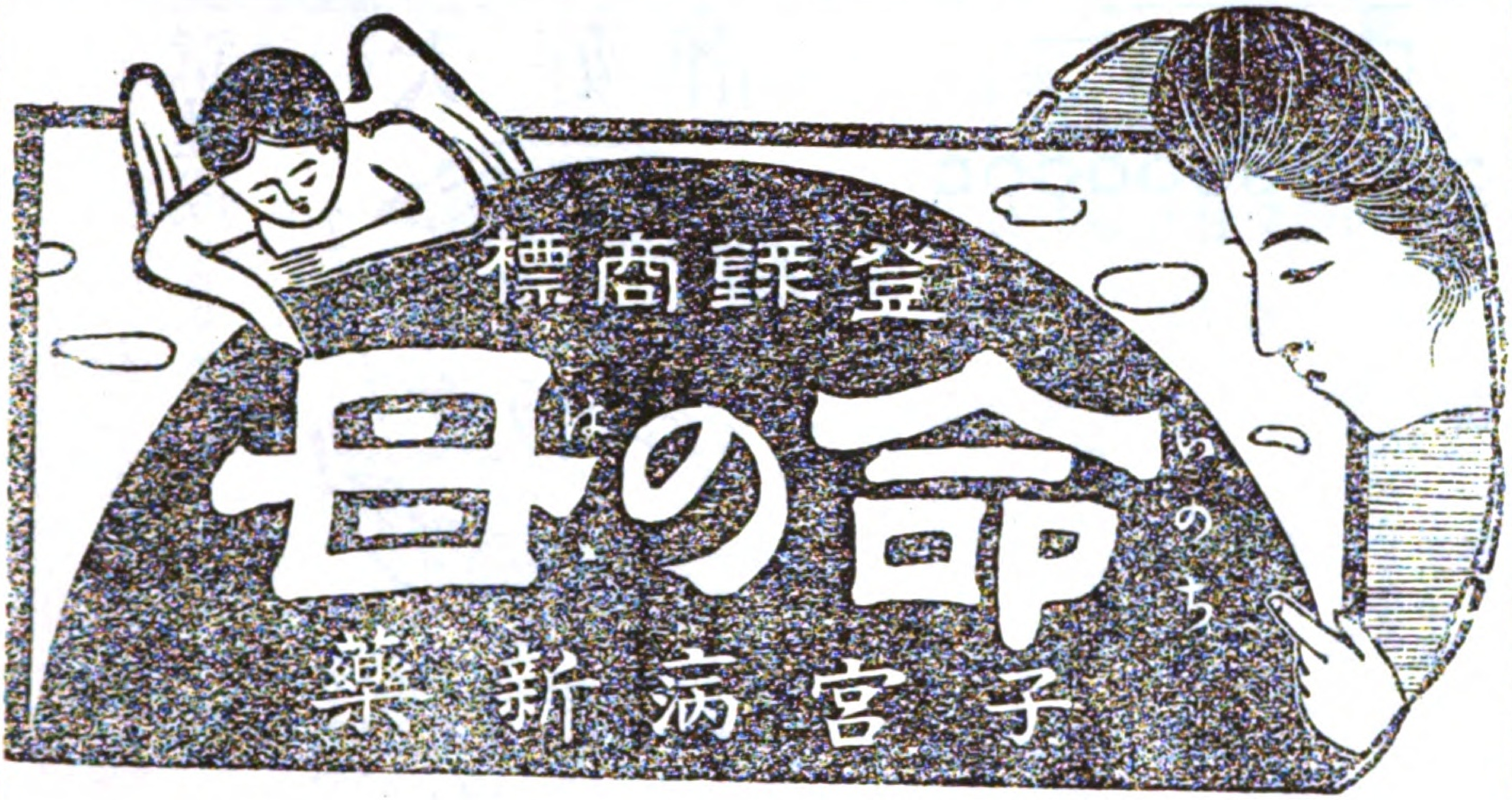
前記の四書とも殘部僅少、賣切れますと增刷せず絶版になりますから、此際至急愛讀を願ます、出版界空前の大安賣なり

東京京橋大鋸町十十一番地　女子文壇社出版　（振替口座第壹七貳九番）

服部製本

明治四十一年十月十五日増刊
（毎月一回一日發行）
女子文壇
（第四年第十五號）
臨時増刊 文壇の光

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



◉命の母は病婦の命なり

子宮病
陰部の痛みはげしく、白帶、赤帶を流し腰脊へかけて痛み、胃部不快を感じ、心悸亢進し、手足冷へ、身體やせ衰ろへ、流產半產又は不姙となり…

血の道
頭痛、耳鳴、眩暈、呼吸促迫、動氣高ぶり四肢知覺脫失又は冷へ、じやくり、あくび、ひきつけ、下腹より胸先へさし込み痛み正氣を失ひ……

ヒステリー
少しの事を苦にし元氣よしと思へば、忽ち鬱ぎ悲しみ短氣になり、夜眠られず身體ところ〲痛み細弱となり、恰も其身は病の容物の如き感を覺ゆ

腦神經
頭痛はげしく理解力鈍くなり、神經過敏となりて憂鬱症となり亦腦部に厭な疼痛の感がしたり又は交接を不好或は交接行ふをがてきぬ樣になる…

月經不順
つはり、產前、產後の逆上、めまひ、立ちぐらみ等凡て前記の如き婦人病を根本的全治せしめ子寶を擧げ健母とならしむ……

◉命の母は子なき人の母なり

◉各國藥店にあり

命の母 藥價	加減命の母 藥價	錠劑命の母 藥價
試用分 十錢	五日分 八十錢	二日分 廿五錢
二日分 廿五錢	十日分 一圓五十錢	五日分 五十五錢
一週間分 八十錢	廿日分 三圓	一週間分 七十五錢
二週間分 一圓五十錢	二ヶ月分 五圓	二週間分 一圓五十錢
五週間分 三圓		

本舖 東京市京橋區新榮町四丁目
電話新橋三六〇壹番（振替口座五〇五〇番）
笹岡省三藥房

本號に限り定價金貳拾錢 郵稅五厘

【東京秀英舍印刷】

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ